公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（27）

東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT）建設に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

永吉天神段遺跡５
第２地点－３

（曽於郡大崎町）

縄文晩期・弥生・古墳時代編

第 1 分 冊

２０２０年２月

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー

巻頭図版1

巻頭図版2　墓域出土遺物・鉄鏃

序　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）の建設に伴って実施した，曽於郡大崎町に所在する永吉天神段遺跡第２地点における発掘調査の記録です。

永吉天神段遺跡第２地点では，旧石器時代から近世の遺構・遺物が発見されました。本報告書では，そのうち縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代の報告を行っています。

縄文時代晩期では，竪穴住居跡のほかに土坑や落とし穴が検出され，遺物では刻目突帯文土器や打製石斧，磨石・石皿が出土しました。

弥生時代では，多くの竪穴住居跡や土坑，周溝墓と土坑墓群が検出されたほか，様々な土器や石器，鉄鏃などが出土したことで，当時の人々の生活のあり方を考える有効な情報を得ることができました。

古墳時代では，竪穴住居跡や土坑のほかにも成川式土器や須恵器などが発見され，大隅半島の古墳時代の様相を考えていく上で貴重な資料となることが期待されます。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

最後に，調査にあたりご協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，大崎町教育委員会，各関係機関及び発掘作業・整理作業に従事いただいた方々，本遺跡の所在する大崎町永吉の档ヶ山集落の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和２年２月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター　中原　一成

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ながよしてんじんだいいせき５　だい２ちてん－３　じょうもんばんき・やよい・こふんじだいへん
書　　名	永吉天神段遺跡５　第２地点－３　縄文晩期・弥生・古墳時代編
副　書　名	東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	27
編 集 者 名	横手　浩二郎・相良　典隆 株式会社パスコ（池畑　耕一・関口　真由美・関口　昌和・翁長　武司・松村　由記・飯野　拓哉）
編 集 機 関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL0995-70-0574　FAX0995-70-0576
発 行 年 月 日	2020 月 2 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ながよしてんじんだいいせき 永吉天神段遺跡 だい２ちてん 第２地点	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曽於郡 おおさきちょう 大崎町 ながよし 永吉 あざてんじん 字天神	H25-46468	104	31° 26′ 35″	130° 58′ 58″	確認調査 2011.07.01 ～ 2011.09.28 本調査 2012.07.02 ～ 2016.01.27	22,734㎡	東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴う記録保存調査

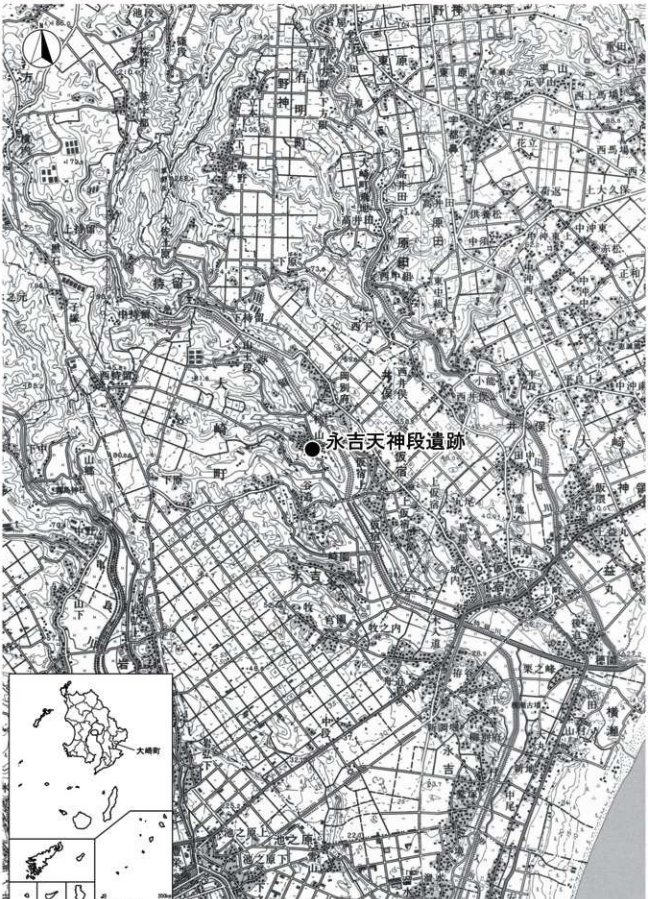
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永吉天神段遺跡 第２地点	散布地	縄文時代 晩期	竪穴住居跡１軒 土坑６基	入佐式土器・黒川式土器・突帯文土器，円盤形土製品，丸玉，打製石鏃・横刃形石器・磨製石斧・打製石斧・磨石・石皿	入佐式土器期の集落
		弥生時代	竪穴住居跡 45 軒 土坑 50 基 溝状遺構１条 周溝墓５基 土坑墓 20 基	突帯文土器・高橋式土器・入来式土器・山ノ口式土器・黒髪式土器・擬朝鮮系無文土器，土製勾玉，鉄鏃，打製石鏃・磨製石鏃・石匙・石包丁・打製石斧・磨製石斧・磨石・石皿・砥石，管玉，軽石製品	集落と墓地が近接して存在
		古墳時代	竪穴住居跡５軒 土坑 10 基	成川式土器，土師器，須恵器，ベンガラ	東九州系の土器が多く入っている
		時代不詳	掘立柱建物跡 11 棟		

要　約

本遺構は持留川とその支流に挟まれた標高約 50 m のシラス台地縁辺部に位置する旧石器時代～近世の複合遺跡である。本報告書は，そのうち縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代を報告している。

主となる時代は，弥生時代である。

本遺跡は，弥生時代における集落域と墓域が同台地内で調査された県内初の事例である。弥生時代中期には集落域と墓域を分離させており，南九州に当該時期の北部九州の同様の墓制・葬制があったことが分かる貴重な情報を得ることができた。



第１図　遺跡位置図(1:50,000)

例　言

1　本書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴う永吉天神段遺跡第２地点の発掘調査報告書（縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代編）である。

2　本遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町永吉字天神に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局から鹿児島県が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，「埋文センター」）及び公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下，「埋文調査センター」）が実施した。

4　発掘調査は，平成24～27年度に埋文センター及び埋文調査センターが実施した。

5　整理・報告書作成は，平成27～31年度に埋文調査センターが実施した。

6　平成24～27年度は，発掘調査支援業務を株式会社パスコへ委託し，埋文センター及び埋文調査センターの指揮・監督のもと調査を行った。また，空中写真撮影は株式会社ふじたに再委託した。

7　平成27・28・30年度は，整理作業及び報告書作成支援業務を株式会社パスコへ委託し，湯場﨑辰巳・隈元俊一・横手浩二郎・相良典隆の指揮・監督のもと業務を実施した（令和元年度刊行）。

8　遺構図・遺物分布図の作成及びトレースは，横手が株式会社パスコの協力を得て行った。

9　出土遺物の実測・拓本・トレースは，湯場﨑・隈元・横手・相良が株式会社パスコの協力を得て行った。実測石器の一部については九州文化財研究所に委託し，監修は湯場﨑・横手が行った。なお，報告書の作成には adobe 社製，「IllustratorCC」，「PhotoshopCC」を使用した。

10　出土遺物の写真撮影は，埋文センターの写場にて，埋文調査センターの吉岡康弘・西園勝彦が行った。

11　鉄製品の保存処理・実測・トレースは，公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

12　本報告に係る自然科学分析は，テフラ分析・放射性炭素年代測定・植物珪酸体分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に，放射性炭素年代測定及び種実同定を株式会社古環境研究所へ委託した。その成果を相良が編集し，第５章に掲載してある。

13　執筆担当は以下のとおりである。また本書の編集は横手・相良が株式会社パスコの協力を得て行った。
第２章，第４章第１節，第２～３節竪穴住居跡，土坑墓，周溝墓，第６章　横手
第１章，第３章第１節，第４章第１節～第３節土坑，第４節　相良
第３章第２節，第４章第１節遺構外出土の土器，第２節弥生時代の調査概要，早期・前期　池畑耕一
第４章第２節Ｆ－27区周辺土器集中，遺構外出土の土器　翁長武司
第４章第２節遺構外出土の石器　関口昌和・関口真由美
第４章第３節遺構外出土の土器　松村由記・飯野拓哉

14　使用した土色は『新版　標準土色帖』（2013，農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。

15　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高度である。

16　本書で使用した方位は，すべて座標北（Ｇ．Ｎ．）であり，測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。

17　遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を以下に示す。
ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝状遺構
ＳＴ：土坑墓　ＳＸ：周溝墓　ＳＢ：掘立柱建物跡

18　遺構番号は報告書作成にあたって整理し，発掘調査時の番号との比較表は93頁に示した。遺物注記は調査時の番号で記してある。

19　遺構の縮尺は次を基本とした。
竪穴住居跡・掘立柱建物跡：1/40，1/60，1/80
土坑：1/40　溝状遺構：1/80
土坑墓：1/20　周溝墓：1/40，1/60，1/80

20　遺物の縮尺は次のとおりである。
土器・土製品1/3，小型石器1/1～1/2，大型石器1/3～1/6，鉄製品1/1。各図中にスケールを示してある。

21　掲載遺物番号はすべて通し番号であり，本文，挿図，表及び図版の番号は一致する。

22　掲載土器の拓本を表裏とも貼付の場合，表面が左，裏面が右に配置してある。

23　本報告書に係る出土遺物及び記録物は，埋文センターで保管し，展示・活用を図る予定である。なお，遺物注記等で用いた遺跡記号は「ＮＴＪ」である。

総目次

【第１分冊】
巻頭図版（カラー）
序文
報告書抄録
例言
目次
第１章　発掘調査の経過
第１節　調査に至るまでの経緯
第２節　確認調査
第３節　本調査
第４節　調査の経過
第５節　整理・報告書作成
第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理・地質的環境
第２節　歴史的環境
第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡
第３章　調査の方法と層序
第１節　調査の方法
第２節　層序
第４章　調査の成果
第１節　縄文時代晩期の調査
第２節　弥生時代の調査（～竪穴住居跡）

【第２分冊】
第２節　弥生時代の調査（土坑～）
第３節　古墳時代の調査
第４節　時期不明の掘立柱建物跡の調査
第５章　自然科学分析
第１節　自然科学分析の種類と目的
第２節　テフラ分析
第３節　放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）
第４節　種実同定
第５節　植物珪酸体分析
第６節　樹種同定
第７節　土器圧痕調査
第６章　総括
第１節　縄文時代晩期の調査
第２節　弥生時代の調査
第３節　古墳時代の調査

【第３分冊】
図版目次
図版

本文目次

【第１分冊】
巻頭図版１（カラー）
巻頭図版２（カラー）
序文
報告書抄録
例言
目次
第１章　発掘調査の経過…… 1
第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
第２節　確認調査…… 1
第３節　本調査…… 2
第４節　調査の経過…… 3
第５節　整理・報告書作成…… 6
第２章　遺跡の位置と環境…… 9
第１節　地理・地質的環境…… 9
第２節　歴史的環境…… 9
第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡…… 15
第３章　調査の方法と層序…… 20
第１節　調査の方法…… 20
第２節　層序…… 22
第４章　調査の成果…… 26
第１節　縄文時代晩期の調査…… 26
第２節　弥生時代の調査（～竪穴住居跡）…… 56

挿図目次

【第１分冊】

第１図　遺跡位置図
第２図　周辺遺跡位置図……12
第３図　東九州自動車道関連遺跡位置図……19
第４図　基本土層図……23
第５図　土層断面図（１）……23
第６図　土層断面図（２）……24
第７図　土層断面図（３）……25
第８図　縄文時代晩期遺構配置図……26
第９図　縄文時代晩期西部遺構配置図……27
第10図　縄文時代晩期東部遺構配置図……28
第11図　縄文時代晩期竪穴住居跡（１）……29
第12図　縄文時代晩期竪穴住居跡（２）……30
第13図　縄文時代晩期竪穴住居跡（３）……31
第14図　縄文時代晩期竪穴住居跡（４）……32
第15図　縄文時代晩期竪穴住居跡（５）……33
第16図　縄文時代晩期土坑（１）……34
第17図　縄文時代晩期土坑（２）……35
第18図　縄文時代晩期～弥生時代前期
　　西部出土土器分布図……36
第19図　縄文時代晩期～弥生時代前期
　　東部出土土器分布図……37
第20図　縄文時代晩期土器（１）入佐式……38
第21図　縄文時代晩期土器（２）入佐式……39
第22図　縄文時代晩期土器（３）入佐式……40
第23図　縄文時代晩期土器（４）入佐式……41
第24図　縄文時代晩期土器（５）入佐式……42
第25図　縄文時代晩期土器（６）入佐式……43
第26図　縄文時代晩期土器（７）黒川式……44
第27図　縄文時代晩期土器（８）黒川式……45
第28図　縄文時代晩期土器（９）黒川式……46
第29図　縄文時代晩期土器（10）黒川式……47
第30図　縄文時代晩期土器（11）黒川式……48
第31図　縄文時代晩期土器（12）黒川式……49
第32図　縄文時代晩期土器（13）黒川式……50
第33図　縄文時代晩期土器（14）黒川式……51
第34図　突帯文土器（１）……57
第35図　突帯文土器（２）……58
第36図　突帯文土器（３）……59
第37図　突帯文土器（４）……60
第38図　突帯文土器（５）……61
第39図　突帯文土器（６）……62
第40図　突帯文土器（７）……63
第41図　突帯文土器（８）……64
第42図　突帯文土器（９）……65
第43図　突帯文土器（10）……66
第44図　突帯文土器（11）……67
第45図　突帯文土器（12）……68
第46図　突帯文土器（13）……69
第47図　突帯文土器（14）……70
第48図　突帯文土器（15）……71
第49図　突帯文土器（16）……72
第50図　突帯文土器（17）……73
第51図　突帯文土器（18）……74
第52図　突帯文土器（19）……75
第53図　突帯文土器（20）……76
第54図　突帯文土器（21）……77
第55図　突帯文土器（22）……78
第56図　突帯文土器（23）……79
第57図　突帯文土器（24）……80
第58図　突帯文土器（25）……81
第59図　突帯文土器（26）……82
第60図　突帯文土器（27）……83
第61図　突帯文土器（28）……84
第62図　弥生時代前期土器……85
第63図　弥生時代東部遺構配置図……94
第64図　弥生時代西部遺構配置図……95
第65図　弥生時代竪穴住居跡１号……96
第66図　弥生時代竪穴住居跡２号（１）……97
第67図　弥生時代竪穴住居跡２号（２）……98
第68図　弥生時代竪穴住居跡２号（３）……99
第69図　弥生時代竪穴住居跡２号（４）……100
第70図　弥生時代竪穴住居跡２号（５）……101
第71図　弥生時代竪穴住居跡２号（６）……102

第 72 図　弥生時代竪穴住居跡 2 号（7）……103
第 73 図　弥生時代竪穴住居跡 3 号（1）……104
第 74 図　弥生時代竪穴住居跡 3 号（2）……105
第 75 図　弥生時代竪穴住居跡 3 号（3）……106
第 76 図　弥生時代竪穴住居跡 4 号（1）……107
第 77 図　弥生時代竪穴住居跡 4 号（2）……108
第 78 図　弥生時代竪穴住居跡 5 号（1）……109
第 79 図　弥生時代竪穴住居跡 5 号（2）……110
第 80 図　弥生時代竪穴住居跡 5 号（3）……111
第 81 図　弥生時代竪穴住居跡 6 号（1）……112
第 82 図　弥生時代竪穴住居跡 6 号（2）……113
第 83 図　弥生時代竪穴住居跡 6 号（3）……114
第 84 図　弥生時代竪穴住居跡 7 号（1）……115
第 85 図　弥生時代竪穴住居跡 7 号（2）……116
第 86 図　弥生時代竪穴住居跡 7 号（3）……117
第 87 図　弥生時代竪穴住居跡 8 号（1）……118
第 88 図　弥生時代竪穴住居跡 8 号（2）……119
第 89 図　弥生時代竪穴住居跡 8 号（3）……120
第 90 図　弥生時代竪穴住居跡 9 号（1）……121
第 91 図　弥生時代竪穴住居跡 9 号（2）……122
第 92 図　弥生時代竪穴住居跡 9 号（3）……123
第 93 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（1）……124
第 94 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（2）……125
第 95 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（3）……126
第 96 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（4）……127
第 97 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（5）……128
第 98 図　弥生時代竪穴住居跡 11 号……129
第 99 図　弥生時代竪穴住居跡 12 号（1）……130
第 100 図　弥生時代竪穴住居跡 12 号（2）……131
第 101 図　弥生時代竪穴住居跡 12 号（3）……132
第 102 図　弥生時代竪穴住居跡 13 号（1）……134
第 103 図　弥生時代竪穴住居跡 13 号（2）……135
第 104 図　弥生時代竪穴住居跡 14 号（1）……136
第 105 図　弥生時代竪穴住居跡 14 号（2）……137
第 106 図　弥生時代竪穴住居跡 14 号（3）……138
第 107 図　弥生時代竪穴住居跡 15 号（1）……139
第 108 図　弥生時代竪穴住居跡 15 号（2）……140
第 109 図　弥生時代竪穴住居跡 16 号（1）……141
第 110 図　弥生時代竪穴住居跡 16 号（2）……142
第 111 図　弥生時代竪穴住居跡 16 号（3）……143
第 112 図　弥生時代竪穴住居跡 17 号（1）……144
第 113 図　弥生時代竪穴住居跡 17 号（2）……145
第 114 図　弥生時代竪穴住居跡 17 号（3）……146
第 115 図　弥生時代竪穴住居跡 18 号（1）……147
第 116 図　弥生時代竪穴住居跡 18 号（2）……148
第 117 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（1）……149
第 118 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（2）……150
第 119 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（3）……151
第 120 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（4）……152
第 121 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（5）……153
第 122 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（6）……154
第 123 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（7）……155
第 124 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（8）……157
第 125 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（9）……158
第 126 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（10）……159
第 127 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（11）……160
第 128 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（12）……162
第 129 図　弥生時代竪穴住居跡 20 号（1）……163
第 130 図　弥生時代竪穴住居跡 20 号（2）……164
第 131 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（1）……165
第 132 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（2）……166
第 133 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（3）……167
第 134 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（4）……168
第 135 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（5）……169
第 136 図　弥生時代竪穴住居跡 22 号……170
第 137 図　弥生時代竪穴住居跡 23 号……171
第 138 図　弥生時代竪穴住居跡 24 号……172
第 139 図　弥生時代竪穴住居跡 25 号（1）……173
第 140 図　弥生時代竪穴住居跡 25 号（2）……174
第 141 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（1）……176
第 142 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（2）……177
第 143 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（3）……178
第 144 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（4）……179
第 145 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（5）……181
第 146 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（6）……182
第 147 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（7）……184
第 148 図　弥生時代竪穴住居跡 27 号……185
第 149 図　弥生時代竪穴住居跡 28 号（1）……186

第 150 図　弥生時代竪穴住居跡 28 号（2）……187
第 151 図　弥生時代竪穴住居跡 29 号（1）……188
第 152 図　弥生時代竪穴住居跡 29 号（2）……189
第 153 図　弥生時代竪穴住居跡 30 号（1）……190
第 154 図　弥生時代竪穴住居跡 30 号（2）……192
第 155 図　弥生時代竪穴住居跡 30 号（3）……193
第 156 図　弥生時代竪穴住居跡 31 号（1）……194
第 157 図　弥生時代竪穴住居跡 31 号（2）……195
第 158 図　弥生時代竪穴住居跡 31 号（3）……196
第 159 図　弥生時代竪穴住居跡 32 号……197
第 160 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（1）……199
第 161 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（2）……200
第 162 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（3）……201
第 163 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（4）……202
第 164 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（5）……203
第 165 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（6）……204
第 166 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（7）……205
第 167 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（8）……207
第 168 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（9）……209
第 169 図　弥生時代竪穴住居跡 34 号……210
第 170 図　弥生時代竪穴住居跡 35 号……211
第 171 図　弥生時代竪穴住居跡 36 号……212
第 172 図　弥生時代竪穴住居跡 37 号……213
第 173 図　弥生時代竪穴住居跡 38 号（1）……215
第 174 図　弥生時代竪穴住居跡 38 号（2）……216
第 175 図　弥生時代竪穴住居跡 39 号（1）……217
第 176 図　弥生時代竪穴住居跡 39 号（2）……218
第 177 図　弥生時代竪穴住居跡 40 号（1）……219
第 178 図　弥生時代竪穴住居跡 40 号（2）……220
第 179 図　弥生時代竪穴住居跡 40 号（3）……221
第 180 図　弥生時代竪穴住居跡 41 号（1）……223
第 181 図　弥生時代竪穴住居跡 41 号（2）……224
第 182 図　弥生時代竪穴住居跡 41 号（3）……225
第 183 図　弥生時代竪穴住居跡 42 号（1）……226
第 184 図　弥生時代竪穴住居跡 42 号（2）……227
第 185 図　弥生時代竪穴住居跡 43 号（1）……228
第 186 図　弥生時代竪穴住居跡 43 号（2）……229
第 187 図　弥生時代竪穴住居跡 43 号（3）……230
第 188 図　弥生時代竪穴住居跡 43 号（4）……231
第 189 図　弥生時代竪穴住居跡 44 号（1）……232
第 190 図　弥生時代竪穴住居跡 44 号（2）……233
第 191 図　弥生時代竪穴住居跡 45 号（1）……235
第 192 図　弥生時代竪穴住居跡 45 号（2）……236
第 193 図　弥生時代竪穴住居跡 45 号（3）……237
第 194 図　弥生時代竪穴住居跡 45 号（4）……238

【第２分冊】

第 195 図　弥生時代土坑１号……1
第 196 図　弥生時代土坑２～４号……2
第 197 図　弥生時代土坑５～８号……3
第 198 図　弥生時代土坑９～13 号……4
第 199 図　弥生時代土坑 14～19 号……5
第 200 図　弥生時代土坑 20～24 号……6
第 201 図　弥生時代土坑 25～29 号……7
第 202 図　弥生時代土坑 30～34 号……8
第 203 図　弥生時代土坑 35～40 号……9
第 204 図　弥生時代土坑 41・42 号……10
第 205 図　弥生時代土坑 43～47 号……11
第 206 図　弥生時代土坑 48～50 号・溝状遺構……12
第 207 図　弥生時代周溝墓１号……13
第 208 図　弥生時代周溝墓２号……14
第 209 図　弥生時代周溝墓３号（1）……15
第 210 図　弥生時代周溝墓３号（2）……16
第 211 図　弥生時代周溝墓３号（3）……18
第 212 図　弥生時代周溝墓４号（1）……19
第 213 図　弥生時代周溝墓４号（2）……20
第 214 図　弥生時代周溝墓４号（3）……22
第 215 図　弥生時代周溝墓５号……23
第 216 図　F-27 区土器集中図……24
第 217 図　F-27 区周辺遺物出土分布図……25
第 218 図　F-27 区周辺出土土器（1）……26
第 219 図　F-27 区周辺出土土器（2）……28
第 220 図　F-27 区周辺出土土器（3）……29
第 221 図　F-27 区周辺出土土器（4）……30
第 222 図　F-27 区周辺出土土器（5）……31
第 223 図　弥生時代土坑墓１号……32
第 224 図　弥生時代土坑墓２・３号……33
第 225 図　弥生時代土坑墓４～６号……35

第 226 図　弥生時代土坑墓 7 ・ 8 号……36
第 227 図　弥生時代土坑墓 9 号（1）……37
第 228 図　弥生時代土坑墓 9 号（2）……38
第 229 図　弥生時代土坑墓 10～13 号……39
第 230 図　弥生時代土坑墓 14・15 号……40
第 231 図　弥生時代土坑墓 16～18 号……41
第 232 図　弥生時代土坑墓 19 号（1）……43
第 233 図　弥生時代土坑墓 19 号（2）……44
第 234 図　弥生時代土坑墓 20 号（1）……45
第 235 図　弥生時代土坑墓 20 号（2）……46
第 236 図　弥生時代中期　西部出土土器（1）……47
第 237 図　弥生時代中期　西部出土土器分布図……48
第 238 図　弥生時代中期　西部出土土器（2）……49
第 239 図　弥生時代中期　西部出土土器（3）……50
第 240 図　弥生時代中期　西部出土土器（4）……51
第 241 図　弥生時代中期　西部出土土器（5）……52
第 242 図　弥生時代中期　西部出土土器（6）……53
第 243 図　弥生時代中期　西部出土土器（7）……54
第 244 図　弥生時代中期　西部出土土器（8）……55
第 245 図　弥生時代中期　西部出土土器（9）……56
第 246 図　弥生時代中期　西部出土土器（10）……57
第 247 図　弥生時代中期　西部出土土器（11）……58
第 248 図　弥生時代中期　西部出土土器（12）……59
第 249 図　弥生時代中期　西部出土土器（13）……60
第 250 図　弥生時代中期　西部出土土器（14）……61
第 251 図　弥生時代中期　西部出土土器（15）……62
第 252 図　弥生時代中期　西部出土土器（16）……63
第 253 図　弥生時代中期　東部出土土器（1）……64
第 254 図　弥生時代中期　東部出土土器分布図……65
第 255 図　弥生時代中期　東部出土土器（2）……66
第 256 図　弥生時代中期　東部出土土器（3）……67
第 257 図　弥生時代中期　東部出土土器（4）……68
第 258 図　弥生時代中期　東部出土土器（5）……69
第 259 図　弥生時代中期　東部出土土器（6）……70
第 260 図　弥生時代中期　東部出土土器（7）……71
第 261 図　弥生時代中期　東部出土土器（8）……72
第 262 図　弥生時代中期　東部出土土器（9）……73
第 263 図　弥生時代中期　東部出土土器（10）……74
第 264 図　弥生時代中期　東部出土土器（11）……75
第 265 図　弥生時代中期　東部出土土器（12）……76
第 266 図　弥生時代中期　東部出土土器（13）……77
第 267 図　弥生時代中期　東部出土土器（14）……78
第 268 図　西部出土石器分布図……80
第 269 図　西部出土石器（1）……81
第 270 図　西部出土石器（2）……83
第 271 図　西部出土石器（3）……84
第 272 図　西部出土石器（4）……85
第 273 図　西部出土石器（5）……86
第 274 図　西部出土石器（6）……88
第 275 図　西部出土石器（7）……89
第 276 図　西部出土石器（8）……91
第 277 図　西部出土石器（9）……92
第 278 図　西部出土石器（10）……93
第 279 図　西部出土石器（11）……94
第 280 図　西部出土石器（12）……95
第 281 図　西部出土石器（13）……96
第 282 図　西部出土石器（14）……97
第 283 図　西部出土石器（15）……98
第 284 図　西部出土石器（16）……99
第 285 図　西部出土石器（17）……101
第 286 図　西部出土石器（18）……102
第 287 図　西部出土石器（19）……103
第 288 図　西部出土石器（20）……104
第 289 図　西部出土石器（21）……105
第 290 図　東部出土石器分布図……107
第 291 図　東部出土石器（1）……108
第 292 図　東部出土石器（2）……109
第 293 図　東部出土石器（3）……111
第 294 図　東部出土石器（4）……112
第 295 図　東部出土石器（5）……113
第 296 図　東部出土石器（6）……114
第 297 図　東部出土石器（7）……116
第 298 図　東部出土石器（8）……117
第 299 図　東部出土石器（9）……118
第 300 図　東部出土石器（10）……119
第 301 図　東部出土石器（11）……120
第 302 図　古墳時代遺構配置図……146
第 303 図　古墳時代竪穴住居跡 1 号（1）……147

第 304 図　古墳時代竪穴住居跡１号（２）……148
第 305 図　古墳時代竪穴住居跡１号（３）……149
第 306 図　古墳時代竪穴住居跡１号（４）……150
第 307 図　古墳時代竪穴住居跡２号（１）……151
第 308 図　古墳時代竪穴住居跡２号（２）……152
第 309 図　古墳時代竪穴住居跡３号（１）……153
第 310 図　古墳時代竪穴住居跡３号（２）……154
第 311 図　古墳時代竪穴住居跡３号（３）……156
第 312 図　古墳時代竪穴住居跡３号（４）……157
第 313 図　古墳時代竪穴住居跡４号（１）……158
第 314 図　古墳時代竪穴住居跡４号（２）……159
第 315 図　古墳時代竪穴住居跡４号（３）……160
第 316 図　古墳時代竪穴住居跡４号（４）……161
第 317 図　古墳時代竪穴住居跡５号（１）……163
第 318 図　古墳時代竪穴住居跡５号（２）……164
第 319 図　古墳時代竪穴住居跡５号（３）……165
第 320 図　古墳時代竪穴住居跡５号（４）……166
第 321 図　古墳時代竪穴住居跡５号（５）……167
第 322 図　古墳時代土坑１号……168
第 323 図　古墳時代土坑２～４号……169
第 324 図　古墳時代土坑５・６号……170
第 325 図　古墳時代土坑７・８号……171
第 326 図　古墳時代土坑９・10 号……172
第 327 図　古墳時代西部出土土器分布図……173
第 328 図　古墳時代西部出土土器（１）……174
第 329 図　古墳時代西部出土土器（２）……175
第 330 図　古墳時代西部出土土器（３）……176
第 331 図　古墳時代西部出土土器（４）……177
第 332 図　古墳時代東部出土土器（１）……178
第 333 図　古墳時代東部出土土器分布図……179
第 334 図　古墳時代東部出土土器（２）……180
第 335 図　古墳時代東部出土土器（３）……181
第 336 図　古墳時代東部出土土器（４）……182
第 337 図　古墳時代須恵器……183
第 338 図　掘立柱建物跡配置図……188
第 339 図　掘立柱建物跡１号……189
第 340 図　掘立柱建物跡２号……190
第 341 図　掘立柱建物跡３号……191
第 342 図　掘立柱建物跡４号……192
第 343 図　掘立柱建物跡５号……193
第 344 図　掘立柱建物跡６号……194
第 345 図　掘立柱建物跡７号……195
第 346 図　掘立柱建物跡８号……196
第 347 図　掘立柱建物跡９号……197
第 348 図　掘立柱建物跡 10 号……198
第 349 図　掘立柱建物跡 11 号……199
第 350 図　重鉱物組成および火山ガラス比……201
第 351 図　火山ガラスの屈折率……203
第 352 図　斜方輝石の屈折率……203
第 353 図　重鉱物……203
第 354 図　軽鉱物……203
第 355 図　重鉱物組成および火山ガラス比……208
第 356 図　火山ガラス屈折率……208
第 357 図　斜方輝石の屈折率……208
第 358 図　重鉱物……209
第 359 図　軽鉱物……209
第 360 図　暦年較正年代……210
第 361 図　マルチプロット図……212
第 362 図　暦年較正年代……213
第 363 図　暦年較正結果……215
第 364 図　種実実体……216
第 365 図　F-44 地点における植物珪酸体分析結果……220
第 366 図　SI-22・26・27・28 における植物珪酸体分析結果……220
第 367 図　永吉天神段遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）……220
第 368 図　石包丁（拡大写真）……220
第 369 図　永吉天神段遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真……222
第 370 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（１）～（６）……226
第 371 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（７）～（15）……227
第 372 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（16）～（24）……228
第 373 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（25）～（29）……229

表目次

【第１分冊】

第１表　周辺遺跡一覧表……13
第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡……15
第３表　縄文晩期遺構内出土土器観察表……52
第４表　縄文晩期遺構出土石器観察表……52
第５表　入佐式土器観察表……52
第６表　黒川式土器観察表……53
第７表　突帯文土器観察表……86
第８表　弥生時代前期土器観察表……92
第９表　縄文時代晩期遺構番号新旧比較表……93
第10表　弥生時代遺構番号新旧比較表……93
第11表　古墳時代遺構番号新旧比較表……93
第12表　掘立柱建物跡番号新旧比較表……93
第13表　弥生時代住居跡・土坑・周溝墓出土土器観察表……121
第14表　弥生時代住居跡・土坑・周溝墓出土石器観察表……131
第15表　Ｆ-27区周辺出土土器観察表……133
第16表　弥生時代土坑墓出土土器観察表……134
第17表　弥生時代土坑墓出土石器観察表……134
第18表　弥生時代土坑墓出土鉄製品観察表……135
第19表　弥生時代中期西部出土土器観察表……135
第20表　弥生時代中期東部出土土器観察表……138
第21表　縄文時代晩期～弥生時代西部石器観察表……141
第22表　縄文時代晩期～弥生時代東部出土石器観察表……144
第23表　古墳時代住居跡・土坑出土土器観察表……184
第24表　古墳時代住居跡・土坑出土石器観察表……185
第25表　古墳時代西部土器観察表……186
第26表　古墳時代東部土器観察表……186
第27表　古墳時代須恵器観察表……187
第28表　テフラ組成分析結果……201
第29表　重鉱物・火山ガラス比分析結果……208
第30表　放射性炭素年代測定結果（σ^{13}C 補正値）……210
第31表　放射性炭素年代測定結果（σ^{13}C 未補正値，暦年較正用^{14}C 年代，較正年代）……210
第32表　測定試料および処理……212
第33表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果……212
第34表　放射性炭素年代測定・暦年較正結果……215
第35表　種実同定結果……216
第36表　永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析結果……219
第37表　永吉天神段遺跡出土炭化材の樹種同定結果……221
第38表　土器圧痕同定結果……226
第39表　土器圧痕調査結果……229

【第２分冊】

第１章　発掘調査の経緯

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議剣に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ区間の事業に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会に照会した。

この計画に伴い鹿児島県教育委員会文化財課（以下，県教委文化財課）は，平成11年１月に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間の，平成12年２月には志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財分布調査を実施し，50か所の遺跡（調査対象表面積854,100㎡）の存在が明らかになった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，県教委文化財課，県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）の４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の厳密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査や確認調査が実施されることとなった。

そこで，県教委文化財課はまず，平成13年１月29日から２月６日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，石縊遺跡，十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに，平成13年７月10日から７月26日に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査を実施し，同年９月17日～10月26日及び12月３日～12月25日の２期間にわたり，各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩保遺跡の３遺跡を対象に，平成13年10月１日から平成14年３月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年４月には，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡について再度分布調査を実施した結果，遺跡の調査対象範囲が678,700㎡となった。

その後，日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成15年11月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年12月に大隅ＩＣ（平成21年４月28日，「曽於弥五郎ＩＣ」へ名称変更）から末吉財部ＩＣ間の発掘調査協定書締結，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書が締結され，工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま継続されることになった。

また，日本道路公団からの委託業務は曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

第２節　確認調査

永吉天神段遺跡の確認調査は，県内遺跡事前調査事業で平成23年７月１日から同年９月28日に実施した。

１　調査体制

事業主体　鹿児島県教育委員会
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター

		所　　長	寺田　仁志
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中　明成
	〃	次長兼南の縄文調査室	井ノ上秀文
	〃	調査第一課長	堂込　秀人
	〃	調査第一課	
		第二調査係長	大久保浩二
調査担当	〃	文化財主事	馬籠　亮道

２　調査の経過

調査の経過については，日誌抄を月ごとに集約して記載した。写真撮影は適宜行っているので記述を省略した。

７月　調査開始。調査施設設営及び環境整備。１～31トレンチ（以下，Ｔ）を設定・掘削。

８月　トレンチ調査。遺物取上げ。１Ｔ：旧石器剥片・縄文早期被熱破砕礫出土。２Ｔ：方形竪穴住居跡検出。弥生土器・石剣出土。４Ｔ：柱穴検出。下剥峯式土器・被熱破砕礫出土。８Ｔ：柱穴検出。磨製石鏃出土。15Ｔ：縄文早期土器片出土。16Ｔ：Ⅱ層遺物集中部下部硬化面検出。23Ｔ：Ⅱ層土器片及び柱穴検出。Ⅴ層被熱破砕礫検出。24Ｔ：柱穴検出。隣接地の民家敷地から古銭を多量に採取。27Ｔ：Ⅱ・Ⅲ層土器片出土。Ⅶ層（薩摩火山灰層上面）柱穴検出。30Ｔ：Ⅱ層土師器出土。Ⅲ層縄文後期土器片出土。

９月　29・30・31トレンチ調査。遺物取上げ。埋め戻し。16Ｔ：硬化面を竪穴住居跡と判断。６・15・18Ｔ：石坂式土器出土。12・13・16・21・27Ｔ：山ノ口式土器・

東原～辻堂原式土器出土。30・31 T：縄文晩期組織痕土器出土。文化庁記念物課埋蔵文化財部門林正憲調査官来跡（14 日）。

第3節　本調査

確認調査の結果，地点毎に包含層の時期や内容には差があるが，遺構・遺物は調査対象地の広い範囲で，中世～古代，古墳時代～弥生時代，縄文時代晩期・早期，旧石器時代の包含層が確認され調査対象範囲が広大で，調査対象表面積を 37，100㎡，調査対象延面積 87,588㎡とした。

確認調査の結果を踏まえ，改めて遺跡の取扱いについて県教委文化財課，国土交通省，埋文センターの３者で協議し，遺跡の現状保存は困難であることから，埋文センターが本調査を実施することとなった。平成 24 年度は埋文センターが本調査を実施し，発掘調査は，「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき，株式会社バスコへ発掘調査支援業務の委託を行い実施した。

平成 25 年度からは，東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を含めた国事業関係を円滑に進めるために発足した公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下，調査センター）が，県から受託して発掘調査を進めることになった。

本調査は，平成 24 年７月２日から平成 25 年１月 28 日（第１地点含む），平成 25 年６月 13 日から平成 26 年１月 28 日，平成 26 年５月 12 日から平成 27 年１月 28 日，平成 27 年５月 11 日から平成 28 年１月 27 日（第３地点含む）までの期間実施した。調査体制については，以下のとおりである。

1　調査体制

(1) 平成 24 年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局		
	大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所　　長	寺田　仁志
調査企画	〃	次長兼総務課長	新小田　穣
	〃	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	〃	調査第二課長	冨田　逸郎
	〃	調査第二課	
		第一調査係長	八木澤一郎
調査担当	〃	文化財主事	川口　雅之
調査事務	〃	主幹兼総務係長	大園　祥子
	〃	主　　査	岡村　信吾
現地指導	鹿児島大学大学院理工学研究科		
	准教授		井村　隆介
	福岡大学人文学部教授		武末　純一

(2) 平成 25 年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局		
	大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団		
	埋蔵文化財調査センター		
		センター長	冨田　逸郎
調査企画	〃	総務課長兼総務係長	山方　直幸
	〃	調査課長	鶴田　静彦
	〃	調査第一係長	八木澤一郎
調査担当	〃	文化財専門員	湯場崎辰巳
	〃	文化財専門員	彌榮　久志
事務担当	〃	主　　査	岡村　信吾
現地指導	福岡大学人文学部教授		武末　純一

(3) 平成 26 年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局		
	大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団		
	埋蔵文化財調査センター		
		センター長	堂込　秀人
調査企画	〃	総務課長兼総務係長	山方　直幸
	〃	調査課長	八木澤一郎
	〃	調査第一係長	中村　和美
調査担当	〃	文化財専門員	湯場崎辰巳
	〃	文化財専門員	彌榮　久志
	〃	文化財専門員	隈元　俊一
事務担当	〃	主　　査	岡村　信吾
現地指導	福岡大学人文学部教授		武末　純一
	福岡大学人文学部教授		桃崎　祐輔
	鹿児島大学法文学部教授		本田　道輝
	鹿児島大学教育学部教授		日隈　正守
	鹿児島国際大学国際文化学部		
	教授		中園　聡
	鹿児島県立短期大学生活科学科		
	教授		揚村　固
	鹿児島女子短期大学助手		下野真理子

(4) 平成 27 年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局		
	大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団		
	埋蔵文化財調査センター		
		センター長	堂込　秀人
調査企画	〃	総務課長兼総務係長	有村　貢

埋蔵文化財調査センター
〃　調査課長　八木澤一郎
〃　調査第一係長　中村　和美
調査担当　〃　文化財専門員　隈元　俊一
〃　文化財専門員　上村　俊洋
事務担当　〃　主査　荒瀬　勝己
現地指導　大分県立歴史博物館
企画普及課長　原田　昭一
鹿児島大学大学院理工学研究科
准教授　井村　隆介

2　発掘調査の民間委託

発掘調査の実施にあたり，埋文センターは「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査(民間委託)実施要綱」，調査センターは「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき，株式会社パスコへ発掘調査支援業務の委託を行った。なお，埋文センター及び調査センターの各年度調査担当職員が常駐監理して，発掘調査の統括を行った。委託内容等は以下のとおりである。

(1) 平成 24 年度

委託先　株式会社パスコ
契約期間　平成 24 年 6 月 8 日～平成 25 年 2 月 22 日
委託内容　発掘調査業務　1 式
測量業務　1 式
土工業務　1 式
担当者　主任技術者　新川　浩
主任調査員　池畑　耕一
調査員　西田　茂　丸山　清志
黒沢　聖子
測量技士　小林　進哉
検査　中間検査　平成 24 年 10 月 18 日
完成検査　平成 25 年 2 月 13 日（実地検査）
平成 25 年 2 月 15 日(成果物検査)

(2) 平成 25 年度

委託先　株式会社パスコ
委託期間　平成 25 年 6 月 3 日～平成 26 年 3 月 14 日
委託内容　発掘調査業務　1 式
測量業務　1 式
土工業務　1 式
担当者　主任技術者　川野　勝弘
主任調査支援員　池畑　耕一
調査支援員　西田　茂　秀嶋　龍男
黒沢　聖子　翁長　武司
宮本　栄二
測量技士　小林　進哉
検査　中間検査　平成 25 年 10 月 10 日
完成検査　平成 26 年 2 月 19 日（実地検査）
平成 26 年 3 月 4 日（成果物検査）

(3) 平成 26 年度

委託先　株式会社パスコ
委託期間　平成 26 年 4 月 11 日～平成 27 年 3 月 12 日
委託内容　発掘調査業務　1 式
測量業務　1 式
土工業務　1 式
担当者　主任技術者　川野　勝弘
主任調査支援員　西田　茂
調査支援員　池畑　耕一　秀嶋　龍男
小柳　太一　黒沢　聖子
翁長　武司　宮本　栄二
上屋　眞一（5 月 26 日～）
関口　昌和（7 月 1 日～）
関口真由美（7 月 1 日～）
玉域乾一朗（～11 月 27 日）
測量主任技士　中野　広行
測量技士　河野　正博
検査　中間検査　平成 26 年 10 月 16 日
一部完成検査　平成 26 年 12 月 19 日
（工事着手に伴う一部引き渡しのため）
完成検査　平成 27 年 3 月 3 日（実地検査）
平成 27 年 3 月 5 日（成果物検査）

(4) 平成 27 年度

委託先　株式会社パスコ
委託期間　平成 27 年 4 月 13 日～平成 28 年 3 月 11 日
委託内容　発掘調査業務　1 式
測量業務　1 式
土工業務　1 式
担当者　主任技術者　川野　勝弘
主任調査支援員　西田　茂
調査支援員　上屋　眞一，浦辻　栄治
関口　昌和，翁長　武司
宮本　栄二
島田由利佳（～11 月 26 日）
測量主任技士　中野　広行
検査　一部完成検査　平成 27 年 8 月 10 日
（工事着手に伴う一部引き渡しのため）
中間検査　平成 27 年 10 月 21 日
完成検査　平成 28 年 2 月 23 日（実地検査）
平成 28 年 3 月 1 日（成果物検査）

第 4 節　調査の経過

第 2 地点の調査は，平成 24 年度から 27 年度まで実施した。本報告書は，縄文時代晩期から古墳時代までを対象としているため，平成 25 年度については一部省略した。平成 25 年度の全調査経過については，『(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（13）永吉天神段遺跡 2』に記載してある。

(1) 平成 24 年度

平成 24 年度は，第 1 地点と第 2 地点の 48 区以東を調査対象とした。第 1 地点の調査経過については，『(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（8）永吉天神段遺跡』に記載してある。

7 月　調査開始（2 日）。新規入場者教育。環境整備。表土剥ぎ。Ⅱ層調査。

8 月　H～K－52～55 区Ⅱ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。全景写真撮影。「おおさきっこ歴史探検隊」発掘体験（3 日）。

9 月　B～I－49～53 区，F～I－57～61 区表土剥ぎ。B～D－49～53 区，F～I－50～53 区，K・L－51～53 区Ⅱ・Ⅲ層調査。竪穴住居跡多数検出。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

10 月　C～F－49～53 区，D～H－47～49 区，I－48・49 区表土剥ぎ。D～K－48～54 区Ⅱ層調査。遺構調査。地形測量。竪穴住居跡 21 基・円形周溝墓 1 基検出。南日本新聞社取材（24 日）。

11 月　E～H－47・48 区表土剥ぎ。C～E－47～50 区，F～H－47～49 区Ⅱ層調査。遺構調査。地形測量。中世の竪穴建物・土坑検出。

12 月　D－48 区Ⅱ層調査。D－48・49 区で土坑 2 基検出。遺構調査。下層確認調査（5×5 m のトレンチ 8 本設定）。空撮（4 日）。南日本新聞社取材（5・8 日）。福岡大学武末純一教授現地指導（6・7 日）。現地説明会（8 日：見学者 270 名）

1 月　弥生中期の遺構調査。SI23 は次年度調査へ。下層確認調査で縄文早期の包含層が全面にあることを確認。旧石器包含層を C～G－50～53 区の約 1,400㎡で確認。遺物水洗。遺構埋土フローテーション。調査終了。

(2) 平成 25 年度

C～L－48～55 区を A 地点，C～J－26～47 区を B 地点として調査を行った。A 地点は縄文早期以前の地層を調査対象としているため，調査経過については省略する。なお，平成 25 年度から，発掘調査支援業務委託において，基礎整理作業（水洗・接合）も並行して行った。

【発掘調査】

6 月　調査開始（10 日）。新規作業員研修。環境整備。G～I－38～43 区表土剥ぎ。Ⅱ層調査。土坑墓・溝状遺構の検出・調査。遺物取り上げ。

県教委文化財課中村和美文化財主事監理業務（11 日）。

7 月　E・F－52・53 区，G・H－53・54 区遺構・遺物の範囲確認のため，表土剥ぎ，Ⅱ層調査。F・G－49・50 区Ⅲ層掘立柱建物跡調査終了。D～F－32～35 区・40～45 区表土剥ぎ。D～F－32～35 区・40～45 区，G～I－38～43 区Ⅱ層調査。遺構調査。Ⅱ層から中世～縄文時代晩期の遺物多数出土。

県教委文化財課中村和美文化財主事監理業務（3 日）。鳥取県埋蔵文化財センター長他 2 名現地視察（19 日）。姶良市チャレンジ！遺跡発掘体験＆キャンプ泊見学（23 日：38 名）

8 月　E～J－37～43 区表土剥ぎ。Ⅱ層調査。土坑墓から白磁・湖州六花鏡，土師皿 3 点出土。弥生時代中期竪穴住居跡多数検出・調査。

霧島市キッズ発掘体験（6 日：18 名），埋文センター堂込秀人調査課長監理業務（7 日）。熊本大学社会教育主事講習（8 日：15 名）。喜界町教育委員会現地視察（9 日：7 名）。

9 月　D～F－30・31 区・37～39・44・45 区表土剥ぎ。D～J－37～45 区Ⅱ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。

古環境研究所（植物珪酸体分析現地採取）（19 日）。京都府立大学生見学（24 日：6 名）

10 月　D・E－29・30 区表土剥ぎ。D～F－37～39 区Ⅳ層重機掘削。E－45・46 区，G－36・37・43・44 区，J－40～43 区Ⅱ層調査。竪穴住居跡・掘立柱建物跡等遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

福岡大学武末純一教授現地指導（1・2 日）。湧水町田尾遺跡作業員一行見学（1 日：24 名）。志布志市有明地区高齢者学級見学（4 日：24 名）。中間検査（10 日）。空撮（16 日）。埋蔵文化財発掘調査現地研修会（29 日：15 名）

11 月　D・E－37～47 区，F～I－36～39 区Ⅳ層及びF－38 区Ⅶ～Ⅸ層重機掘削。D～F－30～35 区Ⅱ・Ⅲ層調査。土坑墓 1 基等検出。竪穴住居跡・掘立柱建物跡等遺構調査。D・E－37～47 区，F～I－36～39 区Ⅴ層調査。SI23～41 調査終了。F－38 区Ⅹ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

現地説明会（9 日：見学者 310 名）。鹿児島県大隅地域振興局局長・建設部長見学（12 日）。パリノ・サーヴェイ（テフラ現地採取）（15 日）。埋文センター堂込秀人調査課長監理業務（22 日），埋文センター井ノ上秀文所長監理業務（25 日）。曽於地区文化協会見学（27 日：13 名）

12 月　C－27・28 区，D－28・29 区，G・H－44～46 区，I－44 区表土剥ぎ。D～H－30～44 区Ⅳ層，D～F－30～34 区Ⅵ～Ⅸ層掘削。C・D－27～29 区Ⅱ・Ⅲ層調査。D～F－30～34 区，G～J－40～43 区Ⅴ層調査。D～F－30～34 区，D～G－36～47 区Ⅹ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

1 月　E・F－36 区表土剥ぎ。E～G－33～36 区，E～I－40～47 区Ⅳ層重機掘削。H・I－40・41 区Ⅶ～Ⅸ層重機掘削。E～G－33～36 区，H・I－43～45 区Ⅱ・Ⅲ層調査。E～G－33～36 区，F－40～47 区，G～I－43・44 区，G－45～47 区Ⅴ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

埋蔵文化財専門職員養成講座（17 日）

【整理作業】

平成 24 年度出土遺物について，水洗・注記等が未了のものがあったため，6 月からこの作業を優先して 6 月・7 月に水洗・注記。7 月～9 月に分類・接合。平成 25 年度出土遺物については 7 月から水洗・注記を始め，その後，分類・接合・台帳作成も行った。1 月に収納準備を始め，2 月 5 日に埋文センターへ収納した。

(3) 平成 26 年度

【発掘調査】

平成 26 年度は，C～L－18～41 区を中心に，中世から縄文早期と地形観察用の土層ベルト沿いにトレンチを設定して，縄文早期の遺構確認調査と旧石器時代の下層確認調査を行った。遺物の出土が見られた箇所については，一部拡張を行い遺物の広がりを確認した。なお，D～J－24～28 区は弥生時代から中世に帰属する墳丘等も予想されたため，表土から人力による掘り下げを行った。

5 月　調査開始（7 日）。C～K－18～22 区表土剥ぎ。Ⅱ層調査。D～J－24～28 区人力による表土剥ぎ。

県教委文化財課黒川忠広文化財主事監理業務（20 日）。

6 月　C～K－18～23 区，D～J－24～28 区Ⅱ層調査。弥生時代中期の土坑墓等多数検出，遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

7 月　C～K－18～23 区Ⅲ層調査。Ⅳ層重機掘削及びⅤ層調査。D～J－24～28 区Ⅱ～Ⅲ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。

文化庁高橋宏治記念物課長現地視察（1 日）。

8 月　I・J－36～38 区表土剥ぎ及びⅡ・Ⅲ層調査。K・L－38～40 区，C～E・H・I－20～22 区Ⅴ層調査。J－19～22 区Ⅶ層重機掘削及びⅧ～Ⅹ層調査。D～J－24～28 区Ⅱ・Ⅲ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

空撮（12 日）。鹿児島大学本田道輝教授，鹿児島国際大学中園聡教授，鹿児島県立短期大学揚村固教授現地指導（19 日）。福岡大学武末純一教授現地指導（20・21 日）。「おおさきっこ歴史探検隊」発掘体験（20 日：15 名）。志布志市立宇都中学校職員研修（20 日：2 名）。

9 月　F～H－21・22 区，I～L－36～38 区Ⅳ層重機掘削及びⅤ層調査。D－20～22 区，K・L－39 区Ⅶ層重機掘削及びⅧ～Ⅹ層調査。E～K－27～30 区表土剥ぎ及びⅡ・Ⅲ層調査。D～J－24～28 区Ⅱ・Ⅲ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

大崎町ひまわり女性講座見学（4 日：28 名）。弥生時代中期墓域についての現地報道発表（10 日）。鹿児島女子短期大学下野真理子助手現地指導（10 日）。現地公開（13 日：370 名）。

10 月　E～K－27～32 区，I～L－36～38 区表土剥ぎ及びⅡ・Ⅲ層調査。D・E－23～26 区，I～K－23～26 区Ⅴ層調査。D～I－23 区，G－22 区Ⅶ層重機掘削及びⅧ～Ⅹ層調査。D～J－24～28 区Ⅱ・Ⅲ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

全埋協中四国・九州ブロック会議見学（3 日：22 名）。福岡大学桃崎祐輔教授現地指導（7 日）。中間検査（16 日）。大崎町立菱田小学校見学（23 日：17 名）。

11 月　J K－33・35 区，H～L－36～38 区Ⅱ・Ⅲ層調査。D～K－23～30 区Ⅳ層重機掘削及びⅤ層調査。D～F－27 区，G－23～26 区，J－25・26 区，J・K－27 区Ⅶ層重機掘削及びⅧ～Ⅹ層調査。

鹿児島大学日隈正守教授現地指導（6 日）。現地公開（8 日：210 名）。大隅教育事務所埋蔵文化財現地研修会（11 日：10 名）。大崎町立中沖小学校見学・地層学習（13 日：19 名）。

12 月　K－24～26 区，K・L－33～35 区Ⅲ層調査。E・F－28・29 区，G－27・28 区，H～K－27 区，H～L－36～38 区Ⅴ層調査。G・H・I－23・24 区，G－27 区Ⅶ層重機掘削及びⅧ～Ⅹ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

県教委文化財課黒川忠広文化財主事監理業務（12・22 日）。埋文センター前迫亮一調査課長監理業務（19 日）。一部完成検査（19 日）。

1 月　K・L－27～31 区Ⅲ層調査及びⅤ層調査。F～L－28～32 区Ⅴ層調査。G－29・30 区，G～I－27・31 区，J・K－23・24 区，K－31 区，H～K－36 区，J－36～38 区Ⅶ層～Ⅹ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。調査終了。

【整理作業】

未洗いであった平成 25 年度出土遺物について，6 月に水洗・注記を行った。平成 26 年度分については，7 月から水洗・注記を始め，9 月～1 月は，併行して分類・接合を行い，2 月 4 日に埋文センターへ収納した。

(4) 平成 27 年度

【発掘調査】

平成 27 年度は，第 3 地点の調査と併せて行った。第 3 地点の調査経過については『(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（22）永吉天神段遺跡 4』に記載してあるため，ここでは省略した。また，第 1 地点の報告書作成と第 2 地点のA地点の整理作業も同時に行ったが，この経過については『(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（8）永吉天神段遺跡』に記載してある。

5 月　調査開始（11 日）。7 月までは第 3 地点のみ調査。埋文センター福山徳治所長監理業務（14 日）。

7 月　県教委文化財課黒川忠広文化財主事監理業務（16 日）。

8 月　第 2 地点に着手。K・L－32 区，I・J－34・

35区表土剥ぎ。K・L－32区Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ層調査。

空撮（5日）。一部完成検査（10日）。

9月　L－31区表土剥ぎ。L－31区Ⅱ・Ⅲ層調査。L－31区Ⅴ層調査。

大崎町モニターツアー鹿児島大学学生（18日：8名）

10月　G～J－33・34区，G・H－35・36区，G～I－37区，I・J－38・39区表土剥ぎ。G～J－33・34区，G・H－35区，G－36区Ⅱ・Ⅲ層調査。

中間検査（21日）。

11月　D・E－28区，D～F－29区，E～G－30・31区，F・G－32区，I・J－32区，F～J－33区，G～J－34・35区，G～I－36区Ⅱ・Ⅲ層調査。

電柱撤去作業終了（24日）。

12月　E～G－30・31区，F・G－32区，I・J－32区，F～J－33区，G～J－34・35区，G～I－36区Ⅱ・Ⅲ層調査。J－33区，G・H－34区Ⅴ層調査。J－33区Ⅶ～Ⅹ層調査。

大崎町教育委員会来跡（2日：2名）。空撮（4日）。大分県立歴史博物館原田昭一企画普及課長現地指導（1・2日）

1月　E～G－31・32区，I・J－32区，H－36区Ⅱ～Ⅲ層調査。F・G－31・32区，I・J－32区，H－36区Ⅴ層調査。J－34・35区，G・H－34区，E～G－31区旧石器調査。全調査終了。

地下式坑について報道機関に公表（18日），及び現地公開（21日）。

【整理作業】

平成26年度出土遺物について，5月・6月に水洗・注記を行った。平成27年度出土遺物については，6月から水洗・注記を開始し，併行して10月～1月に分類を行い，1月は接合を行った。2月4日に埋文センターへ遺物を収納した。

第5節　整理・報告書作成

1　整理・報告書作成作業の組織

本報告書に伴う整理・報告書作成作業は，県から受託した調査センターが平成27～30年度に実施した。平成27年5月～平成28年1月は，永吉天神段遺跡に設置した整理作業場を中心に行った。平成28年5月～平成29年2月は，調査センター第二整理作業所で行った。平成29年4月～平成30年3月は，調査センター第一整理作業所で行った。平成30年5月～平成31年2月は，霧島市福山町に設置された調査センター第2整理作業所で行った。なお，平成25～27年度は，発掘調査支援業務委託の一部として基礎的整理作業（水洗・注記中心）を行っている。整理・報告書作成作業に係る組織は以下のとおりである。

(1) 平成27年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

		センター長	堂込　秀人
作成企画	〃	総務課長兼総務係長	有村　貢
	〃	調査課長	八木澤一郎
	〃	調査第一係長	中村　和美
作成担当	〃	文化財専門員	湯場崎辰巳
	〃	文化財専門員	隈元　俊一
事務担当	〃	主査	荒瀬　勝己

報告書作成検討委員会
6月8日・8月18日・11月9日・11月26日
調査課長ほか5名

(2) 平成28年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

		センター長	堂込　秀人
作成企画	〃	総務課長兼総務係長	有村　貢
	〃	調査課長	八木澤一郎
	〃	調査第一係長	中村　和美
作成担当	〃	文化財専門員	隈元　俊一
	〃	文化財専門員	上村　俊洋
事務担当	〃	主査	荒瀬　勝己

報告書作成指導委員会
6月1日・8月23日・10月6日・11月4日
12月5日・2月1日　調査課長ほか5名
報告書作成検討委員会
6月6日・8月26日・10月11日・11月8日
12月27日・2月13日　センター長ほか6名

(3) 平成29年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

		センター長	前迫　亮一
作成企画	〃	総務課長兼総務係長	中村伸一郎
	〃	調査課長	中原　一成
	〃	調査第一係長	今村　敏照
作成担当	〃	調査第一係長	今村　敏照
	〃	文化財専門員	横手浩二郎
事務担当	〃	主査	荒瀬　勝己

報告書作成指導委員会
6月7日・8月2日　調査課長ほか5名

報告書作成検討委員会
6月12日・8月9日　センター長ほか5名

(4) 平成30年度

事業主体　国土交通局九州地方整備局
大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　前迫　亮一
作成企画　〃　総務課長兼総務係長　中村伸一郎
〃　調査課長　中原　一成
〃　調査第一係長　今村　敏照
作成担当　〃　文化財専門員　横手浩二郎
〃　文化財専門員　相良　典隆
事務担当　〃　主査　小牧　智子
報告書作成指導委員会
6月5日・8月7日・10月3日・11月2日
2月6日　調査課長ほか6名
報告書作成検討委員会
6月12日・8月9日・10月10日・11月6日
2月8日　センター長ほか5名

(5) 平成31年度（令和元年度）

事業主体　国土交通局九州地方整備局
大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　中原　一成
作成企画　〃　総務課長兼総務係長　中島　治
〃　調査課長　寺原　徹
〃　調査第三係長　横手浩二郎
作成担当　〃　文化財専門員　相良　典隆
事務担当　〃　主査　有川　剛弘
報告書作成指導委員会
6月12日　調査課長ほか6名
報告書作成検討委員会
6月17日・7月25日　センター長ほか5名

2　整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託

整理作業・報告書作成作業の実施にあたり，埋文調査センターは「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要綱」に基づき，平成27･28年度，平成30年度は株式会社パスコへ整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行った。委託内容等は以下のとおりである。

(1) 平成27年度

委託先　株式会社パスコ
契約期間　平成27年4月13日～平成28年3月11日
作業期間　平成27年5月11日～平成28年1月28日
委託内容　報告書作成作業支援業務　1式
整理作業支援業務　1式
印刷製本業務　1式
担当者　主任調査支援員　池畑　耕一
調査支援員　黒沢　聖子，関口真由美
松本　拓
検査　中間検査　平成27年10月21日
完成検査　平成28年3月1日

(2) 平成28年度

委託先　株式会社パスコ
契約期間　平成28年4月11日～平成29年3月10日
作業期間　平成28年5月9日～平成29年2月17日
委託内容　報告書作成作業支援業務　1式
整理作業支援業務　1式
自然科学分析業務　1式
印刷製本業務　1式
担当者　主任調査支援員　池畑　耕一
調査支援員　黒沢　聖子，浦辻　栄治
関口　昌和，関口真由美
翁長　武司，松村　由記
相川　薫
検査　中間検査　平成28年10月25日
完成検査　平成29年2月27日

(3) 平成30年度

委託先　株式会社パスコ
契約期間　平成30年4月9日～平成31年3月15日
作業期間　平成30年5月7日～平成31年2月15日
委託内容　報告書作成作業支援業務　1式
整理作業支援業務　1式
担当者　主任調査支援員　池畑　耕一
調査支援員　関口真由美，関口　昌和
翁長　武司，松村　由記
相川　薫，飯野　拓哉
検査　中間検査　平成30年10月26日
完成検査　平成31年3月6日

3　整理作業の経過

整理作業の経過は以下のとおりである。

(1) 平成27年度

第1地点の報告書作成業務と第2地点のA地点の整理作業・報告書作成業務を行った。第1地点の報告書作成業務経過については，『(公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（8）永吉天神段遺跡』に記載してあるので，ここでは省略した。

4月　支援業務委託準備，入札，土器分類
5月　支援業務委託開始，対象遺物を埋文センターから搬入，土器再分類・再選別，石器実測準備・実測（～1月），図面整理（～9月）

6月　土器実測（～1月）・トレース（～2月），石器トレース（～2月），図面トレース（～9月）・調整（～9月）

7月　台帳作成（～1月），原稿執筆（～2月）

8月　トレースに係る管理（～2月）

9月　観察表作成（～2月）

10月　中間検査

1月　遺物を埋文センターに収納

3月　成果物提出，支援業務委託終了，完成検査

※　本遺跡第1地点の報告書を刊行。

(2) 平成28年度

第2地点の「旧石器時代・縄文時代早期・後期編」報告書作成刊行業務と「古代・中世・近世編」報告書作成業務を行ったが，「旧石器時代・縄文時代早期・後期編」については，『(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（13）永吉天神段遺跡2』に記載してあるので，ここでは省略した。

4月　支援業務委託準備，入札

5月　支援業務委託開始，遺物を埋文センターから第2整理作業所へ移動，土師器・陶磁器再分類・再選別・接合，石・金属製品実測準備，図面整理

6月　土師器復元・実測（～12月），陶磁器復元・実測（～12月），石製品実測・トレース（～10月），金属製品実測・トレース（～10月），図面整理・トレース・調整（～2月），台帳作成・修正（～2月）

7月　原稿執筆（～2月）

8月　レイアウト（～2月）

9月　観察表作成（～2月），中間検査準備

10月　中間検査（25日）

12月　校正（～2月）

1月　遺物仮撮影，成果物収納準備

2月　成果物収納，支援業務委託作業終了，検査準備

3月　成果物提出，支援業務委託終了，完成検査

※　本遺跡第2地点旧石器時代・縄文時代早期・後期編の報告書を刊行。

(3) 平成29年度

第2地点「古代・中世・近世編」の刊行と，第3地点の報告書作成業務及び第2地点「縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代編」の整理作業を埋文調査センター直営で行ったが，「古代・中世・近世編」については，『(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（17）永吉天神段遺跡3』に記載してあるので，ここでは省略した。

6月　包含層出土遺物搬入，分類，接合（～11月）

10月　遺構出土遺物搬入，接合（～12月）

12月　包含層出土遺物実測（～2月）
　　石器実測委託（～3月）

2月　包含層出土遺物実測終了，作業員作業終了

※　本遺跡第2地点古代・中世・近世編の報告書を刊行。

(4) 平成30年度

第3地点の刊行及び第2地点の「縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代編」報告書作成業務を行ったが，第3地点については，『(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（22）永吉天神段遺跡4』に記載してあるので，ここでは省略した。

4月　支援業務委託準備，入札

5月　支援業務委託開始，対象遺物を埋文センターから第2整理作業所へ移動，土器選別・接合・実測・トレース，石器選別

6月　土器選別・接合・復元・実測・トレース，石器選別・実測準備，台帳作成・修正

7月　土器選別・接合・復元・実測・拓本・トレース，石器実測準備，台帳作成・修正，レイアウト

8月　土器選別・接合・復元・実測・拓本・トレース，石器実測，台帳作成・修正，観察表作成，レイアウト

9月　土器選別・接合・復元・実測・拓本・トレース，台帳作成・修正，観察表作成，レイアウト

10月　土器復元・実測・拓本・トレース，石器実測，台帳作成・修正，観察表作成，レイアウト，原稿執筆，検査準備，中間検査

11月　土器復元・塗色・実測・拓本・トレース，石器実測，台帳作成・修正，観察表作成，レイアウト，原稿執筆，遺物撮影

12月　土器復元・塗色・実測・トレース，石器実測，台帳作成・修正，観察表作成，レイアウト，原稿執筆，遺物撮影，成果物収納準備

1月　遺物撮影，成果物収納準備

2月　成果物収納，支援業務委託作業終了，検査準備

3月　成果物提出，支援業務委託終了，完成検査

※　本遺跡第3地点の報告書を刊行。

(5) 平成31年度（令和元年度）

第2地点の「縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代編」報告書作成刊行業務を行った。

4月　掲載遺物の収納状況確認，写真整理，原稿執筆

5月　レイアウト，遺物撮影，原稿執筆（～7月）

10月　印刷・製本入札（～11月）

2月　報告書納品

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理・地質的環境

大崎町は，鹿児島県の東南部，大隅半島の東部に位置する。東は志布志市，南は肝属郡東串良町，西は鹿屋市，北は曽於市と接し，南東は志布志湾に面している。

大隅半島は，南北方向に走る山地，その間の丘陵，台地及び低地などの低地帯から構成され，地質は大部分がシラス，ボラなどの火山灰土壌となっている。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に張出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119 m）である。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈山地へと連なっている。高隈山地は，北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600 m級の山々と，南部の大箆柄岳（1,236.8 m）を主峰に横岳・御岳など1,000 m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は，ともに九州山地の延長上にあり，その間は丘陵や台地及び低地帯となっている。これらの山間地を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布する典型的なシラス地形となっている。この火砕流は，鹿児島湾口にある阿多カルデラの火砕流や，湾奥にある姶良カルデラの入戸火砕流で，これらの火砕流をはじめとする火山性噴出物の堆積がベースとなっている。噴出物は，堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開析されるが，丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず，広大な台地となっている。

一方，低地は高隈山地や鰐塚山地などを水源とする大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾などに注いでいる。これらの河川は，上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また，幾段かの河岸段丘も認められる。海岸線には砂丘の形成されるところもあり，特に東側の志布志湾岸では幅広い。

大崎町の地形は，北部に菱田川とその上流にあたる大鳥川，東部を田原川，中央部を持留川が南流し，志布志湾に注いでいる。大崎町の地勢は概ね２つに分けられ，北端部は大鳥川を中心として河川が溶結凝灰岩を切り開き，起伏の激しい渓谷を構成している。中部から南部地帯は北西から東南の海岸線に向かって，緩やかに傾斜している起伏の少ない平坦な地帯であり，場所によっては志布志湾まで見通せる。これらの河川によって台地は区切られ，西部から永吉台地，仮宿台地，飯隈（中神）台地に分けられる。永吉台地の西側を串良川，永吉台地と仮宿台地の間を持留川，飯隈台地の東側を菱田川が流れている。台地の大部分は，約29,000年前の姶良カルデラ起源のシラスの上に形成された「クロボク」と呼ばれる黒色土壌が広がっている。

大崎町の海岸線は，志布志市から東串良町まで約16㎞にわたって続く幅１～1.5㎞の砂丘海岸のほぼ中央部分にあたる。菱田川河口から南西に弧状を描いて，東串良町に至るまで約7㎞の海岸線があり，弥生時代などの遺跡が数mの砂層に厚く覆われていた事例もある。

永吉天神段遺跡は，永吉台地の東側縁辺部に位置し，志布志湾から直線距離で約6㎞ある。持留川とその支流に，東側と南西側を挟まれた標高約35 mの河岸段丘及び標高約50 mの舌状台地上に立地する。調査前は宅地あるいは畑地であった。持留川の流域沿いには，下堀遺跡や荒園遺跡・麦田下遺跡・高久田A遺跡などがあり，本遺跡同様，旧石器時代～中世の遺構・遺物が確認されている。また，台地の麓には，三所大権現や档ヶ山古石塔群が所在し，付近の民家では多量の古銭が採取されていることから，中・近世においても歴史的に重要な地域であったことがうかがえる。

第２節　歴史的環境

大崎町では，主に田原川，持留川，菱田川，大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。本遺跡の周辺は，これまで本格的な発掘調査がなされていなかったため詳細は不明であったが，近年大隅中央広域農道や東九州自動車道建設などに伴う発掘調査によって，次第にその歴史的様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

天神段遺跡でナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡及び石器類が，二子塚A遺跡で剥片が発見されている。永吉天神段遺跡とは持留川を挟んで立地する荒園遺跡では，細石刃文化期の石器類が発見されている。永吉天神段遺跡では角錐状石器やナイフ形石器など，ナイフ形石器文化期の遺物や製作跡が発見されている。

縄文時代

早期では，天神段遺跡で竪穴住居状遺構・集石・連穴土坑・落とし穴等が検出され，前平式・石坂式・桑ノ丸式・塞ノ神式・苦浜式土器，石鏃・打製石斧が出土している。二子塚A遺跡では集石が検出され，吉田式・石坂式・塞ノ神式土器，石鏃・石匙などが出土している。金丸城跡では石坂式土器・石鏃・凹石などが，下堀遺跡では集石13基や土坑と，前平式・石坂式・桑ノ丸式・平栫式・塞ノ神式土器，石鏃・石錐等が発見されている。平良上C遺跡では，竪穴住居跡・集石・連穴土坑と，石坂式・下剥峯式土器が，荒園遺跡では，集石や土坑と，前平式・石坂式・桑ノ丸式・平栫式・塞ノ神式土器，石鏃・石匙，耳栓などが発見されている。益畑遺跡では，前平式土器

の時期の竪穴住居跡2軒，連穴土坑16基，集石85基，土坑160基などが検出された。他に前平式・吉田式・石坂式・下剥峯式・辻タイプ・桑ノ丸式・塞ノ神式などの土器や，石鏃・石皿・磨石・敲石・石斧・ハンマーなどの石器が出土した。串良川の右岸に位置する町田堀遺跡では，集石遺構が多く検出され，中原式土器や下剥峯式土器などが出土した。

前期では，天神段遺跡で曽畑式土器に伴い現状では西日本最古となる石剣や，石鏃・石皿・磨石等の遺物が出土している。立山B遺跡で，曽畑式土器が出土している。

中期では，立山B遺跡で阿高式土器が出土している。細山田段遺跡では前期末から中期前半の土坑が170基以上検出され，在地の深浦式土器とともに東海系土器，近畿地方の大歳山式土器，瀬戸内～北部九州系の鷹島式・船元式とみられる土器が出土しており，広域な交流がうかがわれる。石鏃・石匙など石器の出土数も多く，抉状耳飾も出土している。

後期では，細山田段遺跡で丸尾式・辛川式・西平式・中岳Ⅱ式土器，磨石・石皿などが出土している。下堀遺跡では指宿式・擬似磨消縄文系土器が，大崎細山田段遺跡では，土坑や丸尾式・北久根山式・西平式・御領式土器が確認されている。町田堀遺跡では竪穴住居跡や埋設土器が検出され，住居跡から中岳Ⅱ式土器が出土している。

晩期では，天神段遺跡で，竪穴住居跡・土坑群とともに，入佐式・黒川式土器，石鏃・打製石斧・磨製石斧・石鏃・砥石が出土している。立山B遺跡と大崎細山田段遺跡で，黒川式土器が出土している。細山田段遺跡では入佐式・黒川式土器が出土している。永吉天神段遺跡第1地点では突帯文土器を伴う竪穴住居跡や鉢・壺，打製石斧・石鏃・石匙・石皿などが発見されている。第2地点でも同時期の土器・石器などが多量に出土している。町田堀遺跡では，入佐式・黒川式土器が出土している。

弥生時代

沢目遺跡は，砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成11年に行われた発掘調査で，竪穴住居跡53軒・土坑約20基・柱穴約180基が発見され，入来Ⅰ式・入来Ⅱ式・山ノ口Ⅰ式・山ノ口Ⅱ式・須玖式土器，鉄製品・軽石製加工品が出土している。近くの砂丘では戦前に人骨が発見されており，河口付近の横瀬では甕棺破片も採集されていることから，埋葬遺構があった可能性もある。下堀遺跡では，山ノ口式土器や須玖式土器を伴った直径8mの円形の大型住居跡2軒・掘立柱建物跡5棟などが検出されている。下堀遺跡と同じ台地にある河岸段丘状の荒園遺跡でも吉ヶ崎式・山ノ口式土器を伴う竪穴住居跡が検出されている。下堀遺跡より一段下がった河岸段丘上にある麦田下遺跡では，高付式土器，西南四国系の土器，瀬戸内系の土器など後期の土器溜まりが検出されている。遺跡の北側と東側を串良川が蛇行して流れる町田堀遺跡では，竪穴住居跡と掘立柱建物跡が検出され，住居跡から中津野式土器が出土している。

田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地が多く点在している。

古墳時代

志布志湾岸沿いには，巨大前方後円墳をはじめ，多くの古墳群があり，畿内との関連をうかがわせる。

横瀬古墳は古墳時代中期（5世紀前半頃）の大型前方後円墳で，東串良町に所在する唐仁大塚古墳に次いで県内第2の規模を誇る。墳長132m，前方部幅72m，前方部長68m，後円部径64m，くびれ部幅48mあり，そのまわりを幅が12～23m，深さ約1.5mの壕が巡っているが，さらに周堤帯を挟んで外側に周濠が巡る二重周濠の可能性も考えられている。周濠跡からは伽耶系陶質土器あるいは大阪府陶邑窯産の須恵器や埴輪が出土している。墳丘の高さは，後円部が10.5m，前方部が11.5mであるが，後円部の頂上部に石室が露呈していることから，本来の後円部は現在より高かったと考えられる。墳丘からは円筒埴輪片，形象埴輪片が採集されている。明治35年に盗掘を受け，腐食した直刀や鐙，勾玉類が出土し，石室内は朱塗りであったと伝えられている。

神領古墳群は，前方後円墳4基，円墳9基で構成されている。10号墳は墳長54mの前方後円墳である。主体部は6か所の縄掛突起のある刳抜式舟形石棺を軽石で覆った礫槨で，周辺から管玉・勾玉，鉄剣，短甲の一部，鉄鏃束などが出土している。周濠からは盾持人埴輪や朝顔形埴輪などの埴輪や，愛媛県市場南組窯産などの初期須恵器・土師器高坏・製塩土器などを含む大量の祭祀土器群が出土している。5世紀前半のものである。まわりには4基の地下式横穴墓が発見されている。6号墳（天子ヶ丘古墳）は墳長43mの前方後円墳で，後円部に花崗岩質板石を使用した組合せ箱形石棺があった。日光鏡・倣製獣帯鏡各1面が採集され，石棺内から，鉄剣・鉄刀，鏡等の副葬品が出土した。神領古墳群では他に5・6世紀の地下式横穴墓も8基検出されている。1号は，長方形家形の玄室，妻入りの羨道部取り付けで，軽石製箱形石棺内から鉄剣・イモガイ製貝鋼・倣製内行花文鏡・骨製簪などの副葬品が出土した。5号からも，イモガイ製貝鋼が出土した。6号の玄室内では南側に歯が数本，北側に大腿骨が残存しており，副葬品はなかった。

海岸から離れた所にも高塚古墳は広がり，原田古墳群には，直径40mの円墳が現存する。また，軽石製組合わせ石棺をもつ地下式横穴墓は，玄室が家形をなし，羨道部の取り付けが妻入りである。石棺内には，女性の人骨が残っており，刀子が副葬されている。

町内では他に，飯隈台地に飯隈古墳群（円墳9基，地下式横穴墓21基）・仮宿台地に田中古墳群（円墳3基）・後迫古墳群・鷺塚地下式横穴墓群・下堀遺跡（地下式横

穴墓７基）が知られている。

集落遺跡としては，原田古墳群と同じ台地の北側には長田遺跡があり，竪穴住居跡３軒が検出されている。二子塚Ａ遺跡では，竪穴住居跡３軒・土坑１基が検出され，４～５世紀代の成川式土器や，宮崎平野の影響を受けたと考えられる土師器が出土している。沢目遺跡では，古墳時代初頭の竪穴住居跡５軒があり，住居跡内から成川式土器，土師器が意図的に並べられた状態で出土した。遺物には，布留式土器をまねて作られた土師器等が出土している。下堀遺跡では，竪穴住居跡７軒・溝状遺構が，荒園遺跡では，笹貫式土器を伴う竪穴住居跡が検出され，うち１軒は焼失住居跡である。高久田Ａ遺跡では１軒，永吉天神段遺跡では４軒の竪穴住居跡が見つかっている。小牧遺跡でも花弁状を呈する竪穴住居跡などが検出されている。また，二子塚で採集されたと伝わる朝鮮半島製の鋳造鉄斧もある。

町田堀遺跡では南九州特有の地下式横穴墓が92基検出され，南九州では初めてとなる円形周溝を伴う例も確認されている。

古代

古代の大崎は日向国諸県郡に属し，その南端にあったと考えられるが，具体的な郡域等は不明である。この地域の古代相当期の考古学的様相も明らかになっていない。天神段遺跡では，掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑・炉跡，土師器・墨書土器・刻書土器，鍛造剥片が確認されている。永吉天神段遺跡の第１地点では７棟の掘立柱建物跡や墨書土器・刻書土器，須恵器，焼塩土器，鉄製刀子，砥石などが発見されている。

中世

中世には各地で山城が造られ，この地域にも大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野鉢城跡・竜相城跡・金丸城跡・椿谷城跡・遠見ヶ丘などがある。金丸城跡では，溝状遺構・土坑が検出され，青磁・白磁・青花・東播系こね鉢・瓦質土器・備前焼擂鉢・天目碗など14世紀半ばから15世紀の遺物が出土している。

村落跡としては，天神段遺跡で多くの掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓が検出され，中でも土坑墓１号からは，同安窯系青磁６点・青磁１点・青白磁１点，銅鏡１点・滑石製石鍋２点，鉄製品，木製品，土師器などの豊富な副葬品が出土している。下堀遺跡では，溝状遺構・畝跡とともに，青磁・青花・中国陶器などが発見されている。荒園遺跡では，掘立柱建物跡や土坑・溝などが検出され，土師器・東播系須恵器などとともに華南三彩も出土している。永吉天神段遺跡でも，湖州六花鏡，白磁碗，羽釜形のミニチュア土器や土師器皿・坏の副葬された土坑墓等が検出され，青磁・白磁・陶器壺などの輸入陶磁器や，東播系こね鉢・常滑焼・備前焼などの国内産陶器，楠葉型瓦器埴，滑石製石鍋，茶臼など多くの遺物が出土している。

近世

金丸城跡では，17世紀前半を主体とする陶磁器が多く出土している。多くの柱穴とともに，掘立柱建物跡７棟や水溜土坑（大型６基・小型２基）・炉跡16基・溝状遺構・墓などが検出されている。炉跡はいずれも意図的に壊され，炉周辺に炉壁を構成していたと思われる軽石や熱変粘土片が集中している場所も確認された。周辺で椀形鉄滓が出土していることから，この炉については鉄生産に関連する可能性が考えられる。肥前染付・瓦質土器・中国製陶磁器・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼，鉄製品・鉄滓など多くの遺物も出土している。天神段遺跡では，安永ボラ（1779年）を埋土とする畠畝状遺構や薩摩焼などが発見されている。京の塚遺跡では近代まで続く溝状遺構や古道が検出されている。永吉天神段遺跡でも薩摩焼や肥前系染付などが出土し，道跡や寛永通宝を副葬した墓坑５基が検出されている。

（参考・引用文献）

大崎町教育委員会

2001「立山Ｂ遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

2005「金丸城跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2005「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

2006「美棠Ａ遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

2014「麦田下遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2010「加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡Ａ地点」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（154）

2012「宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡Ｂ地点・柿木段遺跡２」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(173)

鹿児島県教育委員会　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

2015「天神段遺跡１」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(3)

2016「永吉天神段遺跡　第１地点」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(8)

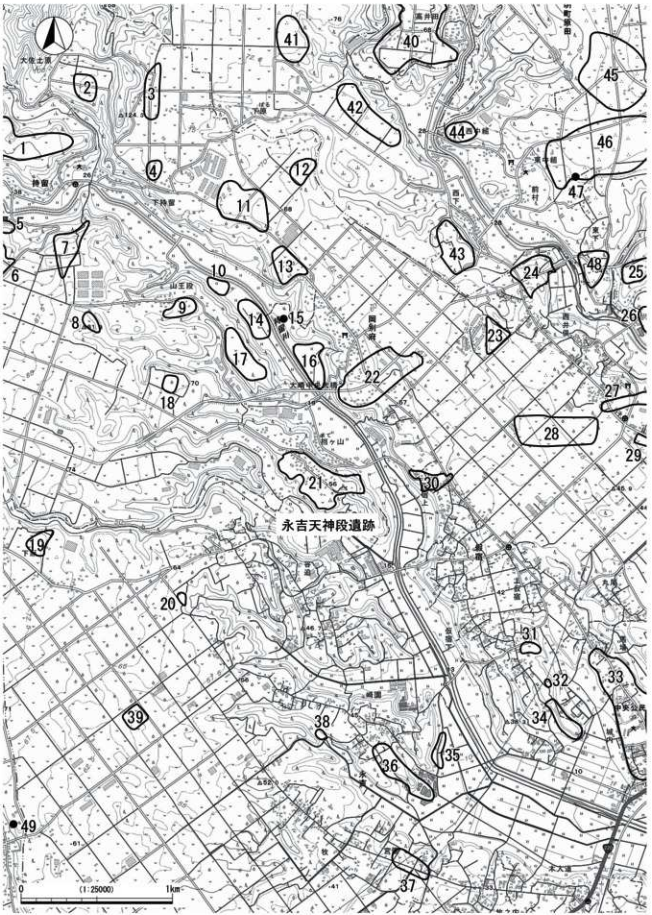
2017「永吉天神段遺跡　第２地点（旧石器・縄文時代編）」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（13）

2017「荒園遺跡」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(12)

2018「町田堀遺跡２」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘報告書(20)

橋本達也

2010「古墳築造南限域の前方後円墳―鹿児島県神領10号墳の発掘調査とその意義」『考古学雑誌』第94巻第３号



第２図　周辺遺跡位置図(1:25,000)

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所　在　地	地形	種類	時　代	遺　物　等	備　考
1	468	116	佐土原	曽於郡大崎町野方佐土原	台地	散布地	縄文，古墳	土器	平成 12 年：農政分布調査
2	468	115	大久保B	曽於郡大崎町持留大久保	台地	散布地	縄文	土器	平成 12 年：農政分布調査
3	468	3	大久保A	曽於郡大崎町持留大久保	台地	散布地	縄文(後)	指宿式・市来式土器	打製石斧
4	468	99	赤野原	曽於郡大崎町持留赤野原	台地	散布地	弥生，古墳	土器	平成 11 年：農政分布調査
5	468	2	川上神社	曽於郡大崎町持留中持留	扇状地	散布地	縄文(後)	指宿式・市来式土器	
6	468	67	持留牧	曽於郡大崎町持留牧，東尾ノ花	台地	散布地	縄文，古墳	磨製石斧片，成川式土器	平成９年：農政分布調査
7	468	135	西ノ上	曽於郡大崎町永吉西ノ上	台地	台地	弥生		平成 18 年７月：NTT ドコモ九州の電話基地局建設に伴う分布調査
8	468	100	枦木段	曽於郡大崎町永吉枦木段	台地	散布地	弥生，古墳	土器	平成 11 年：農政分布調査
9	468	101	永迫	曽於郡大崎町永吉永迫	台地	散布地	縄文，弥生，古墳	土器	平成 11 年：農政分布調査
10	468	127	高久田B	曽於郡大崎町永吉高久田	沖積地	散布地	弥生(前・末)，古墳	弥生終末～古墳住居跡	平成 18 年：農政分布調査 平成 21 年：県営農総事業に伴い発掘調査
11	468	97	坂本原	曽於郡大崎町岡別府坂本原	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
12	468	96	五嶋	曽於郡大崎町岡別府五嶋	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
13	468	98	早馬	曽於郡大崎町岡別府早馬	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
14	468	128	小柳	曽於郡大崎町岡別府小柳	沖積地	散布地	弥生，古墳		平成 18 年：農政分布調査
15	468	137	麦田下	曽於郡大崎町岡別府麦田下	台地		弥生(後)，古墳，古代	土器溜まり，高付式・西南四国系・瀬戸内系土器，勾玉，砥石，成川式土器，黒曜土器	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
16	468	129	宮田	曽於郡大崎町岡別府宮田	沖積地	散布地	弥生，古墳	弥生土器	平成 18 年：確認調査
17	468	130	高久田A	曽於郡大崎町高久田・尾ノ迫	台地	集落	縄文(晩)，弥生(前～終末)，古墳，古代～近代	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構，大化式・黒川式・須目突帯文・山ノ口式・中津野式・東原式土器，磨製石鏃・石錐，ガラス玉，青磁，古銭	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
18	468	102	船迫	曽於郡大崎町永吉船迫	台地	散布地	縄文，弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
19	468	103	下原	曽於郡大崎町持留下原	台地	散布地	縄文(後)，弥生，古墳	指宿式土器・市来式土器・弥生土器，土師器，磨製石斧	平成 11 年：農政分布調査
20	468	134	椎木段	曽於郡大崎町永吉椎木段	台地	散布地	縄文，古墳，中世	成川式土器，磨製石斧	平成 18 年：分布調査
21	**468**	**104**	**永吉天神段(本報告書)**	**曽於郡大崎町永吉天神**	**河岸段丘・台地**	**集落・墓域**	**旧石器，縄文，弥生，古墳，古代，中世・近世**	**竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑墓・集石，ナイフ形石器・尖頭器，縄文土器・弥生土器・成川式土器，土師器，銅銭，古銭**	**平成 24～27 年度：発掘調査 平成 27 年度：第１地点埋文調査センター報告書(8) 平成 28 年度：第２地点－１埋文調査センター報告書(13) 平成 29 年度：第２地点－２埋文調査センター報告書(17) 平成 30 年度：第３地点埋文調査センター報告書(22)**
22	468	53	下堀	曽於郡大崎町岡別府下堀	台地	集落・地下式横穴墓	縄文(早・後)，弥生(中)，古墳，古代，中世	集石遺構・大型住居跡・土坑を伴う掘立柱建物跡・地下式横穴墓等，縄文土器・山ノ口式土器・成川式土器	平成 13～15 年：大隅グリーンロード建設に伴う発掘調査 平成 17 年度：大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
23	468	90	干浅	曽於郡大崎町井俣浅瀬	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年度：農政分布調査
24	468	30	金丸城跡	曽於郡大崎町井俣小牧・金丸	台地・沖積地	城館跡	縄文(早)，古代，中世，近世	掘立柱建物跡・土坑・溝，石版式土器，石鏃・凹石，土師器，須恵器，青磁・白磁・青花・備前焼，砥石・硯，鉄製品等	救仁郷氏墓域と言われているが，調査でも不明 平成 11・12 年：大隅グリーンロード建設に伴う発掘調査 平成 17 年度：大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
25	468	86	井俣牧	曽於郡大崎町井俣井俣牧	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	地形	種類	時代	遺物等	備考
26	468	122	井俣和田	大崎町井俣和田	沖積地	散布地	古墳	成川式土器	平成18年：確認調査
27	468	88	宮脇	大崎町井俣宮脇	台地	散布地	旧石器時代，縄文時代早期	集石，加栗山式・下剥鳥式・条ノ丸式・押型文・平栓式・塞ノ神式土器，石核・石鏃・磨石	平成27・28年：発掘調査
28	468	89	堂園堀	大崎町井俣堂園堀	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査 平成23年：確認調査
29	468	87	坂上	大崎町井俣坂上	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査
30	468	95	荒園	大崎町仮宿荒園	台地	散布地	旧石器，縄文(早)，弥生(中)，古墳，中世，近世	竪穴住居跡・溝状遺構，剥石刃核・剥石刃・集石，前平式・平栓式・塞ノ神式土器・山ノ口式土器・成川式土器，東播系須恵器，備前焼	平成24～26年：東九州自動車道建設に伴う発掘調査
31	468	49	美堂A	曽於郡大崎町仮宿美堂	台地	散布地	古墳，中世，近世	古道・土坑，成川式土器，土師器，青白磁，備前焼・常滑焼	平成14年：県営農免農道整備事業に伴う発掘調査 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
32	468	50	美堂B	曽於郡大崎町仮宿胡摩	台地	散布地	古墳		平成7年：農政分布調査
33	468	34	大崎城跡	曽於郡大崎町仮宿城内ほか	台地	城館跡	中世(室町)，近世		
34	468	33	胡摩ヶ崎城跡	曽於郡大崎町仮宿古城	台地	城館跡	中世(室町)		楡井氏の城
35	468	51	小園	曽於郡大崎町仮宿小園	沖積地	散布地	古墳		平成14年：確認調査
36	468	29	野鄂城跡	曽於郡大崎町永吉前岡・深坂	台地	城館跡	古代，中世		平安時代末築城（1190年）シラス採取で半壊
37	468	106	外園	曽於郡大崎町永吉外園	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査
38	468	126	牧谷・白山	曽於郡大崎町永吉牧谷・白山	沖積地	散布地	中世	野鄂城の堀の可能性有り	平成17年：農政分布調査
39	468	105	大迫	曽於郡大崎町永吉大迫	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査
40	468	17	高井田	曽於郡大崎町井俣高井田（飛地）	台地	散布地	弥生(中)	土器	平成17年：農政分布調査
41	221	449	五色	志布志市有明町野神字五色，風穴	台地	散布地	古墳		平成10年度：農政分布調査
42	221	450	西ノ堀	志布志市有明町原田字西ノ堀，下五歌	台地	散布地	古墳		平成10年度：農政分布調査
43	221	407	坂ノ上	志布志市有明町原田字坂ノ上，前田，西原	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年度：農政分布調査 旧遺跡名：坂ノ下
44	221	352	清水	志布志市有明町原田字清水	台地	散布地	弥生(中)	磨製石斧・打製石斧	昭和58年度：大隅地区埋蔵文化財分布調査，旧遺跡名：平田，原田，元宮の下，水田
45	221	439	東中原	志布志市有明町原田字東中原，大塚，藤原，中塚	台地	散布地	古墳		平成10年度：農政分布調査 旧遺跡名：中塚
46	221	504	大塚	志布志市有明町原田字大塚，出口，有本，竹塚	台地	散布地	縄文，古墳		平成8・10年度：農政分布調査
47	221	386	原田古墳群	志布志市有明町原田字大塚，竹塚	台地	円墳・地下式横穴墓	古墳	原田古墳（円墳直径40m高さ5.6m石積露出）大塚A古墳（円墳直径20m高さ4.5m石積露出長さ1.3m高さ1.2m），大塚B古墳（円墳直径10m高さ1.3m）坂ノ上1・2号古墳（小円墳）・地下式横穴墓（東入型・粗石石積・鉏・人骨（成人女性）・刀子）	昭和58年度：大隅地区埋蔵文化財分布調査 旧遺跡名：大塚瓮，大塚古墳群，大塚A古墳・大塚B古墳，坂ノ上1号古墳，坂ノ上2号古墳・大塚 平成26年：鹿児島国際大学発掘調査
48	221	366	長田	志布志市有明町原田長田，牧，春日免	台地	散布地	縄文，弥生(中)，古墳，中世	竪穴住居跡（弥生4・古墳3）・土坑墓（中世）・掘立柱建物跡（弥生3・古墳4・中世4），山ノ口式土器，成川式土器，白磁，竪穴住居跡（弥生・古墳）	平成11年：発掘調査 平成15年：有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
49	482	9	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	古墳	古墳群1～5号	

第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間には，第２表に示すとおり 23 か所の遺跡が存在する。発掘調査は平成 30 年度で終了しており，ここでは各遺跡の概要を記載する。詳細については各報告書等を参照していただきたい。

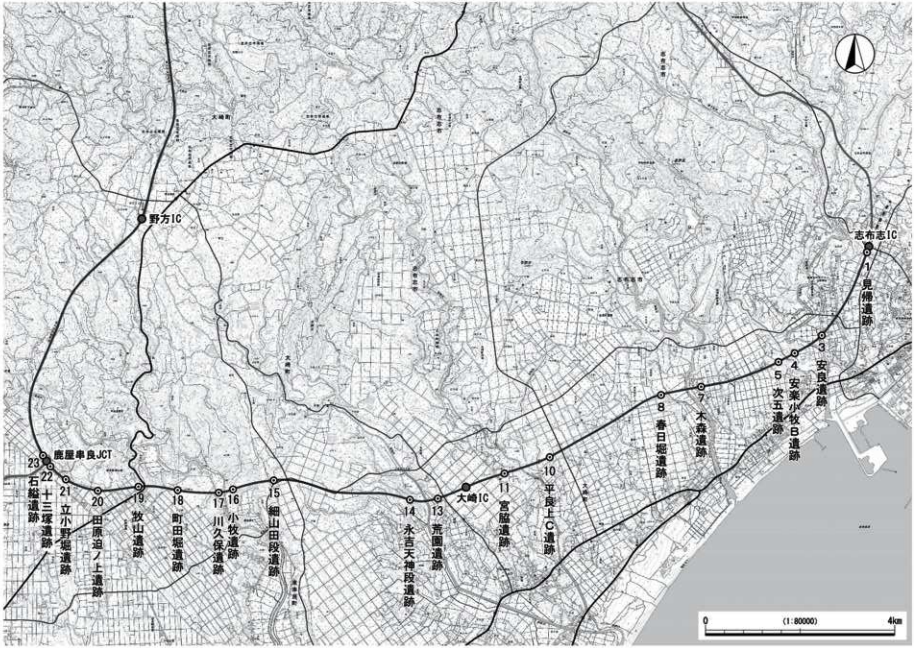
第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	見畑	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約 70 m	H 28 年度 終了 H 25・30 年度に埋文センター調査（隣接地）	H 30 年度 刊行 H 31 年度 隣接地刊行予定	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃，使用痕剥片，磨石，叩石，ハンマーストーン
					縄文早期	土坑（H 25 年度埋文センター調査のみ）	石坂式，押型文，下剥峯式，石鏃，磨石，石皿
					縄文前・中期	落とし穴，土坑	
					縄文後・晩期	—	磨消縄文，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，磨石，敲石
		縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代はナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は，土器に比して石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴が２基検出されている。溝状遺構１号は時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。					
2	宮ノ上	志布志市 志布志町 安楽台地上 標高約 45 m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がいることが確認されたため，本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約 30 m	H 28 年度 H 29 年度 終了	H 30 年度 H 31 年度 作業中	縄文早・後期	土坑，集石	小牧３Ａ，西平式，丸尾式
					弥生中期	竪穴住居跡	山ノ口式
					古墳時代	竪穴住居跡，地下式横穴墓，溝状遺構	笹貫式土器，鉄鏃，鉄斧，須恵器
					古代～中世	掘立柱建物跡，整穴建物跡，土坑，土坑墓，柱穴跡	土師器，須恵器，青磁，白磁，滑石製石鍋，炭化米糠
					近　世	土坑，柱穴	—
		古墳時代後半期と中世を中心とした遺跡である。調査区内における両時期の集落構造把握等に向け整理作業を進めている。					
4	安楽小牧Ｂ	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約 50 m	H 27 年度 H 28 年度 終了	H 30 年度 H 31 年度 作業中	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃核，細石刃
					縄文草創期	集石	土器片，黒曜石剥片，磨石，敲石，石皿
					縄文早期	集石	吉田式，妙見・天道ヶ尾式，塞ノ神Ａ式，塞ノ神Ｂ式，苦浜式，耳粕，石鏃，磨石，異形石器
					弥　生	—	弥生土器，石包丁
		起伏のある地形に立地し，縄文時代早期を中心に旧石器時代，縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成層の大きさに差が認められる。また，塞ノ神式土器の窓形土器や耳粕，異形石器，円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが，これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。					
5	次五	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部標 高約 50 m	H 26 年度 H 27 年度 終了 ※志布志市教育委員会調査	H 29 年度 刊行 ※志布志市教育委員会刊行	旧石器		畦原型細石刃核，細石刃，剥片
					縄文早期	落とし穴，連穴土坑，土坑，集石，磨石集積	前平式，加栗山式，吉田式，札ノ元遺類，石坂式，中原Ⅴ式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神Ｂ式，打製・敲製石鏃，石錘，局部磨製石斧
		旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は，細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。					
6	大代	志布志市 有明町野井倉 台地縁辺部 標高約 40 m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がいることが確認されたため，本調査を実施せず。				
7	木森	志布志市 有明町 野井倉 河岸段丘 標高約 30 m	H 26 年度 H 30 年度 終了		縄文早期	竪穴住居状遺構，集石，土器集中，連穴土坑，土坑	前平式，加栗山式，吉田式，石坂式，下剥峯式，押型文，石鏃，石匙，磨石，敲石
					縄文中・後期	—	春日式，凹線文系土器
					古墳～古代	—	須恵器
					中　世	掘立柱建物跡，杭列状遺構	須恵器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品，鉄滓
		縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の竪穴住居状遺構，連穴土坑，集石，中世の掘立柱建物跡等が発見され，遺物では縄文時代早期の土器，石器，石匙，磨石・敲石の他，中・後期の土器，古墳～古代の須恵器，土師器，中世の青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品等が出土している。鬼界カルデラ噴火による液状化現象（噴砂跡）が確認されている。					
8	春日堀	志布志市 有明町 蓬原 河岸段丘 標高約 30 m	H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 H 30 年度 終了	H 30 年度 H 31 年度 作業中	縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，集石，土坑，土器集中，炭化物集中，落とし穴	前平式，加栗山式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神式，打製石鏃，打製・環状石斧，トロトロ石器，磨石，台石，石皿，砥石，穿孔円礫
					弥　生	竪穴住居跡	山ノ口式
					古墳～飛鳥	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，溝状遺構，土坑，棒状礫集積遺構	甕（東原式，笹貫式），壺，坩，高坏，須恵器高坏，棒状礫，磨製石鏃片
					古代～中世	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑墓，杭列跡，焼土跡	土師器
					近　世	土坑，溝状遺構，古道，遺物集中	陶器，瓶器
		縄文時代早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴住居跡，連穴土坑，集石，落とし穴，弥生時代の竪穴住居跡，古墳～飛鳥時代の竪穴住居跡（焼失住居跡含む），掘立柱建物跡，溝状遺構，中世の掘立柱建物跡，堀跡が検出された。遺物は縄文時代早期の土器，打製石斧，環状石斧，トロトロ石器等をはじめ，弥生時代から中近世の遺物が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）の痕跡も確認されている。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
9	稲荷堀	曽於郡 大崎町 菱田 台地上 標高約 50 m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
10	平良上C	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約 40 m	H 26 年度 H 27 年度 終了	H 28 年度 刊行	縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，集石，埋設土器，チップ集中	吉田式，石坂式，下剥峯式，押型文，平栫式，石鏃，石匙，打製・磨製石斧，扁平打製石斧，磨石，石皿，礫石器，石核，フレーク，チップ
		縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴住居跡，連穴土坑，集石，土坑が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う流状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
11	宮脇	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約 40 m	H 27 年度 H 28 年度 終了	H 30 年度 H 31 年度 作業中	旧石器	礫群	ナイフ形石器，三稜尖頭器，台形石器，細石器，石核，スクレイパー，掻器，使用痕剥片，フレーク，チップ，磨石，叩石
					縄文早期	集石，土坑，土器集中	加栗山式，小牧３A，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平栫式，塞ノ神式，打製石鏃，磨石，チップ
					近世	—	薩摩焼，寛永通宝
		旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では，石器製作に関連すると考えられる石核，フレーク，チップ等が出土している。縄文時代早期では，集石，土坑，土器集中，ピットと土器，石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う流状化現象の噴砂跡も確認されている。					
12	堂園堀	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約 45 m	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
13	荒園	曽於郡 大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約 50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 30 年度 終了 ※ H 24 年度は埋文センター調査	H 28 年度 （第１地点） 刊行 H 30 年度 H 31 年度 （第２地点） （第３地点） 作業中	旧石器	—	畦原型細石核・細石刃，敲石，チップ
					縄文早期	集石，土坑，剥片・チップ集中	前平式，吉田式，加栗山式，下剥峯式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，壺形土器，石鏃，スクレイパー，石匙，耳栓，打製・磨製石斧，磨石，石皿，フレーク，チップ
					弥生中期	竪穴住居跡，土坑	吉ヶ崎式，山ノ口式，磨製石鏃未製品，砥石
					古墳	竪穴住居跡	成川式土器，須恵器，砥石
					古代以前	片薬研堀溝状遺構	—
					中世	掘立柱建物跡，土坑，溝状遺構，帯状硬化面	土師器，東播系須恵器，備前焼，陶器，青磁，華南三彩
					近世以降	帯状硬化面	薩摩焼
		縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は，縄文時代早期の集石，弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡，古代以前の片薬研堀，中世の掘立柱建物跡等が検出され，遺物は縄文時代早期の土器，石器，弥生時代・古墳時代の土器，土師器，陶器，瓦器等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う流状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
14	永吉天神段	曽於郡 大崎町 永吉 台地縁辺及び河岸段丘 標高30～50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了 ※ H 24 年度は埋文センター調査	H 27 年度 （第１地点） 刊行 H 28 年度 （第２地点１） 刊行 H 29 年度 （第２地点２） 刊行 H 30 年度 （第３地点） 刊行 H 31 年度 （第２地点３） 刊行	旧石器	礫群，ブロック	尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，剥片
					縄文早期	集石，土器埋設遺構	前平式，加栗山式，吉田式，手向山式，下剥峯式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，石鏃，石匙，石斧，磨石，敲石，石皿，フレーク，チップ
					縄文前期	—	曽畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式，北久根山式，中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴住居跡，落とし穴，土坑	入佐式，黒川式，刻目突帯文，管玉，打製石斧
					弥生	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，円形周溝墓，土坑墓群，土坑	入来式，山ノ口式，黒髪式，鉄鏃，磨製石鏃，管玉
					古墳	竪穴住居跡，土坑	成川式，須恵器
					古代	掘立柱建物跡，土坑	須恵器，土師器
					中世	掘立柱建物跡，土坑墓，地下式坑，火葬土坑，土坑	白磁，青磁，土師器，瓦質土器，東播系須恵器，備前焼，常滑焼，龍州六花鏡，砥石，石塔，古銭
					近世	近世墓	薩摩焼，染付，寛永通宝，石臼
					時期不明	掘立柱建物跡	—
		旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から，国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁，青磁，瓦質土器，東播系須恵器等が多量に出土した。また，地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
15	細山田段（旧・京の塚）	曽於郡 大崎町 西持留 台地上 標高約 95 m	H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了	H 26 年度 H 28 年度 H 30 年度 H 31 年度 作業中	縄文早期	集石，埋設土器	吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，中原式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，石京西式，打製石鏃，石匙，磨・敲石，石核，フレーク，チップ
					縄文前期～中期初頭	土坑，土器集中	曽畑式，深浦式，大歳山式，鷹島式，船元式，打製石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，二次加工剥片，磨石，敲石，石皿，石核，フレーク，チップ
					縄文後期	土坑	辛川式，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，打製石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，磨・敲石，打製石斧，磨製石斧，石皿，フレーク，チップ
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式
					弥生前期	—	高橋式
					古墳	—	成川式
					近世以降	溝状遺構・古道	—
	縄文時代前期から中期初頭を中心に，縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では 170 基を超える土坑が検出されたほか，在地系土器の深浦式土器，近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器などが出土し，当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。本遺跡ＧＩＳの変更に伴い，遺跡名を「細山田段遺跡」に変更。						
16	小牧	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約 60 m	H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 終了	H 30 年度 H 31 年度 作業中	旧石器	—	細石刃，フレーク，チップ
					縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，土坑，集石	前平式，吉田式，石坂式，下剥峯式，平栫式，桑ノ丸式，石匙，磨石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式，深浦式，磨石
					縄文後期	竪穴住居跡，石皿立石遺構，伏埋，石斧集積遺構，集石，土坑	阿高式系，岩崎上層式，指宿式，市来式，石鏃，横刃型石器，打製石斧，磨石，石皿，大珠
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	—	入来式，山ノ口式，祇石
					古墳	竪穴住居跡，礫集積，土器溜，土坑	東原式，辻堂原式，布留系土器，須恵器，鉄鏃，鉄製品，敲石，勾玉，軽石加工品
					古代	掘立柱建物跡，焼土跡，溝状遺構，土坑	土師器，須恵器，黒書土器，鉄器，土錘，焼塩土器，土製紡錘車
					中世以降	掘立柱建物跡，土坑，石組遺構，溝状遺構，杭列	土師器，東播系須恵器，白磁，青磁，黒書土器，石鍋，合子，輸羽口，刀子，鉄製紡錘車，焙烙，古銭，薩摩焼
	旧石器時代から近世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落，後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他，古墳時代の花岸形住居跡を伴う集落や古代・中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて串良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。						
17	川久保	鹿屋市 串良町 細山田 河岸段丘 標高30～50 m	H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 H 30 年度 終了	H 27 年度 H 29 年度 H 30 年度 （C 地点） 刊行 H 31 年度 （A，B，D 地点） 作業中	旧石器	礫群	剥片尖頭器，ナイフ形石器，敲原型細石核
					縄文早期	竪穴住居跡，集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，加栗山式，吉田式，春岡Ⅱ式，石坂式，下剥峯式，押型文，塞ノ神式，苦浜式，轟Ａ式，石鏃，打製石斧，石皿
					縄文前期	集石	曽畑式，磨製石斧
					縄文後期	—	中岳式
					縄文晩期	集石	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生前期	—	高橋式
					弥生中期	竪穴建物跡	下城式，山ノ口式
					古墳	竪穴住居跡，鍛冶関連建物跡，竪穴状遺構，溝状遺構，道跡	成川式土器，輸羽口，高坏脚転用輸羽口，鉄鏃，鉄滓，勾玉，管玉
					古代	掘立柱建物跡	須恵器，土師器
					中世	掘立柱建物跡，溝状遺構，道跡	青磁，白磁，瓦器椀
	旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では，集落を構成する多数の竪穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか，専用の輸の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。						
18	町田堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約 90 m	H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 終了	H 27 年度 （1）刊行 H 29 年度 （2）刊行	縄文早期	集石	下剥峯式，平栫式
					縄文後期	竪穴住居跡，埋設土器，落とし穴，土坑，石斧集積遺構	中岳Ⅱ式，石刀，石鏃，打製・磨製石斧，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉
					縄文晩期	—	黒川式土器，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴住居跡	入佐式，山ノ口式土器，土製勾玉
					古墳	竪穴建物跡，地下式横穴墓，円形周溝墓，溝状遺構	成川式土器，入骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，箕形石器
					古代	焼土跡，道跡	土師器，須恵器
	縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が 92 基発見され，円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され，高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり，大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか，縄文時代後期の竪穴建物跡から，櫂草文を施す完全な石刀が出土している。						

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
19	牧山	鹿屋市串良町細山田台地縁辺部標高約 110 m	H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 終了	H 28 年度 （A 地点 1） 刊行 H 30 年度 H 31 年度 （A 地点 2、B、C、D 地点） 作業中	旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、土坑、集石構、石器製作跡	吉田式、石坂式、下剛峯式、辻タイプ、桑ノ丸式、押型文、石鏃、石匙、スクレイパー、磨石、剥片、チップ
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟式、条痕文
					縄文後期	土坑、落とし穴状遺構、埋設土器、石器集中部	市来式、丸尾式、西平式、太郎迫式、三万田式、中岳B式、打製・磨製石斧、磨石、剥片、石核、台石、石冠
					縄文晩期	土坑	入佐式、刺目突帯文
					弥生中期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式、打製・磨製石斧、磨製・打製石鍬、磨石、敲石、石皿、青銅鏃
					中・近世	古道跡	青磁、白磁、薩摩焼
	旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に、縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また、同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が1点出土している。						
20	田原迫ノ上	鹿屋市串良町細山田台地縁辺部標高約 120 m	H 22 年度 H 23 年度 H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 28 年度 H 30 年度 終了 ※ H22～24 は埋文センター調査	H 26 年度 （1）刊行 H 27 年度 H 28 年度 （2）刊行 H 31 年度 （3）作業中 ※ H23～24 は埋文センター作業	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石、落とし穴、土坑、石器製作跡	前平式、吉田式、倉岡B式、石坂式、下剛峯式、辻タイプ、桑ノ丸式、中原式、押型文、手向山式、平栫式、窓ノ神式、石槍、石鏃、石匙、磨石、敲石、石皿、打製石斧
					縄文後期	落とし穴、礫集積	指宿式、市来式、石鏃、磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴住居跡、大型建物跡、掘立柱建物跡、円形・方形周溝	山ノ口式・中溝式、擬凹線文系壺、土製勾玉、鉄器、磨製石鏃、石匙、砥石、敲石、台石
					古墳時代以降	溝状遺構、畝状遺構	土師器椀、薩摩焼
	縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では、ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型竪穴住居跡、棟持柱をもつ掘立柱建物跡2棟を含む建物跡群、柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており、大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか、縄文時代早期の竪穴住居跡、連穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。						
21	立小野堀	鹿屋市串良町細山田台地縁辺部標高約 125 m	H 22 年度 H 23 年度 H 24 年度 H 26 年度 H 30 年度 終了 ※ H22～24 は埋文センター調査	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 （1）刊行 R 2 年度以降 （2）作業 ※ H24 は埋文センター作業	縄文前・中期	—	深浦式
					縄文後期	—	指宿式、市来式、西平式
					弥生中期	—	山ノ口式
					古　墳	地下式横穴墓、土坑墓、溝状遺構	成川式、須恵器、鉄器（刀・剣・槍・鉾・刀子・鋲等）、青銅鈴、人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
	縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは、古墳時代の地下式横穴墓が約 200 基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器、青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか、墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ、多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は、南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。						
22	十三塚	鹿屋市串良町細山田台地上標高約 140 m	H 20 年度 H 21 年度 終了 ※埋文センター調査	H 22 年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	—	石坂式
					縄文後期	—	凹線文、市来式、三万田式
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式、土製勾玉、打製・磨製石鏃、棒状敲具、鉄鏃
					古　墳	—	成川式
					中世～近世	道路状遺構	渋武通寶（加治木銭）
	弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する竪穴住居跡が発見された。出土遺物等から、王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また、亀石が竪穴住居跡内から発見されている。7 号住居跡の埋土内から、松木園遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。						
23	石福	鹿屋市串良町細山田台地上標高約 140 m	H 20 年度 H 21 年度 終了 ※埋文センター調査	H 22 年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	集石、土坑	岩本式、前平式、志風頭式、石坂式、平栫式、貝殻条痕文、鎌石橋式、轟A式、打製石鏃、磨石、敲石
					弥生中期	—	山ノ口式、須玖式土器
	縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器1個体と轟A式土器が2個体出土し、両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。						



第３図　東九州自動車道関連遺跡位置図

※本発掘調査を実施した遺跡のみ記載。地図中の番号は表２の番号と一致する。

第３章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理作業・報告書作成作業の方法について記す。

１　発掘調査の方法

永吉天神段遺跡の発掘調査は，平成23年度に確認調査，平成24～27年度に本調査を実施した。調査対象表面積は37,100㎡，調査対象延面積は87,500㎡である。

本遺跡の調査区割り（グリッド）は，平成23年度の確認調査時において工事用基準杭「ＳＴＡ113」と「ＳＴＡ105」の延長線を中心に，10ｍ間隔で西から東に向かって１・２・３…，北から南に向かってＡ・Ｂ・Ｃ…と設定した。

このグリッドを基にして，Ｍ－１区の左下を原点（０，０），縦軸をＸ，横軸をＹとし，遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また，トータルステーションで測量作業を行う場合，公共座標に基づき基準点を設定した。

発掘調査は，基本的に重機で表土を除去した後，確認調査の結果に基づき，遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層，火山灰の一次堆積層は，一部重機を用いて慎重に掘り下げた。遺構は，移植ごて等の遺構掘削に適した道具を用いて慎重に調査し，実測，写真撮影等を行い，遺物は，トータルステーションを使用して取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法及び概要（詳細は第１章に掲載）は，以下のとおりである。

平成23年度

確認調査は，荒園遺跡と同時に実施した。その結果，永吉天神段遺跡の調査延面積は87,588㎡となった。

平成23年７月１日から９月28日までの約３か月間，調査対象地域にグリッドに沿ってトレンチを31か所設定し，調査区全体の包含層の有無について調査した。トレンチの形状は１×８ｍの長方形を基本とし，必要に応じて拡張した。表面を覆う雑草の除去・雑木の伐採を人力で行った後，重機及び人力により徐々に包含層を掘り下げた。遺構・遺物を発見した場合には，重機による掘り下げを即時中止し，山鍬・鋤簾等による人力掘削で遺構・遺物の検出を行った。検出した遺構については，写真撮影，実測を行った。出土遺物はトータルステーションで取り上げた後，掘り下げを続けた。いくつかのトレンチでは，遺構に影響のない部分について，安全対策を施しながら下層確認トレンチを設定し，Ⅺ層（シラス）上面まで調査を実施した。しかしながらⅦ層（薩摩火山灰）より下位の旧石器時代相当層については，上層の包含層が厚く十分な調査面積を確保することができなかったため，本調査にて範囲を確定させることとなった。

平成24年度

隣接する第１地点と並行して調査を実施した。調査期間は平成24年７月２日～平成25年１月28日で，調査延面積は第１地点が2,262㎡・第２地点が4,449㎡であった。第１地点の調査区は本遺跡の東側に位置しており，標高約35ｍに位置するＥ～Ｉ－57～62区の河岸段丘の平坦面であった。Ⅱａ～Ⅴａ層上面まで調査を実施した。Ｆ～Ｈ－57～59区にトレンチを６本設定し，約40㎡で縄文時代早期の下層確認調査を行い，調査終了後，埋め戻しを行った。

調査は重機で表土を除去した後，基本的には山鍬・鋤簾等による人力にて掘り下げを行った。地形測量は，縄文時代晩期が主体になると想定していたため，当初Ⅳ層上面で行う予定であったが，古代の遺構・遺物が全域で確認されたため，Ⅲ層上面での測量を追加した。また，鬼界カルデラの噴火に伴う液状化現象（噴砂）を確認したトレンチでは，該当層の断面も記録した。

遺物を発見した場合は，小片はグリッド毎に一括して取り上げ，詳細が観察できる遺物は，必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。一括性が高いと判断した遺物及び遺構に関係すると想定した遺物については，縮尺１／５～１／10で実測を行った。

なお，遺構実測や遺物取り上げは，調査担当者の指揮・監督の下，発掘調査支援業務受託業者（株）パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

平成25年度

調査期間は平成25年６月13日～平成26年１月28日で，調査延面積は約26,291㎡であった。第２地点の調査区は，標高約50ｍでシラス台地の縁辺部から中央部に位置しており，調査対象区の中央部にあたる。調査は用地境界などでは安全上の措置として約1.0～3.0ｍ程度内側に控えて調査範囲を設定し，重機により表土を剥いだあと，人力による掘り下げ作業を実施した。

Ｃ～Ｌ－48～59区は，平成24年度調査からの継続で，縄文時代早期（Ⅴ層）とＣ～Ｆ－50～53区（約1,400㎡）の旧石器時代を調査した。また，Ｃ～Ｊ－27～47区は，Ⅱ～Ⅴ層（中世～縄文時代早期）の調査を行い，地形確認用土層ベルト沿いに，Ⅶ層上面（薩摩火山灰）とⅧ～Ⅹ層の旧石器時代について確認調査を行った。調査終了後，埋め戻しを行った。

調査は，重機で表土を除去した後，山鍬・鋤簾等による人力掘り下げを基本に行った。弥生時代中期と縄文時代早期が主体になることから，Ⅲｂ層上面とⅥ層上面の地形測量を行った。

遺物を発見した場合は，小片はグリッド毎に一括して取り上げ，詳細が観察できる遺物は，必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。一括性が高いと判断した遺物及び遺構に関係すると想定した遺物については，縮尺１／５～１／10で実測を行った。

なお，遺構実測や遺物取り上げは，調査担当者の指揮・監督の下，発掘調査支援業務受託業者（株）パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

平成26年度

調査期間は平成26年５月12日～平成27年１月28日で，調査延面積31,500㎡であった。調査は用地境界などでは安全上の措置として約1.0～3.0ｍ程度内側に控えて調査範囲を設定し，重機により表土を剥いだあと，人力による掘り下げ作業を実施した。平成26年度調査区は，シラス台地の中央部に位置しており，標高は約50ｍである。

Ｃ～Ｌ－18～41区を中心に，中世から縄文時代早期（Ⅱ～Ⅴ層）の調査と地形確認用の土層ベルト沿いに２ｍ幅のトレンチを設定し，Ⅶ層（薩摩火山灰層）上面で縄文時代早期の遺構とⅧ～Ⅹ層の旧石器時代の確認調査を行った。なお，旧石器時代の遺物が確認された場合は，周辺を拡張し遺物の広がり等について確認した。また，Ｄ～Ｊ－24～28区は弥生時代から中世の墳丘等の存在も予想されたため，表土から人力による掘削を行った。調査終了後，埋め戻した。

調査は，重機で表土を除去した後，山鍬・鋤簾等による人力掘り下げを基本に行った。弥生時代中期と縄文時代早期が主体になることから，Ⅲｂ層上面とⅥ層上面の地形測量を行った。なお，Ⅱ層調査中に中世の遺構・遺物が多数発見されたため，Ⅲａ層上面でも地形測量を追加した。

遺物が発見された場合は，小片はグリッド毎に一括して取り上げ，詳細が観察できる遺物は，必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。一括性が高いと判断した遺物及び遺構に関係すると想定した遺物については，縮尺１／５～１／10で実測を行った。

なお，遺構実測や遺物取り上げは，調査担当者の指揮・監督の下，発掘調査支援業務受託業者（株）パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

平成27年度

平成27年５月11日～平成28年１月28日の期間に，第２地点から谷を挟んだ遺跡西端の第３地点と併せて，第２地点の町道部分の調査（８月～）を行った。調査延面積は，第２地点が約4,650㎡・第３地点が約7,724㎡であった。調査は用地境界などでは安全上の措置として約1.0～3.0ｍ程度内側に控えて調査範囲を設定し，重機により表土を剥いだあと，人力による掘り下げ作業を実施した。

第３地点は，中世から縄文時代早期のⅡ～Ⅵ層の調査，第２地点は町道の付替え工事と並行して，中世から縄文時代早期（Ⅱ～Ⅴ層）の調査を行った。地形確認用の土層ベルト沿いに４ｍ幅のトレンチを設定して，Ⅶ層（薩摩火山灰層）上面で縄文時代早期の遺構とⅧ～Ⅹ層の旧石器時代の確認調査を行った。遺構・遺物が検出された箇所については適宜調査範囲を拡張し，遺構・遺物の広がりを確認した。調査終了後，埋め戻しを行った。

調査は，重機で表土を除去した後，山鍬・鋤簾等による人力掘り下げを基本に行った。中世・弥生時代中期と縄文時代早期が主体になることから，Ⅲｂ層上面とⅥ層上面の地形測量を行った。

遺物が発見された場合は，小片はグリッド毎に一括して取り上げ，詳細が観察できる遺物は，必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。一括性が高いと判断した遺物及び遺構に関係すると想定した遺物については，縮尺１／５～１／10で実測を行った。

なお，遺構実測や遺物取り上げは，調査担当者の指揮・監督の下，発掘調査支援業務受託業者（株）パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

２　遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

(1) 遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し，調査担当者で検討したうえで認定した。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴住居跡は，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土など総合的に判断し，検出された順にＳＩの略記号と番号を付した。溝状遺構は，底面に硬化面を有するもの，硬化面はないが溝状に明らかな掘り込みをもつと判断したものに，検出された順にＳＤの略記号と番号を付した。土坑及びピットについては，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土など総合的に判断し，検出した順に土坑はＳＫ，ピットはＰの略記号とそれぞれ番号を付した。大まかな時期判断はできたものの埋土の色調の違いや時期の異なる遺物が混在する遺構については，時期の判定を控えた。また，掘立柱建物跡は，埋土状況や出土遺物の状況を総合的に検討して時期判断した後，検出した順にＳＢの略記号と番号を付した。なお，遺構は，検出状況の撮影後掘り下げ・実測を行った。遺構に応じて縮尺１／10～１／20で実測を行った。

(2) 遺構の検出方法

遺構の検出及び調査に際しては，可能な限り当時の生活面を把握することを目指したが，火山灰層上面などで

検出せざるを得ない場面も多かった。特に，黒色土層中で調査する中世～弥生時代については，当時の生活面を掘みきれず，結果として「検出面からの深さ」にばらつきがでることとなった。

また，調査以前が宅地や耕作地，雑木林等だった区域は，撹乱を受けている地点も多く，遺構検出をはじめ調査は難航した。対策として，ミニトレンチの多用など撹乱部分を排除する最善の調査方法を遺構毎に調査担当で検討し，想定も含め可能な限り残存部の記録保存に努めた。

3　整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

平成25～27年度の発掘調査支援業務においては，発掘調査と並行して遺物の水洗・注記を行った。

水洗作業は，基本的には柔らかいブラシを用いたが，黒曜石や剥片石器には超音波洗浄機を用いて進めた。

注記は，水洗終了後順次行った。注記は，十分な換気に留意しつつ手作業で進めた。遺跡記号は，データを管理している埋蔵文化財センターの南の縄文調査室に確認をとった上で，「ＮＴＪ」とした。その後に出土区，層，取り上げ番号等が記してある。

平成27・28年度の整理作業及び報告書作成作業支援業務では，分類・接合から作業を開始した。遺構内遺物と包含層遺物に分類し，包含層出土土器については胎土や文様等で時期ごとに分別し，接合した。石器については，剥片石器と礫石器に分けた後，器種及び石材別に分類した。作業の効率化を図るため，整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託先である（株）パスコ（本社）で一部遺物の実測を行った。

遺物出土分布図は，トータルステーションで取り上げたデータを統合し，図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は，実測図や写真等を用いて，発掘調査担当者と連携を取りながら再検討し確定した。

土層断面や遺構図は，原図データの点検・修正後，デジタルトレースを行った。

平成29年度の整理作業は，調査センターの直営により，第１整理作業所にて，包含層出土遺物の選別・抽出，土器の実測・拓本，石器の実測・トレースの業務委託を行った。

平成30年度は，（株）パスコに整理作業及び報告書作成作業を委託し，掲載遺物の選定・実測・拓本・トレース，遺構図等データの編集加工，レイアウト作成，遺物写真撮影，原稿執筆等の作業を実施し，本報告書原稿を完成させた。

なお，遺構の認定・分類については，遺構図や写真等をもとにして，過年度の発掘調査支援業務の委託先でもある（株）パスコの調査支援員と連携を取りながら再検討し確定した。

平成31年度は，調査センターの直営により，第１整理作業所にて，遺物写真撮影や原稿の校正等の本報告書作成作業，印刷・製本を行った。

第２節　層序

永吉天神段遺跡の調査対象地は東西に長く，間には深い谷や傾斜地を挟んでいるため地点により層序は異なる。

東側の48区から53区周辺は，台地上が宅地や耕地の造成により削平を受けているため，Ⅱｂ層より上位の残存度は良くない。遺構検出はⅢａ層ないしはⅢｂ層である。台地端は北・東・南へ下がっており（第５図），包含層は傾斜地下方のみ残存していた。弥生時代竪穴住居跡の２号・６号などは床面までわずかしか残っておらず，７号の東側はかすかに輪郭を検出できただけであった。また，11号・17号の南側は段をもって削られ，遺構のほとんどが掘削されている。

南北からの谷がせまって狭くなっている47区あたりから西側に向かっては，34区あたりまで上る地形になっており層厚は厚い。黒色の強いⅡ・Ⅲ層が30㎝ほどある所もあり，弥生・古墳時代の包含層も厚い。そのため遺構検出は困難で，29号・30号などの本来の掘り込み面はもう少し上であった可能性もある。この付近における竪穴住居跡の掘り込み地層については『永吉天神段遺跡３　第２地点－２　古代・中世・近代編』第９図に図示してある。谷からあがってくる道は40区あたりまで深く掘り込まれており，遺構や包含層の残存が望めるＸ層あたりまで失われていたため，調査対象外とした。台地上の道については付け替えをして調査した。

Ｇ－34区あたりを最高地とする台地は，南北から入り込む谷によって再び西へ向かって下降しており，傾斜の強い深い谷となり，特に西側は急傾斜となっている。西側傾斜地となる27・28区あたりは宅地造成によって削平され，シラスの露呈した所もある。

この台地と西側の丘に挟まれた28区～31区あたりの谷部は厚い地層堆積となっており，シラスまでの堆積も厚いが，中世以降の堆積も厚い。そのため，現代の地形は平坦に近かったが，中世の遺構は傾斜面あるいは谷部に営まれていた。

Ｈ－26・27区あたりを頂部とする丘は北東－東西に主軸をもって，さらに西側へ下降している。西側にある谷は深く，急傾斜や崖をもって台地端となっている。丘の頂部や西側斜面には弥生時代から中世にかけての生活跡，弥生時代の墓などがつくられている。頂部近くは調査前まで鎮守の森となっていたが，地形上包含層などの堆積は薄くなっている。

当遺跡の基本層序は第４図のとおりであり，本報告書と関連する地層はⅡｂ層より下，Ⅲａ層までである。弥生時代・古墳時代の住居や墓などの遺構はⅢｂ層上面で

検出されているが，本来の生活面はⅡb層中にあったと想定される。

永吉天神段遺跡の基本層序

Ⅰ層：表土（造成土及び耕作土）。シラスに存在する白色軽石を多く含み，しまりがある固い層と，しまりのない軟質な層の２層に分かれる箇所もある。

Ⅱa層：黒色腐植土層で，中世・古代の包含層。

Ⅱb層：黒褐色砂質土で0.5㎜程度の褐色粒子を多く含む。上層に比べてわずかに明るい。古墳時代・弥生時代の包含層。場所により，やや色の暗いⅡc層も存在している。

Ⅲa層：黒色腐植土層で若干光沢があり，保湿性に富み，わずかに粘りがある。縄文時代前期～晩期の包含層。

Ⅲb層：１～２㎝程度の黄色軽石粒（約6,300年前の池田カルデラ起源の噴出物）を含む褐色土。粘りはないが，硬い粒子を多く含みしまりがある。

Ⅳa層：アカホヤ火山灰（約7,300年前の鬼界カルデラ起源の噴出物）の堆積層である。黄橙色土。

Ⅳb層：３～５㎜の黄色パミス。鬼界カルデラの一次降下軽石（幸屋降下軽石）である。

Ⅴa層：軟質なにぶい黄褐色土。縄文時代早期の包含層。

Ⅴb層：にぶい黄褐色土の２～３㎝のブロックを含む褐色土。縄文時代早期の包含層。

Ⅵ層：黒褐色砂質土。上層は縄文時代早期の包含層。

Ⅶ層：約12,800年前の桜島起源噴出物である薩摩火山灰の堆積層で，灰黄褐色を呈する。

Ⅷ層：チョコ層といわれる暗褐色の粘質土で，細石器文化の包含層。

Ⅸa層：Ⅷ層に比べてやや明るく，粘性が弱い。

Ⅸb層：灰黄褐色を呈する粘質土である。

Ⅸc層：褐色の粘質土である。

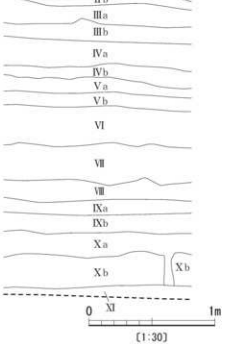
Ⅹa層：にぶい黄橙色を呈する粘質土である。

Ⅹb層：やや暗い暗褐色の硬質土がブロック状に含まれる灰黄色粘質土で，旧石器時代の包含層。

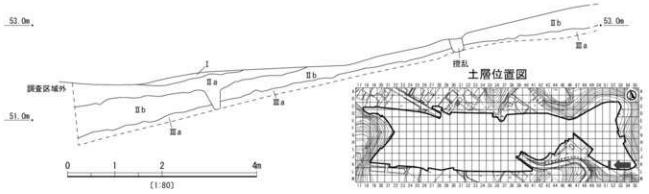
Ⅹc層：暗灰黄色ロームで，粘性は弱い。

Ⅺ層：約29,000年前の姶良カルデラ起源の噴出物であるシラスの二次堆積層（ＡＴ）である。

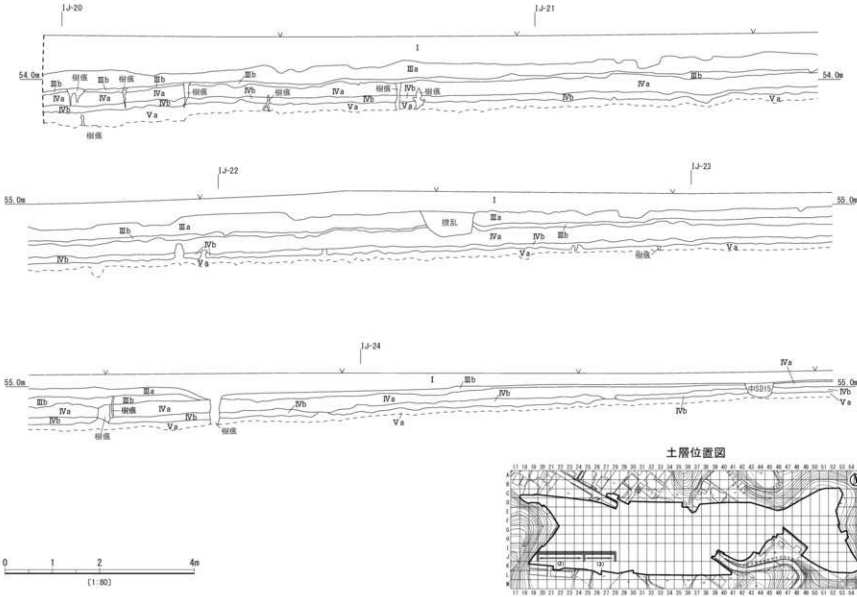
以下，シラスの二次堆積の砂質土が続く。



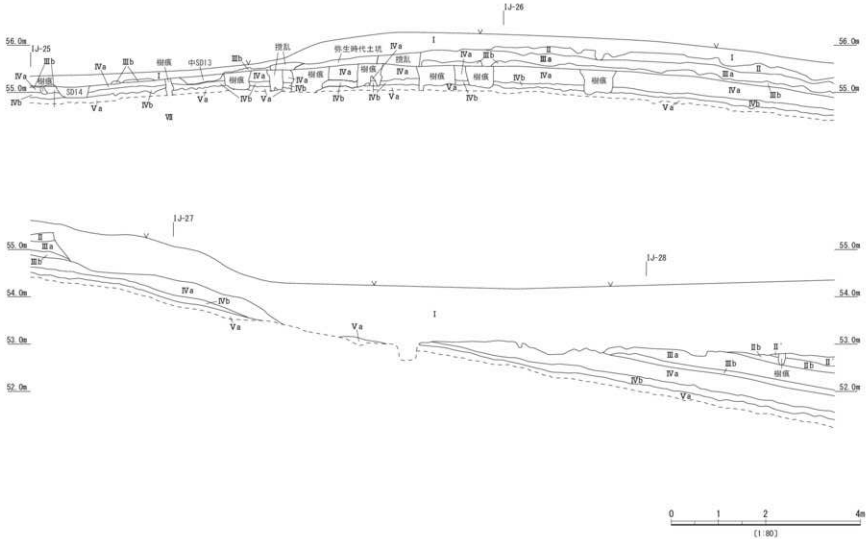
第４図　基本土層図



第５図　土層断面図（１）　Ｋ－51・52区



第6図　土層断面図（2）　Ⅰ・Ｊ－19～24区



第７図　土層断面図（３）　Ｉ・Ｊ－26～28区

第４章　調査の成果

第１節　縄文時代晩期の調査

１　概要（第８～10図）

第２地点の調査区域は，Ⅲｂ層・Ⅳ層上面での地形をみると，南側から入り込んだ２か所の深い谷によって３か所の小丘陵に分断されている。２か所の谷は29～31区付近の南から北へ伸びる谷と，44～53区付近の南側にある谷である。これによって，23～27区付近の丘陵と32～40区付近の台地，47～53区付近の丘陵に分かれる。23～27区付近の丘は，Ｇ～Ｋ－26～28区付近の小高い丘頂を頂点とし，西から南へ向かって緩やかに下降しており，東へは急傾斜で谷に落ちている。32～40区付近の台地は，34・35区付近の南北に伸びる細長い頂部から西へは急傾斜で，東へは緩やかに下降している。47～53区付近の丘陵は，Ｄ・Ｅ－51～53区付近を頂点として北・西と東へは急傾斜で落ち，南西方向へは緩やかな傾斜で下降し，南東へは舌状に伸びるやせ尾根の形状となる。これらの丘陵には，長期にわたる自然作用あるいは宅地造成や耕地整備などによる人為的作用によって削平されている部分がある。

縄文時代晩期の調査は，遺跡の全調査範囲で行った。包含層は，池田降下軽石層に該当するⅢｂ層と，弥生時代～中世の包含層であるⅡ層との間に挟まれた黒色土のⅢａ層である。

当該時期の遺構としては，竪穴住居跡１軒と土坑６基が検出されている。

遺物では，入佐式土器，黒川式土器といった土器とともに，打製石斧，磨石，石皿，管玉等が出土しているが，土器以外は弥生時代中期の項で扱う。

２　遺構

(1) 竪穴住居跡１号（第11～15図１～20）

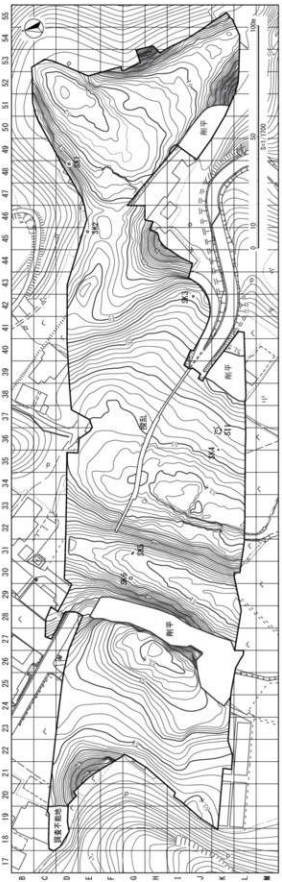
Ｋ－36区のⅢｂ層上面で検出した。Ⅲａ層掘り下げ時に土器が集中して出土する箇所として認識されていたが，黒色土であるⅢａ層中では明瞭なプランを検出できず，Ⅲｂ層上での検出となった。

平面形は直径が約３ｍ，深さが約0.1ｍの円形を呈する住居である。

埋土は２層に分けられ，埋土１は黒褐色土でしまりが強く，ほぼすべての遺物がこの層から出土している。埋土２は暗褐色土でしまりが強い。

柱穴は竪穴内で３基，外で４基の計７基検出されたが，住居跡の周辺は，中世の柱穴が多数検出されており，住居の柱穴ははっきりしない。７基の柱穴の径は13～30㎝，深さは15～27㎝程度である。

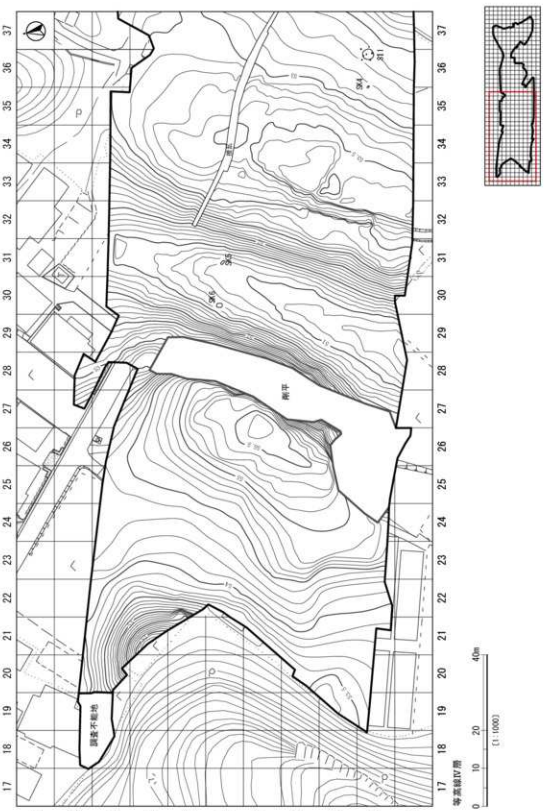
住居内から入佐式土器の深鉢・浅鉢や，撥形打製石斧，打製石斧未製品，黒曜石剥片などが一括出土している。



第８図　縄文時代晩期　遺構配置図

ほぼ水平に出土したことは，人為的な廃棄を想起させる。

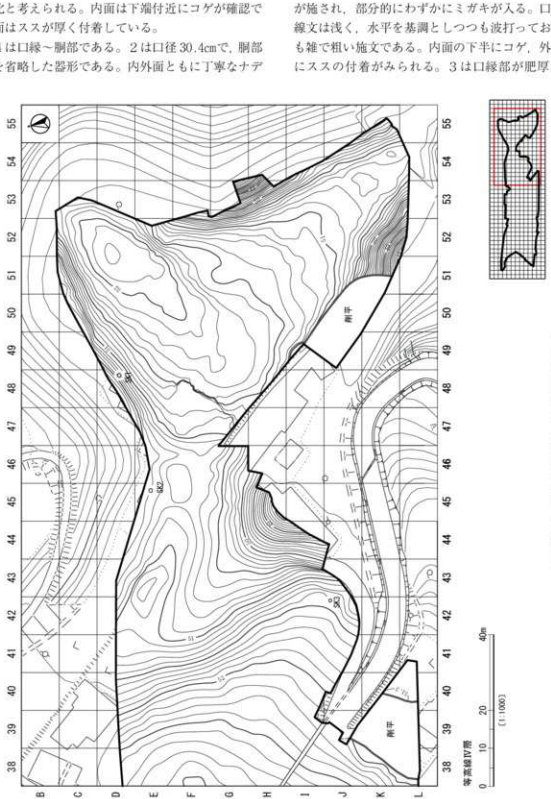
1～10は入佐式土器の深鉢である。1は平口縁で大型だが器壁は薄い。口径は36.7cm，底径は7.0cmで，内面はヨコナデ，外面はヘラミガキで上部は横・斜め，下部は縦方向に仕上げている。口縁部は，段を設けて肥厚させ，沈線は施されていない。胴部の屈曲は，仕上げ段階で屈曲を無視して磨いているため，稜が丸みを帯びている。内面の下端付近は胎土が脆くなっているが，使用に



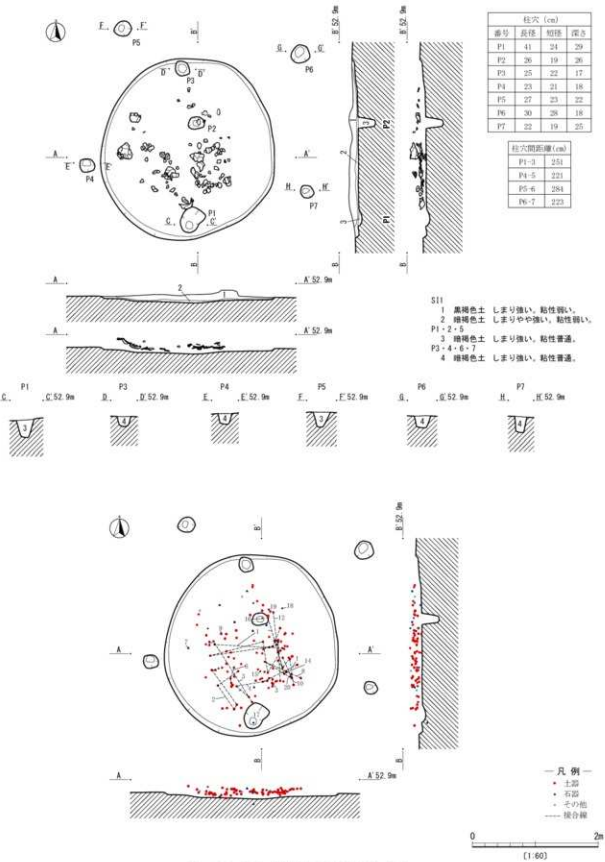
第9図　縄文時代後期　西部遺構配置図

よる劣化と考えられる。内面は下端付近にコゲが確認でき，外面はススが厚く付着している。

２～４は口縁～胴部である。２は口径30.4cmで，胴部の屈曲を省略した器形である。内外面ともに丁寧なナデが施され，部分的にわずかにミガキが入る。口縁部の沈線文は浅く，水平を基調としつつも波打っており，接続も雑で粗い施文である。内面の下半にコゲ，外面の上半にススの付着がみられる。３は口縁部が肥厚はしない



第10図　縄文時代晩期　東部遺構配置図



柱穴 (cm)			
番号	長径	短径	深さ
P1	41	24	29
P2	26	19	26
P3	25	22	17
P4	23	21	18
P5	27	23	22
P6	30	28	18
P7	22	19	25

柱穴間距離(cm)
P1-3	251
P4-5	221
P5-6	284
P6-7	223

第 11 図　縄文時代晩期竪穴住居跡（1）

が，外面のみ小さく「く」の字に明瞭に屈曲させており，整形時に文様帯を区分する意識がみられる。口径は約31cmで，内外面ともミガキに近いヨコナデで仕上げるが，内面がより丁寧である。胴部の外面上半分に前段階の調整の消し残しがあったり，最終仕上げ段階の工具痕を残したりしている。内面の胴部下半にコゲが付着し，外面は胴部下半と口縁部にススが多く付着している。4は波状口縁になる可能性がある。口径は約30cmで，外面は横方向のヘラミガキ，内面は横方向のケズリに近い粗いナデで仕上げてあり，内面よりも外面の方が調整が丁寧である。沈線は大雑把に施される。口縁部近くに2か所刺突があるが，沈線施文後の作業であり，文様であるかは不明である。刺突に使用された工具は，刻目突帯文土器に用いられるものと形態が類似している。内面は屈曲部下位にコゲが付着，外面は胴部の屈曲部周辺までと口縁部にススが確認できる。

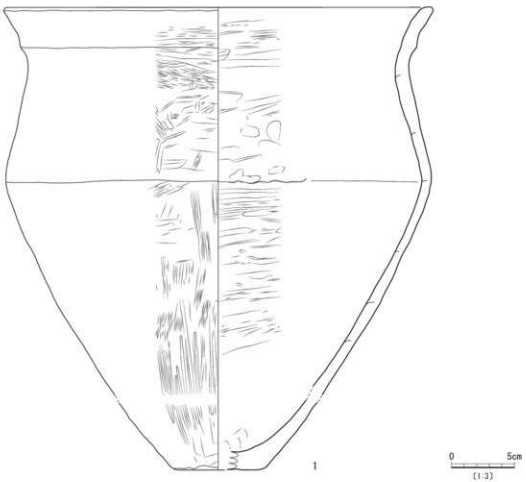
5は小ぶりな深鉢で，口縁端部をわずかに上向きに整形してあり，断面は舌状である。内面は横，外面は縦方向のミガキが施してあり，外面の屈曲部下位のミガキには，浅い条線が混じっている。やや雑な仕上がりである。

6と7は胴部である。6は内外面ともに丁寧なナデで仕上げているが，屈曲の頂部もナデているため稜は平坦になっている。ススは屈曲下端の片側にのみみられ，タールのような液体が付着した痕跡も確認できる。7は器壁が薄い。内面の調整は下半がナデ，上半の下位が粗いナデ，上位がナデで，下半と上半で調整法が異なる。内面下半にコゲが付着しており，外面屈曲下位にはススが付着している。

8は小ぶりの平口縁鉢で，器壁は厚い。口縁部は断面略方形に仕上げ，胴部屈曲は整形を兼ねたナデ調整で仕上げる。器壁が相対的に厚い以外は，丁寧なつくりの資料。口縁部は段を設けて，文様帯区画を意識して整形している。沈線文が1条のみ施文されているようにみえるが，この沈線を施したあとにヨコナデ調整がなされていることから，この沈線は本遺跡の入佐式土器に散見される「文様帯」最下部に施される区画線である可能性がある。外面は全体的にススが付着している。

9・10は底部である。10の外面は接地面までミガキ調整を施してある。接地面外端の張り出しはなく，胴部もやや膨らみつつ立ち上がる。内面にはコゲが付着する。

11・12は浅鉢である。口縁は短く直線的で，断面略方



第12図　縄文時代晩期竪穴住居跡（2）

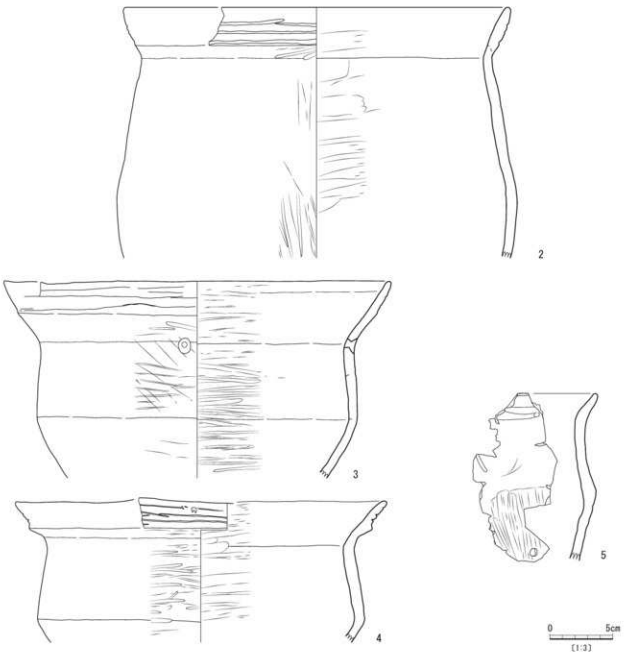
形を意識している。口縁部内面の突起や胴部の屈曲は，接合等の後，ミガキ調整を兼ねた整形で仕上げている。調整は内外面ともにヘラミガキである。12の各屈曲部は鋭角的に整形され，器形変化と連動した丁寧なミガキが全面に施されている。

13は直径約3㎝の小型円盤形土製品で，全体的に割れ面を磨いて平滑に仕上げている。ミガキは元の器面に対して直角になるよう角度を意識して作業している。

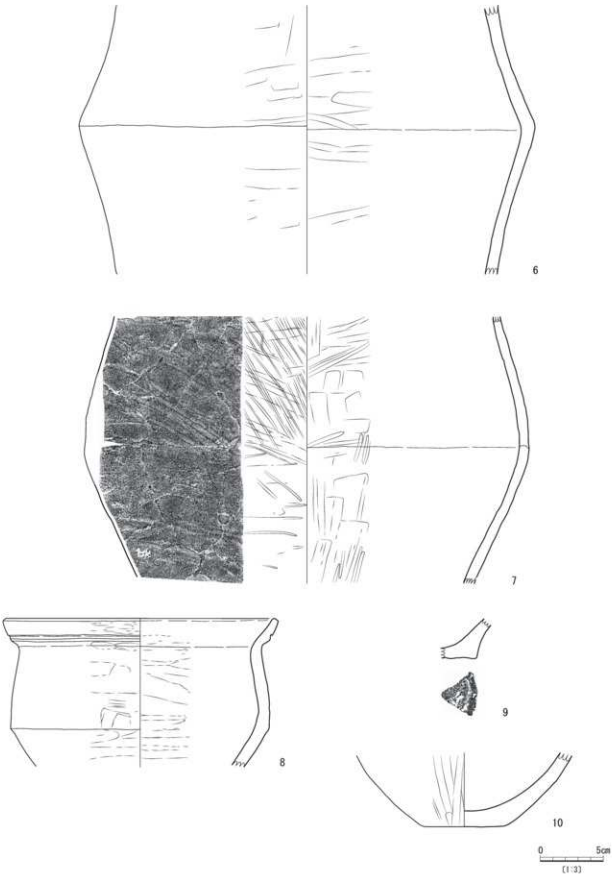
14～20は埋土1層中から出土した石器である。

14は黒曜石製の打製石鏃である。正面並びに裏面には主要剥離面を広く残し，側縁部，抉り部や脚部などの周縁のみに調整剥離を施して仕上げている。長さ約1.5㎝，幅約1.2㎝，厚さ約0.2㎝，重さ約0.2ｇである。石材は，縞状の透明部で不純物は少ない

15・16は横刃形石器と考えられる。どちらも，ホルンフェルスの縦長剥片を素材とし，側辺に微細な剥離調整を施して刃部を形成している。なお，刃部に直交する側辺部に，調整剥離は観察されない。15は長さ約8㎝，幅約14㎝，厚さ約2㎝，重さ約140ｇ，16は長さ約6.5㎝，幅約9.5㎝，厚さ約1㎝，重さ約68ｇである。



第13図　縄文時代晩期竪穴住居跡（3）

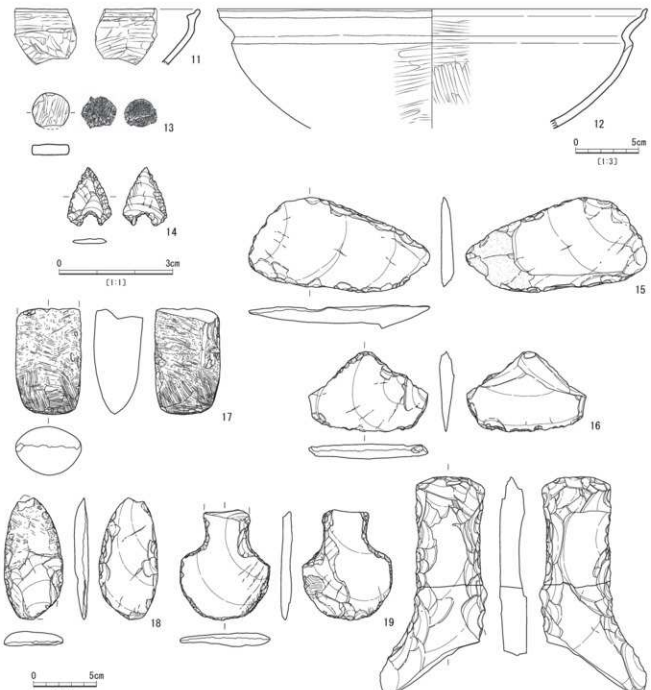


第14図　縄文時代晩期竪穴住居跡（4）

17は頁岩製磨製石斧の刃部である。剥離及び敲打で整形し，全面を研磨して仕上げている。刃部は複数方向からの研磨で研ぎ出されているため，素材の厚さ等が保たれている。刃部には，使用に伴うと考えられる微細な剥離が確認できる。残存部で，長さ約8㎝，幅約5㎝，厚さ約4㎝，重さ約254ｇである。

18～20は打製石斧である。18は頁岩製で，より大型の磨製石斧の破片を再利用した可能性がある。刃部は先端から平坦剥離の後，先端部のみ研磨して作り出される。長さ約4.5㎝，幅約9.5㎝，厚さ約1㎝，重さ約56ｇである。

19・20は大きさが異なるが，どちらもラケット型の打製石斧の破片と考えられる。どちらも素材の主要剥離面を残し，周辺部への整形剥離で全形を仕上げている。19



第15図　縄文時代晩期竪穴住居跡（5）

は表面が風化しているが，刃部にかろうじて使用痕を観察できる。

(2) 土坑（第16～17図）

落とし穴を想定できるものが2基，用途を想定できないものが4基，合計6基発見された。

土坑1号（第16図）

D－48区でⅤb層から検出された。直径約95cm，深さ約40cmで平面形は略円形をしており，後世の柱穴に切られている。埋土は3～4枚に分層でき，いずれも池田降下軽石やアカホヤ火山灰が混じる。遺物は出土しなかった。

土坑2号（第16図）

E－46区でⅢb層から検出された。落とし穴と想定される。平面形は円形，断面形は上部がやや漏斗状に開く円筒状を呈し，直径約100cm，深さ170cm，底面径約70cmである。なお，底面中央に直径約10cm，深さ約60cmの小ピットが検出されたが，蛇行した形状であり関連など不明である。

土坑3号（第17図21）

J－42区でⅢb層上面から検出された。落とし穴と想定される。平面形は80cm×90cmの略菱形で，深さは160cm，底面は平面がほぼ円形で径約80cmである。埋土は黒褐色土1枚だが，上部にアカホヤと池田降下軽石が確認でき，下部にはⅨ層と考えられる埋土の混入が観察できた。さらに，土坑2号と同様，底面中央に径10cm，深さ50cmの小ピットが発見された。この小ピットについては，断面形状から逆茂木痕と想定される。

遺物は，壁付近の埋土上位から，丸玉が1点出土した。含クロム白雲母片岩製丸玉は径1.2cmで，片面穿孔による孔（大径0.7cm，小径0.2cm）が穿たれている。

土坑4号（第17図22）

K－36区でⅢa層から検出された。中世の柱穴に一部切られているが平面形は楕円形を呈すると考えられる。残存部で47×38cm，深さ7cmである。正立した深鉢の下半部を伴うが，深鉢は浮いており，土坑の形状も深鉢と一致しないことから，少なくとも埋設土器ではない。

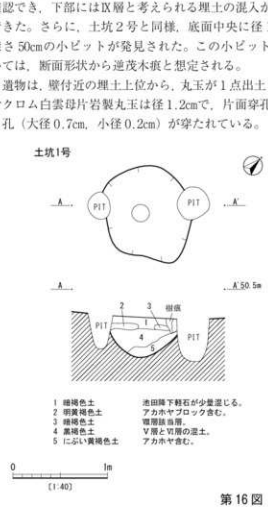
深鉢は入佐式で，底径約7cm，胴部へ向けて直線的に開く。外面は縦位，内面は横位のナデ調整が施される。底部接地面には明瞭な凹みが2か所ある。また，上端断面の一部には擦って平滑にしたような部分がみられる。

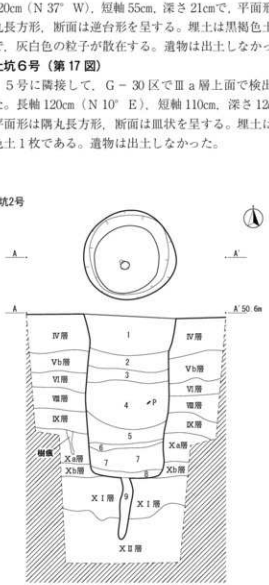
土坑5号（第17図）

谷部のG－31区でⅢa層上面から検出された。長軸120cm（N 37° W），短軸55cm，深さ21cmで，平面形は隅丸長方形，断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色土1枚で，灰白色の粒子が散在する。遺物は出土しなかった。

土坑6号（第17図）

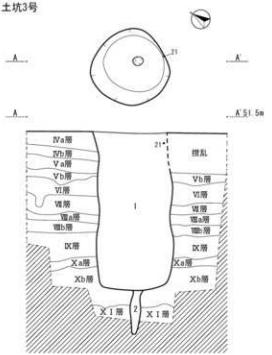
5号に隣接して，G－30区でⅢa層上面で検出された。長軸120cm（N 10° E），短軸110cm，深さ12cmで，平面形は隅丸長方形，断面は皿状を呈する。埋土は黒褐色土1枚である。遺物は出土しなかった。





第16図　縄文時代晩期土坑（1）

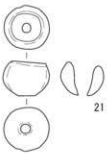
土坑3号



1　黒色土　しまり中。粘性無し。軽石が少量混じる。
2　暗褐色土　しまりなし。粘性無し。Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ層が混ざり合った土壌。

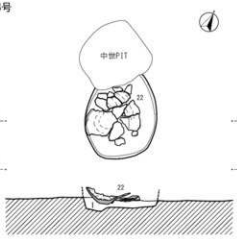
— 凡 例 —
・ 石器
── もぐり線

0　1m
(1:40)



0　3cm
(1:1)

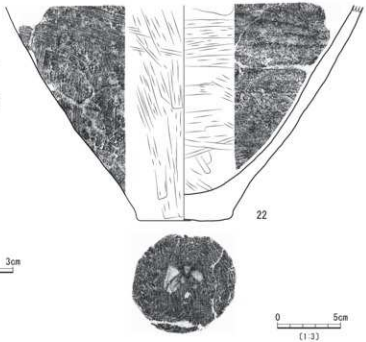
土坑4号



1　暗褐色土　しまり強い。粘性弱い。

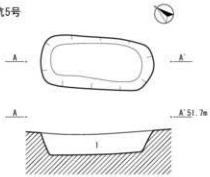
— 凡 例 —
┅┅ 推定線

0　1m
(1:20)



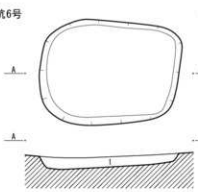
0　5cm
(1:3)

土坑5号



1　黒褐色土　しまりやや強い。粘性やや強い。

土坑6号



1　黒褐色土　しまり強い。粘性普通。

0　1m
(1:40)

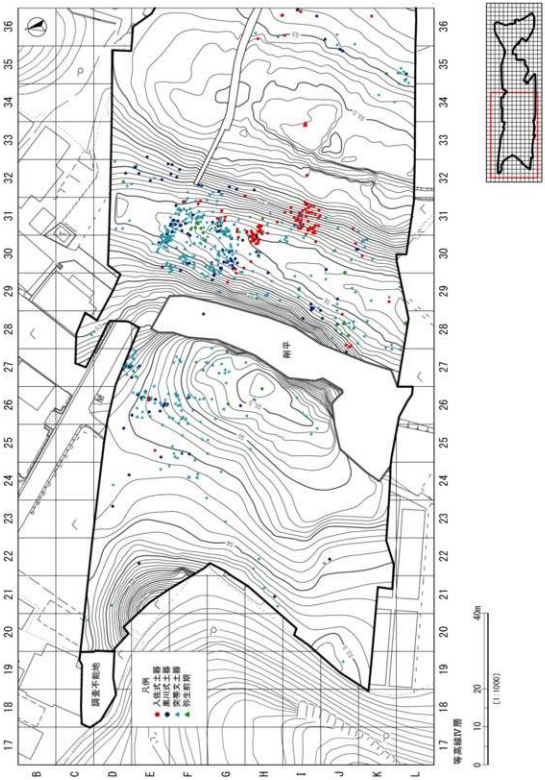
第17図　縄文時代晩期土坑（2）

3　土器

(1) 概要

縄文時代晩期の土器は入佐式土器と黒川式土器が出土しており，他に多くの突帯文がある。

包含層の残り具合もあって，41～44区の谷部，28～31区の谷部で多く出土している。（第18・19図）

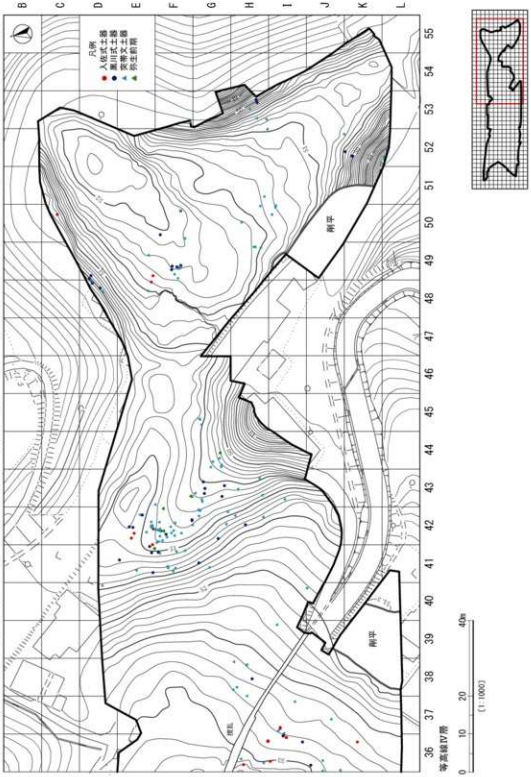


第18図　縄文時代晩期～弥生時代前期　西部出土土器分布図

入佐式土器の出土はH・I－31区に集中している傾向があり，その周りの平坦地にはほとんど出土していない。

黒川式土器も30～32区の谷部で多く出土しており，その他では散在している状況だが，E～G－41～43区の谷部でもいくらか出土している。

突帯文土器は谷部の他に，D～G－24～27区の北西向き傾斜面でもやや多くの出土がみられる。



第19図　縄文時代晩期～弥生時代前期　東部出土土器分布図

(2) 入佐式土器

器種には深鉢と浅鉢があるが，その中間となる鉢もある。また，粗製浅鉢の中にはボール状を呈し，底に組織痕のある鍋形の鉢もある。口縁部を肥厚するものが多く，焼成は概して良好である。胎土には黄白色石・白色石・石英・雲母を多く含み，茶色石・灰色石・黒色石なども含まれている。

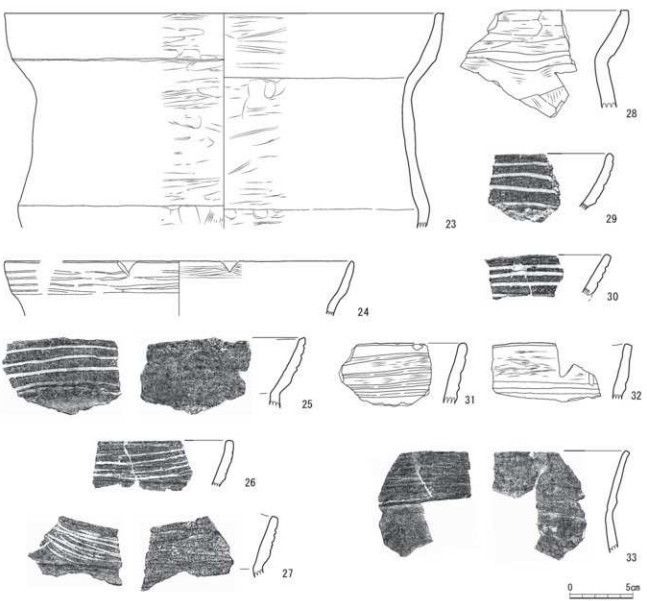
深鉢（第20～24図23～57）

安定した平底から外へ広がり，胴部最大径付近で稜をつくって内傾する。頸部は強く外反するものと，緩やかに外傾するものがある。口縁部は，口縁端部で直に立ち上がるもの，やや外へ屈曲するもの，直行して伸びるものがある。

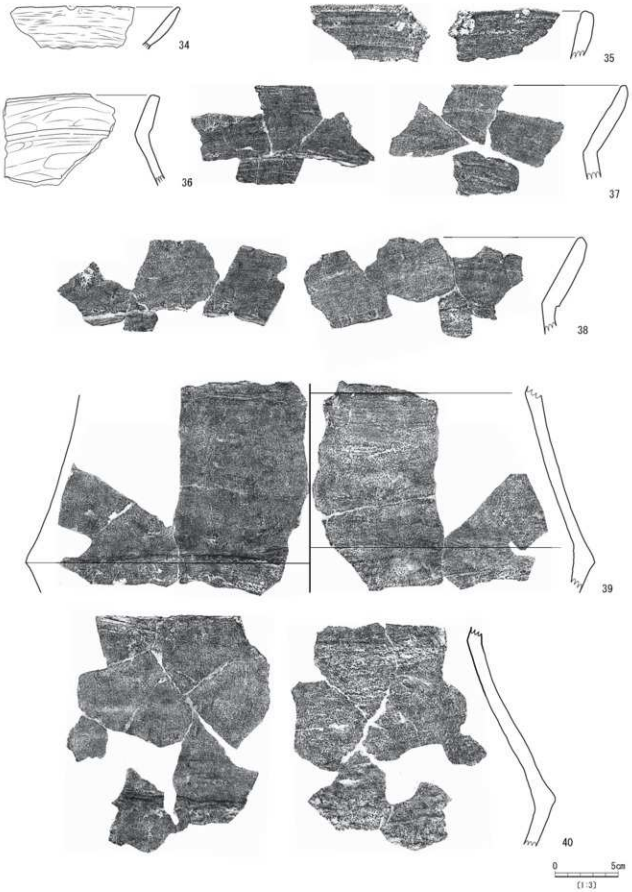
23・24は頸部から外傾し，口縁端近くで直に近く外傾するものである。23は口縁部から胴部の屈曲部まで残存する資料で，口縁直径は34.8cmである。胴部で逆「く」の字状に緩やかに屈曲し，頸部から外傾し，口縁近くでやや内弯ぎみに直立する。24も同様の形状をしているが，口径は27.7cmと小さく，やや薄い作りである。口縁には3条ほどの雑な凹線が横方向に施される。

25～32は頸部で短く外傾し，口縁部がやや内弯気味に外傾するものである。25～27・29～31などには口縁外面に4～7条の横方向の凹線あるいは沈線が施されているが，26はそのあとナデている。27は口縁部が波状を呈し，沈線も同様に波状となる。28・32は口縁部が無文である。28は分厚く，やや粗い調整である。

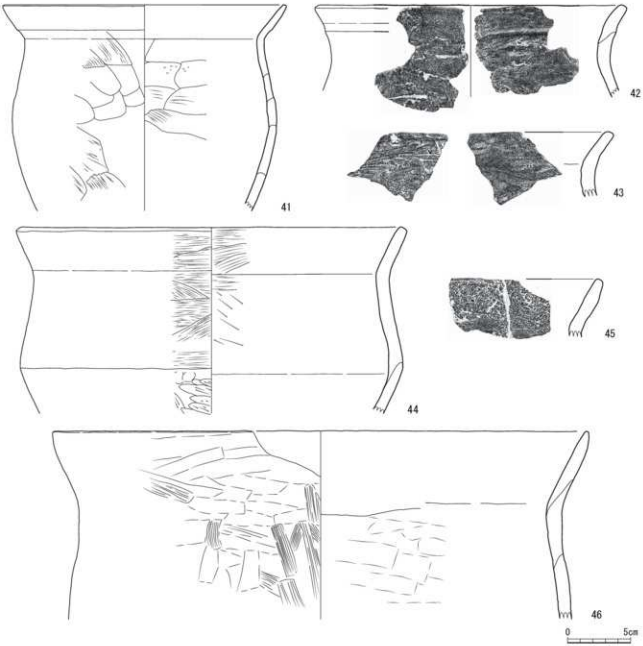
33は口縁部が肥厚していない。口縁部には沈線状の調整が粗く横位に施される他は，内外とも丁寧にナデて



第20図　縄文時代晩期土器（1）入佐式



第 21 図　縄文時代晩期土器（2）　入佐式



第 22 図　縄文時代晩期土器（3）　入佐式

いる。

34～38 は口縁部が無文である。34 は頸部から強く外へ反る口縁である。端部は丸みを帯び，肥厚しているが，肥厚度は小さい。35 は端部が幅広く内弯気味の肥厚口縁である。36 の口縁部は断面が矩形を呈するもので，外面は直線的である。外面にススが付着している。

37～40 は接合できないが，同一個体と思われる。胴の屈曲部は鋭く曲がり，頸部の屈曲も強く短い。口縁部の直径は 40cmほどと大型で，外面には横方向の沈線文を施しているが，そのあとミガキに近い丁寧なナデで仕上げており，不明瞭である。肩部外面の調整も丁寧である。

41～43 は胴部の屈曲が緩やかな作りである。41 は頸部で強く外傾し，口縁部は段をもって肥厚している。口縁直径は 22.6cmで，内外とも粗いナデ整形である。42 は口縁部に段をつくっている。

44・45 は口縁端が矩形を呈している。44 は口縁直径が 30cmで，口縁部は緩やかに外反し，それほど肥厚していない。内外とも丁寧に横方向にナデている。45 はやや肥厚する口縁で，胎土に雲母を多く含んでいる。

46 は口縁直径 42cmと大きく，口縁端は歪んで細くなっている。外面は繊維状ハケナデ，内面は横方向ヘラナデで仕上げている。47 は「く」の字に外反する口縁で，雲

母を多く含み，外面にススが付着している。48と同一個体の可能性がある。

48～56は胴部である。強く屈曲するものと緩やかに曲がるものとがある。

48・49は屈曲が緩やかである。48の肩部内面には輪積み痕が明瞭に残っている。肩部外面は縦方向のヘラミガキによって暗文風の仕上げとなっている。50も屈曲部が緩やかで，樽状の器形をしている。

51は精製土器で屈曲部は鋭く曲がっている。

52は屈曲上部に連続して綾杉文がある。綾杉文の施文後に短い円柱状の突起が貼付されるが，突起の先端にはレンズ状のくぼみがある。内外ともヘラミガキで仕上げている。

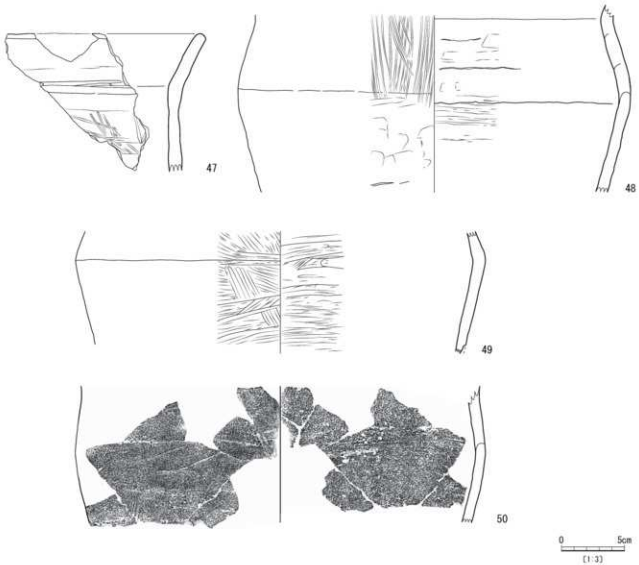
53は薄手の作りの口縁部下半から肩部の破片である。肩部から口縁へ強く外傾し，さらに輪積みをして直立するようだが，屈曲部の下には凹線状のくぼみがある。内外とも丁寧な調整がされる。

54は胴部最大径が21.5cm程度の小型のもので，頸部から外傾している。内外とも屈曲部から上はナデ調整だが，下は縦位のヘラミガキで仕上げている。

55は頸部・胴屈曲部とも強く屈曲しており，胴最大径は38cmである。

56は胴部最大径が21cmと小型のもので，屈曲部が55より緩やかだが，外面はヘラミガキを施すなどよく似た作りである。

57は胴下半部で，底径8.7cmの平底からややくびれて立ち上がり，胴部は丸みを帯びている。底の作りは雑でやや凸凹がある。内面は摩耗が目立ち，コゲが付着している。外面は下から上へのケズリ調整で仕上げている。雲母，軽石などを含む胎土である。



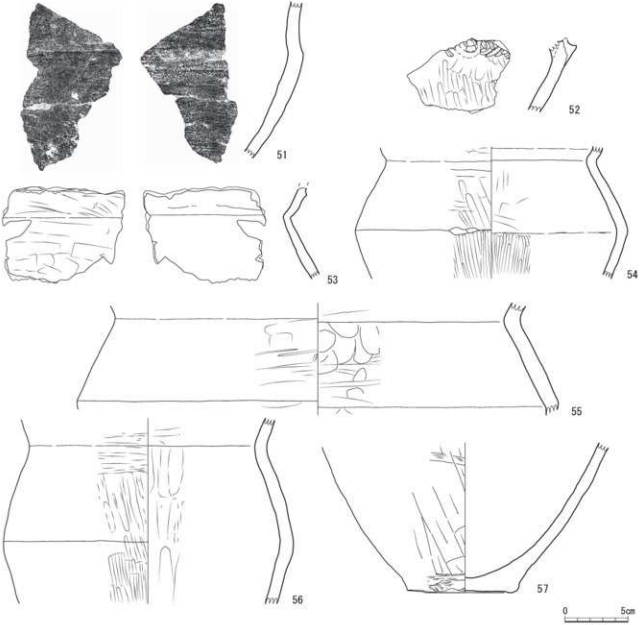
第23図　縄文時代晩期土器（4）入佐式

浅鉢（第 25 図 58～66）

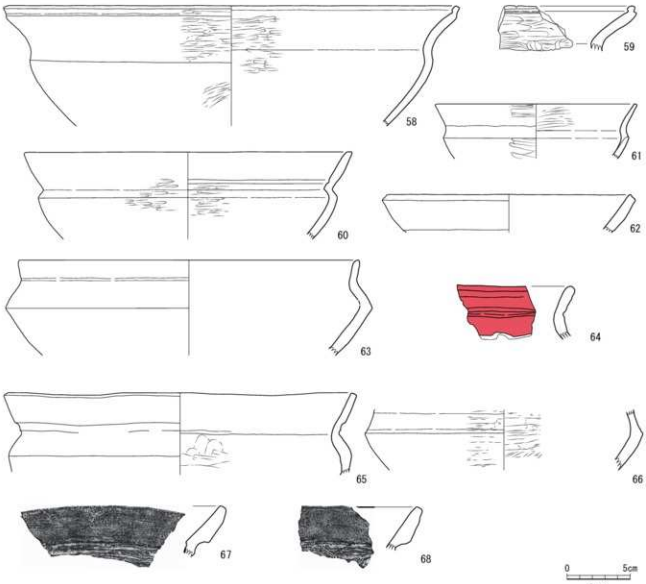
外反する長い口縁部と丸みを帯びた体部から成るもの，まっすぐ外へ伸びる口縁部と稜をもって屈曲するものなどがある。

58～61 は精製土器である。58 は口径 36cmである。口縁部は外反しているが，端部近くで直に立ち上がり屈曲している。体部は丸みを帯びて，外面にはススが付着している。59 も 58 と同じような口縁部で，端部近くの内外に沈線状の凹みがみられる。60 は口径 26cmで，口縁部は分厚く，外へまっすぐ開いて立ち上がっている。内面の頸部近くに 1 条の凹線が巡っている。体部は丸みを帯びており，肩部は短い。口縁部にススが付着している。61 は口径 15.6cmの小型で，外反する口縁部と丸みを帯びた体部から成る。口縁端断面は矩形を呈する。内外ともヘラミガキ仕上げだが，肩部だけはミガキ調整がみられない。

62～66 は半精製土器である。62 は口径が 19cmと小型で，口縁端断面が矩形となる肥厚口縁である。外面にススが付着している。63 は口径 27cmで，口縁部は短い。頸部には凹線状のくぼみがみられ，胴部上半で鋭く屈曲している。内外とも器面の剥落が目立つ。64 は口縁内面から外面に丹塗りのある浅鉢だが，器面剥落が目立つ。口縁部と胴部の境ははっきりしないが，頸部に 1 条の凹線が巡っている。65 は口径 28cmで，頸部からまっすぐ外へ開いて立ち上がっている。端部断面は矩形で，頸部近くに凹線状の凹みがある。胴部の屈曲は緩やかで外面



第 24 図　縄文時代晩期土器（5）　入佐式



第 25 図　縄文時代晩期土器（6）　入佐式

にススが付着している。66 は丹塗りの胴部屈曲部であるが，表面剥脱が目立ち，丹は凹みの一部だけに残っている。屈曲部の上側に浅い凹線がある。

鍋（第 25 図 67・68）

どちらも外傾しながら立ち上がる肥厚口縁部で，資料外面下端には組織痕が観察される。口縁部は内外とも丁寧な横方向のナデ仕上げである。外面の一部は黒褐色であるが，にぶい橙・黄橙色を呈する。黄白色石や白色石・茶色石・輝石などを含む砂質土を用い，焼成は良好である。

(3) 黒川式土器

器種には深鉢と浅鉢・まり・小型鉢があり，浅鉢の中には鍋形のものもある。また，深鉢・浅鉢を再利用した円盤形土製品もある。浅鉢に比べて，深鉢の数量が少ない。

①深鉢（第 26・27 図 69～90）

69～73 は口縁端部が丸く，内外とも横ナデ仕上げである。69・72 は外面の口縁端近くを強くナデて段をもたせ，膨らんだような端としている。69・70 にはススが付いている。71 はリボン状突起の端部が残っている可能性があり，やや白っぽい。

74 は直線的に外傾する口縁部で，口径 25.6cm。やや下がった位置に断面台形の粘土紐を貼り付け，その中央に棒状の工具で横方向に明瞭な凹線を引いている。明赤褐色の色調で，焼成は良好である。75・76 は口縁部外端

を丸く張り出させており，76 ではその部分に３本の細い右下がりの斜線を施す。

77 は口縁からいくらか下がった部位に細い三角突帯があり，さらにその下に１条沈線がある。調整はヘラ状の工具で丁寧にナデた薄い作りで，焼きは良い。78 は外面を横方向の貝殻条痕で仕上げ，分厚い作りである。79 も分厚い作りで，口縁部は端部のみ外反している。内外とも丁寧な横ナデ調整を施しているが，内面には積み上げ痕を顕著に残している。口縁外面も突帯状に作っている。

80 は胴下半部である。くびれながら外へ開いて立ち上がっている。内面は横方向，外面は横方向を主体とした丁寧なナデ調整で，焼成は良好である。６㎜大のものを含む粗い砂質土を用いている。底部は径 13㎝程の平底になると想定される。

81～90 は底部である。器形の変化に乏しく細分が困難であるが，胎土・焼成・調整などから黒川式土器に帰属すると想定されるものをまとめた。

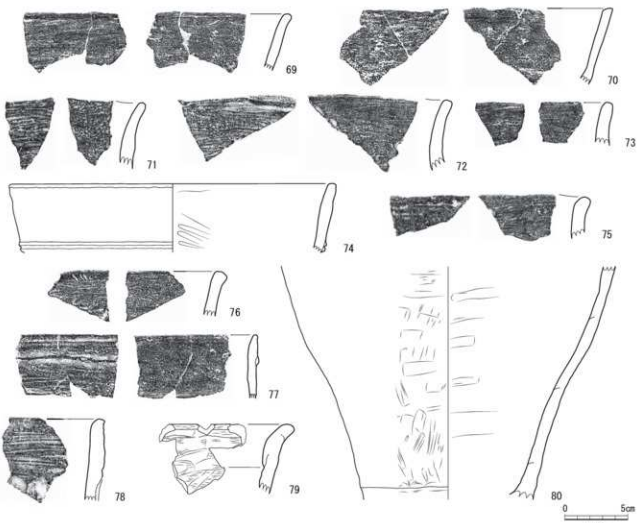
81～84 は底部に白土が付着したものや，網代のあるものである。

81・82 は底部接地面に白土が付着している。81 は底径９.2㎝で，端部がやや張り出し，やや丸みを帯びて外傾しながら立ち上がる。内外面とも表面の剥離が全面にみられる。82 は底径９.8㎝で，端部は外へ張り出し，内弯しながら外傾して立ち上がる。調整は内外とも丁寧なナデ調整である。内面にはコゲがあり，外面は剥落が目立つ。

83 は底径７.0㎝で，内面はミガキに近い丁寧なナデだが，外面は縦ナデで，外面は剥落が目立つ。84 は底径 17㎝と大型で，厚さが２㎝近くもある。外傾しながらまっすぐ伸びる部分と円盤状貼り付けのように外へ張り出す部分とがある。底には正格子状の網代圧痕がある。６㎜大の砂礫を含む粗い砂質土を用い，内面は磨耗が目立つ。

85～87 は底部からの立ち上がりが丸みをもつもので，底径は 85 が７.2㎝，86・87 が９.4㎝である。85 は底部の仕上げが雑で，87 はやや上げ底となっている。

88 は底部が三角突帯状に外へ張り出すもので，胴部へ



第 26 図　縄文時代晩期土器（７）　黒川式

は外へ開きながら丸みを帯びて立ち上がる。焼成は良好で，全体に薄い作りとなっている。底径8.4cmである。

89・90はともに輪状高台のような形状の底部で，底径は89が8.4cm，90が6.8～7.0cmである。

②浅鉢（第28～31図91～161）

安定した平底から，外へまっすぐ伸び，屈曲して口縁部がまっすぐ立ち上がるか，外反する深めの器形である。

91～94は屈曲部に幅広の粘土紐を貼り付け，その中央に凹線を引き2条突帯様にしている。凹線は雑で，途切れている箇所もある。91は口径33cmで，口唇部にリボン状突起がある。突起の2か所の頂部には刺突文が施され，この頂部間には短沈線がある。内面はミガキに近い丁寧なナデ整形である。92は口径32cmで，屈曲部の突帯上に，中央に押点文のある環状浮文が貼り付けてある。93は口径35.6cmで，内外ともナデ仕上げだが，外面上半はミガキ仕上げである。94は口径26.2cmで，波状口縁である。高まり部分口縁部にリボン状突起がある。突起の頂部は2か所あり，そこに刺突文がある。突起下の胴部屈曲部には中央に刺突文のある環状浮文が貼り付けられている。

95は口縁下に1条，屈曲部のやや上に2条の短絡線が引かれている。96は口唇部と，口縁端近くに凹線がある。屈曲部から外反しながら立ち上がっている。

97～102は外へ開きながらまっすぐ立ち上がる口縁部である。97～100は屈曲部に沈線がある。内外とも横方向のヘラミガキで仕上げている。101は外反気味に立ち上がる口縁部で，下部に浅い凹線がある。102はリボン状突起の端部が残る。

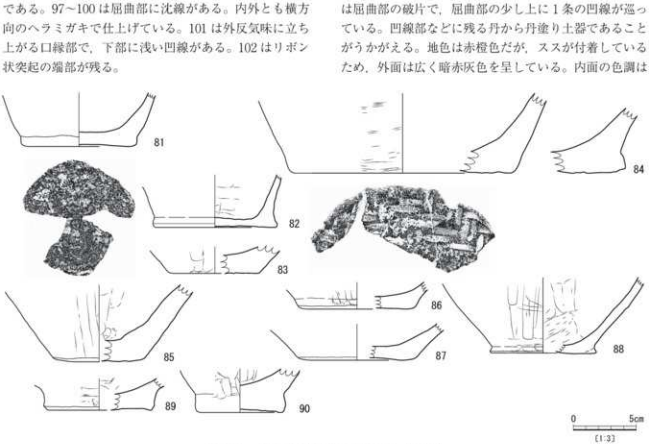
103は口径28.4cm，底径12.4cm，高さ15cmの丹塗りの鉢である。口縁部の4か所にリボン状突起があり，このうちの対面する2か所では，下の胴部屈曲部に中央に刺突のある環状浮文が貼り付けてある。リボン状突起は両側のこぶ状突起中央に刺突文がある。底部は安定した平底だが，筋状や粒状の圧痕が多い。口縁部中央付近に太さの一定しない凹線が巡っている。

104は口径28cmで，外面の凹みに赤色顔料があるため丹塗り土器だった可能性がある。口縁端部近くで深く削り込み，口唇部の屈曲もやや膨らませ，突帯状に見せている。

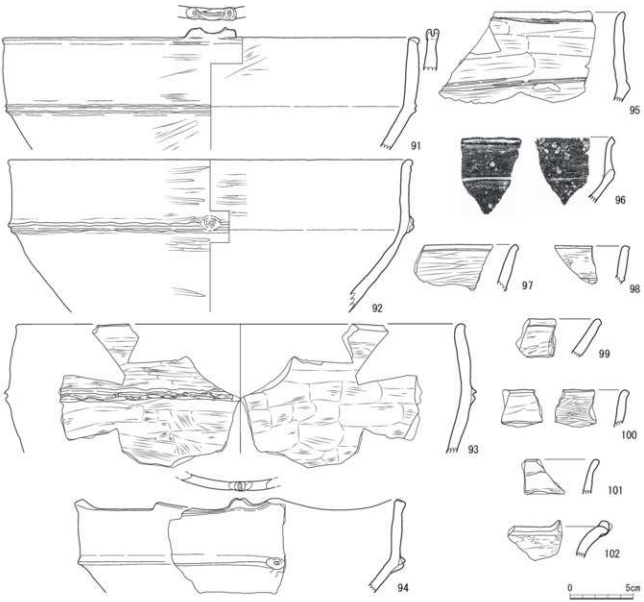
105は口径23.4cmである。底部から外へ開きながら立ち上がり，上部で屈曲し，やや外反ぎみに直行して口縁端に至る。口縁端部は断面三角形の突帯状に肥厚している。内外ともヘラミガキ仕上げだが，外面口縁部と内面は横方向，外面体部は縦方向である。外面には多くのススス，内面下半にはコゲが付着している。

106は口径23.8cmで，口唇部に厚みをもたせ，端部は内傾する。口縁下部には三角突帯があり，四方には突起が貼り付けられる。両端に刺突のあるこぶ状突起があり，その間には短凹線が引かれている。口縁部は波状となる可能性がある。

107は波状を呈する口縁で，波頂部分は折り曲げてこぶ状を呈している。外面にはススが付着している。108は屈曲部の破片で，屈曲部の少し上に1条の凹線が巡っている。凹線部などに残る丹から丹塗り土器であることがうかがえる。地色は赤橙色だが，ススが付着しているため，外面は広く暗赤灰色を呈している。内面の色調は



第27図　縄文時代晩期土器（8）　黒川式



第 28 図　縄文時代晩期土器（9）　黒川式

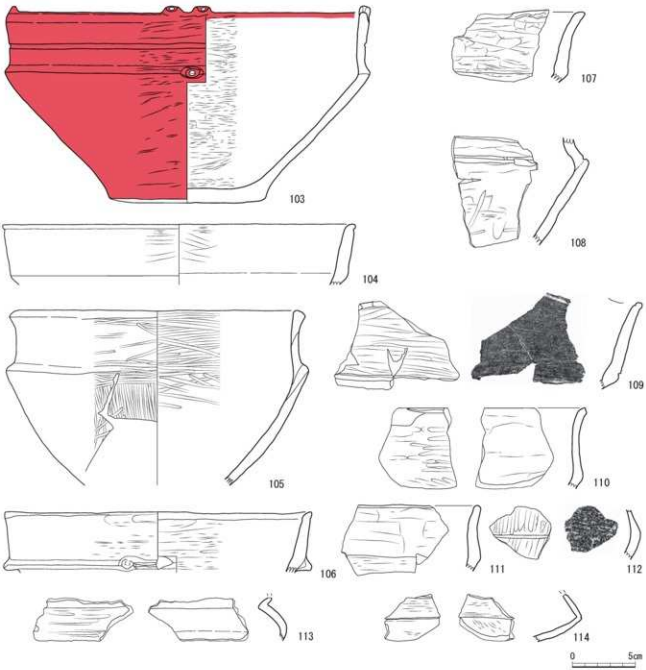
灰褐色で，一部褐灰色を呈している。胴部屈曲部に接合面が観察される。

109～110 は丸みを帯びた屈曲部から口縁部へ外反する器形である。109 は丹塗り土器で波状口縁となる。屈曲部は外面上位に凹線があり，口縁端部は内面に沈線が巡り，外面は突帯状となる。110 の口縁部外端は調整により段を作っている。外面にはススが付着しているが，剥落部分にも付着していることから，活用している時点ですでに剥落していたことがわかる。111 の外面は丁寧な横ナデ調整だが，内面は粗い条痕状の横ナデ調整である。波状口縁の可能性もある。

112～114 は薄手の浅鉢である。112 は頸部付近が薄くなっている。113 は丸みを帯びた胴部と，外へ強く折れ，端部近くで直に立ち上がる短い口縁部から成る。内外とも丁寧なヘラミガキ調整である。114 は胴部で鋭く屈曲する器形で，小壺の可能性もある。屈曲部の上方に沈線が巡り，頸部にも三叉文の可能性のある沈線を観察できる。ヘラナデ調整で，外面上半は丁寧である。

115～130 は外傾する胴部から屈曲して，口縁部が外へあるいは内へ反ったりまっすぐ伸びるものである。

115～118 は口縁部が外反するが，115 が外へ傾くのに対して，116 はやや内傾し，117・118 は直立気味になるという違いがある。115 は口径 36cmと大型で，口唇部に環状浮文を貼り付け，屈曲部の上には凹線がある。内外ともミガキに近い丁寧なナデ整形である。116 は口径が 29cmで，屈曲部の上下と，口縁端近くの 3 か所に凹線が巡っている。117 は口径 28cmで，口縁端近くに 1 条の沈線が巡っている。屈曲部は比較的シャープで，やや外傾

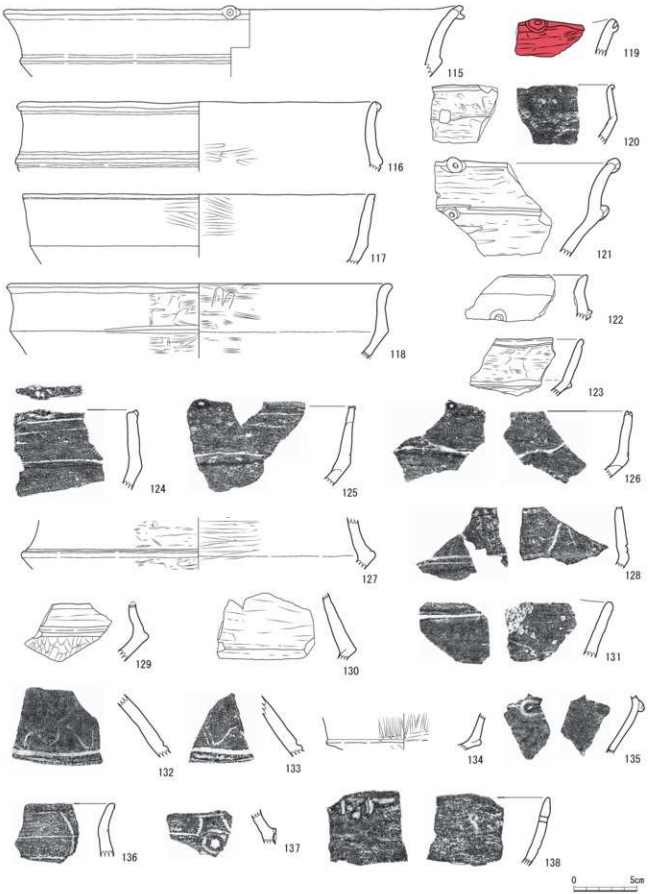


第 29 図　縄文時代晩期土器（10）　黒川式

して立ち上がり，端部は矩形を呈する。118 は口径が 30.6cmで，鋭く屈曲して外反気味にまっすぐ立ち上がる。

119 は口縁部が波状となる丹塗り土器で，口縁端に刺突のあるこぶ状突起が貼り付けられている。丹は口縁内面から外面全体に塗られている。120 は薄い作りだが，鋭く屈曲している。胴部に内傾する口縁を貼り付け，口縁端は丸く外へ折り曲げている。にぶい赤褐色を呈しているが，外面はススによって黒色化している。121 は丹塗り土器で，口縁部と屈曲部の上に凹線がある。刺突のあるこぶ状突起が口縁部と屈曲部に貼付されている。口縁部は外反しつつ外傾する。122 は内外とも剥脱が多い破片だが，屈曲部に浅い刺突のある環状浮文がある。口縁部は短く，鋭角的に外反する。

123～126 は屈曲部から，外傾，直立あるいはやや内傾しながら立ち上がる。123 は外面の口縁下に凹線，屈曲部に三角突帯が巡らされている。124 は口縁部下と，屈曲部の上に凹線が巡り，口縁端にこぶ状貼付文がある。125 は屈曲部から口縁端へ向かって薄くなり，屈曲部の上には 1 条の細沈線が巡っている。口縁端に刺突のあるこぶ状突起がある。屈曲部下位に赤色顔料が残っていることから丹塗り土器の可能性がある。126 は屈曲部の上に 2 条の細沈線が巡り，口縁端に浅い刺突のあるこぶ状



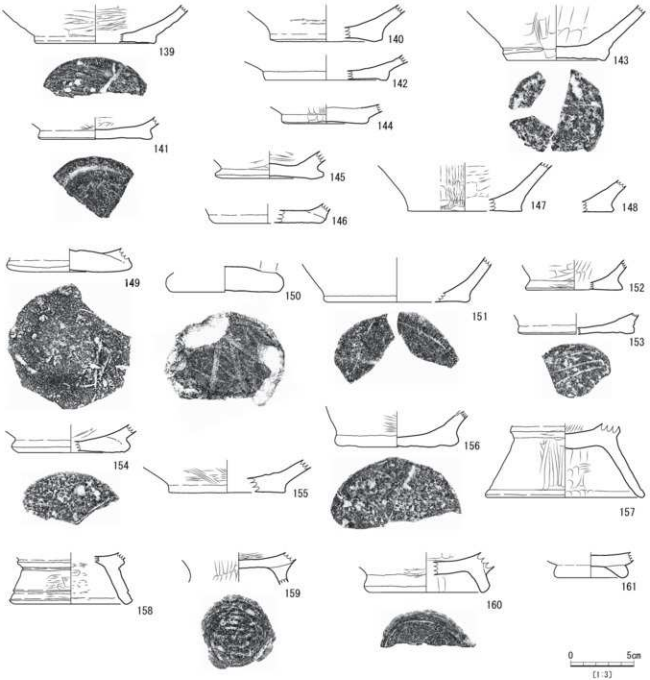
第 30 図　縄文時代晩期土器（11）　黒川式

突起が貼り付けてある。

127 は屈曲部端が丸みを帯びた丹塗り土器で，屈曲部の上を凹線が巡っている。128 は屈曲部の上に 2 条の沈線が巡っている。129・130 は強く屈曲している胴部で，129 は屈曲部の少し上に幅広の凹線が巡る丹塗り土器である。130 は外面を丁寧にナデている。

131 は波状口縁部で，口縁端直下に 2 条の沈線があり，外面にススが付着している。132・133 は肩部で，外面に 2 条以上の幅広凹線を巡らせた後に波状沈線が描かれる。波状沈線は途切れ途切れとなる。134 は屈曲部付近の径が 12cmほどの小型浅鉢で，内外ともヘラミガキで仕上げ，接合部が凹んでいる。135 も内外ヘラミガキ仕上げの丁寧な薄い作りで，屈曲部には刺突のある環状浮文がある。136 は口縁端部が丸くなり，丁寧な調整である。口縁下に 1 条，口縁中ほどに 1 条，屈曲部の上に 2 条の沈線が巡っており，口縁端近くから屈曲部に縦方向の弧状沈線が引かれる。口縁中程の沈線は弧状沈線よりあとに引かれている。137 は屈曲部に刺突のある環状浮文が貼り付けられ，その上位両側には矩形凹線が引かれる。

138 は全体的に磨滅しているが，口縁端近くに幅広で



第 31 図　縄文時代晩期土器（12）　黒川式

低い突帯があり，途中に「コ」の字状区画沈線があり，その中には外→内へ開けられた焼成前穿孔がある。肩にも2条の浅い沈線があり，外面にはススが付着する。

浅鉢の底も深鉢同様，区分が困難だが，胎土や調整などから黒川式土器の浅鉢と思われるものを列挙した。平底のものと脚台の付くものとがある。

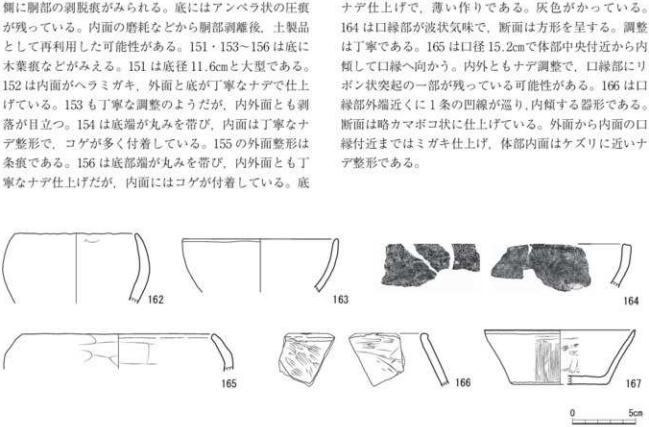
139～143は円盤貼り付けの底部で，底径は7.0～9.6cmである。139はややあげ底で，内面と底部はヘラミガキで仕上げている。140もあげ底で，内面と底は丁寧なナデ整形だが，外面整形は粗い。141は周辺だけが接地する輪高台状の底で，内面・底ともミガキに近い丁寧なナデ整形である。142の内面は広く剥脱して凸凹しているが，ミガキ調整のようにみえる。底と外は丁寧な横方向のナデ整形である。口径9.6cmと大きなもので，ややあげ底となっている。143は底径7.0cmと小振りだが，厚みのある丹塗り浅鉢である。内面は表面がほとんど剥落し，外面・底は丁寧なミガキ調整である。胎土は細かい粒子である。

145～156は底が外へ強く張り出している。145は底部が強く凹んで，あげ底状となっている。調整は丁寧である。147・148は分厚く，147は底径9.8cmと大きい。149は円盤状の底部に胴部を積み上げているが，積み上げの時に円盤の外まで粘土を巻いている。150は胴部が剥がれた円盤状の底で，端部は丸く整えている。底のやや内側に胴部の剥脱痕がみられる。底にはアンペラ状の圧痕が残っている。内面の磨耗などから胴部剥離後，土製品として再利用した可能性がある。151・153～156は底に木葉痕などがみえる。151は底径11.6cmと大型である。152は内面がヘラミガキ，外面と底が丁寧なナデで仕上げている。153も丁寧な調整のようだが，内外面とも剥落が目立つ。154は底端が丸みを帯び，内面は丁寧なナデ整形で，コゲが多く付着している。155の外面整形は条痕である。156は底部端が丸みを帯び，内外面とも丁寧なナデ仕上げだが，内面にはコゲが付着している。底には木の葉や小さな粒状の圧痕が付着している。

157～161は脚台部分である。157は鉢内面と外面が縦方向のヘラミガキ，脚台内面が横ナデで仕上げる丁寧なつくりである。脚台端直径11.4cm，脚台高4.5cmで，鉢と脚台の境には三角突帯が貼り付けてある。脚台端はわずかに段を形成する。色調はにぶい橙色だが，広く黒褐色を呈しており，鉢内面は光沢のある黒色である。158は脚台端直径が9.0cmで，脚台端近くに幅広の凹線，脚台と鉢の境に突帯があり，その上下に沈線がある。157が鉢に比べて脚台の厚さが薄いのに対し，158は逆である。159は脚台端が欠けているが，鉢内面はヘラミガキ，外面は縦方向ヘラナデで仕上げている。160は脚台端直径が9cm，高さが1.5cmの低い脚台である。鉢部の底に木葉痕があることから，鉢部に脚台を貼り付けたあと，接合部外側に粘土を付加していると想定される。内面にコゲが付着している。161は脚台端直径が5.4cm，高さが0.9cmの小さな外開きの脚台である。鉢内面はヘラミガキ，外面・脚台内面はナデ整形である。

③まり（第32図162～166）

口縁部が内弯するものである。162は口径9.4cmで，分厚い作りだが口縁端は薄くなっている。内外ともナデ整形だが，手捏ね風のため，口縁端はやや凸凹している。胴部下位にススが付着している。163は丸みを帯びて外へ広がる器形で，口径は11.2cmである。内外とも丁寧なナデ仕上げで，薄い作りである。灰色がかっている。164は口縁部が波状気味で，断面は方形を呈する。調整は丁寧である。165は口径15.2cmで体部中央付近から内傾して口縁へ向かう。内外ともナデ調整で，口縁部にリボン状突起の一部が残っている可能性がある。166は口縁部外端近くに1条の凹線が巡り，内傾する器形である。断面は略カマボコ状に仕上げている。外面から内面の口縁付近まではミガキ仕上げ，体部内面はケズリに近いナデ整形である。



第32図　縄文時代晩期土器（13）　黒川式

④小型鉢（第32図167）

口径11.8cm，高さ4.3cm，底径7.4cmの坏状を呈している。薄い作りで，口縁端近く外面に凹線が巡って細くなっている。外面は暗文風の縦方向ヘラミガキ，内面は繊維状ナデで仕上げている。底はミガキ調整の平底である。一部褐灰色を呈するが，にぶい橙色を呈し，胎土は細かい。

⑤鍋（第33図168～176）

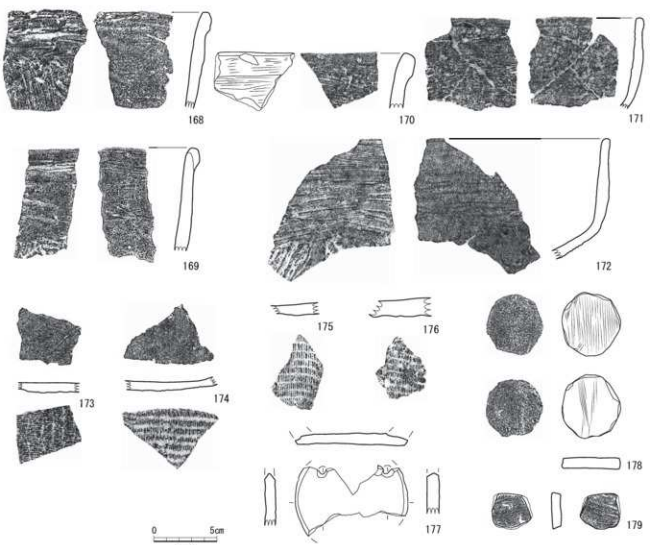
やや外傾するか，直に立ち上がる口縁部で，底部には広く組織痕が残っている。スス付着のものが多く，焼成良好である。

168～170は直立気味だが，やや外傾する口縁部で，口縁端には帯状のものが貼り付けられ肥厚している。168の外面は肥厚部とその下は横方向，体部は縦方向の粗い繊維状ハケナデ，内面は横ナデで仕上げている。171と172は同一個体である。やや外傾気味だが，ほぼ直立して立ち上がり，丸みを帯びて底部へ移る。口縁端近くがやや凹んで，厚みのある口縁部となる。内面は丁寧な横ナデ，外面は横ナデ調整だが，底には編布痕跡がみられる。173～176は底部破片で，いずれも編布痕跡が残っている。内面は丁寧なナデ仕上げである。

⑥土製品（第33図177～179）

円盤状土製品が3点出土している。

177は直径が9cmある浅鉢の底部を再利用したもので，上下が欠けている。本来は円盤状貼り付けの底部で，胴部が剥脱したあと上半部の2か所に表裏面から径0.7～1.1cmほどの円孔を穿っている。吊るすのに用いたものだろうか。178・179は浅鉢胴部の周辺を丁寧に研磨しており，178が径4.5～5.0cm，厚さ0.9cmの円形，179が径2.8～3cm，厚さ0.8cmの不整円形に加工している。



第33図　縄文時代晩期土器（14）　黒川式

第３表　縄文晩期遺構内出土土器観察表

掲載番号	図版番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 白石	胎土 茶白石	胎土 赤白石	胎土 石英	胎土 黒石	胎土 長石	胎土 角閃石	備考
12	1	縄SI1 F25	①	No.3 他	深鉢	口縁～胴	口36.7 底7.0	ヘラ縦・横・斜ミガキ	横ナデ	－	赤 黒		普通	○	○		○			○	雲母、スス、コゲ、器高37.3cm
13	2	縄SI1	①	No.61 他	深鉢	口縁～胴	口30.4	丁寧な縦ナデ	丁寧な横ナデ	3条沈線、円圏	赤・赤黒 赤褐・暗赤灰		普通	○		○			○		スス、コゲ
13	3	縄SI1 B11	①	No.18 他	深鉢	口縁～胴	底30.6	横ナデ	丁寧な横ナデ	3条円圏	橙・暗赤灰		良好		○	○	○		○		スス、コゲ、補修孔
13	4	縄SI1	①	No.49 他	深鉢	口縁～胴	口29.4	ヘラ縦ミガキ	粗い横ナデ	3条沈線	にぶい赤褐		良好	○	○	○			○		スス、コゲ
13	5	縄SI1	①	No.1 他	深鉢	口縁～胴	－	縦ミガキ	横ミガキ	－	にぶい褐・赤褐		普通		○				○		－
14	6	縄SI1	①	No.62 他	深鉢	胴	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	暗褐・黒・赤橙・赤黒		普通	○	○		○	○	○		雲母、スス ふきこぼれ
14	7	縄SI1	①	No.1	深鉢	胴	－	丁寧なナデ→斜ミガキ	縦・横ナデ	－	明赤褐 にぶい橙		普通	○		○		○			スス、黒斑
14	8	縄SI1	①	No.28 他	深鉢	口縁～胴	21.2	横撫状ハケ横ナデ	横撫状ハケ横ナデ	四線	にぶい橙・黒褐 黒褐		良好			○	○				スス
14	9	縄SI1	①	24521	深鉢	底	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	－	赤灰		良好			○	○				底：白粒、圧痕
14	10	縄SI1	①	24532 他	深鉢	底	底6.6	ヘラ縦ミガキ	ナデ	－	にぶい橙 灰褐		普通	○		○		○			雲母 底：ナデ→ミガキ
15	11	縄SI1	①	－	浅鉢	口縁～胴	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	－	黒 黒褐		良好			○	○			○	細砂質土
15	12	縄SI1	①	No.18 他	浅鉢	口縁～胴	口34.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	－	にぶい黄橙・黒		良好			○	○				黒色研磨
15	13	縄SI1	①	－	土製円盤	完形	－	周辺研磨	周辺研磨	－	暗赤褐・黒褐		普通	○		○	○			○	2.8×(2.7)×0.8cm
17	22	縄SK4 K3SP1943	①	30062	甕	胴～底	底8.0 ～8.5	縦ナデ	横ナデ	－	橙・黒 淡黄・黄灰		良好	○	○	○	○				底：ナデ、圧痕

第４表　縄文晩期遺構出土石器観察表

掲載番号	図版番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
15	14	縄SI1	①	No.87	打製石斧	1.53	1.17	0.17	0.21	黒曜石	－
15	15	縄SI1	－	No.77	磨製石斧	7.50	14.33	1.85	139.84	ホルンフェルス	－
15	16	縄SI1	－	No.15	磨製石斧	6.38	9.42	1.17	68.29	ホルンフェルス	－
15	17	縄SI1	①	29602	磨製石斧	(8.40)	5.18	3.89	(253.82)	頁岩	－
15	18	縄SI1	－	No.19	打製石斧	(4.65)	9.60	1.16	(56.02)	ホルンフェルス	－
15	19	縄SI1	－	No.17	打製石斧	(8.75)	7.10	1.10	(60.43)	ホルンフェルス	－
15	20	縄SI1	①	No.35	打製石斧	(17.45)	(8.50)	2.25	(291.68)	ホルンフェルス	－
17	21	縄SK3	①	19600	丸玉	0.90	径1.20	－	1.70	含タロムロ石質母	孔径上：0.8　下：0.2

第５表　入佐式土器観察表

掲載番号	図版番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 白石	胎土 茶白石	胎土 赤白石	胎土 石英	胎土 黒石	胎土 長石	胎土 角閃石	備考
20	23	縄SI41	③	36560 他	深鉢	口縁～胴	口34.8	ミガキ	横ナデ	－	灰褐・黒褐 にぶい橙・褐灰		良好	○	○	○			○		スス
20	24	H29-31	Ⅱ	－	深鉢	口縁	口27.7	ナデ→横ミガキ	ナデ→横ミガキ	3条沈線	明褐		良好	○			○	○	○		－
20	25	136	Ⅲａ	29074	深鉢	口縁	－	丁寧な横ナデ	横ナデ	4条沈線	暗赤灰		普通	○			○	○	○		－
20	26	G30	Ⅲｂ Ⅲａ	30455 他	深鉢	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	4～6条沈線	橙、暗赤灰		良好	○		○	○			○	波状口縁 沈線→ナデ
20	27	G30	Ⅲａ	33995	深鉢	口縁	－	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	7条沈線	にぶい褐		良好		○	○	○	○		○	波状口縁 沈線→ヘラナデ
20	28	136	Ⅲａ	29085	深鉢	口縁	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	明赤褐 にぶい橙		普通			○	○	○	○		雲母
20	29	136	Ⅲａ	29176	深鉢	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	4条円圏	褐灰		良好			○	○			○	スス
20	30	I31	Ⅱ	30212	深鉢	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	4条円圏	にぶい赤褐 褐灰		良好	○	○		○			○	－
20	31	K29	Ⅲａ	26981	深鉢	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	4条円圏	褐、黒褐		良好		○	○	○		○		雲母
20	32	I31	Ⅱｂ	31168	深鉢	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯	明赤褐		良好	○			○	○		○	波状口縁、スス
20	33	E42	Ⅱ	10032 他	深鉢	口縁	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	にぶい褐 明褐		良好				○			○	－
20	34	古SI4	①	37989	深鉢	口縁	－	横ナデ	丁寧な横ナデ	－	暗赤褐		良好	○	○		○			○	スス
21	35	E42	Ⅱａ	9972	深鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	－	黒褐 にぶい褐・黒褐		普通	○	○		○				スス
21	36	市SI19	①	6734 他	深鉢	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	－	にぶい赤褐		普通		○		○				スス、雲母
21	37	H30	Ⅲａ	33415 他	深鉢	口縁	－	ナデ	ナデ	沈線	暗褐 黒		良好	○	○	○	○			○	37～40同一個体 スス、コゲ
21	38	H30	Ⅲａ	32731 他	深鉢	口縁	－	ナデ	ナデ	－	黒褐 にぶい黄褐		良好	○	○	○	○			○	37～40同一個体 スス、コゲ
21	39	G30 H30-31	Ⅲａ	31719 他	深鉢	胴	胴42.8	ナデ、粗いナデ	横ナデ	－	にぶい黄褐		良好	○	○	○	○			○	37～40同一個体 スス、コゲ
21	40	G29 H30-31	Ⅲ、Ⅲａ	31718 他	深鉢	胴	－	ナデ	粗いナデ	－	暗褐～橙 にぶい黄褐		良好			○	○	○		○	37～40同一個体 スス、灰白石
22	41	I31	Ⅱ、Ⅲａ	28232 他	深鉢	口縁～胴	口22.6	粗いナデ	粗いナデ	－	黒褐		良好	○		○		○		○	スス、コゲ、灰白石
22	42	F31	Ⅲｂ Ⅲａ	38280 他	深鉢	口縁	口24.8	ナデ	ナデ	－	暗褐 灰黄褐		良好	○		○	○	○			スス、灰白石
22	43	K30	Ⅲａ	28800	深鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい黄橙 灰黄褐		良好	○	○	○				○	スス
22	44	J28	Ⅱ、Ⅲａ	27835 他	深鉢	口縁～胴	口30.0	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	－	にぶい褐		良好	○	○	○	○		○		スス、雲母
22	45	I31	Ⅲａ	32866 他	深鉢	口縁	－	ナデ	丁寧なナデ	－	にぶい橙		良好	○	○	○	○				スス、雲母
22	46	136	Ⅲａ	29193 他	深鉢	口縁～胴	口42.4	撫状ハケナデ	ヘラ横ナデ	－	にぶい赤褐 にぶい橙		良好	○	○		○	○	○		スス、雲母

博図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	地成	胎土 白石	胎土 茶白石	胎土 黄白石	胎土 石英	胎土 黒石	胎土 黒白石	胎土 長石	角閃石	備考
23	47	I31	Ⅱ	28205	深鉢	口縁～胴	－	横ナデ→縦ミガキ	横ナデ	縄文風ミガキ	赤/暗赤灰	良好	○		○	○					スス，雲母
23	48	I30-31	Ⅱ a	28889	深鉢	胴	－	ヘラ縦ミガキ	横ナデ	縄文風縦ミガキ	明赤褐/赤褐 にぶい橙/黒褐	良好		○	○				○		スス，雲母 輪積み痕
23	49	I31	Ⅱ a	32282	深鉢	胴	－	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ナデ	－	赤褐 にぶい赤褐	良好	○	○		○			○		スス
23	50	H30-31 K31	Ⅱ，Ⅲ a	31704	深鉢	胴	胴 16.3	ナデ	ナデ	－	にぶい黄褐	良好									雲母
24	51	G31	Ⅲ a	32903	深鉢	胴	－	ナデ	横ナデ	－	褐 灰黄褐	良好	○							○	精製土器，雲母
24	52	I27	Ⅲ a	21989	深鉢	胴	－	ヘラ縦ミガキ	ヘラミガキ	連続楕円文 円柱状突起	赤 赤黒	普通	○		○	○			○		－
24	53	I31	Ⅲ a	40141	深鉢	胴	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	黒褐	良好		○	○	○			○		スス
24	54	I31	Ⅲ a	32390	深鉢	胴～胴	胴 21.5	ナデ，ヘラ縦ミガキ	ナデ，ヘラ縦ミガキ	－	赤 赤～暗赤灰	普通	○	○	○		○	○	○		スス
24	55	I36	Ⅲ a	29683	深鉢	胴～胴	胴 38.0	横ナデ	横ナデ，指オサエ	－	にぶい赤褐 褐灰	良好	○		○				○		スス，雲母
24	56	G31	Ⅱ b Ⅲ a	31119	深鉢	胴～胴	胴 21.0	ヘラミガキ，ナデ	ナデ	－	にぶい褐	普通	○		○	○			○		スス
24	57	H31 I30-31	Ⅱ，Ⅲ a	27277	深鉢	胴～底	底 8.7	ケズリ，丁寧なナデ	－	－	にぶい褐 橙	普通	○	○	○		○		○		コゲ，スス，雲母，黒斑，底：丁寧なナデ
25	58	I30-31	Ⅱ，Ⅲ a	28226	浅鉢	口縁～胴	口 36.2	ミガキ	ミガキ	－	にぶい褐 灰黄褐～褐灰	良好	○		○		○		○		精製土器，スス
25	59	I31	Ⅲ a	32201	浅鉢	口縁	－	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	沈線	にぶい橙 にぶい黄橙	良好	○		○	○	○		○		－
25	60	I31	Ⅱ	28623	浅鉢	口縁～胴	口 26.0	ミガキ	ミガキ	1 条沈線	黄褐～黒褐 灰黄褐	良好		○	○			○	○		精製土器，スス
25	61	I37	Ⅲ a	28334	浅鉢	口縁～胴	口 15.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	－	黒褐	良好	○	○							精製土器，スス
25	62	K36	Ⅲ a	33331	浅鉢	口縁	口 19.0	ナデ	丁寧なナデ	－	黒褐	良好		○	○	○			○	○	スス
25	63	E25-26	Ⅱ b Ⅲ a	19913	浅鉢	口縁～胴	口 27.0	－	－	－	明黄褐	良好		○		○	○		○		剥落
25	64	G30	Ⅱ	33732	浅鉢	口縁	－	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	1 条沈線	明赤褐	普通	○				○				剥落，丹塗り
25	65	I31	Ⅱ b Ⅲ a	31178	浅鉢	口縁～胴	口 28.0	ナデ	ナデ，指オサエ	－	にぶい黄褐 灰黄褐	良好	○	○	○				○	○	スス，雲母
25	66	I32	Ⅰ	29617	浅鉢	胴	－	横ナデ	丁寧な横ナデ	沈線	にぶい褐	普通				○		○			剥落，丹塗り
25	67	C50	Ⅱ	7163	鉢	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	－	にぶい橙，黒褐 にぶい橙	良好	○	○	○				○		スス，輝石
25	68	D49	Ⅱ	－	鉢	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	－	灰黄褐 にぶい黄橙	良好	○	○	○				○		スス，輝石

第6表　黒川式土器観察表

博図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	地成	胎土 白石	胎土 茶白石	胎土 黄白石	胎土 石英	胎土 黒石	胎土 黒白石	胎土 長石	角閃石	備考
26	69	F-G30	Ⅲ a	32593	深鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	－	黒褐 にぶい褐	普通	○		○	○			○		スス
26	70	G30	Ⅲ，Ⅲ a	33519	深鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	－	暗褐 にぶい褐	普通	○			○			○		スス
26	71	他 S118	①	7465	深鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	－	明褐灰	良好	○		○	○				○	口縁円凸，スス
26	72	D48	Ⅱ	7274	深鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	－	明黄褐	良好	○		○		○		○		口縁円凸，スス
26	73	他 S118	①	7454	深鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい橙	普通	○		○		○			○	口縁円凸，スス
26	74	G30-31	Ⅲ a	32564	深鉢	口縁	口 25.6	ヘラナデ	ヘラナデ	円環のある突帯	明赤褐 にぶい黄橙	良好	○	○	○	○	○		○		スス
26	75	他 S118	①	7453	深鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい黄橙	普通	○				○				スス，雲母
26	76	J28	Ⅱ b	27945	深鉢	口縁	－	横ナデ	横・指ナデ	－	にぶい黄橙	普通	○		○		○		○		－
26	77	E26	Ⅱ a Ⅲ a	19467	深鉢	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	突帯，1 条凹線	赤褐	良好				○	○		○		－
26	78	D48	Ⅱ	7796	深鉢	口縁	－	只段条痕	横ナデ	－	にぶい黄橙	普通	○	○			○	○	○		スス
26	79	F31	Ⅲ a	40259	深鉢	口縁～胴	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	－	にぶい橙，黒褐	良好	○		○	○					粗入上げ痕，スス
26	80	D26-27 E26	Ⅱ，Ⅲ a	19133	鉢	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	－	にぶい赤褐 赤黒	良好		○	○	○			○		スス，コゲ
27	81	G43	Ⅱ b	12537	鉢	底	底 9.2	ナデ	粗いナデ	－	にぶい赤褐 にぶい橙	良好	○	○		○				○	コゲ，底：白粉 繊維状パケナデ
27	82	E32	Ⅲ b	16569	鉢	底	底 9.8	縦ナデ	横ナデ	－	赤 にぶい橙	普通	○		○		○		○		コゲ，雲母，底：白粉，丁寧なナデ
27	83	E42	Ⅱ a	9890	深鉢	底	底 7.0	縦ナデ	丁寧なナデ	－	にぶい黄橙 褐灰	普通	○		○	○				○	ナデ
27	84	I29-30	Ⅱ，Ⅲ a	23471	鉢	底	底 17.2	横ナデ	ナデ	－	褐 赤褐	普通	○		○	○				○	底：網代痕，布圧痕
27	85	H21	Ⅱ a	18659	深鉢	底	底 7.2	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	－	にぶい橙 褐灰	普通	○		○	○	○				底：縦なナデ
27	86	J28	Ⅱ a	28643	深鉢	底	底 9.4	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	赤褐 暗赤灰	普通	○		○	○			○		－
27	87	F32	Ⅲ a	40476	深鉢	底	底 9.4	ナデ	ナデ	－	赤褐 暗赤灰	良好	○		○	○				○	ナデ，コゲ
27	88	G31	Ⅲ a	32916	深鉢	底	底 8.4	繊維状パケナデ	繊維状パケナデ	－	赤褐 暗赤灰	良好	○	○		○	○				スス，コゲ
27	89	F31-32	Ⅲ a-b	16827	深鉢	底	底 8.4	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	にぶい橙 暗赤灰	良好	○		○	○	○				輪状高台風
27	90	J28	Ⅱ	23457	深鉢	底	底 6.8 ～7.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	－	赤	普通	○		○	○					ナデ，雲母 輪状高台風

博図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	地色	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄石	胎土 石英	胎土 灰	胎土 黒石	胎土 長石	胎土 角閃石	備考
28	91	F31 (G30・31	Ⅲａ	32967 他	浅鉢	口縁～胴	口33.0	横ナデ	丁寧なナデ	円線のある突帯リボン状突起	暗褐	良好	○		○	○			○		スス、コゲ
28	92	H30	Ⅱｂ Ⅲａ	32736 他	浅鉢	口縁～胴	口32.0	ナデ	ナデ	円線のある突帯、円形浮文	赤褐	良好	○			○	○			○	コゲ
28	93	E・F31 G30	Ⅲａ	32525 他	浅鉢	口縁～胴	口35.6	ナデ、ミガキ	ナデ	円線のある突帯	黒褐 他	普通	○	○	○	○		○			スス、雲母
28	94	E25	Ⅱｂ	20037	浅鉢	口縁～胴	口26.2	ナデ	横ナデ	円線のある突帯、リボン状突起、円形浮文	にぶい黄褐 にぶい褐	良好			○	○			○		波状口縁、スス
28	95	J35	Ⅱｂ	35610 他	浅鉢	口縁～胴	－	ナデ	ナデ	1条円線	橙 にぶい褐	普通		○	○	○	○				スス、コゲ、雲母
28	96	D27	Ⅱ	21848	浅鉢	口縁～胴	－	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ナデ	沈線	にぶい赤褐	良好	○			○			○		－
28	97	D49	Ⅱ	7755	浅鉢	口縁	－	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	沈線	暗赤灰・赤赤	良好	○		○					○	－
28	98	弥S116 SK2	②	－	浅鉢	口縁	－	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	沈線	暗赤灰	普通	○			○				○	－
28	99	D48	Ⅱ	－	浅鉢	口縁	－	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	沈線	赤	良好	○		○	○					－
28	100	C50	Ⅲａ	－	浅鉢	口縁	－	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	沈線	にぶい赤褐	良好	○	○		○					黒斑
28	101	C50	Ⅰ	－	浅鉢	口縁	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	円線	にぶい赤褐 赤黒	普通		○	○	○				○	スス
28	102	G30	Ⅲａ	32572	浅鉢	口縁	－	丁寧なナデ	丁寧な横ナデ	リボン状突起	にぶい黄橙	普通	○		○	○			○		－
29	103	E30・F31	Ⅲａ	37768 他	浅鉢	完形	口28.4 底12.4	横ナデ	横ナデ	リボン状突起 円形浮文、円線	赤橙・暗赤灰 赤黒、暗赤灰	普通	○		○	○			○		スス、コゲ、丹塗り、底：圧痕、器高：15.0
29	104	E32	Ⅲａ	13466 他	浅鉢	口縁～胴	口28.0	ナデ	ナデ	－	黒褐 にぶい黄橙	良好	○				○		○	○	スス、丹塗り
29	105	G29～31	Ⅱ、Ⅲａ	30513 他	浅鉢	口縁～胴	口23.4	ヘラ縦・横ミガキ	ヘラ横ミガキ	－	明褐 他	良好	○			○		○		○	スス、コゲ、雲母
29	106	E41	Ⅱｂ	11045 他	浅鉢	口縁	口23.8	横ナデ	丁寧な横ナデ	突帯、リボン状突起	にぶい橙	普通	○			○	○		○		－
29	107	G41	Ⅱａ	9156	浅鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	－	橙	普通		○	○	○	○	○			波状口縁、スス
29	108	G31	Ⅲａ	33369 他	浅鉢	胴	－	横ナデ	横ナデ	1条円線	赤橙・暗赤灰 灰褐、褐灰	普通			○	○	○		○		スス、丹塗り
29	109	E49	Ⅰ	－	浅鉢	口縁～胴	－	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	円線、沈線	褐灰・黒褐 褐灰	良好	○	○			○		○	○	波状口縁、雲母、丹塗り
29	110	E42	Ⅲａ	9944	浅鉢	口縁	－	ミガキ	ナデ	－	灰褐 にぶい褐	良好	○	○	○	○	○		○	○	スス、雲母
29	111	F31	Ⅲａ	38770 他	浅鉢	口縁	口14.4	丁寧な横ナデ	粗い横ナデ	－	にぶい黄橙	普通	○		○	○	○				－
29	112	D49	Ⅱ	7760	浅鉢	胴	－	縦ミガキ	横ナデ	－	赤灰 橙	普通	○	○			○				雲母
29	113	G42	Ⅱｂ	10772	浅鉢	胴	－	丁寧なヘラミガキ	丁寧なヘラミガキ	－	黒褐	良好	○		○					○	－
29	114	弥S118	②	7485 他	浅鉢	胴	－	丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	沈線	橙 赤灰	良好	○							○	雲母
30	115	E26・27	Ⅱ	18838 他	浅鉢	口縁	口36.0	丁寧なナデ	丁寧なナデ	円形浮文、沈線	赤褐 にぶい橙	良好	○		○		○		○		－
30	116	F30	Ⅱｂ	37853 他	浅鉢	口縁	口29.0	丁寧なナデ	ナデ	沈線	にぶい黄橙	普通	○		○		○		○	○	－
30	117	G32	Ⅱｂ Ⅲａ	36601 他	浅鉢	口縁～胴	口28.0	ナデ	ナデ	1条沈線	にぶい黄橙	良好			○		○		○	○	波状口縁、雲母
30	118	D27	Ⅲａ	21970	浅鉢	口縁～胴	口30.6	丁寧な横ナデ、ヘラミガキ	横ナデ	－	にぶい褐	普通	○		○		○		○		スス、コゲ
30	119	E30	Ⅲ	38531	浅鉢	口縁	－	横ナデ	－	刺突のあるこぶ状突起	黒褐	普通	○		○	○	○		○		波状口縁、丹塗り
30	120	H38	Ⅲａ	13568	浅鉢	口縁	－	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	－	にぶい赤褐	良好	○	○	○	○	○				細砂質土、スス
30	121	弥S145	①	22436	浅鉢	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	円線、刺突のあるこぶ状突起	灰黄褐 明黄褐	普通	○	○	○	○	○				スス、丹塗り
30	122	F36	Ⅲａ	21820	浅鉢	口縁	－	ミガキ	ミガキ	円形浮文	にぶい赤褐、黒褐 にぶい赤褐	普通		○		○	○		○		スス
30	123	D24	Ⅲａ	22519	浅鉢	口縁～胴	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	沈線、突帯	にぶい橙、褐灰	良好				○			○		スス
30	124	D32	Ⅱｂ	16653	浅鉢	口縁～胴	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	沈線、刺突のあるこぶ状突起	橙色 にぶい橙	普通			○	○	○				細砂質土、スス
30	125	G30	Ⅲａ	32513 他	浅鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	1条沈線、刺突のあるこぶ状突起	にぶい黄橙、褐灰	普通	○			○			○		スス、丹塗り
30	126	G30	Ⅲａ	32510 他	浅鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	2条沈線、刺突のあるこぶ状突起	にぶい黄橙、褐灰	普通	○			○	○		○		細砂質土、スス
30	127	E26	Ⅰ	18381	浅鉢	胴	－	丁寧な横ナデ	赤褐風横ナデ	1条沈線	赤色	良好			○	○	○		○		細砂質土、丹塗り
30	128	G30	Ⅲａ	33529 他	浅鉢	胴～脚	－	丁寧なナデ	横ナデ	2条沈線	にぶい黄橙	普通	○		○	○			○		－
30	129	G31	Ⅲａ	38647 他	浅鉢	胴～脚	－	丁寧なヘラ磨ナデ	横ナデ	円線	明赤褐～赤灰 明赤褐	普通			○	○	○		○		丹塗り
30	130	F42	Ⅱｂ	12482 他	浅鉢	脚	－	丁寧な横ナデ	横ナデ	－	にぶい赤褐 明赤褐	普通	○		○	○	○				細砂質土
30	131	E22	Ⅱ	21211	浅鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	2条沈線	にぶい黄橙	普通			○	○	○	○			波状口縁、スス、雲母
30	132	H42	Ⅲａ	8853	浅鉢	脚	－	丁寧なヘラ磨ナデ	粗いヘラ磨ナデ	2条円線、1条波状沈線	にぶい赤褐	良好	○		○	○					雲母
30	133	G43	Ⅱ	12090	浅鉢	脚	－	丁寧なヘラ磨ナデ	ヘラ横ナデ	3条以上円線、2条波状沈線	にぶい赤褐	普通	○		○	○	○				－
30	134	H32	Ⅱｂ	29983	浅鉢	脚	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	－	灰褐・黒褐 にぶい橙・黒	普通	○	○	○	○	○			○	底：ヘラミガキ

博図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	地色	胎 白	胎 黄白	胎 石	胎 石英	胎 灰	胎 黒	胎 長石	胎 角閃石	備考
30	135	E25	Ⅰ	－	浅鉢	胴	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	円形浮文	暗褐黒	良好	○	○		○		○		○	－
30	136	E26	Ⅱa	22578	浅鉢	口縁	－	横ヘラミガキ	丁寧な横ナデ	1～2条沈線、弧状沈線	明赤褐・暗赤灰 明赤褐	普通	○		○		○		○		細砂質土
30	137	F25	Ⅱa	21515	浅鉢	胴	－	横ナデ	横ナデ	矩形沈線、円形浮文	にぶい赤褐	普通	○	○		○			○		細砂質土、スス
30	138	E26	Ⅱb	19869	浅鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	2条沈線、突帯、刺孔	にぶい黄橙 褐灰	普通	○		○	○					雲母、スス
31	139	G30	Ⅱb Ⅱa	30439 他	浅鉢	底	底9.4	ヘラナデ	ヘラミガキ	－	暗赤灰	良好	○		○	○					底：ヘラミガキ
31	140	E41·F42	Ⅱ	10124 他	浅鉢	底	底9.0	横ハナデ	丁寧なナデ	－	赤褐 灰黄褐	良好	○		○		○		○	○	スス、底：丁寧なナデ
31	141	D49	Ⅱ	7769	浅鉢	底	底8.8	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	黒褐色 にぶい黄褐	良好	○			○				○	輪状底台 底：丁寧なナデ
31	142	古SI3	①	14458	浅鉢	底	底9.6	丁寧な横ナデ	ミガキ	－	褐灰 暗赤灰	普通	○			○					底：丁寧な横ナデ
31	143	I29	Ⅱa	33900 他	浅鉢	底	底7.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	－	赤 暗赤灰	良好	○		○	○				○	底：ヘラミガキ、刀削り
31	144	F25	Ⅱa	21487	浅鉢	底	底7.0	丁寧なミガキ	ナデ	－	にぶい橙 褐灰	普通	○			○		○			底：丁寧なミガキ、刀削り
31	145	弥SI33	Ⅱ	15423	浅鉢	底	底8.6	丁寧なヘラ磨ナデ	丁寧なヘラ磨ナデ	－	にぶい黄橙	普通	○	○						○	底：ヘラミガキ
31	146	E26-27	Ⅱb、Ⅲ	20633	浅鉢	底	底8.2	丁寧なナデ	ナデ	－	橙	普通	○		○	○	○				底：丁寧なナデ
31	147	J30	Ⅱb	27270	浅鉢	底	底9.8	ヘラ磨しミガキ	ヘラミガキ	－	にぶい赤褐 褐灰	良好	○			○		○	○	○	底：丁寧なナデ
31	148	弥SI15	①	7200	浅鉢	底	－	ヘラナデ	ナデ	－	にぶい橙 暗灰黄	普通	○				○			○	底：ナデ
31	149	E32	Ⅱb	16663	浅鉢	底	底9.8	－	ナデ	－	にぶい橙 褐灰	良好	○		○	○	○			○	底：圧痕→ナデ
31	150	C50	Ⅱa	－	浅鉢	底	底8.8	ナデ	ナデ	－	にぶい褐	良好	○		○	○	○			○	底：ナデ、アンペラ状圧痕
31	151	E26	Ⅱb	19863	浅鉢	底	底11.6	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙 灰黄褐	良好	○		○	○	○			○	コゲ、底：本葉痕
31	152	弥SI26 G43	Ⅱb、Ⅲ	12612 他	浅鉢	底	底7.6	丁寧なナデ	ヘラミガキ	－	にぶい赤褐 黒	普通	○		○	○	○				コゲ 底：丁寧なナデ
31	153	F32	Ⅱa	16767	浅鉢	底	底9.2	ナデ	ナデ	－	橙 赤灰	普通	○		○	○				○	コゲ 底：本葉痕
31	154	F30	Ⅱb	37357	浅鉢	底	底9.2	横ナデ	丁寧なナデ	－	橙 赤黒	普通	○			○	○				底：本葉痕
31	155	E33	Ⅱb	16361	浅鉢	底	底9.2	条痕	ナデ	－	橙 にぶい黄橙	良好	○		○	○		○	○	○	底：圧痕
31	156	G31·G29	Ⅱb Ⅱa	30520 他	浅鉢	底	底9.8	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	黒褐	普通	○		○	○				○	スス、コゲ 底：本葉痕、圧痕
31	157	F·G32	Ⅱa Ⅱa	11306 他	有付鉢	脚台	底11.4	ヘラ磨しミガキ	ヘラ磨しミガキ	三角突帯	にぶい黄橙 黒	良好	○	○		○	○	○	○	○	有付面：横ナデ 脚台高：4.5
31	158	F32	Ⅱb	16871	有付鉢	脚台	底9.0	ヘラ横ナデ	丁寧な横ナデ	円環、沈線、突帯	にぶい赤褐 黒褐	普通	○	○		○		○			コゲ
31	159	D25	Ⅰ	18424	有付鉢	脚台	－	ヘラ磨ナデ	ヘラミガキ	－	橙 にぶい橙	普通	○	○	○	○	○			○	スス、雲母、底：圧痕
31	160	D27	Ⅱa	21990	有付鉢	脚台	底9.0	ナデ	ナデ	－	にぶい橙 黒	良好	○		○	○					コゲ、底：本葉痕 脚台高：1.5
31	161	F28	Ⅱ	23328	有付鉢	脚台	底5.4	ナデ	ヘラミガキ	－	明赤褐 赤黒	良好	○		○	○				○	脚台高：0.9
32	162	I36	Ⅱa	29544	まり	口縁～胴	口19.4	ナデ	ナデ	－	灰黄褐 黒	良好				○				○	スス、雲母
32	163	I29	Ⅱa	29662	まり	口縁～胴	口11.2	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	灰褐 褐灰	良好				○			○	○	－
32	164	F42	Ⅱb	－	まり	口縁	－	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	－	黒 黒褐	良好	○			○			○		－
32	165	E42	Ⅱa	9948	まり	口縁	口15.2	ナデ	ナデ	－	褐 黄褐	良好	○		○	○		○	○	○	粗砂質土
32	166	G26	Ⅱa	21689	まり	口縁	－	ミガキ	ナデ	1条凹線	にぶい褐～黒褐	普通	○		○		○	○			－
32	167	J22	Ⅱ	26223 他	小型鉢	口縁～底 口11.8	底7.4	ヘラ磨しミガキ	鐘状ナデ	－	にぶい褐、褐灰	普通	○		○		○			○	器高4.3cm、底：ミガキ
32	168	G44 弥SI26	①	13429	鉢	完形	－	粗い横・縦鐘状ハケナデ	横ナデ	－	黒褐 にぶい赤褐、黒褐	良好				○	○				スス、雲母
33	169	E41	Ⅱb	11058	鉢	口縁	－	横ナデ	ナデ	－	黒褐	良好			○	○					雲母
33	170	D49	Ⅱ	－	鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	－	褐灰 にぶい黄橙	普通	○	○		○	○			○	－
33	171	K52 弥SI5	Ⅱ・床直	2171 他	鉢	口縁	－	横ナデ	丁寧な横ナデ	－	浅黄 にぶい黄橙	普通	○	○	○		○				172と同一個体、スス
33	172	H53	Ⅱ	5739 他	鉢	口縁～胴	－	横ナデ	丁寧な横ナデ	－	浅黄 橙、黒褐	良好	○	○	○		○				171と同一個体、スス、コゲ、輝石、底：編布痕
33	173	SK3	②	6639	鉢	不明	－	編布痕	丁寧なナデ	－	にぶい赤褐 黒	良好	○		○	○					コゲ、底：編布痕
33	174	L52	Ⅲ	12411	鉢	不明	－	編布痕	丁寧なナデ	－	にぶい橙 黒褐	良好	○	○	○	○		○		○	スス、コゲ、底：編布痕
33	175	J36	Ⅱb	29270	鉢	不明	－	編布痕	ナデ	－	にぶい橙 にぶい黄褐	良好	○		○	○					底：編布痕
33	176	L35	Ⅱa	33093	鉢	不明	－	編布痕	ナデ	－	にぶい橙 褐灰	良好	○		○	○				○	スス、底：編布痕
33	177	F31	Ⅱa	40103 他	円盤状土製品	不明	－	ナデ	ミガキ	円孔2個	にぶい橙 黒褐	普通	○		○	○				○	径9.0cm 孔径0.7cm
33	178	H30	Ⅱa	33436	円盤状土製品	完形	－	横ナデ	横ナデ	周辺研磨	黒褐 褐灰	良好	○	○	○	○				○	径2.8cm、雲母
33	179	I36	Ⅱa	29177	円盤状土製品	完形	－	－	－	周辺研磨	灰褐 灰黄褐	良好	○	○	○	○				○	径4.5cm

第２節　弥生時代の調査

１　概要

第２地点では広い範囲で弥生時代早期・前期の土器・石器が出土し，中期の遺構・遺物が発見された。

遺構としては住居・土坑・溝状遺構などから成る集落跡と，円形周溝墓や土坑墓などから成る墓跡とが検出された。この地点は南北から延びてくる谷によって大きく３つの平坦地に分かれている。

東側の平坦地はＤ－40区からＩ－44区以東の範囲にあたり，北東隅のＤ－51区付近に最高所があり，ゆるやかに南西方向に下降し，45・46区付近からは逆に西側へ上昇している。南東方向へは舌状に平坦地が伸びており，調査地内で終結している。

ここでは29軒の竪穴住居跡が検出されたが，土坑は６基と少ない。住居は大規模な円形住居と，小規模の方形住居がある。円形住居の柱穴は，径も大きく深い。建て替えの痕跡もみられ，円形の周囲や中央部に土坑を有するものもある。方形住居の多くは主柱穴が２本柱で，その対面に土坑を有する。ベッド状の高まりを片側あるいは三方に有するものや，多くの柱穴を有する特異なものもある。南側へ降りるＨ－45区の谷頭部分では溝状遺構が１条検出されている。

東側よりやや高い地形にある中央の平坦地は，西側に比高２ｍほどの深い谷があり，全体的に東側にやや下降している。12軒の竪穴住居跡と土坑７基が検出された。円形住居が１軒，方形住居が11軒あり，規模・柱穴構造は東側平坦地と同じである。この中には壁に棚状の掘り込みを有するものもある。方形周溝墓１基もある。

西側の平坦地は西側の谷へ向かって下降し，東側は24～28区で谷へ向かって急下降している。４軒の竪穴住居と多くの土坑が検出されている。この地点には墓坑もあることから，これらの土坑は生活遺構なのか，墓坑なのか性格がつかみにくい。

墓は西側の平坦地，その中でも東側25～27区の高い屋根状地点に多くが所在している。墓の形状には大きく３種がある。土坑のまわりを円形あるいは方形に溝が巡る周溝墓と，方形の土坑墓，方形あるいは楕円形の竪坑を掘り込み，その長軸方向から下部に横方向の穴を掘る形状の墓である。

周溝墓と思われる遺構はあわせて５基あり，円形にまわるものが３基と，方形を呈するものが２基ある。このうち中央に主体部を有するものは１基で，他に周溝から供献土器の出土したものが１基ある。ほかの３基は主体部がなく，供献土器も出土してない。東端の53区，中央の42区，西側の最高地27区，西端の22区と所在場所は散在している。

方形の土坑墓は25～27区にある高い所，あるいはそこから西方向へ下る傾斜地にあり，東西方向に列状に並んでいるようにもみえる。土坑内から鉄鏃・玉などの副葬品とも思える共伴資料が出土したのは４基だけで，出土品がない土坑については，墓かどうかの区別もつきにくい。

竪坑の床に横穴のある土坑は，最高所の南西斜面にあたる24～27区付近で多く検出されたが，出土品がないため具体的所属時期が不明である。

29・30区の谷部でも４基の土坑が検出された。

これらの他に11棟の掘立柱建物も検出されているが，時期を示す出土遺物がなく，埋土がやわらかいものや，色の薄いものがあることなどから今回は時期不明の遺構として第４節で扱った。

谷斜面を主として遺構外から多くの土器・石器などが出土している。

土器には早期から中期のものまで多種ある。早期の突帯文土器は時期として前期，あるいは縄文時代晩期との区別がしにくいため，突帯文土器として一緒に扱い，前期末と区別できるもののみを前期とした。突帯文土器は甕・鉢・壺などがあり，それぞれに器形の違いがある。甕は屈曲するもの，砲弾形のもの，突帯が２条のもの，１条のもの，刻目のないもの，あるもの，口縁端にあるもの，やや下にあるものなど多くの種類がある。壺には大型のもの，小型のもの，丹塗りのもの，黒色暗文のもの，肩部に沈線文のあるものなどがある。

中期は入来Ⅱ式・山ノ口Ⅰ式・山ノ口Ⅱ式等の甕・壺・蓋などがある。それぞれの器種には器形・調整などに差異がある。これらに混ざって東九州系の中溝式・中九州系の黒髪式土器や朝鮮半島系の無文土器を模した土器などもある。

突帯文土器や中期の土器に伴って打製石斧・磨製石斧・打製石鏃・石包丁・石皿・敲石・磨石・砥石等の石器，軽石製品・石剣・管玉等の石製品，土製勾玉・紡錘車等の土製品などが出土している。

２　早期・前期

遺構は検出されなかったが，多くの突帯文土器やそれに伴うと思われる石器・土製品などが出土している。しかし，突帯文土器を細分することが難しく，石器もこの時期と中期前半のものとを分別することは困難である。そのため，ここでは突帯文土器は器形・突帯の貼り付け位置・突帯の数などの形式ごとに分けて紹介した。なお，前期後半の土器とわかるものについては分けて取りあげた。石器についても早～中期のものを細かく分けることができないため，遺構外出土のものについては中期の項で紹介することとした。

(1) 突帯文土器

器種として甕形土器・鉢形土器・鍋形土器・壺形土器・土製品などがある。甕形土器・鉢形土器・鍋形土器などはいずれも口縁部や体部に突帯がある。突帯には刻み目のあるものが多い。

甕形土器

いずれも突帯があるが，刻み目を有するものとないものとに大きく分かれる。突帯は口縁付近と体部上半の2か所に突帯のあるものと，口縁付近のみにあるものとがある。また，体部上半で内側に屈曲するタイプと，まっすぐ伸びる砲弾形のものとがある。

無刻目突帯文（第34・35図180～200）

口縁部や体部に三角突帯文のある深鉢である。

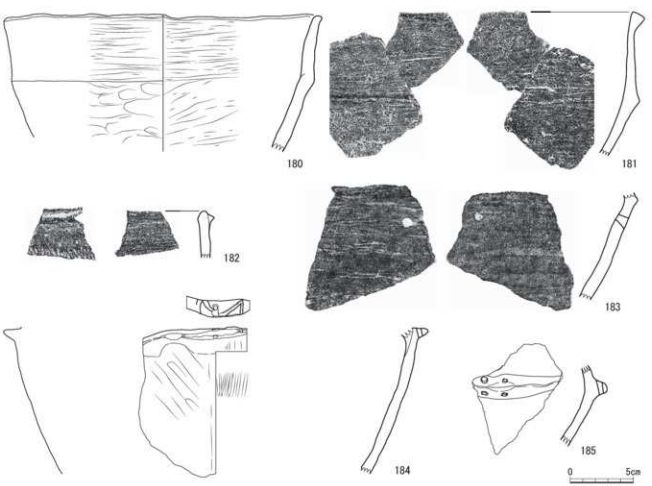
180は口縁端を外へやや張り出させているが，突帯は貼り付けていない。体部は外へ開きながら立ち上がり，上半で内側へ屈曲し，外反気味にまっすぐ立ち上がっている。口縁直径は25cmである。外面は横方向あるいは右下がりの粗いナデ，内面は横方向のナデ整形で，外面にススが付着している。181は体部中央で屈曲し，口縁端と体部に突帯文のある深鉢である。内外ともナデ整形である。182は内傾する口縁部で，口縁端の少し下に三角突帯が巡っている。

183～185は体部上半で屈曲する器形の，屈曲部より下の破片である。183は内外とも横ナデ仕上げで，外側から内側へ穿ったもみ切り補修孔がみられる。184と185は突帯に縦位の穿孔がみられる。184は最大径が32cmほどで，穿孔部分の上に幾何学文が施されている。185は2個の穿孔がある。

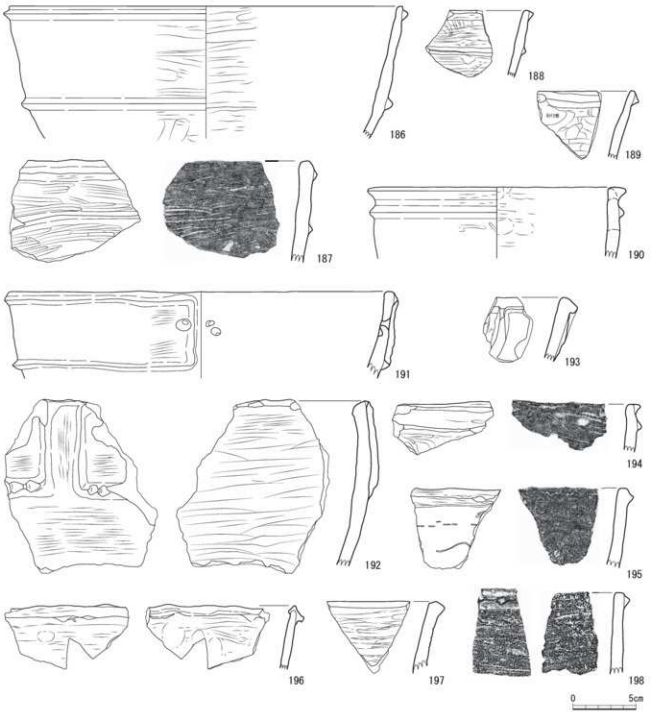
186～192は砲弾形の深鉢で，186～191は口縁端のやや下部に突帯がある。186～188は2条甕である。186は口縁直径が34cmあり，内外とも横ナデで仕上げている。187は186に比べ，突帯間の幅が狭い。188も2条甕だが，上の突帯は口縁端に貼り付けてある。

189は口縁端に突帯のある1条甕で，外面に砂粒が付着している。190・194は2条甕で，突帯間の幅は狭い。190は口径が20.4cmで，分厚いつくりである。内外とも丁寧なナデ調整だが，内面には輪積み痕跡が残っている。194の口縁端はやや波状を呈し，外面調整は丁寧である。

191・192は矩形の突帯で，192は下部の突帯に爪形の刻みが付される。191は口縁直径が30.6cmで，口縁近く



第34図　突帯文土器（1）



第 35 図　突帯文土器（2）

に内外から補修孔が穿たれているが，そのほかに内面に穿孔途中の穴がある。

193 は口縁端に三角突帯が貼り付けられ，そこから下へ，やや直に「ノ」の字状の三角突帯が貼り付けてある。195～198 は 1 条甕である。195 は口縁部がやや波状を呈し，横ナデ調整だが，外面には波状を呈する沈線や浅い押圧痕などがみえる。

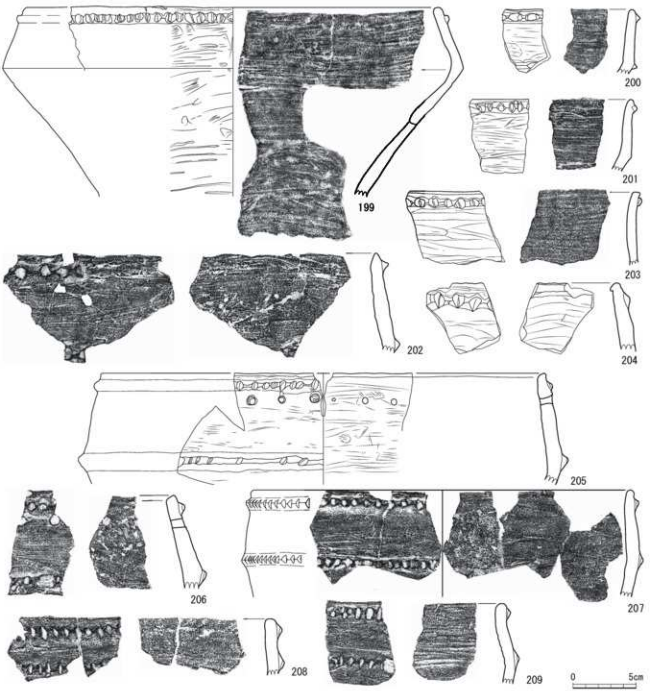
刻目突帯文（第 36～52 図 201～399）

199～224 は口縁のやや下部に突帯が貼り付けられるものである。

199～213 は屈曲する器形で 199・201 は 1 条突帯で，突帯には巻貝押圧がみられる。199 は口縁直径が 32.8cm で，胴部上半で強く屈曲して端部へ向かっている。内外とも横方向の貝殻条痕調整であるが，外面はそのあとナデ仕上げを行っている。200・202～209 は 2 条突帯である。200・203 は直に近く立ち上がり，203 の突帯は巻貝押圧である。ともに横方向へラナデ仕上げだが 203 の内面は貝殻条痕で調整している。202 は硬質に焼けてい

る。204は平担な突帯の上に押圧文がみられる。口縁内面は内にややとび出ている。205は，口縁下の突帯下に孔列文がある。207は口縁直径が30.3cmで，内外とも横ナデで仕上げている。突帯に施される刻み幅は，胴部のほうが口縁部より狭い。208は2条甕だが突帯間の幅は狭い。209の内面調整は条痕風の粗いナデである。210・211はヘラ切り，212は巻貝押圧，213は爪形押圧が突帯上に付される。213の突帯は細い。調整は丁寧なものが多いが，211だけはやや粗い。

214～224は甕弾形の器形である。214の口縁端にはこぶ状突起が貼り付けられ，頂上から刺突文が付されている。215は口径20.8cmで，口縁端の下に上向きの高い台形状の突帯が貼り付けられ，その上にヘラ刻みが施されている。216の口縁端は細くつまみ上げて，突帯は細く，巻貝押圧が施されている。217の口縁端は外へつまみ上げており，三角突帯には爪形の押圧が刻まれている。218は2条の突帯があるが，口縁下の突帯は扁平である。刻みはともに板状工具を垂直に突き刺したあと右方向に



第36図　突帯文土器（3）

かき取るように動かしている。外面調整は丁寧にナデているが，内面調整は条痕状の粗い横ナデである。219～224は同じような器形だが，端部は220が丸みを帯びているのに対し，他は矩形を呈している。突帯は219・220が三角形で，他は台形状である。219・220は板状のものの押圧であるのに対して，221～224は巻貝押圧である。

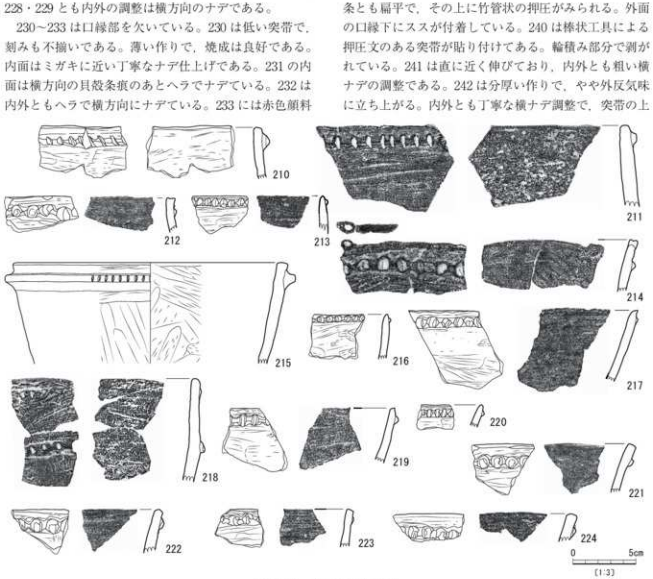
225～341は口縁端に刻目突帯のあるものだが，そこだけ1条のものと，その他に肩部にもある2条甕と呼ばれるものとがある。

225～286は2条甕で，このうち225～259は胴部上半で屈曲するものである。

225～233は板状工具を押して引き上げる押圧痕のある屈曲する2条甕である。225は胴部に比べて口縁部に細くなっており，焼成度は良く硬質である。胴下半外面にはススが付着している。226の突帯は幅狭で低い。内外面ともヘラ状のもので，横方向に丁寧にナデている。外面にススが付着している。227の屈曲は緩やかで，228・229とも内外の調整は横方向のナデである。

230～233は口縁部を欠いている。230は低い突帯で，刻みも不揃いである。薄い作りで，焼成は良好である。内面はミガキに近い丁寧なナデ仕上げである。231の内面は横方向の貝殻条痕のあとヘラでナデている。232は内外ともヘラで横方向にナデている。233には赤色顔料が付着しており，屈曲部の上に細沈線の幾何学文が描かれている。

234～243は突帯に押圧のある突帯文である。234は口径34.8cmで，底から外へ開き，屈曲部から外反気味に立ち上がっている。棒状のもので押圧している。浅黄橙色を呈しているが，外面はススにより黒褐色化している。粘土の積み上げがはっきりしており，突帯は低く幅広い。235も同じような器形・突帯の様相をしており，口径は35.8cmである。236は分厚いつくりで，内面調整はミガキに近い丁寧な横ナデであるが，外面調整はやや粗い。三角突帯上には竹管状の押圧が施されている。237の突帯間はやや狭くて薄い作りである。その間に背中合わせのわらび手文と鋸歯状文を細沈線で描いている。口縁端の突帯はややくずれている。238は上下が欠損しているため突帯数など不明だが，237とよく似た左巻きのわらび手文が2条貼り付けられている。239は口径28.0cmとやや小型で，内外とも丁寧なナデ整形である。突帯は2条とも扁平で，その上に竹管状の押圧がみられる。外面の口縁下にススが付着している。240は棒状工具による押圧文のある突帯が貼り付けてある。輪積み部分で剥がれている。241は直に近く伸びており，内外とも粗い横ナデの調整である。242は分厚い作りで，やや外反気味に立ち上がる。内外とも丁寧な横ナデ調整で，突帯の上

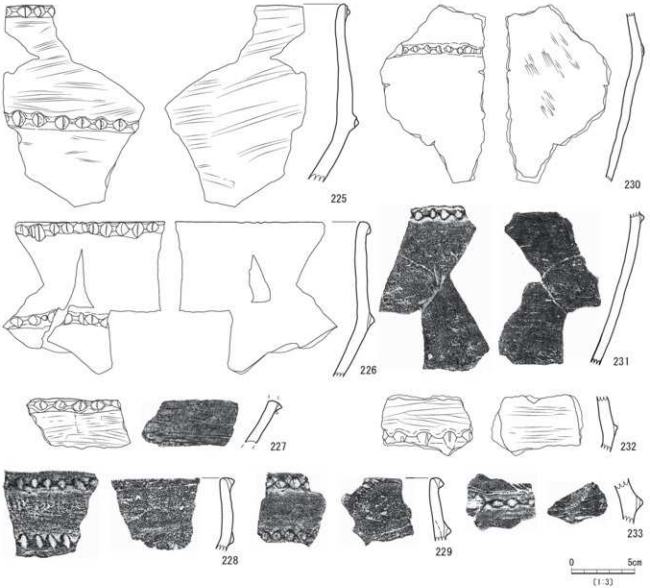


第37図　突帯文土器（4）

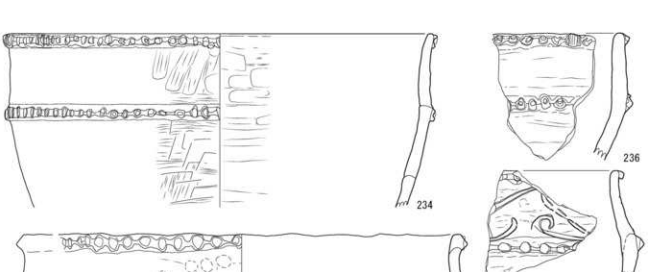
下も丁寧にナデている。押圧は浅くて小さい。243の屈曲部は緩やかに曲がっており，突帯断面はカマボコ状を呈している。内外とも横方向の繊維状ハケナデで仕上げている。

244は口径39.4cmで箇所数は不明だが，口縁端に中央に刺突痕のある環状突起が貼り付けられている。突帯上には竹管状の押圧痕がみられる。口縁端近くに内外から穿った円形の補修孔がある。245は口径21.8cmで，口縁端の突帯は細い。板状工具の押圧痕がみられる。内外とも横方向のヘラナデ調整だが，外面調整は粗い。246はススが付着しており，口縁端近くに円形の補修孔が穿たれている。外表面は磨耗している。247の突帯は口縁端のものが細く低いのに対して，屈曲部のものは幅広く高いという大きな差異がみられる。ともに爪形の押圧刻みである。内外とも横方向の丁寧なナデ整形である。248はともに小さな突帯で，爪形押圧である。混和剤が多く，分厚いつくりである。外面はミガキ調整である。249は胴径36.2cmの大きな深鉢で，屈曲部に断面台形の突帯が貼り付けてある。爪形押圧が施されている。外面下半部にススが付着している。250は胴下半部で，内外から穿たれた補修孔がある。

251～259は屈曲部が緩やかで，突帯にはヘラ状刻みがある。251は口径30.6cmで，薄い作りである。突帯は断面が蒲鉾形で，その上をやや右下がりに刻みを付けている。252は内外とも丁寧にナデて，薄いつくりで，口縁を強く内傾しながら外反させている。口縁端は小さい貼り付け突帯で玉縁状に肥厚している。刻みは右下がりに押し引きのように付けている。253は高い三角突帯が貼り付けられており，内外とも丁寧な横方向のナデ整形である。刻目はほぼ垂直でやや浅い。板状施文具を押して，右側にかきとるように引き上げている。254はやや小型で，屈曲部より下にススが残っている。255も小型



第38図　突帯文土器（5）



第39図　突帯文土器（6）

で，口縁部が短く，丹塗り土器である。256は分厚いつくりで，三角突帯に断面三角形の刻みがほぼ垂直に付けられている。6㎜大の小石も含まれているが，焼きは良い。257は屈曲部より下の破片で，底から外反しながらも直立気味に立ち上がっている。突帯上には左下がりの刻目が施されている。258も屈曲部より下の破片で，補修孔がみられる。ススが付着している。259は大型の土器で，三角突帯上に刻みがある。

260～282は亀弾形2条甕である。260～265は突帯の上に爪形の刻みがある。260は口径25.8㎝で，底から外へ開き，胴部上方で口縁端へ向かいやや内傾し，端部が貼付突帯により外反するようにみえる。胴部上方の突帯は丸みを帯びてしっかりしているが，口縁端のものは丸みを帯びて低い。口縁突帯の下と胴部上半突帯の下に1条ずつ沈線があり，その間には矩形と縦線の文様が施されている。内外とも丁寧にナデられているが，内面と外面下半部は表面の剥落が目立つ。261は薄いつくりで，低い三角突帯が貼り付けてある。外面のナデ方向は左上がりの斜方向である。262も低い貼り付け突帯でやや丸みを帯びている。内外とも横ナデ調整である。263は三角突帯である。264は分厚い作りで，突帯は幅狭の三角突帯である。内外ともナデ調整だが，内面は丁寧である。265は薄いつくりで，焼成度は良好である。三角突帯には巻貝による爪形刻目がある。内外ともナデ整形だが，内面は横方向，外面は下半が縦方向になされている。

266・267は似た器形をしている。内外とも丁寧な横方向のヘラナデだが，267は外面が横方向のヘラナデ，内面が貝殻条痕仕上げである。突帯上の刻みは266が巻貝であるのに対し，267はヘラ刻みである。

268～275は突帯の上に押圧文が施されている。268は口縁直径が24.2㎝で，三角突帯上に竹管状と爪形の2種の深い押圧文が押されている。ほとんどは竹管状である。口唇部の4か所に上からの刺突文がある山形の突起が貼り付けられている。内外とも丁寧なナデ整形だが，内面全体と外面上半は横方向，外面下半は縦方向である。淡橙色を呈するが，外面はススが多く付着し，上半部が黒褐色となり，内面も部分的に黒褐色を呈している。外面の磨滅が目立つ。胎土には石英・長石・白色石・黄白色石などの軽石粒が多く含まれ，中には5～6㎜大の石粒もある。269はまっすぐ伸びており，左下がりの板状工具の押圧である。270は丸みを帯びた器形を呈し，突帯上に棒状のもので押圧している。271は口縁のやや下がった所に矩形の突帯があるもので，その上には巻貝の押圧文が施されている。外面調整は横方向の繊維状ハケナデ，内面調整は横方向の二枚貝条痕である。272はやや外傾し，273はやや内傾している。274の口縁突帯は高いが，胴部突帯は低い。内外面とも剥落が顕著である。275は口縁部がやや外反する器形で，外面は磨滅が目立つ。棒状押圧である。突帯幅は細く，口縁端内面はやや膨らんでいる。

275は口径34㎝と大型で，口縁部は不均整である。内面は剥落・磨耗が目立つ。突帯は幅広で低い。内外とも

第40図　突帯文土器（7）

横方向のナデ整形だが，外面の一部には縦方向の調整痕がある。口縁近くに内外から穿った補修孔がみられる。

276は口縁直径が37.0cmのやや丸みを帯びた器形をしている。胴部の突帯はしっかりした三角突帯だが，口縁端の突帯は低い。口唇部にリボン状突起があり，突起両端はこぶ状高まりがあり，そこには刺突文がある。高まりの間には凹線が引かれる。内外とも粗いナデ整形である。277はまっすぐ伸びる器形で，竹管文押圧のある突帯がある。内外面とも丁寧なナデ整形だが，突帯文は粗いつくりである。278は口縁端内部がやや肥厚し，口縁断面が角張る。右下がりの刻みで，突帯内に内外から円形の補修孔が穿たれている。焼成良好で，外面にはススが付着している。279は波状となる口縁部で，薄いつくりである。口縁端の三角突帯は端部にあるものからやや下がる所に貼り付けられるものとがあり，爪形押圧文が付される。胴部の三角突帯はヘラ切りである。胎土に雲母が含まれている。280は口径が40.3cmで，口縁部がやや内傾している。三角突帯上には棒状工具の押圧が施されている。281はやや内傾する口縁部で，口径が35.5cmである。口唇部にリボン状突起がある。両端のこぶ状突起に刺突文があり，その間には凹線が引かれる。282はまっすぐ伸びる器形をし，口径29.0cmである。薄いつくりで焼成良好である。外面は粗いナデだが，内面はミガキに近い丁寧なナデである。283～295は焼成良好で，幅狭の高めの突帯が貼付される甕形土器である。

283～286は2条甕である。283は口径25.4cmで，やや外反気味にまっすぐ口縁へ開く器形である。突帯間は割合に狭く，高い三角突帯に密に刻目が施されている。内面はミガキに近い丁寧なナデで，外面は縦方向のハケナデである。284も突帯間は狭く，胴部の突帯は幅広いが低い。それぞれに刻目がある。内面は横ナデだが，外面は上半が右下がりのナデ，下半が横方向のケズリである。285・286は2条の突帯がくっつくほど幅狭く並んでいるが，285は上の方が口縁端からやや下がっており，突帯上に爪形の刻みが施されている。286の刻みは浅く，口縁端の方は先端が欠けているため刻みが不明である。

287は胴部のみに無刻目突帯が1条ある。口唇部に上から深い刺突の施される環状突起が貼り付けてある。胎土は7mm大のものも含まれる黄白石・長石・灰石などの入った粗い砂質粘土である。

288は幅広い口唇部の内外に2条の突帯があり，ヘラ状工具による刻みが施される。その間は凹線状になっている。内外とも丁寧なナデ調整である。

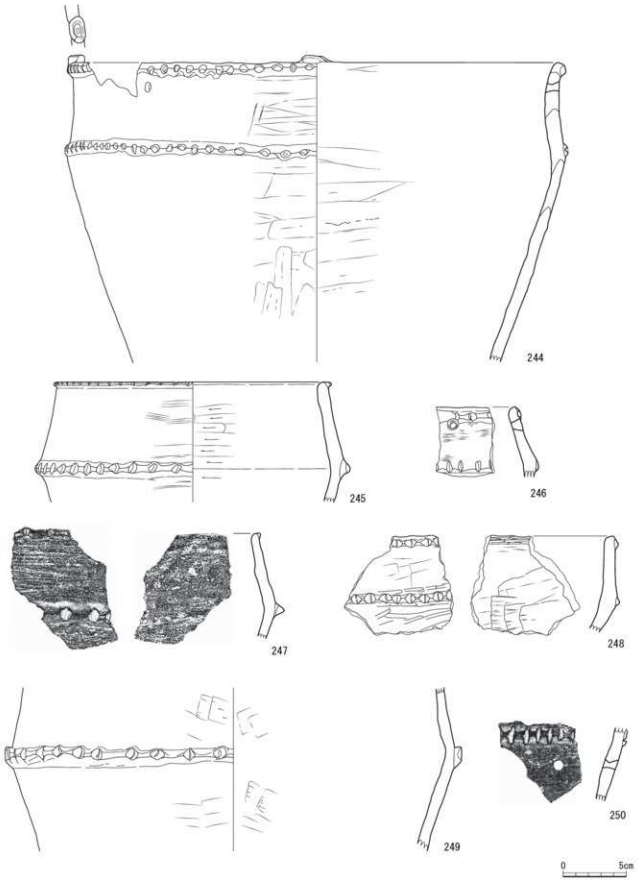
289・290は口縁端より少し下がった所に台形状の高い突帯が貼り付けられ，口唇部と突帯上にヘラ刻みが施されている。やや内傾ぎみの器形をしており，外面にはススが付着している。

291・292は強く内弯する薄いつくりの器形で，口縁端からやや離れた所に高い突帯が貼り付けられる。口唇部と突帯上に刻みが施される。口唇部に山形突起が貼り付けられ，突帯の上と突起部に弧状沈線が引かれる。突帯の下には1条の沈線が引かれ，その上下に2条の鋸歯状を呈する波状文が引かれる。雲母や黄白色石・灰色石・白色石などの細礫を多く含む胎土で，焼成度は良好である。

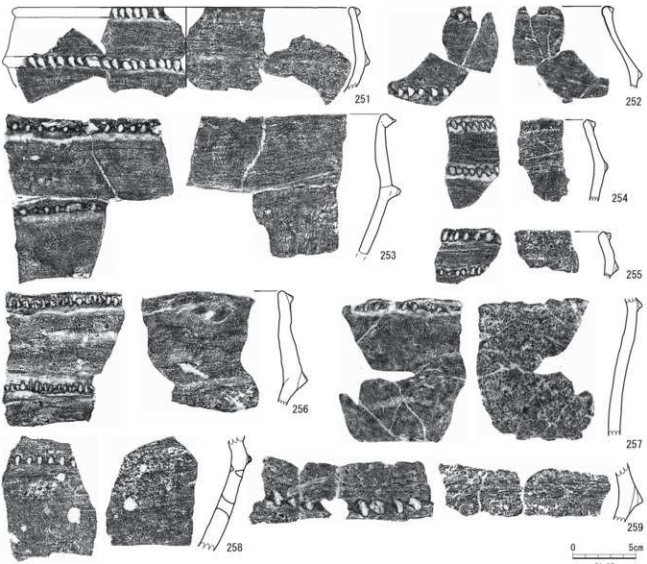
293はやや外傾して立ち上がり，端部が少し内弯している。口縁端に先端の尖った三角突帯が貼り付けられ，そこに巻貝による刻みが施されている。外面にススが付着している。294と295は同一個体と思われるが，口縁端よりやや下に高い三角突帯が貼り付けられ，小さな刻みが施されている。焼成度は良く，外面にススが付着している。

296～341は口縁端近くに1条の突帯が巡る類である。

296～302は三角突帯が口縁端に貼り付けられ，突帯に



第41図　突帯文土器（8）



第42図　突帯文土器（9）

刻目はつかない。

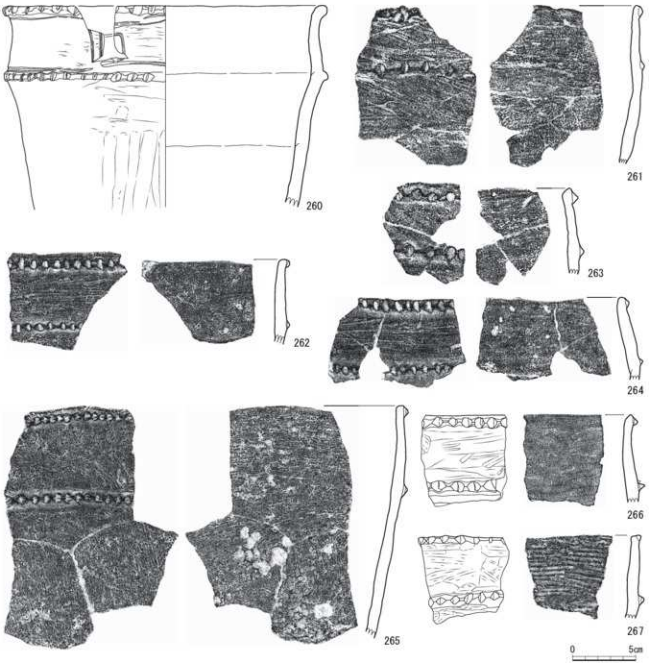
296・297は屈曲甕である。296の口縁端は貼り付け突帯でなく強く曲げているようである。その下は棒状工具で強くナデて，突帯風に見せている。口縁端近くは内側に粘土を貼り付けてから曲げているため，やや分厚くなっている。調整は内外とも粗いナデだが，内面の口縁付近は丁寧である。297は口径22cmで，外面にはススが付着している。

298・299は鉢弾形である。298は口縁端を三角形状に肥厚させている。内面は丁寧な横方向のヘラナデで仕上げているが，外面調整は粗い。口縁部は山形に隆起させている可能性がある。299～301は端部が丸みを帯びて，口縁端に三角突帯が貼り付けられている。301の突帯は小さい。301の調整は丁寧で，外面はミガキである。302は内外とも丁寧なナデ整形である。

303・304は内から外へ穿った孔列土器である。303の口縁端近くは内側が抉れたようになっており，外に小さな三角突帯が貼り付けられ，それにやや間隔を広くして押圧を施している。304は口縁端へ向かってやや細くなっており，先端のややつぶれた三角突帯が貼り付けてある。突帯を貼り付けてから径3mmほどの小さな孔が穿たれている。

305は口縁が内傾しており，屈曲部付近は分厚くなっている。口縁端の少し下に三角突帯が貼り付けてあり，板状施文具による押圧が施されている。内面は条痕様の横ナデだが，外面は丁寧に横方向にナデている。にぶい赤褐色の色調だが，外面はススが付着し，黒褐色を呈している。

306～311は鉢弾形を呈する器形で，口縁端に三角突帯が貼り付けられる。306は口縁端からやや下がった所に幅広の扁平な突帯が貼り付けられ，押圧文が付される。口縁端に近くやや薄くなっており，端部は丸みをもった

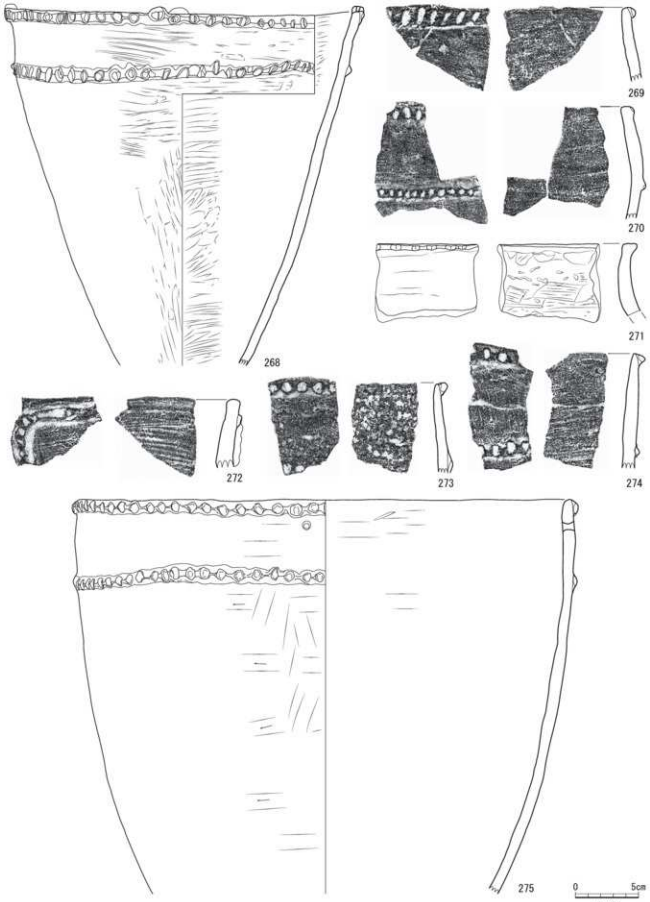


第 43 図　突帯文土器（10）

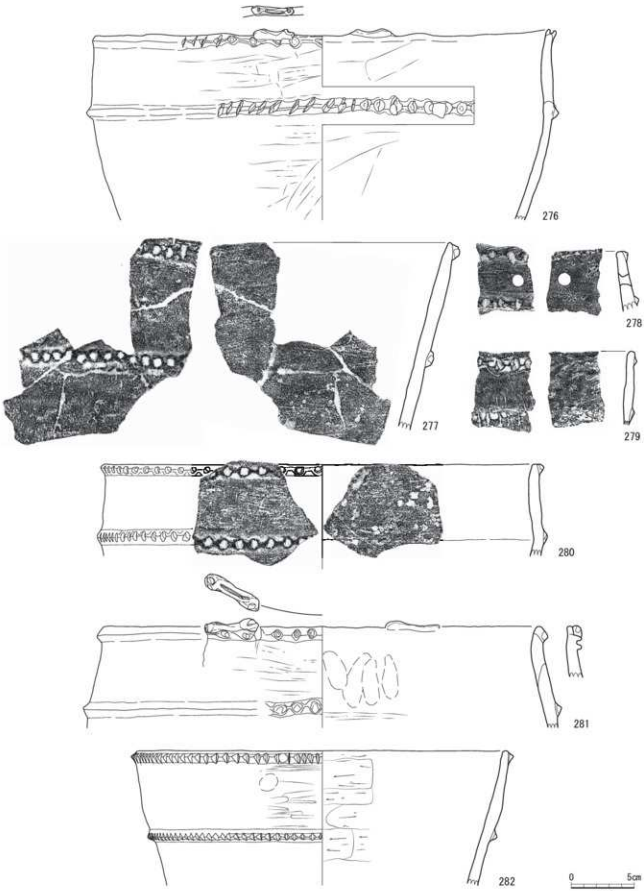
矩形に仕上げている。内外とも丁寧な調整である。307 も口縁端近くがやや薄くなり，端部に三角突帯が貼り付けられ，押圧文が付される。外面にはススが付着し，内面調整は丁寧である。308 は口径 31.6cmと大型で，口縁端近くに三角突帯が付される。突帯上には爪形の押圧がやや左下がり気味に施される。外面にはススが多く付着している。309 は口縁端に三角突帯が貼り付けられ，その上に押圧が付されている。途中に口縁端内面から縦方向に帯状の突帯が貼り付けられている。口縁部に孔径 1cmの補修孔が外から穿たれている。内面は縦方向のヘラミガキ，外面は口縁端近くが横方向，下方が縦方向の繊維状ハケナデで仕上げている。内面は剥脱が広範囲にみられ，外面の突帯も一部剥脱している。310 の突帯は丸みを帯びた矩形で，その上に左下がりの刻みがみられる。311 は内外とも横方向の丁寧なヘラナデ仕上げだが，外はヘラミガキに近い。

312・313 は薄いつくりで，突帯が口縁端よりやや下にある類である。312 の口縁端内面はやや内側に張り出しており，突帯の刻みは左下がりに浅く施してある。313 の突帯は台形状を呈している。

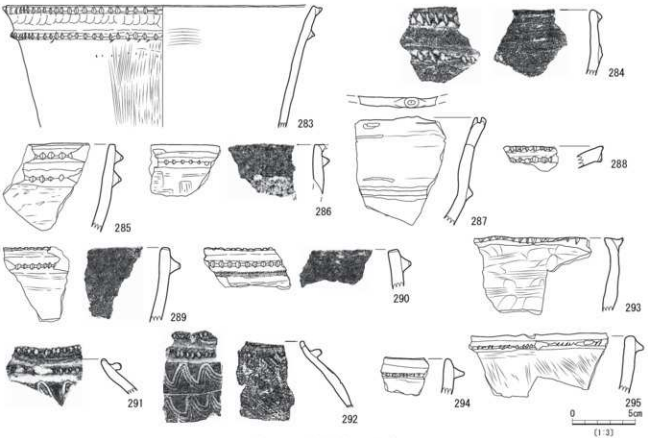
314 は口径 18.7cmの小型深鉢で屈曲形である。屈曲部は鋭くなく丸みを帯びている。突帯には爪形の押圧が右



第 44 図　突帯文土器（11）



第 45 図　突帯文土器（12）



第46図　突帯文土器（13）

下がりに施され，内面調整は丁寧である。外面にはススが付着している。315は口縁端に向かって薄くなっていく器形で，突帯には左下がりの爪形押圧痕がみえる。焼成は良く，外面にはススが付着している。316は口縁端近くの外面を削って薄くし，そこに三角突帯を貼り付けている。突帯の上には爪形の押圧が施されている。外面にはススが付着している。317は口縁端を矩形に作っており，突帯は低い。突帯上には爪形の押圧が施されている。横方向の調整だが，内面がより丁寧な仕上げである。318は口縁端が尖り気味で，突帯上には棒状工具の押圧がみられる。319はやや内傾する器形で，口縁端に低い突帯が貼り付けられている。内外とも横方向の繊維状ハケナデで仕上げているが，部分的に条痕様の痕跡がみられる。内面は剥脱が広範囲にみられる。320の突帯は略三角形で，その上に竹管状押圧がみられる。口縁端近くに外から穿った径7㎜ほどの円形補修孔がある。321は全体的に風化して軽い感じのもので，突帯上には左下がりのヘラ状押圧が施されている。322は丸みを帯びた突帯がやや下向きに押され，その上に板状工具で右下がりにやや深く押圧されている。内面は横方向の繊維状ハケナデだが，外面は右下がり貝殻条痕で仕上げている。323の外面はやや凸凹しており，仕上げが内面に比べて雑である。324は薄いつくりで，口縁端がやや外反している。口縁端に低く幅狭の突帯を貼り付け，線描きの刻みが施されている。その下には三角突帯を弧状に貼り付けており，その上には線描きの刻みがある。325は口縁端が細くなる作りで，口縁端の突帯を途中で垂下させ，胴部の突帯とつなげている。突帯の上には左下がりに楕円状の刻みが付される。

326はやや薄いつくりで硬質に焼けている。小型の丸みを帯びた器形である。突帯も細い粘土紐を用いているが，下面の押さえ調整が不充分で，貼付痕がそのまま残っている所もある。爪状の刻みが直に施されている。縦方向のヘラナデ調整だが，内面は丁寧である。327も同じような器形で，硬質に焼けている。細い三角突帯で，爪状刻みが直に押されている。328は口縁端が矩形を呈し，端部からやや離れて下部に高い突帯が貼り付けられ，刻目は細かく浅い。329は内面を外へ突き出しているため口縁端近くが薄くなっており，端部近くに高い突帯が貼り付けてある。突帯には深く押圧されている。内外とも縦方向にミガキに近い丁寧なナデ調整で，外面にはススが付着している。330は薄いつくりで硬質に焼け，やや外反気味である。口縁端には山形突起の所がある。口縁端より少し下に三角突帯があるが，突起部にも同じような突帯が貼り付けられている。突帯の上には垂直ないしは右下がりの爪状刻みが施されている。突帯は口縁端

第 47 図　突帯文土器（14）

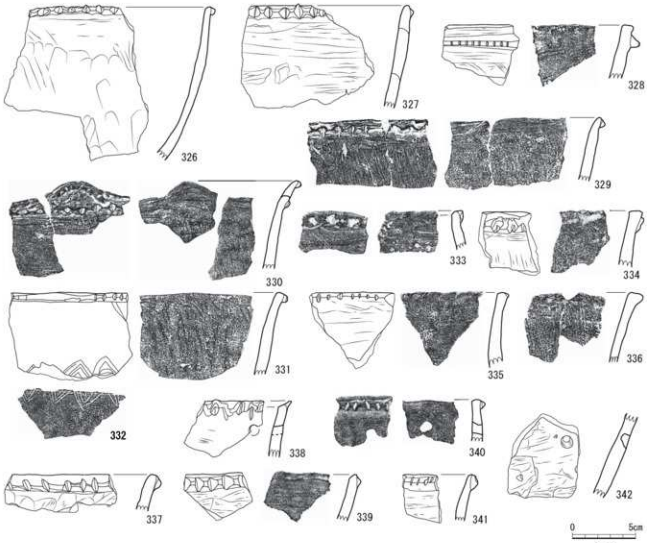
を巡らしたあと，山形突起に貼り付けている。内外とも丁寧なナデ整形であるが，外面は横方向，内面は右下がり方向である。331 も硬質に焼けたもので，口縁端に丸みを帯びた小さな突帯がある。突帯には縦方向のヘラ刻みがあるが，途中で切れている。これが当時の所作か，調査時のガジリかはっきりしない。胴上半部には細沈線で２～４段に重なる鋸歯文があり，突帯下の一部にも沈線文がみられる。内外とも縦方向のヘラミガキで仕上げている。332 も同一個体と思われ，鋸歯文がある。333 は口縁端外面をやや細くして，そこに断面蒲鉾形の太い突帯を貼り付けている。突帯の下２か所に右下がりの２～３条の平行細沈線が引かれている。内外面とも丁寧な横方向ナデ整形である。334 は幅広の台形状突帯が貼り付けてあり，口縁端内側はやや張り出している。335 は口縁端近くが細くなる器形で，やや外反する。低い突帯で，刻目も小さい。336 は細い作りで，口縁端に三角突帯が貼り付けられている。突帯の下に２条からなる縦方向細沈線が２列ある。磨耗が激しい破片のためはっきりしないが，外面調整は縦方向の幅広ハケナデである。337 は蒲鉾状突帯が貼り付けられ，右下がりの板状押圧が施される。外面にはススが付着している。338 は上向きに三角突帯が貼り付けられ，板状押圧が施される。径８㎜ほどの円形補修孔がある。内外とも横方向の丁寧なナデ整形である。339 の口縁端は断面三角形状で，三角

第 48 図　突帯文土器（15）

突帯上にはヘラによる爪形押圧文がある。340 にも補修孔があり，突帯は高い。341 は大きめの三角突帯が貼り付けてあり，細長の小さい刻みが施されている。342 は屈曲甕の下半部で，外面の下の方から補修孔を穿とうとしているが，中途で止めている。

突帯文土器と思われる底部は多種で，底径は 4.6cmの小さいものから 19.0cmの大きなものまであり，立ち上がり部分はまっすぐ胴部へ移るものや，くびれるものなどがある。底に草木の葉や布などの圧痕を残すものと，丁寧にナデているものなどの違いもある。

343～352 は底からあまりくびれないで立ち上がる底である。343～350 は底径が 7 cm以下のものである。343 は底径 4.6cmの小さなもので，外面・底とも丁寧にナデている。ややくびれて立ち上がる。344 も底径 6.0cmと小さく直に近く立ち上がっている。346 は底から外傾して立ち上がり，底は繊維質ハケナデである。348 は薄いつくりで，外面は粗い指などの縦ナデである。底はやや歪で，底径が 6.5～7.0cmである。底には 2 枚の木葉や粒状の痕跡が残っている。345 の外面底付近は磨耗が，内面は剥脱が目立ち，外にはススが付着している。347 の底はやや歪な形状を呈しているが，調整は丁寧で，内面はヘラミガキで仕上げている。底面もナデており，ややあげ底となっているが，中央が膨らんだようになっている。349 もややあげ底で丸みをもって外傾しながら立ち



第 49 図　突帯文土器（16）

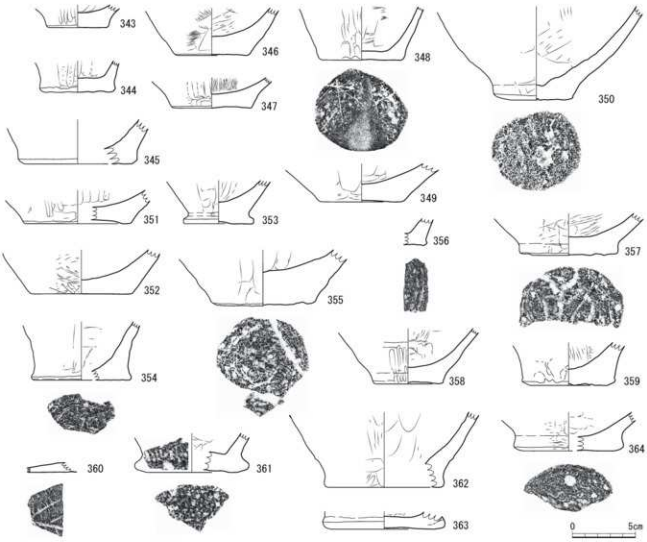
上がっている。内外とも丁寧な縦ナデで，特に外面はミガキに近い丁寧なナデ調整である。350 は全体的に磨滅が目立ち，底は丸みを帯びている。底には網代圧痕が残り，布痕もみえる。

351～380 は底径が 7.0～10.0cm の中型である。器形や底調整などは小型のもの同様，多種である。

351 は上げ底となり，外面は丁寧な縦ナデ調整である。352 は底を丁寧にナデている。外面は横ナデだが，立ち上がり部分は横方向のヘラケズリ調整である。

353～380 は底が外へやや張り出すものである。

353 は底径 5.4cm と小型のもので，底が強く外へ張り出している。中央に近い部分がやや凹んでおり，外面にススが付着している。354 は底から少し凹んで，直立気味に外傾斜している。底に粒状圧痕がある。355 は分厚い底で，くびれは弱い。底には筋状や粒状の圧痕が多く残り，凸凹している。356 の底には同心円状の圧痕が残っている。357 は円盤状貼り付け風の底で，外面調整は粗い。底部には筋状の圧痕が残っており，丸底気味になっている。358 はやや薄いつくりで，内外とも丁寧なヘラによる縦ナデである。張り出しは弱い。359 は底が剥落しており，凸凹している。内面にはコゲが付着している。360 は焼成度の良い薄手の底で，底に木葉痕が残っている。361 は外に強く張り出す底で，網代様の圧痕が残っている。362 は内外ナデ調整である。363・364 は外へ丸く張り出す底で，内外・底とも丁寧にナデている。364 は底に大きな圧痕がある。365 は歪な形をした底で，平らな底からまっすぐ胴部へ伸びている。366 はややあげ底だが，外へ開きながら伸びる器形で，内外とも縦ナデで調整している。367・368 は底から丸く立ち上がり，外反しながら口縁へ向かう。367 の底には布痕がみられる。369 は内外とも磨耗の激しい底部で，ややあげ底となっている。底部外縁に胴部を乗せる器形で，胴部は薄いつくりとなっている。370 は丸みをもった底で，複数枚の木の葉を敷いている。胴部は薄い。371 は

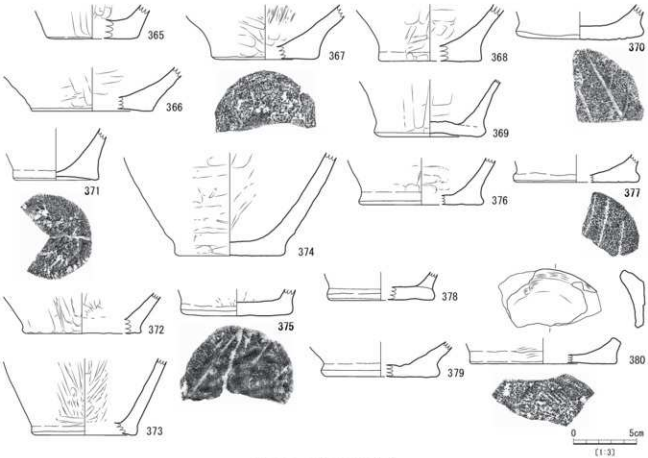


第50図　突帯文土器（17）

底径6.5cmの小型甕で，底には複数枚の木葉痕が残っている。中央部はだいぶ薄くなっている。372は安定した平底で，残存部でも小さな葉が2枚みえることから複数枚の木の葉が敷かれていたようである。373は内外とも斜方向のナデ調整で，外面は丁寧にナデである。底もナデ調整で，やや薄く，まっすぐ伸びる器形である。374は底部近くで強くくびれている。内面・底は丁寧にナデているが，外面は粗い横ナデである。胎土には8mm大の石粒もあり，雲母も含まれている。375は底から直立気味に立ち上がり，底には木葉痕がある。376は外面に剥脱の目立つ破片で，内面にコゲが付着している。377～379は外に膨らむ破片で，377の底には複数の木の葉圧痕がある。378は磨滅しており，内面は剥落が多い。底には粒状圧痕が多く付いている。380は底径11.6cmであるが，底には網代・布目などの圧痕などがある。胴部割れ部は平滑に磨かれており，2次的に使用された可能性がある。

381～385は平底から外へ開きながらまっすぐ立ち上がる底である。381・382は薄いつくりで，381の外面は丁寧な縦方向のヘラナデで仕上げ，布痕が底に残っている。382は底径が11cmと大きなもので，ややあげ底となっている。磨滅が広範囲にあり，底には木の葉などの圧痕があるが，はっきりしない。383は立ち上がりの角度が強く，内外ともナデ整形だが磨耗が目立つ。底には粒状のものや布などの圧痕がある。384は底径15.0cmと大型のものだが，内面ヘラミガキ，外面丁寧なナデと丁寧な調整である。内面にコゲが付着している。385も底径11.0cmと大きく，丸みをもって立ち上がる。内面は丁寧なナデ調整で，内面の底中央はやや膨らんでいる。底には編布の圧痕がみられる。経糸幅は0.6cm～1.2cm，緯糸は2cmの間に11本ほどある。

386～399は外へ張り出すもので，張り出し度の弱いも



第 51 図　突帯文土器（18）

のと強いものとがある。386 は内底部がやや盛り上がっており，胴部が丸みをもって立ち上がっている。底を高台様にしようとしているが完成していない。387 は底径 11.6cmと大きいもので，底には筋状の圧痕がみえる。388 も底径 11.2cmと大きく，分厚いものである。底にはアンペラ状のものと布痕が残っている。389 も大きなもので，底に編布の痕跡がみえる。390 は胴部・底とも薄いつくりで，立ち上がり部分の調整は雑である。底には大きな木の葉の圧痕が残っており，ややあげ底となっている。木の葉にはこぶ状突起もある。391 の立ち上がり部はくびれており，内底立ち上がりは直に近い。内外面とも剥落・磨滅が激しい。392 は底径 19.0cmと大きな底だが，胴部は薄いつくりで，底の平面形は楕円形となる。底は丁寧にナデている。コゲ・ススが付着している。393 は丸みを帯びた底で，布目の圧痕がみえる。394 は外へ強く張り出す底で，直に近く立ち上がっている。底には格子状に組んだ網代痕が残り，網代の間には布目がある。その痕跡をナデで平らに調整している。外面は横方向のハケ，内面は斜方向のヘラでナデている。395 は張り出しの弱い破片で，胴下部に外から打ち欠いた径 1.5cmほどの円形孔が穿たれている。

396～399 は外への張り出しが強い。396 は底径 11.2～11.8cmと大きい底で，底に細かい織りの編布痕がみられる。経糸間隔は 0.25cm，緯糸は 2 cmに 18 本ある。剥脱が多く，あげ底となっている。397 は底に大きな木葉痕が残っている。398 は内外とも剥脱が多く，内面は丁寧なナデ仕上げである。コゲが付着している。399 の底は薄く，内面にコゲが付着している。

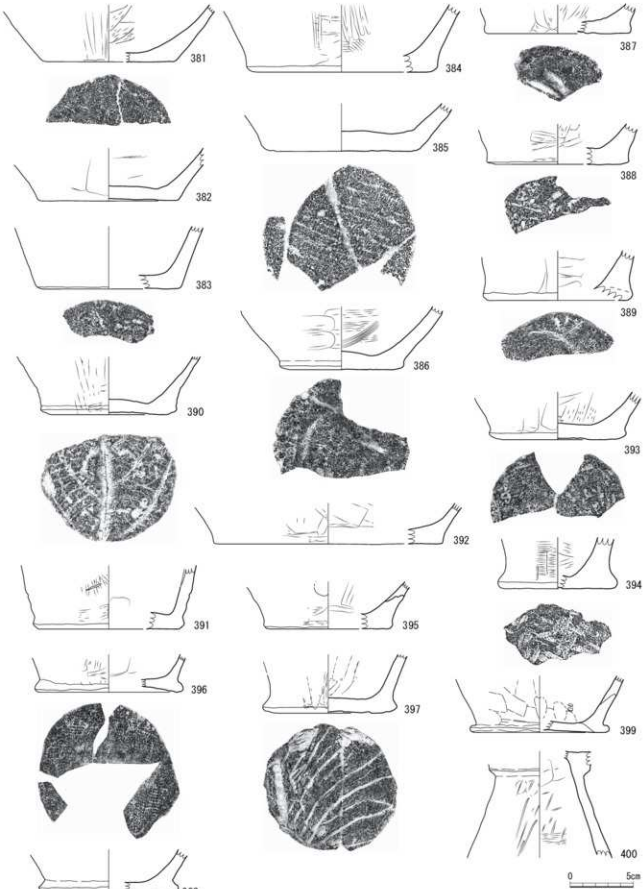
台付鉢形土器（第 52 図 400）

鉢と脚台の接合部から脚台部の破片である。外面から，内面下部にかけて丹塗りがしてある。調整は内外とも粗いハケナデ調整である。鉢と脚貼り付け部の下には三角突帯が貼り付けてある。

鉢形土器（第 53・54 図 401～433）

底から外傾しながら立ち上がり，胴部中ほどで屈曲して内傾する器形で，口縁端に三角突帯が貼り付けられる。

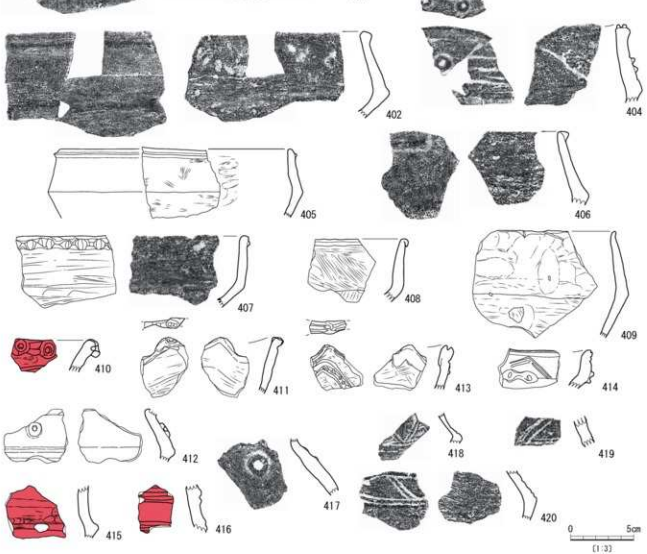
401 は屈曲度が強いもので，口縁端からやや下に無刻目突帯が貼り付けられる。402 は屈曲部が接合部を利用してやや外に張り出しており，口縁端に無刻目突帯が貼り付けられる。内外ともミガキに近い丁寧なナデ整形であり，外面にススが付着している。403 は口縁部が短く，端部に無刻目突帯が貼り付けられる。突帯の下に中央に刺突のある環状浮文が貼り付けられ，その脇に 3 条の横方向細沈線がある。404 も 403 と同じような器形と文様



第 52 図　突帯文土器 (19)

だが，頭部の浮文上の口唇部に２個の環状浮文が貼り付けられている。405 は口径 18.6㎝で，口縁端からやや下がった所に小さな無刻目突帯が貼り付けられている。406 は内傾する口縁部で，端部に三角突帯が貼り付けられている。407・408 は直立する口縁部に突帯が貼り付けられている。407 は口縁部端のやや下に細い突帯が貼り付けられ，押圧の刻みが施される。408 は口縁端に向かって細くなり，端部は外へ折り曲げて玉縁状の口縁となっている。内面は横方向のナデ調整だが，外面は屈曲部から上が斜方向，下が横方向の丁寧なナデ調整である。409 は薄いつくりのもので，端部に向かって細くなり，端部はわずかに外へ反っている。外面にはススが付着している。

410～414 は短い立ち上がりで，口縁端あるいは口縁中ほどに環状浮文が貼り付けられる。410 は丹塗土器で，口縁端に２個の環状浮文が貼り付けられ，その下には横沈線が巡る。411 は山形突起のある口縁部で，突起頂部に２個の小さい刺突文がある。412 は肩部に環状浮文がある。413 は内外を分厚くした山形突起の頂部に刺突文があり，その下には細かい押圧文のある突帯が貼り付けられる硬質の土器である。414 は波状口縁で，口唇部に沈線が，口縁下に２条の鋸歯沈線と２個一体となる環状浮文がある。415 は屈曲部から外反気味に立ち上がる丹塗土器の胴部で，屈曲部の上に浅い凹線が巡る。416 は



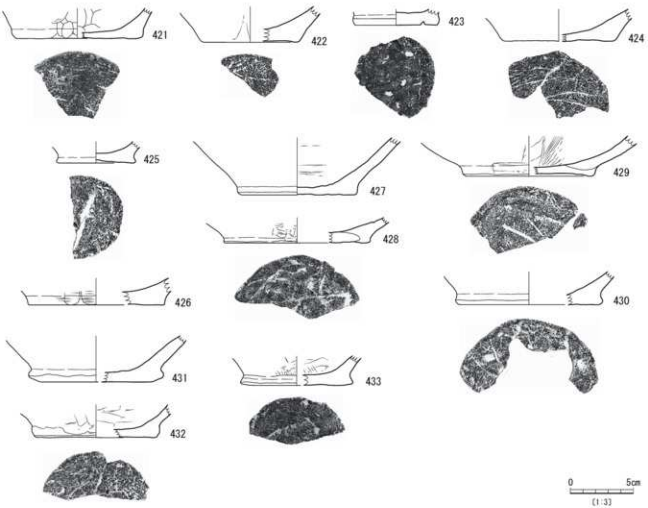
第 53 図　突帯文土器（20）

細かい砂質土を用いた赤色磨研土器の口縁部近くの破片で，中央に沈線のある台形突帯が２条貼り付けてある。内面は橙色，外面は黒色を呈する。417は環状浮文のある肩部破片である。418は屈曲部から外反気味に内傾して立ち上がる破片で，肩部は薄い。肩部に２条の横沈線が巡り，その上に２条の連続鋸歯文が施される。鋸歯文の間には短い横線が引かれる。419も肩部で，二重の三角形沈線が引かれているが，底辺は三重になっている。420は表面が磨耗した破片だが，屈曲部の上に２条の横沈線が２段あり，その間にやや曲線状となる２条の鋸歯文が引かれている。

浅鉢の底も張り出しがほとんどなく立ち上がるものと，外へ大きく張り出して，くびれてから立ち上がるものとがある。薄い底のものが多く，木葉痕を残しているものも多い。

421～427は張り出さないか，張り出しの弱いものである。421は底径が10.2cmで，わずかに張り出すが，ほとんどまっすぐに近い。内外とも緩ナデで，底は薄い。底には小さな木の葉の圧痕がある。422はややあげ底となり，底には浅い木葉痕が残っている。423は底径6.5cmと小型で，底には粒状圧痕が数点ある。424はほとんど張り出さない薄い底で，複数の木葉痕がある。425は円盤状底のまわりに粘土を貼り付けて，外へ大きく広がる。内外ともナデ整形だが，内面のナデは丁寧である。底に２枚の木葉痕が残っている。426は底径 10.6cmと大きなもので内外・底ともナデ整形だが，内面は丁寧である。427は内外・底とも剥落が目立つ円盤状底部だが，薄いつくりである。内面にはコゲが付着している。

428～433は外へ張り出しているものである。428は底径6.4cmと小型で，あげ底となる。丁寧な整形をしており，底に筋状の圧痕がある。429は底径10.0cmとやや大きく，あげ底となる。薄いつくりで底に胴を乗せる作りである。底には木の葉圧痕が残っているが，周辺の接地面付近はナデている。内面はヘラミガキで仕上げている。430・431は外へ強く張り出す底で，430は底に木の葉の圧痕があり，底径11.6cmと大きい。432の底周辺部は雑であるが，内面は丁寧にナデており，底に木葉痕がある。433の底は鋭く尖っており，底に木葉痕がある。



第54図　突帯文土器（21）

鍋形土器（第 55～57 図 434～463）

大きな丸みを帯びた底から開きながらまっすぐ立ち上がる鍋形の鉢である。口縁端近くには刻み目突帯が貼り付けられている。底には組織痕があり，布目には編布・平織布・網目などの種類がある。内面調整は概して丁寧で，外にはススが付着しているものが多い。

434～438 は口縁部から底部までの形状のうかがえるもので，口径 19cmほどの小さいものから，口径 40cmほどの大きいものまで法量は様々である。434 は口径 40cmと大きなもので底を欠いている。高さは現存で 12cm（想定 13.5cmほど）ある。口縁端は丸みを帯び，端部近くに数種の工具による押圧痕のある三角突帯が貼り付けてある。胴部に比べて底部の厚さは薄くて，底に編布痕がある。1.5cm四方に 5 本× 17 本の糸がある長方形の布目である。外面にはススが厚く付着している。焼成度は良いが，火を強く受けている。

435 も口径は 40cmで，分厚いつくりである。口縁端に小さな突帯が貼り付けられ，その上に左下がりの刻目が付されている。外面全体にススが付着している。外面は粗いナデ整形だが，内面は丁寧なナデ整形である。組織痕はナデ消されている。

436 は口径 22cmと小さく，高さが 10.4cm以上あるため深い鍋状を呈する。口唇部は矩形を呈し，口縁端の少し下に突帯が貼り付けられ，刻目が付されている。内外とも器面調整はミガキである。

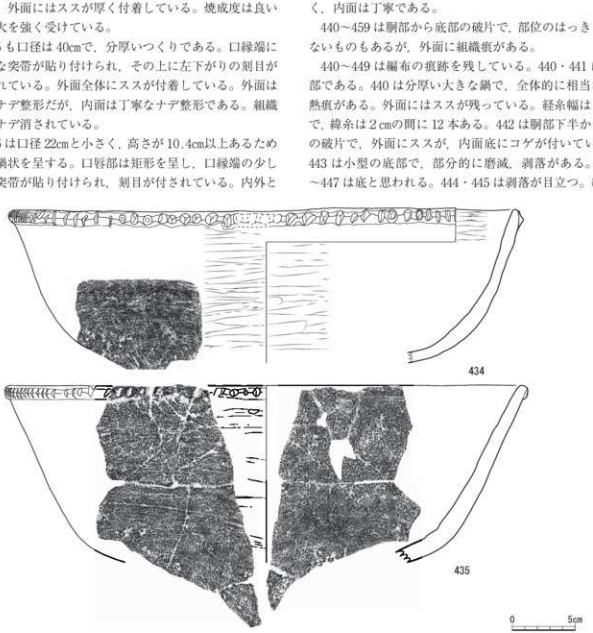
437 は口径 23.5cm，高さ 8.9cmの安定した丸みを帯びた平底で，口縁端は丸い。口縁端近くのやや下に棒状押圧のある突帯が貼り付けられ，内面は横方向，外面は縦方向のナデ整形である。外面にはススが，内面の底にはコゲが付着している。

438 は口径 18.8cm，高さ 9.0cmの深い鉢で，口縁端に低い突帯が貼り付けてある。突帯には板状施文具でほぼ直に刻みをいれている。底は 9.0cmほどの平底で，丸みをもって立ち上がっている。内外とも横方向のナデ整形である。内面にコゲ，外面にはススが付着しており，外面底部付近は磨耗している。

439 は胴部から底部近くの破片で，外面上端にはススが多く付着している。内外ともナデ調整だが，外面は粗く，内面は丁寧である。

440～459 は胴部から底部の破片で，部位のはっきりしないものもあるが，外面に組織痕がある。

440～449 は編布の痕跡を残している。440・441 は底部である。440 は分厚い大きな鍋で，全体的に相当な被熱痕がある。外面にはススが残っている。経糸幅は 1 cmで，緯糸は 2 cmの間に 12 本ある。442 は胴部下半から底の破片で，外面にススが，内面底にコゲが付いている。443 は小型の底部で，部分的に磨滅，剥落がある。444～447 は底と思われる。444・445 は剥落が目立つ。経糸

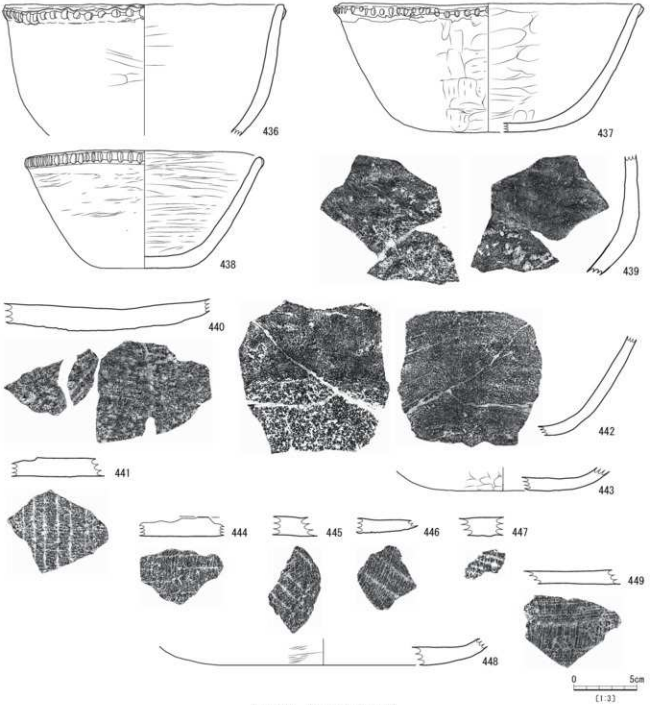


第 55 図　突帯文土器（22）

幅は1㎝で，緯糸は2㎝の間に17本ある。446は底から胴へ立ち上がろうとする部分で経糸幅が1.7㎝，緯糸は2㎝の間に17本ある。447は分厚い作りで，経糸幅が0.6㎝，緯糸は2㎝の間に17本ある。448は大きな鍋の底で，外底面は被熱により赤色化している。外面にはススが付着している。

449は薄いつくりで，内面はミガキ調整である。外面は被熱で赤色化している。経糸幅が不規則で，緯糸は2㎝の間に17本ある。

450～458は平織りである。450は大型の鍋で，内面は丁寧にナデられている。布のつなぎ目が数か所にみられる。451は薄いつくりで，布のつなぎ目がよくわかる。452の内面は丁寧なナデ整形だが，外は凸凹している。2㎝四方に14×9本の糸がある。453は底から立ち上がろうとする部分で，内面はミガキに近い丁寧なナデだが2㎝四方に10×11本の糸が織られた布痕が残っている。外面は被熱のため赤色化している。454の内面は丁寧なナデで平らになっているが，外面は凸凹している。



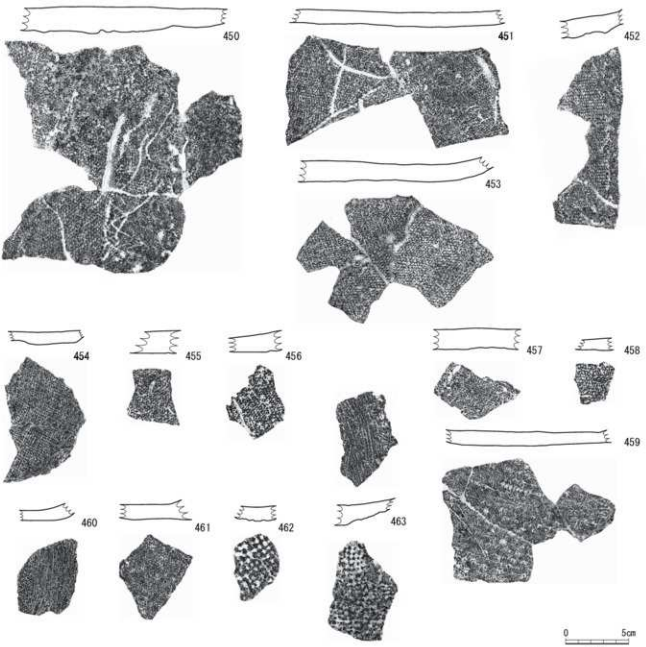
第56図　突帯文土器（23）

2cm四方に14×12本の糸がある。455～457は分厚いが，458は薄い。457の糸は細い。459の組織痕は部分的に消えているが，編布のようにみえる。460もはっきりしないが，糸間が細い平織りのようにみえる。461は立ち上がり部分で，内面にコゲ，外面にススが付着している。平織りのようにみえる。

462・463は2cm四方に縦・横5本の糸がある網目である。内面は丁寧にナデているが，外面は凸凹している。

特殊壺形土器（第58図464）

底径11.0cm，残存高24.2cmの大きな平底の甕形土器である。胴部の中央が膨らんでいる樽形をした土器で，やや歪である。胴下半部から底にかけて幅約2cm，長さ14cm足らずのこぶ状突起が貼り付けてある。外面は縦方向のナデ整形であるが，こぶ状突起の周りは縦方向ヘラミガキで仕上げている。内面は横方向を主体とした貝殻条痕で整形しているが，下部は横を基調としたナデ整形で仕上げている。底面はナデ整形で，やや上げ底となっており，立ち上がり部は丸みを帯びている。外面はにぶい橙色・黒褐色を呈し，内面は赤色だが，一部に円形状の赤黒色を呈した部分がある。胎土は黄白色石・白色石・石英・雲母・長石などを含む砂質土で，焼成度は普通である。



第57図　突帯文土器（24）

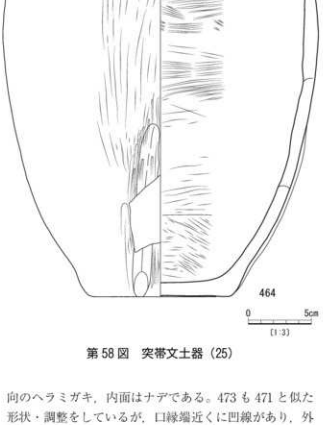
壺形土器（第 59～61 図 465～499）

壺形土器（以下，壺と略す）は頸部から口縁へ向かって内傾しているが，口径が狭くてナデ肩をする器形のものと，口径がやや広く肩部が膨らむものとがある。

465～468 はナデ肩器形のものである。465・466 はやや内傾しているが，直立気味の口縁部で，ナデ肩の器形を呈している。465 は口縁直径が 12.4cm で，調整は外面が縦方向ヘラミガキ，内面がいずれも横方向で口縁付近はヘラミガキ，下半は丁寧なナデである。にぶい赤褐色を呈している。466 は口縁直径が 11cm である。全体的に磨滅が目立ち口縁端は丸みを帯びている。肩部からやや内傾しているが，直立に近い。頸部と肩部境は継ぎ目にあたり，やや分厚くなっている。内面は指押さえの痕跡が目立ち，口縁部に肩部をかぶせる接合になっている。外面はヘラあるいは指頭の縦ナデ，内面はヘラによる縦あるいは斜方向のナデである。467 は 468 と器形が似ているが，だいぶ小さなつくりで，残存高が 10cm 足らず，最大径 14.4cm である。外面は縦ナデのあと縦方向のヘラミガキで，内面は丁寧な横ナデで仕上げているが，内面は深い剥脱が目立つ。積み上げは内傾から行っている。色調は赤っぽいが，外は部分的に赤黒である。468 は口縁と底部を欠いているが，長胴形のナデ肩をした壺である。残存高が 33cm，最大幅が 32.3cm ある。外面は縦あるいは斜方向のヘラミガキで仕上げ，内面は剥脱が目立つが横ナデである。外面は赤色あるいは赤黒，内面は暗赤灰色を呈しているが，外面の上半部にはスス状のものが広範囲に付着している。

469～473 は「ハ」の字状となる内傾形の口縁部を有するもので，471～473 は丹塗り土器である。

469 は口縁直径が 11cm で，胴部最大径は 28cm である。膨らんだ胴部から肩部へ移り，頸部で段となり，内傾しながら口縁端へ向かい，口縁端部で短く外へ屈曲している。内外とも表面の剥脱が目立つが，内面は横方向のナデ，外面は斜方向のヘラミガキで仕上げている。内外ともにぶい橙色を呈するが，外面の一部にはススが付着している。470 は口縁直径が 24.6cm と大型で，内傾しながら立ち上がり，口縁端はやや粗いつくりでわずかに外反している。内面調整は縦ナデ，外面は縦方向のミガキで仕上げている。471 は口縁直径が 19cm で，口唇部の欠けが目立つ。外面から内面の口縁端近くまで丹塗りが施されている。内面は広く剥脱してでこぼこしているが，肩部から口縁部への屈曲ははっきりしており，外面も境ははっきりしている。内面調整ははっきりしないが，外面は横方向のヘラミガキで仕上げている。472 は口縁直径 8.8cm と小形の丹塗り土器で，頸部から稜をもって屈曲し内傾しながら立ち上がっている。口縁端は磨耗してはっきりしないが，小さく外へ屈曲しており，玉縁の可能性もある。表面の剥脱・磨耗が目立つが，外面は横方向のヘラミガキ，内面はナデである。473 も 471 と似た形状・調整をしているが，口縁端近くに凹線があり，外へ屈曲するような形状をみせている。浅黄橙色を呈し，内面の口縁端近くから外面が赤褐色の丹塗りとなる。



第 58 図　突帯文土器（25）

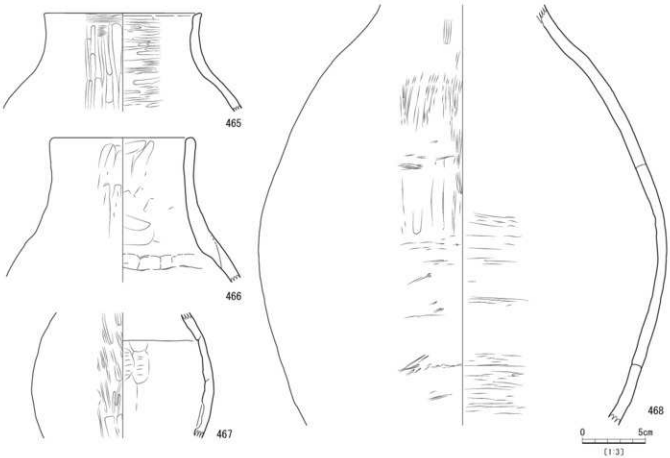
474・475 は口縁端が玉縁状に膨らむ，内傾する口縁部である。ともに丹塗り土器で，内面は丁寧なナデ，外面は横方向のヘラミガキで仕上げている。

476～480 はやや外反する口縁部で，477～479 は丹塗り土器である。476 は波状口縁となる。477 は直立気味だが，やや外反する長い丹塗りの口縁部で，外面は縦方向のヘラミガキで仕上げる。478 は口縁直径が 12.4cm と小型で，口縁下にすれ違っている 1 条の細沈線がみえる。480 はやや分厚いつくりで，端部近くで強く外反している。外面のヘラミガキは頸部を境とし，口縁は横方向，肩部は縦方向と向きを変えている。内面の丹塗りもだいぶ下まで施している。

482～487 は頸部から胴部である。483・486・487 以外は丹塗りである。

482 は胴部最大径 34.4cm，口縁直径 13.5cm ほどの大型壺で，外表面の細かい精製土が剥がれ落ちているため，丹塗りも広く剥がれ，調整痕も縦方向ヘラミガキのようだがはっきりしない。内面も剥脱部分が広くナデのようだがはっきりしない。膨らんだ胴部から，丸みをもった肩部を経て，やや内傾して口縁部へ至るが，口縁端が一部欠けている。肩部に 2 対の補修孔があるが，いずれも輪積み痕を挟んで上下にある。

483 は丸みを帯びた胴部から頸部でやや屈曲して，直



第 59 図　突帯文土器（26）

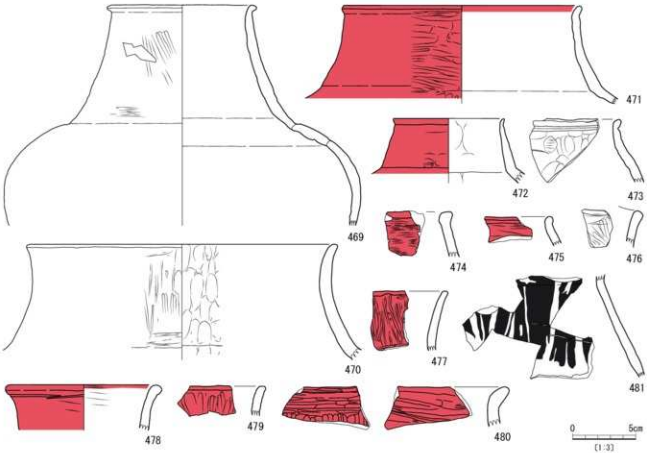
に口縁部へ至る破片で，口縁部は分厚い。内外ともヘラミガキ調整で，焼成度の良い土器である。内面が黒褐色，外面が暗赤褐色を呈している。484 は肩部に粘土紐による台形状の隆帯ながみられる。隆帯文の上は積み上げて口縁部へ至る。485 は口縁が強く内傾するが，肩部へ屈曲しないため，頸部がはっきりしない。頸部付近に円形押圧のある突帯が巡っている。内面は横ナデ調整だが，広く剥脱している。外面は横方向のヘラミガキである。486 は「ハ」の字状に広がる肩部で，外面は横方向のヘラミガキのあと部分的に縦方向のヘラミガキで仕上げる。内面は浅い指ナデであるが，剥脱が目立つ。外面が灰・浅黄色，内面が灰白色を呈し，胎土は粘質土である。487 は内外とも丁寧なナデ調整の土器で，外面は幅広ハケナデのあと丁寧にナデている。内面が黄灰色，外面がにぶい黄橙色である。

488・489 は肩部と口縁部を頸部で貼り付けるつくりの壺で，肩が膨らむ器形である。外面は両者とも横方向ヘラミガキ，内面は 488 が縦方向の丁寧なヘラナデ，489 が横方向の指頭ナデで仕上げる。

490・491 は底部である。490 は底径 10cm の安定した平底で，ややあげ底となっている。外面は一部ヘラナデもあるが，横方向のヘラミガキ調整で，底もヘラミガキで仕上げている。内面は横方向のヘラナデである。491 は細かい砂質土を用いているため，丹塗り土器だが，ほとんど丹が剥脱している。直径 9.4cm の安定した平底だが，立ち上がり部分が丸みを帯びている。薄いつくりで内外ともヘラナデで仕上げている。

492～498 は小型の丹塗り壺である。492 は丸みを帯びた胴部と内傾する口縁部から成る。口縁部と胴部境に横方向の凹線，肩部に 3 条の横方向の凹線がある。外面は丁寧なナデ，内面はナデ仕上げだが内面は広く剥脱している。493 は底径 5.4cm で安定した平底だが，ややあげ底となっている。胴下半部に 1 条の横方向凹線がある。外面と底は丁寧なナデ，内面はナデ仕上げだが，内面は広く剥脱している。494 は肩部の破片で，内外とも縦方向のナデ整形だが，器面の剥落が目立つ。495～498 は同一個体の体部で，粘土紐を貼り付けて台形状の文様を作る丹塗り土器である。台形間には，中央に刺突のある環状浮文がある。内外とも丁寧な横ナデだが，内面の剥脱が目立つ。

499 は口径 11.2cm の内傾する無頸壺である。口縁下と肩部に 1 条ずつ凹線が巡っている。外面は丁寧な横方向



第 60 図　突帯文土器（27）

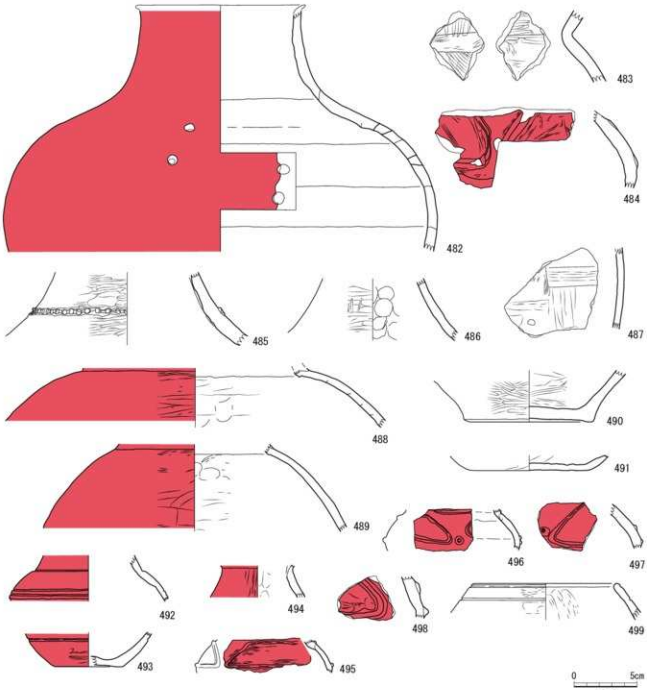
のナデ，内面は縦方向のヘラナデで仕上げているが，外面は磨耗が目立つ。

(2) 弥生時代前期土器（第 62 図 500～519）

当時期の甕形土器は口縁部が外反するものと，口縁端に突帯の貼り付けられるものとがある。焼成度は概して良好である。500～503 は口縁部が強く外反する高橋Ⅰ式土器と呼ばれているものである。500 は口唇部に刻みのあるもので，端部に近くやや薄くなっている。内面には 4 条の縦方向の沈線がある。501～503 は口唇部に刻みがなく，外へ強く反っている。外面は縦方向の粗いナデで，内面は口縁付近が横方向，その下が斜方向のハケナデである。503 の口径は 25.8cmで，頂部に 2 条の沈線がある。

504～512 は口縁端に三角突帯の貼り付けられるものである。頂部がやや下に下がっているが，下がり度が強いものと，胴部と直に曲がるものとがある。504 は口唇部に刻みのないもので，突帯外面の調整は雑である。505～512 は口唇部に刻みが施され，505～509 は口唇部がやや下がっているが，510～512 は口縁端が水平に近くなっている。505 と 507 は二条甕で，口縁端の突帯には刻みがあるが，胴部の小さい三角突帯は刻目がない。505 の口縁部突帯の貼り付け外面のハケ調整は不十分で，いくらか隙間がある。507 は口径 33.8cmで胴部の突帯より下は分厚いが，口縁部のほうは薄くなっており，口縁部突帯の上はやや凹んでいる。内面調整は斜方向のヘラナデだが，外面は縦方向のハケナデである。509 の突帯は下のほうが丸みをもっており，貼付部もしっかり押さえていない。510 の突帯貼付も一部ナデていない部分があり，頂部はミガキに近い。口唇部は密な押圧刻みである。511 は口径 26cmで口縁突帯はやや長く，肩部にある 2 条の三角突帯にも刻目がある。内面はハケナデのあと，ヘラミガキ，外面はハケナデのあと縦ヘラミガキである。外面にはススが付着している。512 もやや長い突帯で，密な押圧が施されている。口径は 22cmと小さく，内外ともヘラナデだが，内は横方向，外は縦方向である。

513 は口縁部が内傾する器形の頸部から肩部の破片で，3 段にわたって 3 条の圏線と，3 列の細線から成る鋸歯文が描かれている。外面はにぶい橙色を呈し，丁寧にナデられている。514 は肩部を内側から貼り付けて肥厚させる器形で，外面ヘラミガキ，内面横方向ヘラナデで仕上げる大形の壺である。外面に 2 条の横沈線と 3 条の重弧文がある。内面が灰白色，外面が灰黄あるいは黄灰色を呈する。517 は肩部にカマボコ状の突帯文があ

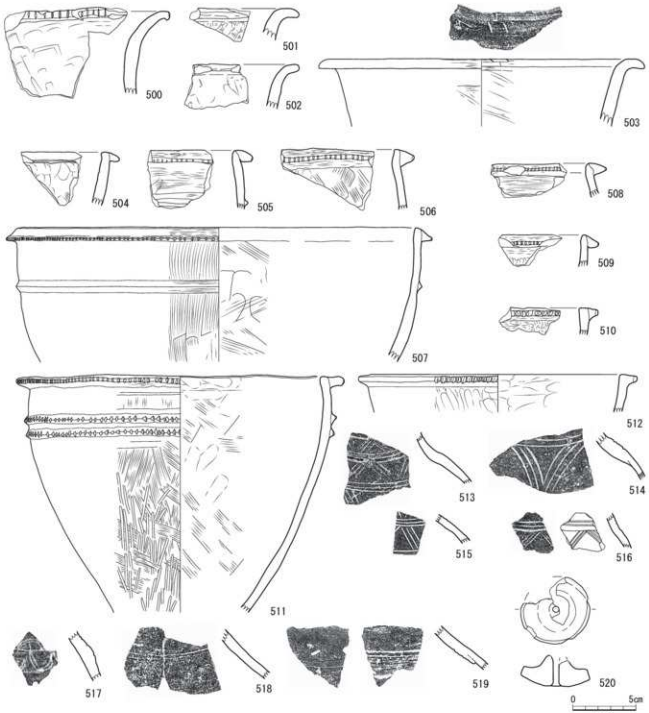


第 61 図　突帯文土器（28）

り，その上側と上に２条沈線の下向き半円文がある。518・519 は肩部に２条の浅い細沈線が巡っている。外面は丁寧なヘラ横ナデだが，内面は貼り付け部分が良く残っており，やや粗い横ナデ仕上げである。

土製品（第 62 図 520）

つまみ形紡錘車が１点出土している。直径 5.4cm，孔径 0.45cm，つまみ部分厚さ 2.4cm，周縁部厚さ 1.0cmである。つまみ側は周縁からやや凹んで立ち上がり，つまみ先端部が一部欠けて磨耗もしている。つまみ部分の基部直径は 2.8cmほどで，先端直径は想定 1.6cmの山形を呈している。つまみの反対側は弧状を呈しており，側縁部は凹線状の凹みが巡っている。皿状のものにつまみ部分を貼り付けているようにもみえる。つまみ部分，平坦部とも調整は丁寧である。



第 62 図　弥生時代前期土器

第7表　突帯文土器観察表

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外 内	焼成	胎土 白石	茶石	黄白石	石英	黒石	長石	長石	角閃石	備考
34	180	E-V-G30 F26	Ⅱ、Ⅲa	19145他	甕	口縁～胴	口25.0	板ヘラ・斜ナデ	横ナデ	－	にぶい黄橙、黒褐	普通									スス
34	181	H27	Ⅱb	20201他	甕	口縁～胴	－	ナデ	ナデ	突帯	橙 にぶい黄橙	普通	○	○	○				○	○	スス
34	182	I29	Ⅱa	32024	甕	口縁	－	縦ナデ	横ナデ	突帯	褐灰 にぶい褐	普通	○			○		○		○	スス
34	183	D49	Ⅱ	7871	甕	胴	－	横ナデ	横ナデ	－	暗赤灰 赤褐	良好	○			○		○		○	スス、雲母、輝石、輝石
34	184	G27	Ⅱb	20159他	甕	胴	－	ナデ	ナデ	突帯、穿孔、幾何学文	明黄褐、黒褐	普通	○		○	○		○			スス、雲母
34	185	J28	Ⅱb、Ⅲa	27151他	甕	胴	－	ナデ	ナデ	突帯、穿孔2箇	橙 にぶい橙	普通	○			○	○	○			スス
35	186	H29	Ⅱa-b	30127他	甕	口縁～胴	口34.0	横ナデ	横ナデ	突帯	赤 にぶい黄橙、褐灰	普通	○		○	○			○		スス
35	187	弥S110	②	6028	甕	口縁～胴	－	ミガキ	目隠条痕→ナデ	突帯	褐灰 にぶい橙	良好	○	○	○		○				
35	188	K27	Ⅳa	34116	甕	口縁～胴	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯	黒 灰褐	良好	○		○		○		○		スス、細かい土
35	189	K35	Ⅱb	31363	甕	口縁～胴	－	横目殻条痕	斜ナデ	突帯	にぶい黄褐	普通	○		○	○	○			○	スス
35	190	E42、F43	Ⅱa	9806他	甕	口縁～胴	口20.4	丁寧なナデ	丁寧なナデ	突帯	にぶい黄橙 浅黄橙	普通	○		○	○				○	－
35	191	J28	Ⅱ	－	甕	口縁	口30.6	横ナデ	横ナデ	矩形突帯	にぶい黒 橙	普通	○		○	○		○		○	植物孔
35	192	D22	Ⅱ	18063	甕	口縁～胴	－	ヘラナデ	横ナデ	矩形突帯、刺目	にぶい赤褐 灰褐	良好	○		○	○	○	○			－
35	193	F42	Ⅱb	－	甕	口縁	－	丁寧なナデ	ヘラ横ナデ	突帯	にぶい赤褐	良好	○	○	○				○		－
35	194	弥S115 SK1	①	6725	甕	口縁	－	丁寧な横ナデ	横ナデ	突帯	黒褐 にぶい橙	良好	○	○	○	○	○				－
35	195	F53	Ⅱ	9511	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	突帯、沈線	にぶい黄橙 黒褐	普通	○			○				○	スス、波状口縁
35	196	J28	Ⅱa-b	27967他	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	突帯	灰褐	普通	○	○		○					スス、波状口縁
35	197	弥S12	SK直	6003	甕	口縁	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	突帯、沈線	暗褐 にぶい橙	良好	○	○		○				○	－
35	198	I28	Ⅱ	23450	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	突帯	橙 にぶい黄橙	普通	○			○				○	－
36	199	C50	Ⅱb	－	甕	口縁～胴	口32.8	目殻条痕→ナデ	目殻条痕	刺目突帯	にぶい赤褐 灰褐、にぶい橙	普通			○	○	○	○	○	○	スス、コゲ
36	200	弥S118	②	7478	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	刺目突帯	にぶい黄橙 明赤褐	良好	○		○	○					スス
36	201	D49	Ⅱ	－	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	刺目突帯	褐暗褐	良好		○		○	○			○	スス
36	202	D27、E26	Ⅲa	21552他	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	刺目突帯	灰黄褐 にぶい黄橙	良好			○	○	○			○	スス
36	203	D49	Ⅱ	－	甕	口縁	－	丁寧なヘラ状ナデ	目隠条痕→ナデ	刺目突帯(急目)	暗褐 褐	良好	○	○	○	○				○	－
36	204	S27	②	－	甕	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	刺目突帯	にぶい黄橙	普通	○		○		○			○	スス
36	205	F41-42	Ⅱb	9768他	甕	口縁～胴	口35.0	横ナデ	横ナデ	刺目突帯 孔列文	明黄褐 明黄褐	普通		○	○	○	○			○	－
36	206	中S11	－	－	甕	口縁	口34.1	横ナデ	横ナデ	刺目突帯 孔列文	赤灰 橙	普通	○		○	○		○		○	スス
36	207	E25-26	Ⅱb、Ⅲa	19463他	甕	口縁～胴	口30.3	横ナデ	横ナデ	刺目突帯	にぶい黄褐	良好			○	○	○			○	スス
36	208	F26、G29	Ⅰ、Ⅲa	32844	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	刺目突帯	にぶい黄褐	普通	○		○	○		○			－
36	209	L35	Ⅱb	31299	甕	口縁～胴	－	横ナデ	粗い横ナデ	刺目突帯	にぶい黄橙	普通	○		○	○	○				スス
37	210	J-K28	Ⅱa-b	27125他	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	刺目突帯(ヘラ)	明赤褐	普通	○		○	○				○	スス
37	211	C28	Ⅱb	17173	甕	口縁～胴	－	やや粗い横ナデ	やや粗い横ナデ	刺目突帯(ヘラ)	にぶい赤褐 明赤褐	普通	○		○	○	○			○	スス
37	212	D49	Ⅱ	－	甕	口縁	－	丁寧な横ミガキ	丁寧な横ミガキ	刺目突帯(急目)	赤褐 にぶい黄橙	良好		○		○		○		○	スス
37	213	D48	Ⅱ	－	甕	口縁	－	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	刺目突帯(爪)	にぶい黄橙	良好	○		○	○		○		○	－
37	214	G43	Ⅱb	12081他	甕	口縁	－	粗いナデ	丁寧なナデ	刺目突帯 ニニ状突起	暗褐 黒	良好								○	－
37	215	G25、H29	Ⅲa	22372他	甕	口縁～胴	口20.8	ヘラ斜ナデ	ヘラ斜ナデ	刺目突帯(ヘラ)	にぶい橙	良好	○			○	○				スス、雲母
37	216	SX1	中層	5821	甕	口縁	－	粗いヘラ横・斜ナデ	ヘラ横ナデ	刺目突帯(急目)	にぶい黄橙	良好	○			○					－
37	217	D49	Ⅱ	－	甕	口縁	－	条痕→ナデ	ヘラ横ナデ	刺目突帯(爪)	黒	良好		○	○						－
37	218	E27、J29	Ⅱ、Ⅲa	18686他	甕	口縁～胴	－	丁寧なナデ	粗い横ナデ	刺目突帯(ヘラ)	暗赤灰	良好			○	○	○		○	○	－
37	219	C50	Ⅱb	－	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	刺目突帯(ヘラ)	暗赤褐 橙	良好			○	○				○	スス
37	220	弥S118	①南東	－	甕	口縁	－	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	刺目突帯(ヘラ)	橙 にぶい黄橙	良好	○			○					
37	221	D49	Ⅱ	－	甕	口縁	－	横ミガキ	横ミガキ	刺目突帯(急目)	暗赤褐	良好			○	○		○			スス
37	222	C50	Ⅱb	－	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	刺目突帯(急目)	暗褐	普通	○	○	○	○				○	－
37	223	弥S215	①	7293	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	刺目突帯(急目)	にぶい褐	良好	○			○		○		○	スス
37	224	D49	Ⅱ	－	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	刺目突帯(急目)	暗褐	普通	○		○	○					－
38	225	H36、I37	Ⅱb、Ⅲa	22829他	甕	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	刺目突帯(ヘラ)	にぶい黄褐	良好			○			○		○	スス
38	226	F26	Ⅱ	19412他	甕	口縁～胴	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	刺目突帯(ヘラ)	黒褐 灰褐	普通	○			○			○	○	スス
38	227	D49	Ⅱ	－	甕	胴	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	刺目突帯(ヘラ)	黒褐 にぶい赤褐	良好	○		○		○			○	－
38	228	C35	Ⅲa	34095	甕	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	刺目突帯(ヘラ)	にぶい黄褐 にぶい褐	良好	○		○		○				スス
38	229	J30	Ⅱb	26976	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	刺目突帯(ヘラ)	黒褐 暗褐	普通	○		○	○					スス

博図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外 内	地色	胎土 白	胎土 黒	胎土 赤	胎土 石	胎土 黒	胎土 長	胎土 石	胎土 角閃石	備考
38	230	F30	Ⅱa	38308 他	甕	胴	－	粗いナデ	丁寧なナデ	附加突帯(ヘラ)	にぶい黄橙 明赤褐	良好	○	○	○	○	○		○		スス
38	231	H38	Ⅱa	13577 他	甕	胴	－	横ナデ→ヘラ削ミガキ	横ナデ→ヘラ横ミガキ	附加突帯(ヘラ)	にぶい赤褐	良好	○			○			○		スス, 細砂質土
38	232	D21	Ⅱ	19256	甕	胴	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	附加突帯(ヘラ)	橙 にぶい橙	普通	○		○	○	○		○		－
38	233	L35	Ⅱb	31361	甕	胴	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯(ヘラ) 沈線, 三角文	にぶい黄橙	普通	○		○	○		○			スス
39	234	D31-32 E30-32 F31-32 G30-31 H30	Ⅱ Ⅲa・b	16563 他	甕	口縁～胴	口34.8	縦ナデ→横ナデ	横ナデ	附加突帯(棒)	浅黄橙	良好	○	○		○		○	○		スス
39	235	E-G30 F29-31	Ⅱb Ⅲa	30861 他	甕	口縁～胴	口35.8	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	附加突帯(棒)	橙 にぶい黄橙	普通	○		○	○	○			○	スス
39	236	E27	Ⅲ	21874	甕	口縁～胴	－	横ナデ	丁寧な横ナデ	附加突帯(指貫)	黒褐 灰黄褐	良好	○	○	○				○	○	スス
39	237	E28	Ⅱa	34149	甕	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯, わらび手文 細画状文	にぶい橙 赤	良好	○		○	○			○	○	細砂質土, 雲母
39	238	I25	Ⅰ	18872	甕	胴	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯, わらび手文	にぶい橙 にぶい黄橙	普通	○		○	○			○	○	スス
40	239	F30	Ⅱa	38373	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯(棒)	灰黄褐 にぶい黄橙	普通	○	○	○	○	○	○	○	○	スス
40	240	E27	Ⅱa	21605	甕	口縁	口28.0	丁寧なナデ	丁寧なナデ	附加突帯(指貫)	褐灰, 灰黄褐 にぶい黄橙	普通	○	○	○	○	○		○	○	スス
40	241	E26	Ⅱa	19481	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯	橙	普通	○		○	○	○	○			－
40	242	K34	Ⅱb	31467	甕	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	附加突帯	灰黄褐 にぶい黄橙	普通	○		○	○		○	○	○	－
40	243	G24	Ⅱb	21744	甕	口縁	－	横縦状ハケ横ナデ	横縦状ハケ横ナデ	附加突帯	にぶい黄 褐灰	良好	○		○	○				○	スス
41	244	E30-31 F31-G30	Ⅱb Ⅲa	32917 他	甕	口縁～胴下	口39.4	縦・横ナデ	横ナデ	附加突帯(指貫) 櫛状突起	橙	普通	○		○	○	○			○	スス, コゲ, 補修孔 雲母
41	245	G43	Ⅱb	12115	甕	口縁～胴	口21.8	粗いヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	附加突帯(ヘラ)	黒褐 橙	普通	○	○	○	○	○			○	スス
41	246	F42	Ⅱb	11153	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯	浅黄橙 黒褐	普通		○	○	○				○	摩耗, スス, 補修孔
41	247	F26	Ⅱ	21862	甕	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯(爪)	橙	普通			○	○	○				スス
41	248	F26	Ⅱa	21640	甕	口縁～胴	－	丁寧なナデ	横ナデ	附加突帯(爪)	黒 褐黒	良好	○	○	○	○				○	スス, 雲母
41	249	F24	Ⅱb	20065 他	甕	胴	胴36.2	横ナデ	横ナデ	附加突帯(爪)	褐 にぶい黄橙	良好				○			○		スス
41	250	I29	Ⅱa	32055	甕	胴	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯	黒褐 にぶい黄橙	普通				○	○		○		補修孔
42	251	J36, K35	Ⅱb Ⅲa	28501 他	甕	口縁～胴	口27.6	横ナデ	横ナデ	附加突帯(ヘラ)	にぶい黄橙	良好	○	○			○	○	○	○	スス
42	252	G44	Ⅱb	14231 他	甕	口縁～胴	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	附加突帯(ヘラ)	にぶい黄橙	普通	○		○	○			○	○	スス, 細砂質土
42	253	F31	Ⅱa・b Ⅲa	9568 他	甕	口縁～胴	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	附加突帯(ヘラ)	灰黄褐 にぶい黄橙	良好	○		○					○	スス
42	254	J36	Ⅲa	30125	甕	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯(ヘラ)	にぶい褐	良好	○			○		○		○	スス
42	255	K34	Ⅱa	31472	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯(ヘラ)	にぶい赤褐 にぶい黄橙	普通	○			○			○		スス, 月並り, 雲母
42	256	E27	Ⅱ	18834	甕	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯(ヘラ)	にぶい黄橙	良好		○	○	○				○	スス, コゲ
42	257	L35	Ⅲa	31568	甕	胴	－	ナデ	ナデ	附加突帯(ヘラ)	極暗褐 灰褐	普通	○		○	○			○	○	スス, コゲ
42	258	J30	Ⅲa	28922	甕	胴	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	附加突帯(ヘラ)	灰黄褐	普通	○			○		○	○	○	スス, 補修孔, 雲母
42	259	J-K28	Ⅱ	23823 他	甕	胴	胴47.0	横ナデ	横ナデ	附加突帯(ヘラ)	明黄褐 橙	良好	○	○	○	○	○			○	スス
43	260	E-F30	Ⅱb	37347 他	甕	口縁～胴	口25.8	丁寧な縦・横ナデ	丁寧なナデ	附加突帯(爪) 櫛形沈線	明赤褐	良好	○		○	○	○				剥落, スス, コゲ
43	261	F26	Ⅱb	20000	甕	口縁～胴	－	斜ナデ	横ナデ	附加突帯(爪)	黒褐 にぶい黄橙	普通	○		○	○			○		スス, 雲母
43	262	J19	Ⅴ	22335	甕	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯(爪)	褐灰 にぶい橙	普通	○	○	○	○				○	スス, 雲母
43	263	G27	Ⅱb	20162 他	甕	口縁～胴	－	粗い斜・横ナデ	横ナデ	附加突帯(爪)	にぶい褐	普通	○		○	○		○		○	スス, コゲ
43	264	D27, F24-25	Ⅱ	20476 他	甕	口縁～胴	－	ナデ	丁寧なナデ	附加突帯(爪)	黒褐 灰黄褐	良好			○	○	○	○			スス
43	265	E27	Ⅱb Ⅲa	20670 他	甕	口縁～胴	－	縦・斜ナデ	横ナデ	附加突帯(爪)	黒褐 灰黄褐	良好	○	○	○	○				○	スス, コゲ
43	266	D49	Ⅱ	－	甕	口縁	－	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	附加突帯(魚目)	暗褐色 灰黄褐	良好	○		○						スス, 雲母
43	267	弥S118	②	7475	甕	口縁～胴	－	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	貝殻条痕	附加突帯(ヘラ)	にぶい褐 にぶい黄橙	良好		○	○	○	○	○	○	スス, 煤類
44	268	G31	Ⅱa	32961 他	甕	口縁～胴	口24.2	丁寧な縦・横ナデ	丁寧な横ナデ	附加突帯(指貫・爪), 山形突起	淡橙	普通	○		○	○				○	摩耗, スス
44	269	E26	Ⅱa	19475	甕	口縁	－	斜ナデ	横ナデ	附加突帯(ヘラ)	褐	普通			○	○				○	スス
44	270	E26	Ⅱa	21574 他	甕	口縁～胴	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	附加突帯(棒)	黒褐 にぶい黄橙	良好	○		○		○				スス
44	271	弥S118	①	7186	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	附加突帯(ヘラ)	橙 黒褐	普通	○	○	○	○	○				摩耗
44	272	I39	Ⅱa	13691	甕	口縁～胴	－	縦横状ハケ横ナデ	二枚目横条痕	擬形貝目突帯(魚目)	褐灰 にぶい黄, 褐灰	普通		○	○	○				○	剥落
44	273	J29	Ⅱa	28827	甕	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	附加突帯	にぶい褐	普通	○		○	○	○				スス, 剥落
44	274	弥SX4	①Ⅲa	23154 他	甕	口縁～胴	－	横→縦ナデ	横ナデ	附加突帯	にぶい褐 にぶい橙	普通	○			○					スス
44	275	E30-F29-30 G30-31	Ⅱ, Ⅲa	No. 65 他	甕	口縁～胴	口34.0	横ナデ	縦・横ナデ	附加突帯	暗赤灰 橙, 赤灰	普通	○		○	○	○			○	剥落, 摩耗スス, 補修孔

掲図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	地色	胎土 白	胎土 赤	胎土 黄白	胎土 石	胎土 灰	胎土 黒	胎土 長石	胎土 角閃石	備考
45	276	E30,F30-32 (G30-31	Ⅱb Ⅲa	30398 他	甕	口縁～胴	口37.0	粗いナデ	粗いナデ	別目突帯、リボン状突起、円面	赤茶 にぶい橙、明赤褐	良好			○						雲母
45	277	E26	Ⅱb Ⅲa	19912 他	甕	口縁～胴	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	別目突帯(沓型)	明黄褐 橙	普通		○	○				○		雲母
45	278	I31	Ⅲa	32233	甕	口縁	－	横ナデ	丁寧な横ナデ	別目突帯	黒褐	良好	○		○	○			○		スス、補修孔
45	279	G27	Ⅱb	20140	甕	口縁	－	横ナデ	ヘラ横ナデ ヘラケズリ	別目突帯(爪)	褐灰 にぶい褐	普通	○		○	○			○		波状口縁 スス、雲母
45	280	D27	Ⅰ	－	甕	口縁～胴	口40.3	横ナデ	横ナデ	別目突帯(棒)	にぶい褐 にぶい黄橙	普通	○		○	○	○	○	○		－
45	281	E30, F31	Ⅲa	38107 他	甕	口縁～胴	口35.5	横ナデ	横ナデ	別目突帯、リボン状突起	黒 にぶい黒	良好	○		○	○	○		○		内面剥落 スス、雲母
45	282	F24～26	Ⅱ	23482 他	甕	口縁～胴	口29.0	粗いナデ	丁寧な横ナデ	別目突帯	黒褐 にぶい黄褐	普通	○		○				○		スス
46	283	G45	Ⅲb	14336 他	甕	口縁～胴	口25.4	ハケ掻ナデ	丁寧なナデ	別目突帯	にぶい黄褐	良好	○		○	○	○				スス
46	284	J31	Ⅱ	26703	甕	口縁	－	横ナデ、横ケズリ	横ナデ	別目突帯	にぶい黒	良好	○	○	○	○	○		○		－
46	285	D48	Ⅱ	7118	甕	口縁～胴	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	別目突帯(爪)	橙	普通	○	○	○	○	○				－
46	286	弥S52	①	6000	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	別目突帯	にぶい黄橙	良好	○	○		○	○	○	○		－
46	287	F41	Ⅱa	9567	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	突帯、環状突起	明赤褐 明黄褐	普通			○	○	○		○		スス
46	288	弥S52	－	－	甕	口縁	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	別目突帯(ヘラ)	黒褐	良好	○	○	○	○	○				雲母
46	289	弥S38	②北西	－	甕	口縁	－	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	別目突帯(ヘラ)	黒褐 にぶい黄褐	良好	○								スス、雲母
46	290	弥S14	①南東	－	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	縞状ハケ横ナデ	別目突帯(ヘラ)	暗褐色	良好	○	○		○			○		スス
46	291	H22	Ⅱa	18640	甕	口縁～胴上	－	ヘラナデ	ヘラナデ	別目突帯、3条櫛描沈線状文	橙	良好	○		○	○	○				292と同一個体、雲母
46	292	H21	Ⅱa	18648	甕	口縁～胴上	－	ヘラナデ	ヘラ斜ナデ	別目突帯、山形突起、弧状沈線、1条沈線、2条櫛描状波状文	橙	良好	○		○	○					291と同一個体、雲母
46	293	－	②、東西	6168 他	甕	口縁	－	丁寧なナデ	ナデ	別目突帯(条目)	黒褐 にぶい黄褐	良好		○	○	○	○			○	スス
46	294	－	北東	－	甕	口縁	－	ナデ	ナデ	別目突帯	にぶい橙	良好	○	○		○					295と同一個体、スス、雲母
46	295	弥S4-19	②下、①北東	7883	甕	口縁	－	ナデ	縞状ハケ	別目突帯	にぶい橙	良好	○	○		○					294と同一個体、スス、雲母
47	296	F27	Ⅱ	20739	甕	口縁	－	粗い横ナデ	粗い横ナデ	突帯	にぶい黄褐 黒	普通	○			○	○		○	○	－
47	297	G27	Ⅱb	20132 他	甕	口縁～胴	口22.0	ナデ	ヤスリ、ナデ	突帯	にぶい褐～黒褐	普通	○	○			○		○		スス
47	298	F42	Ⅱa	9669	甕	口縁～胴	－	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	突帯	赤 にぶい赤褐	良好	○	○	○	○			○		－
47	299	G51	Ⅰ	－	甕	口縁	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	突帯	褐灰	良好	○		○	○				○	スス
47	300	K51	Ⅱ	620 他	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯	にぶい橙	良好	○	○	○	○				○	雲母
47	301	H48	Ⅰ	－	甕	口縁	－	ミガキ	丁寧なナデ	突帯	赤灰	良好	○	○						○	－
47	302	弥S23	Ⅱ	14690	甕	口縁	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	突帯	にぶい橙	普通		○	○	○	○				雲母
47	303	H25	Ⅱ	19297	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	突帯、孔列文	黒褐 褐	普通		○		○			○		スス
47	304	E26	Ⅲa	23268	甕	口縁	－	ナデ	ナデ	突帯、孔列文	黒褐 明黄褐	普通	○	○	○	○			○	○	スス
47	305	D31	Ⅱb	16689	甕	口縁～胴	－	丁寧な横ナデ	粗い横ナデ	別目突帯(ヘラ)	黒褐 にぶい赤褐	普通	○		○	○			○		スス
47	306	E-F42	Ⅱa-b	9779 他	甕	口縁	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	別目突帯	黒褐 暗褐	良好	○	○		○	○			○	スス
47	307	F31	Ⅲa	40700	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	別目突帯	赤黒 灰赤	普通	○		○		○			○	スス
47	308	G42-44	Ⅱb	11748 他	甕	口縁～胴	口31.6	丁寧なナデ	粗い横ナデ	別目突帯(爪)	黒褐 明赤褐	普通	○		○	○	○	○		○	スス、雲母
47	309	E30	Ⅲa	38101	甕	口縁	－	横ナデ	縞状ハケ横ナデ	縞状ハケ掻ミガキ	暗赤灰 赤	良好		○	○	○	○		○		剥落、スス、補修孔
47	310	D27	Ⅰ、Ⅲa	21992 他	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	別目突帯	灰黄褐	良好			○	○	○		○	○	スス
47	311	L35	Ⅲa	31580	甕	口縁	－	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	別目突帯	にぶい橙、黒褐 にぶい橙	良好	○	○		○			○		スス
48	312	F42、G42	Ⅱ	11158 他	甕	口縁～胴	－	丁寧なナデ	縞状ハケ横ナデ	別目突帯	にぶい黄褐 明黄褐	普通			○	○				○	スス
48	313	G25	Ⅱ	23337	甕	口縁～胴	－	ヘラ横、斜ナデ	横、斜ナデ	別目突帯	にぶい褐	良好	○			○	○				スス、雲母
48	314	F-G30	Ⅱ、Ⅲa	32482 他	甕	口縁～胴	口18.7	ヘラナデ	丁寧なナデ	別目突帯(爪)	橙	良好									スス、雲母
48	315	G26	Ⅱb	20301 他	甕	口縁	－	丁寧な斜ナデ	丁寧な横ナデ	別目突帯(爪)	黒褐 にぶい赤褐	良好			○	○	○				スス、雲母
48	316	F31	Ⅲa	40326 他	甕	口縁	－	ナデ	丁寧なナデ	別目突帯(爪)	黒褐 褐	普通			○	○	○	○		○	スス、雲母
48	317	E26	Ⅱb	19960 他	甕	口縁	－	横ナデ	丁寧な横ナデ	別目突帯(爪)	灰赤	良好			○	○	○			○	スス
48	318	D27	Ⅲa	21099	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	別目突帯(棒)	黒褐	良好			○	○	○			○	スス
48	319	F27	Ⅱb	20747	甕	口縁	－	縞状ハケ横ナデ	縞状ハケ横ナデ	別目突帯	暗赤灰 明赤褐	普通	○			○	○			○	剥落
48	320	I38	Ⅲa	14498	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	別目突帯(沓型)	にぶい赤褐	普通		○	○						補修孔
48	321	F42	Ⅱb	11164	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	別目突帯(ヘラ)	にぶい黄	普通		○	○					○	スス
48	322	I-J30	Ⅱb Ⅲa	26975 他	甕	口縁	－	口縁斜条櫛→横ナデ	縞状ハケ横ナデ	別目突帯(ヘラ)	にぶい橙	普通			○	○		○		○	雲母
48	323	E30、G31、H31	Ⅱb、Ⅲa	31702 他	甕	口縁	－	縞状ハケ横ナデ	横ナデ	別目突帯	黒褐 にぶい褐	普通	○			○	○			○	コゲ
48	324	E26	Ⅲa	21572	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	弧状突帯、面描きの刺み	橙	普通	○		○	○	○				細砂質土

博図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外	色調 内	地色	胎土 白	胎土 黄白	胎土 右	胎土 赤	胎土 黒	胎土 長	胎土 角閃石	備考
48	325	F26	Ⅲ a	21453	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	矩形別台突帯	にぶい橙		普通	○		○	○	○			コゲ
49	326	E31, F29 (26)	Ⅱ, Ⅲ a	29730 他	甕	口縁～胴	－	ヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	別台突帯(爪)	にぶい黄橙, 黒		良好	○	○	○			○		スス, コゲ, 雲母
49	327	D27	Ⅲ a	21967	甕	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	別台突帯(爪)	にぶい赤褐 明赤褐		良好	○	○	○		○	○	○	スス
49	328	F24	Ⅲ a	22351	甕	口縁	－	横ナデ	横ナデ	別台突帯	にぶい橙		良好	○			○				○ スス, 雲母
49	329	F25	Ⅱ, Ⅲ a	19188 他	甕	口縁	－	丁寧な縦ナデ	丁寧な縦ナデ	別台突帯	にぶい橙		良好			○	○			○	スス
49	330	F25-26	Ⅲ b Ⅲ a	20540 他	甕	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な斜ナデ	別台突帯(爪) 山形突起	にぶい橙		良好			○	○			○	スス, 橄榄
49	331 332	F25	Ⅰ b	18025	甕	口縁～胴	－	丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	別台突帯(ヘラ) 蕨痕文, 沈線	灰褐 にぶい橙		良好	○	○	○	○		○	○	○ スス
49	333	L27	Ⅲ a	34129	甕	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	別台突帯 2～3条沈線	橙		良好	○		○	○			○	スス, 細砂質土
49	334	弥 S318	②	7472	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	別台突帯	橙		普通	○		○				○	－
49	335	L52	Ⅱ c	3323	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	別台突帯	浅黄橙		普通			○	○			○	－
49	336	H26	Ⅰ	18561	甕	口縁	－	ハケ縦ナデ	ヘラ横ナデ	突帯, 2条縦沈線	明褐灰 にぶい褐		普通		○	○	○				雲母, 雲母
49	337	K30, L29	Ⅱ b Ⅲ a	27392 他	甕	口縁	－	横ナデ	ヘラ横ナデ	別台突帯(爪)	にぶい橙		普通	○			○	○		○	スス
49	338	F26	Ⅲ a	21433	甕	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	別台突帯(ヘラ)	黒		良好		○	○	○				補修孔
49	339	弥 S318	②	7551	甕	口縁	－	横ナデ	縦継状ハケ横ナデ	別台突帯(爪)	にぶい黄橙		普通	○		○	○			○	－
49	340	F42	Ⅱ b	11096	甕	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	別台突帯	にぶい橙		良好	○	○	○	○			○	補修孔
49	341	D49	Ⅱ	－	甕	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	別台突帯	にぶい黄橙 黄橙		普通	○		○	○				－
49	342	F26	Ⅱ	19431	甕	胴	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい褐 灰黄褐		普通	○		○	○		○	○	補修孔
50	343	G42	Ⅱ b	－	甕	底	底 4.6	丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	－	にぶい橙 黒褐赤橙		普通	○	○	○	○			○	スス, 底:丁寧なヘラナデ
50	344	F31	Ⅲ a	38675	甕	底	底 6.0	横ナデ	横ナデ	－	橙		普通			○	○	○			底:ナデ
50	345	F32	Ⅲ a	40463	甕	底	底 7.0	ナデ	ナデ	－	赤		普通	○		○	○	○			剥落, 雲母, スス 底:ナデ
50	346	G45	Ⅱ b	14027	甕	底	底 5.6	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	－	赤褐		良好		○	○	○				雲母, 底:繊維状ハケナデ
50	347	F31	Ⅲ a	40251	甕	底	底 6.0	ヘラ縦ナデ	ヘラミガキ	－	明赤褐		普通	○	○	○	○			○	底:ヘラナデ
50	348	S35	④	23882 他	甕	胴～底	底 6.5～7.0	粗い縦ナデ	縦ナデ	－	にぶい橙		普通		○	○	○				底:木葉痕, 粒状痕
50	349	H43	Ⅲ a	8717	甕	底	底 6.8～7.2	丁寧な縦ナデ	丁寧な縦ナデ	－	にぶい橙		普通	○		○	○			○	雲母, 底:丁寧なナデ
50	350	F25	Ⅱ a-b Ⅲ a	19196 他	甕	胴～底	底 6.2	縦ナデ	縦ナデ	－	にぶい橙 にぶい赤橙		普通		○	○	○	○		○	補修, 雲母, 底:胴代痕, 布痕
50	351	J37	Ⅱ b	22781	甕	底	底 8.4	丁寧な縦ナデ	ナデ	－	にぶい褐 褐灰		良好	○	○				○	○	○ 底:ナデ
50	352	J38	Ⅰ	－	甕	底	底 8.0	横ナデ, ヘラ縦ナデ	ナデ	－	赤 灰赤		普通	○		○	○				雲母, 底:丁寧なナデ
50	353	I37	Ⅲ a	29004	甕	胴～底	底 5.4	縦ナデ	ナデ	－	赤		良好	○	○	○	○				スス, コゲ, 底:ナデ
50	354	E26	Ⅲ a	22357	甕	胴～底	底 7.0	縦ナデ	横ナデ	－	橙		普通		○	○	○	○		○	底:ナデ, 粒状圧痕
50	355	E30 F30-31	Ⅱ b, Ⅲ a	37780 他	甕	底	底 7.6	ヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	－	灰黄褐 黒		普通	○	○	○	○			○	雲母, 底:粒状圧痕
50	356	H53	Ⅲ	5733	甕	底	－	ナデ	ナデ	－	にぶい褐		普通	○		○	○			○	底:同心円状圧痕
50	357	J28	Ⅱ b	27092 他	甕	底	底 7.8	粗い縦ナデ	横ナデ	－	にぶい黒褐 赤		普通	○		○	○	○			底:粗いヘラナデ 粒状圧痕
50	358	I-J31	Ⅱ, Ⅲ a	30567 他	甕	胴～底	底 5.5	丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	－	赤 赤, 暗赤灰, 赤黒		良好	○	○	○	○			○	底:ヘラナデ
50	359	F31	Ⅲ a	40145 他	甕	底	底 7.3	ナデ	ナデ	－	にぶい褐 黒褐		普通	○		○	○			○	コゲ, 底:粒状圧痕, 布痕
50	360	L27	Ⅲ a	34130	甕	底	－	丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	－	赤褐		良好	○	○	○	○		○		底:丁寧なヘラナデ, 木葉痕
50	361	J52	Ⅱ	2213	甕	底	底 9.0	貝殻痕	ナデ	－	赤褐 黄褐		普通	○	○		○				底:胴代痕
50	362	弥 S310	①②4	6025 他	甕	胴～底	底 9.6	ナデ	ナデ	－	赤 暗赤灰		良好	○			○		○		○ 底:ナデ
50	363	F26	Ⅱ	19410	甕	底	底 9.6	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	赤 暗赤灰		普通			○	○	○			底:丁寧なナデ
50	364	L35	Ⅲ a	33604	甕	底	底 8.6	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	橙 にぶい黄橙		普通	○			○	○			底:丁寧なナデ, 圧痕
51	365	G44	Ⅱ b	13903	甕	底	底 7.2	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	－	赤 灰黄褐		良好		○	○	○	○			雲母, 底:粗いナデ
51	366	J36	Ⅲ a	29006	甕	底	底 9.4	縦ナデ	縦ナデ	－	赤		普通	○	○	○	○				スス, 底:ナデ
51	367	I31	Ⅲ a	32255 他	甕	底	底 8.2	丁寧な斜ナデ	横ナデ	－	赤褐 暗赤灰		良好	○		○	○			○	底:ナデ, 布圧痕
51	368	J31	Ⅱ	30555	甕	底	底 8.0	ナデ	ナデ	－	赤 赤褐		良好		○	○				○	底:丁寧なナデ
51	369	E41	Ⅲ a	10147	甕	胴～底	底 7.8	縦ナデ	縦ナデ	－	明赤褐 にぶい橙		普通	○		○	○	○			補修, 底:ナデ
51	370	D27	Ⅱ	21864	甕	底	底 10.0	ナデ	丁寧なナデ	－	黄橙 にぶい黄橙		普通	○		○	○	○			底:木葉痕
51	371	F26	Ⅱ	19146 他	甕	底	底 6.5	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	暗赤褐 灰赤		良好	○	○		○	○			○ 底:ナデ
51	372	E24	Ⅲ a	22344	甕	底	底 9.4	ヘラ縦ナデ	ナデ	－	赤橙 暗赤灰		普通	○			○				○ 底:木葉痕
51	373	H42	Ⅱ b	12656	甕	胴～底	底 7.4	丁寧な斜ナデ	斜ナデ	－	暗赤褐 黒褐		普通	○	○	○	○				コゲ, 底:ナデ
51	374	K30	Ⅱ	24360 他	甕	胴～底	底 8.8	粗い横ナデ	丁寧な縦ナデ	－	赤 暗赤灰		良好	○	○	○			○		○ 雲母, 底:丁寧なナデ
51	375	弥 S312	①	6534	甕	底	底 8.6	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙 黒褐		普通	○		○	○			○	スス, コゲ 底:木葉痕

博図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	地色	胎土 白	胎土 赤	胎土 黄	胎土 石	胎土 英	胎土 灰	胎土 黒	胎土 長	胎土 角閃石	備考
51	376	G31	Ⅲa	38654	甕	底	底9.6	ナデ	ナデ	－	赤褐	普通		○		○	○	○		○	○	調落、コゲ、雲母 底：ナデ
51	377	E26	Ⅱ	19127	甕	底	底10.0	－	－	－	にぶい橙 灰黄褐	良好	○			○	○					底：木葉痕
51	378	F26	Ⅲa	21455	甕	底	底8.4	ナデ	ナデ	－	にぶい赤褐 褐灰	普通			○	○	○	○	○	○		雲母、調落、底：ナデ、粒状圧痕
51	379	F28	Ⅱ	－	甕	底	底9.4	ナデ	ナデ	－	にぶい橙	普通			○	○	○					雲母、調落、底：ナデ、雲母
51	380	G41	Ⅲa	9147	甕	底	底11.6	ナデ	ナデ	－	にぶい橙	普通		○		○		○			○	底：ナデ、調代痕、布目痕
52	381	G-H42	Ⅱb	10997	甕	底	底10.2	丁寧なヘラ磨ナデ	ナデ	－	にぶい橙 褐灰	普通	○	○	○	○	○					コゲ、底：布痕
52	382	H43	Ⅱb	12319	甕	胴～底	底11.0	ナデ	ナデ	－	赤	普通	○		○	○					○	雲母、コゲ、底：木葉痕
52	383	I29	Ⅲa	32032	甕	底	底11.4	ナデ	ナデ	－	橙	普通		○	○	○	○				○	雲母、底：粒状圧痕、布痕
52	384	J20-29	Ⅲa	28663	甕	底	底15.0	丁寧なナデ	ヘラミガキ	－	にぶい橙 褐灰	普通			○	○	○			○		底：丁寧なナデ
52	385	E-F42	Ⅱ	11610	甕	底	底11.0	－	丁寧なナデ	－	黄橙 にぶい黄橙	普通	○	○		○	○					雲母底：編布痕
52	386	F23	Ⅱb	20556	甕	底	底8.6	ナデ	ナデ	－	にぶい褐 にぶい黄褐	普通			○	○	○	○	○	○	○	底：布痕
52	387	H48	Ⅱ	－	甕	底	底11.6	ナデ	ナデ	－	にぶい褐	普通	○			○	○				○	底：ナデ、木葉痕
52	388	J28	Ⅲa	28648	甕	底	底11.2	ナデ	ナデ	－	赤褐 暗赤灰	普通	○		○	○	○			○		底：アンペラ、布圧痕
52	389	J40	Ⅱb	14851	甕	底	底11.0	縦ナデ	縦ナデ	－	赤 暗赤灰	普通	○			○	○					底：平織布痕
52	390	F33	Ⅲa	40123	甕	底	底10.6	縦ナデ	ナデ	－	赤 にぶい橙	普通	○			○		○				コゲ、雲母 底：木葉痕
52	391	弥SI12	①	6516	甕	底	底11.0	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙	普通	○	○	○	○	○	○		○		調落、雲母、底：ナデ
52	392	L35	Ⅲa	34006	甕	底	底19.0	縦ナデ	横ナデ	－	橙、黒褐	良好			○	○	○				○	スス、コゲ、底：丁寧なナデ
52	393	K28	Ⅱ	23822	甕	底	底8.8	縦ナデ	ナデ	－	橙 にぶい橙	普通	○			○					○	コゲ、底：ナデ、布目痕
52	394	H38	Ⅲa	13396	甕	底	底10.2	ハケ横ナデ	ヘラ斜ナデ	－	にぶい赤褐 黒褐	良好	○		○	○	○				○	コゲ、底：ナデ、布目・調代痕
52	395	J29	Ⅲa	28812	甕	底	底10.0	ヘラ斜ナデ	丁寧なナデ	－	にぶい橙 黒褐	普通			○	○	○			○		円孔
52	396	G30	Ⅲa	32857	甕	底	底11.2～11.8	ヘラ縦ナデ	ナデ	－	明赤褐 にぶい橙	普通		○	○	○	○				○	調落 底：平織布痕
52	397	F26	Ⅲa	21636	甕	胴～底	底10.8	ヘラ縦ナデ	ナデ	－	にぶい橙 にぶい黄橙	普通	○			○	○					スス、コゲ 底：木葉痕
52	398	G30-31	Ⅱ	26516	甕	胴～底	底11.0	ナデ	丁寧なナデ	－	明赤褐 にぶい橙	普通	○		○	○	○	○	○	○		調落、スス、コゲ 底：ナデ
52	399	G31	Ⅲa	32168	甕	底	底10.1～11.0	ヘラナデ、斜ナデ	ヘラ縦ナデ	－	黒	普通	○			○	○				○	スス、コゲ、雲母 底：丁寧なナデ
52	400	F-G-K33	Ⅱb、Ⅲa	39355	高杯	脚	－	粗いハケナデ	粗いハケナデ	突帯	赤褐 黒褐	良好		○		○	○			○		丹塗り
53	401	D22	Ⅱ	18059	鉢	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	突帯	橙 にぶい黄橙	良好	○	○	○	○	○	○		○		－
53	402	H29	Ⅱb、Ⅲa	30941	鉢	口縁～胴	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	突帯	にぶい橙 橙	良好	○	○	○	○	○			○	○	スス
53	403	G42	Ⅱb	12046	鉢	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	櫛状沢文、3条の横組流麗文	明褐 黒	普通	○			○	○			○	○	波状口縁 ※34と同一個体
53	404	F43、G42	Ⅱb	12049	鉢	口縁	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	櫛状沢文、3条の横組流麗文	橙 にぶい黄橙	普通	○			○	○			○	○	波状口縁 ※33と同一個体
53	405	弥SI44	①	22671	鉢	口縁～胴	口径8.6	横ナデ	横ナデ	－	にぶい橙	普通	○			○				○		細砂質土
53	406	G25	Ⅱb	20309	鉢	口縁	－	ナデ	粗い横ナデ	突帯	黒褐 灰褐	普通			○	○	○					－
53	407	C50	Ⅱb		鉢	口縁～胴	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	刺目突帯	黒褐	普通			○	○				○	○	－
53	408	G30	Ⅲa	32559	鉢	口縁～胴	－	横・斜ナデ	横ナデ	－	にぶい橙	普通	○		○	○	○			○	○	－
53	409	E26	Ⅲa	22424	鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	－	明赤褐	普通	○			○	○				○	スス
53	410	E30	Ⅲa	38045	鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	櫛状沢文、沈線	明赤褐 赤灰	普通	○		○	○	○				○	丹塗り、細砂質土
53	411	G29	Ⅲ	33771	鉢	口縁	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	刺突のある山形突起、沈線	にぶい褐 橙	良好	○	○			○		○		○	－
53	412	G42	Ⅲa	8914	鉢	胴	－	ナデ	粗いナデ	櫛状沢文	にぶい黄橙	良好				○	○	○	○	○		－
53	413	E26	Ⅱ	19121	鉢	口縁	－	横ナデ	横ナデ	刺突のある山形突起、沈線	明赤褐 にぶい黄橙	良好	○		○	○	○			○		雲母
53	414	G22	Ⅱ	－	鉢	口縁～胴	－	横ナデ	横ナデ	櫛状沢文、沈線	橙、褐灰 橙	普通	○			○		○				雲母、波状口縁
53	415	弥SX4	①	22573	鉢	胴	－	丁寧な横ナデ	横ナデ	円線	にぶい橙	普通	○	○	○	○	○				○	丹塗り
53	416	F30	Ⅲa	30867	鉢	胴	－	ヘラミガキ	丁寧な横ナデ	沈線のある突帯	黒 橙、褐灰	普通	○		○	○					○	内面黒漆、丹塗り 細砂質土
53	417	F26	Ⅲa	21437	鉢	胴	－	ナデ	－	櫛状沢文	にぶい褐 黒褐	良好			○	○		○		○	○	調落
53	418	F41	Ⅱb	－	鉢	胴	－	縦ナデ	横ナデ	2条横沈線 蛇行文	赤 暗赤灰	普通	○		○	○					○	細砂質土
53	419	弥SI28	－	－	鉢	胴	－	横ナデ	横ナデ	2重三角形沈線	橙 明赤褐	普通	○		○	○	○					調落、細砂質土
53	420	D32	Ⅱb	16665	鉢	胴	－	横ナデ	横ナデ	2条沈線 2条蛇行文	にぶい褐	普通	○	○	○	○	○			○	○	雲母、丹塗り、細砂粒
54	421	G26	Ⅱb	20290	鉢	底	底10.2	縦ナデ	縦ナデ	－	橙 黒褐	普通	○		○	○	○			○		底：丁寧なナデ、木葉痕
54	422	K29	Ⅲa	28678	鉢	底	底7.8	ナデ	ナデ	－	橙 にぶい黄橙	普通	○		○	○	○			○		底：木葉痕

博図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外	色調 内	胎土 白	胎土 茶	胎土 黄白	胎土 石	胎土 黒	胎土 灰	胎土 黒	胎土 長	胎土 角閃石	備考
54	423	H51	Ⅰ	–	鉢	底	底6.5	–	ナデ	–	にぶい黄橙		良好	○	○	○	○	○				底：丁寧なナデ 粒状浮痕
54	424	D27	Ⅱ	21856 他	鉢	底	底8.6	縦ナデ	ナデ	–	にぶい黄橙 灰黄褐		普通	○	○		○	○	○			底：木葉痕
54	425	F31	Ⅲa	40084	鉢	底	底6.4	ナデ	丁寧なナデ	–	にぶい橙 灰黄褐		普通	○		○	○	○	○	○		コゲ 底：ナデ、木葉痕
54	426	F26	Ⅱ	19374 他	鉢	底	底10.6	ナデ	丁寧なナデ	–	にぶい黄橙 褐灰		普通	○		○	○				○	コゲ、底：ナデ
54	427	G36	Ⅲa	33335	鉢	胴～底	底9.7	縦ナデ	横ナデ	–	にぶい橙 黒		普通	○		○	○				○	剥落、コゲ、底：粒・砂状浮痕
54	428	D31	Ⅱb	16678	鉢	底	底6.4	ナデ	丁寧なナデ	–	黒褐		普通	○		○	○				○	スス、コゲ、底：筋状浮痕
54	429	G30	Ⅲa	32833 他	鉢	底	底10.0	横ナデ	ミガキ	–	にぶい橙		普通	○		○	○				○	スス、コゲ、底：木葉痕
54	430	E26	Ⅱ	19118 他	鉢	底	底11.6	ヘラケズリ	ハケメ	–	にぶい黄橙 灰黄褐		普通	○			○	○				スス、コゲ 底：木葉痕
54	431	E26	Ⅱa-b	19474 他	鉢	底	底10.6	ナデ	縦ナデ	–	明赤褐 黒褐		普通	○	○	○	○	○			○	スス、コゲ、底：ナデ
54	432	G29	Ⅱ	23284 他	鉢	底	底9.6	縦ナデ	丁寧な縦ナデ	–	赤		普通	○		○	○	○	○			底、木葉痕
54	433	弥 S118	②	6938	鉢	底	底8.8	縦ナデ	縦ナデ	–	灰黄褐 にぶい褐		良好	○			○				○	底：ナデ
55	434	E-F30 G31	Ⅲ	38108 他	鉢	完形	口40.0	横ナデ	横ナデ	別目突帯	赤褐、赤黒		普通	○		○	○				○	スス、底：編布痕 器高12.0cm
55	435	D27	Ⅱa	21985 他	鉢	口縁	口40.0	幅い横ナデ	丁寧な横ナデ	別目突帯	にぶい黄橙		普通	○		○	○				○	スス、コゲ
56	436	H26	Ⅱ	19278 他	鉢	口縁～胴	口22.0	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	別目突帯	にぶい褐 にぶい黄橙		良好	○		○	○			○	○	–
56	437	G31	Ⅲa	32358	鉢	完形	口23.5 底9.0	縦ナデ	横ナデ	別目突帯(棒)	にぶい橙 黒褐		普通			○	○	○			○	スス、コゲ 器高8.9cm
56	438	F-G30	Ⅱb Ⅲa	33601 他	鉢	完形	口18.8 底7.0	横ナデ	横ナデ	別目突帯(ヘラ)	にぶい黄橙		普通	○		○	○				○	煤付、スス、コゲ 器高9.0cm
56	439	H30	Ⅲa	33462 他	鉢	胴～底	–	粗いナデ	丁寧な横ナデ	–	灰黄褐 明褐		良好	○	○	○	○	○	○	○	○	スス、コゲ
56	440	G30	Ⅲa	32484 他	鉢	底	–	–	丁寧なナデ	–	橙 灰黄褐		普通	○		○	○	○	○	○	○	コゲ、編布
56	441	G30	Ⅲa	32671	鉢	底	–	–	ナデ	–	灰黄褐 褐灰		普通	○		○	○	○	○	○	○	編布
56	442	H22	Ⅱ	21007	鉢	胴～底	–	丁寧な横ナデ	横ナデ	–	にぶい黄橙 にぶい黄褐		普通	○		○	○		○			スス、コゲ、編布 底：ナデ
56	443	内 S34	②	39707	鉢	底	–	ヘラ縦ナデ	丁寧な縦ナデ	–	にぶい橙 黒褐		普通	○		○	○	○			○	コゲ、編布、底：ナデ
56	444	H30	Ⅲa	33443	鉢	底	–	–	–	–	にぶい黄橙 にぶい褐		普通	○		○	○	○				剥落、コゲ、編布
56	445	G30	Ⅲa	32645	鉢	底	–	–	–	–	橙 にぶい褐		普通	○			○	○				剥落、編布
56	446	C50	Ⅱb	–	鉢	底	–	–	ナデ	–	にぶい橙 黒褐		普通	○			○	○				コゲ、輝石、編布
56	447	J38	Ⅰ	–	鉢	底	–	–	ナデ	–	にぶい橙 灰黄褐		良好	○	○		○		○		○	コゲ、雲母、編布
56	448	F42	Ⅱa-b	11108 他	鉢	底	–	横ナデ	丁寧なナデ	–	明黄褐		普通	○		○	○	○			○	スス、コゲ、編布 底：横ナデ
56	449	D40	Ⅱb	12661	鉢	底	–	–	ミガキ	–	橙 にぶい褐		良好			○	○	○			○	編布
57	450	E31、F31 G30	Ⅲa	32654 他	鉢	底	–	–	丁寧なナデ	–	黄橙 にぶい黄褐		良好		○	○	○			○	○	コゲ、雲母、平織
57	451	F27	Ⅱb	20732 他	鉢	底	–	–	丁寧なナデ	–	黄褐 にぶい黄褐		良好	○	○		○	○		○	○	コゲ、平織
57	452	E32 H29・31	Ⅱ Ⅲa-b	16851 他	鉢	底	–	–	丁寧なナデ	–	黒褐 にぶい黄褐		良好	○		○	○	○	○	○	○	スス、コゲ、平織
57	453	E30、F31 G31	Ⅲa	38065 他	鉢	底	–	–	丁寧なナデ	–	橙 にぶい黄褐		良好	○	○		○			○	○	スス、コゲ、平織
57	454	F30	Ⅲa	38344 他	鉢	底	–	–	丁寧なナデ	–	橙 にぶい黄褐		良好	○			○	○			○	平織
57	455	F31	Ⅱb	29327	鉢	底	–	–	ナデ	–	にぶい褐 灰黄褐		普通	○			○	○	○		○	平織
57	456	F31	Ⅲa	39581	鉢	底	–	–	ナデ	–	にぶい橙 灰黄褐		普通	○		○	○	○			○	コゲ、平織
57	457	F42	Ⅱb	11155	鉢	底	–	–	ナデ	–	明黄褐 灰黄褐		良好	○		○	○	○			○	平織
57	458	G30	Ⅲa	32619	鉢	底	–	–	ナデ	–	にぶい赤褐 にぶい黄橙～黒		普通	○		○	○	○				コゲ、平織
57	459	E27	Ⅱb Ⅲa	20641 他	鉢	底	–	–	ナデ	–	褐		良好		○		○		○		○	スス、コゲ、底：ナデ
57	460	G27	Ⅱ	19023	鉢	底	–	横ナデ	横ナデ	–	灰褐 にぶい黄褐		普通			○	○				○	–
57	461	D26	Ⅱ	21234	鉢	底	–	–	ナデ	–	にぶい黄褐 オリーブ黒		普通	○			○	○			○	スス、コゲ
57	462	D33	Ⅱ	–	鉢	胴	–	–	丁寧なナデ	–	橙 灰黄		普通	○		○	○		○			–
57	463	E32	Ⅰ	–	鉢	底	–	–	丁寧なナデ	–	にぶい褐 黒		普通	○		○	○		○			–
58	464	E42 F41・42	Ⅱ	9906 他	特殊壺	胴～底	底11.0	縦ナデ、縦ミガキ	只見横条帯→ナデ	こぶ状突起	にぶい黄 黒褐 赤、赤黒		普通	○		○	○				○	雲母
59	465	E30	Ⅲa	39958	壺	口縁～胴	口12.4	ヘラ縦ミガキ	横ミガキ、丁寧な横ナデ	–	にぶい赤褐		普通	○		○	○	○	○			剥落雲土、雲母
59	466	C30、E30 F31	Ⅲa	28265 他	壺	口縁～胴	口11.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦・斜ナデ、指オサエ	–	赤褐 にぶい橙		普通	○	○		○	○	○	○		煤付
59	467	F31	Ⅲa	40301 他	壺	胴	–	縦ナデ→縦ミガキ	丁寧な横ナデ	–	赤黒 赤		普通	○		○	○	○				剥落

博図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外 内	焼成	胎土 白	胎土 黒	胎土 黄白石	胎土 石英	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰	胎土 黒	胎土 長石	胎土 角閃石	備考
59	468	E・F31	Ⅱa Ⅱa	32556他	壺	胴	–	縦・斜ミガキ	横ナデ	–	赤、赤黒 明赤灰	普通		○		○	○	○		○			調製、スス、煤砂質土
60	469	E31、F30-31 G20-31、J30	Ⅱb Ⅱa	31863他	壺	口縁～胴	口11.0	ヘラ斜ミガキ	横ナデ	–	にぶい橙	普通	○	○		○	○	○					調酒、スス
60	470	G27	Ⅱb	20099	壺	口縁	口24.6	縦ナデ	縦ナデ	–	にぶい橙	良好		○	○	○	○						雲母
60	471	E27	Ⅱb	20631	壺	口縁	口39.0	ヘラ横ミガキ	–	–	赤	普通	○			○	○				○		調酒、丹塗り
60	472	G42	Ⅱb	11751	壺	口縁	口8.8	ヘラ横ミガキ	ナデ	–	にぶい橙 浅黄橙	普通	○	○	○	○	○						帯状、調酒、丹塗り
60	473	弥SI16 SK2	②	–	壺	口縁	–	ヘラ斜ミガキ	横ナデ	円線	浅黄橙	普通	○		○	○	○	○					丹塗り、粘土紐密
60	474	弥SI28	②	13492	壺	口縁	–	ヘラ横ミガキ	丁寧なナデ	–	にぶい赤褐～灰赤褐灰	普通	○			○	○	○					丹塗り、粘土紐密、雲母
60	475	E26	Ⅱ	–	壺	口縁	–	ヘラ横ミガキ	丁寧なナデ	–	にぶい橙	普通	○			○	○	○					丹塗り、粘土紐密
60	476	弥SI16	①	7434	壺	口縁	–	丁寧なナデ	丁寧なナデ	–	にぶい赤褐	良好	○			○							波状口縁
60	477	H31	Ⅱa	31785	壺	口縁	–	ヘラ縦ミガキ	横ナデ	–	にぶい橙	普通	○	○	○	○							丹塗り
60	478	D22、F26	Ⅱ、Ⅱa	21458他	壺	口縁	口12.4	ヘラ横ミガキ	丁寧なヘラ横ナデ	1条沈線	にぶい橙	普通	○		○	○					○		丹塗り、細砂質土、雲母
60	479	E26	Ⅱb	19858他	壺	口縁	–	ヘラ縦ミガキ	–	–	浅黄橙	普通	○			○		○					丹塗り、細砂質土
60	480	H38	Ⅱa	13666	壺	口縁	–	ヘラ縦、横ミガキ	丁寧な横ナデ	–	にぶい橙	普通	○		○	○						○	コゲ、丹塗り
61	481	H30-31	Ⅱa	32725他	壺	頸	–	ヘラ縦ミガキ	丁寧な横ナデ	黒色線文 2条刺突帯	褐灰	良好	○			○					○	○	–
61	482	–	–	–	壺	頸～胴	口13.5	ヘラ横ミガキ	ヘラナデ	–	にぶい橙	普通	○	○		○	○						調製、丹塗り、補修孔、精製土
61	483	弥SK5	①	7148	壺	頸～胴	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ 横ナデ	–	暗赤褐 黒褐	良好	○	○		○		○			○		–
61	484	E27、F-H26	Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ	21871他	壺	頸	–	ヘラミガキ	ナデ	隆帯文	明赤褐	普通			○	○	○	○					丹塗り
61	485	E30、G31	Ⅲa	38136他	壺	頸～胴	–	ヘラ横ミガキ	横ナデ	押圧のある突帯	赤	普通		○		○		○			○		調酒、丹塗り
61	486	H-I29、J28	Ⅱ、Ⅲa	25690他	壺	頸	–	ヘラ縦・横ミガキ	ナデ	–	灰、浅黄 灰白	普通	○			○				○	○		粘質土
61	487	J37	Ⅰ、Ⅱ	No.33他	壺	胴	–	ハケナデ→丁寧なナデ	丁寧なナデ	–	にぶい黄橙 黄灰	普通	○			○					○		–
61	488	F31	Ⅱb、Ⅲa	39318他	壺	頸	–	ヘラ横ミガキ	丁寧なヘラ縦ナデ	–	橙	普通	○					○					丹塗り、雲母
61	489	G32	Ⅲa	40429他	壺	頸	–	ヘラ横ミガキ	横ナデ	–	にぶい橙	普通	○		○	○							丹塗り
61	490	G30	Ⅲa	33965	壺	底	底10.0	ヘラ横ミガキ ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	–	にぶい橙 明褐灰	普通		○	○	○		○	○	○			底：ヘラミガキ
61	491	E27	Ⅲ	21873	壺	底	底9.4	ヘラナデ	ヘラナデ	–	にぶい橙 浅黄橙	普通		○		○	○	○					丹塗り
61	492	G30	Ⅲa	32618	小型壺	頸～胴	–	丁寧なナデ	ナデ	1条横凹線 3条横凹線	赤褐 橙、灰褐	普通	○		○	○	○						調酒、丹塗り
61	493	H30	Ⅲa	33400	小型壺	胴～底	底5.4	丁寧な横ナデ	ナデ	1条横凹線	橙、赤 橙、黒褐灰	普通	○		○	○	○						丹塗り、底：丁寧なナデ
61	494	J22	Ⅱ	18231	小型壺	頸	–	丁寧な縦ナデ	縦ナデ	–	浅黄橙	普通	○	○		○		○		○	○		調酒、丹塗り、細砂質土
61	495	E30	Ⅲa	38146	小型壺	頸	–	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	台形状貼付文	橙	普通			○	○	○	○	○	○	○		調酒、丹塗り、細砂質土
61	496	E30	Ⅱb	37498	小型壺	頸	–	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	台形状貼付文 刺突のある円形浮文 沈線	橙	普通	○	○			○				○		丹塗り、細砂質土
61	497	D28	Ⅱb	17169	小型壺	頸	–	丁寧なナデ	丁寧なナデ	台形状貼付文 刺突のある円形浮文 沈線	にぶい橙	普通		○	○	○	○				○		調酒、丹塗り
61	498	H31	Ⅲa	31844	小型壺	頸	–	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	台形状貼付文 刺突のある円形浮文 沈線	にぶい橙	普通	○		○	○	○						調代痕、布目痕、丹塗り
61	499	E24	Ⅱa	20043	無頸壺	口縁	口11.2	丁寧な横ナデ	ヘラ縦ナデ	1条凹線	橙	普通	○		○		○			○			細砂質土

第8表　弥生時代前期土器観察表

博図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外 内	焼成	胎土 白	胎土 黒	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰	胎土 黒	胎土 長石	胎土 角閃石	備考
62	500	G27	Ⅱ	18961	甕	口縁	–	縦ナデ	縦ナデ	刺目突帯、4条沈線	にぶい黄橙	良好	○	○	○	○	○				○	磨滅
62	501	G26	Ⅱ	19255	甕	口縁	–	粗い縦ナデ	横・斜ナデ	–	にぶい赤褐	良好		○	○	○	○				○	–
62	502	I29	Ⅱb	30711	甕	口縁	–	粗い縦ナデ	横・斜ナデ	–	橙 赤灰	良好	○	○	○	○						角閃石
62	503	H26	Ⅰ	18872	甕	口縁～頸	口25.8	粗い縦ナデ	横・斜ナデ	–	にぶい橙	良好			○	○	○	○	○	○		–
62	504	H31	Ⅱb	30830	甕	口縁	–	–	斜ナデ→縦ナデ	突帯	にぶい橙	良好	○	○			○	○	○			底：縦・横ナデ
62	505	F41	Ⅱa	–	甕	口縁	–	ハケ横ナデ	ハケ斜ナデ	刺目、突帯	にぶい赤褐 暗赤灰	普通	○	○	○	○		○					–
62	506	D32	Ⅲb	16668	甕	口縁～頸	口26.0	ハケ縦ナデ→ヘラナデ	ヘラ縦ナデ	刺目	にぶい黄橙	良好	○		○	○		○		○		角閃石
62	507	E41、F42	Ⅱ	9740他	甕	口縁～胴	口33.8	ハケ縦ナデ	ヘラ斜ナデ	刺目、突帯	にぶい橙、黒褐 にぶい橙	良好	○	○	○	○	○					角閃石
62	508	F43	Ⅱb	12449	甕	口縁	–	ハケ縦ナデ	ヘラ横ナデ	刺目	にぶい赤褐 暗赤灰	良好	○	○		○						角閃石
62	509	古SI4	①	–	甕	口縁	–	ハケ縦ナデ	ヘラ横ナデ	刺目	にぶい橙	良好		○		○		○				角閃石
62	510	J30	Ⅱ、Ⅲa	28608	甕	口縁	–	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	刺目	赤黒	良好	○		○	○		○				角閃石、細石
62	511	F30・31	Ⅲa	38328他	甕	口縁～胴	口26.0	ハケナデ→ヘラ縦ミガキ	ハケナデ→ヘラ横ミガキ	刺目、刺目突帯	明赤褐、赤黒 橙、黒褐	良好		○	○	○	○					スス

博図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	計測値(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	地底	胎土 白石	胎土 黒白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰黒石	胎土 長石	備考
62	512	J30	Ⅱa	28807	甕	口縁	口22.0	ヘラ擦ナデ	ヘラ横ナデ	押圧のある突帯	にぶい黄橙	良好	○		○	○	○	○	−
62	513	K35	Ⅱa	34014	壺	頸	−	丁寧なナデ	ヘラナデ	3段3条沈線 鋸歯文	にぶい橙 黒褐	普通	○	○		○		○	−
62	514	中SD8	①	26055	壺	頸	−	ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	2条沈線、重弧文	灰黄、黄灰 灰白	良好	○	○				○	−
62	515	弥SI40	−	−	壺	頸	−	丁寧なナデ	ナデ	3条沈線、3条鋸歯文	橙 浅黄橙	普通	○	○		○			角閃石
62	516	弥SI40	③	−	壺	頸	−	ミガキ	横ナデ	3条沈線、3条鋸歯文	灰黄 にぶい橙	普通	○	○		○			角閃石
62	517	G42	Ⅱb	−	壺	頸	−	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	2条半円文 沈線、突帯	橙	良好		○		○		○	−
62	518	J28	Ⅱ	23564 他	壺	頸	−	ヘラ横ナデ	粗い横ナデ	2条沈線	橙 浅黄橙	普通	○	○		○	○		−
62	519	L28	Ⅱa	34182	壺	頸	−	丁寧なヘラ横ナデ	粗い横ナデ	2条沈線	にぶい黄橙	良好	○	○		○	○		−
62	520	F41・G44	Ⅱb	14259	胴継単	口径底	径5.4	丁寧なナデ	丁寧なナデ	−	橙	普通	○	○			○	○	厚さ：2.4・1.0cm 角閃石

第9表　縄文時代晩期遺構番号新旧比較表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
竪穴住居跡		土	坑	土	坑
縄SI 1	SI51	縄SK 1	SK40	縄SK4	SK197
		縄SK 2	SK53	縄SK5	SK253
		縄SK 3	SK42	縄SK6	SK252

第10表　弥生時代遺構番号新旧比較表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
竪穴住居跡		竪穴住居跡		土	坑	土	坑	周溝墓	
弥SI 1	SI 1	弥SI27	SI28	弥SK 1	SK20	弥SK22	SK98	周溝墓 1	SX1
弥SI 2	SI 3	弥SI28	SI25	弥SK 2	SK22	弥SK28	SK133	周溝墓 2	SX 2
弥SI 3	SI 4	弥SI29	SI29・42	弥SK 3	SK19	弥SK29	SK141	周溝墓 3	SX 3
弥SI 4	SI 5	弥SI30	SI30	弥SK 4	SK24	弥SK30	SK129	周溝墓 4	SX 5
弥SI 5	SI 6	弥SI31	SI35	弥SK 5	SK18	弥SK31	SK131	周溝墓5	SX 6
弥SI 6	SI 7	弥SI32	SI26	弥SK 6	SK28	弥SK32	SK130	土 坑 墓	
弥SI 7	SI 8	弥SI33	SI34	弥SK 7	SK204	弥SK33	SK182	弥ST 1	SK70
弥SI 8	SI 9	弥SI34	SI33	弥SK 8	SK195	弥SK34	SK183	弥ST 2	SK116
弥SI 9	SI10	弥SI35	SI32	弥SK 9	SK194	弥SK35	SK95	弥ST 3	SK80
弥SI10	SI11	弥SI36	SI49	弥SK10	SK193	弥SK36	SK96	弥ST 4	SK79
弥SI11	SI12	弥SI37	SI48	弥SK11	SK191	弥SK37	SK142	弥ST 5	SK135
弥SI12	SI13	弥SI38	SI50	弥SK12	SK200	弥SK38	SK143	弥ST 6	SK68
弥SI13	SI14	弥SI39	SI52	弥SK13	SK281	弥SK39	SK113	弥ST 7	SK71
弥SI14	SI15	弥SI40	SI53	弥SK14	SK233	弥SK40	SK114	弥ST 8	SK76
弥SI15	SI16	弥SI41	SI56	弥SK15	SK232	弥SK41	SK122	弥ST 9	SK65
弥SI16	SI17	弥SI42	SI43	弥SK16	SK255	弥SK42	SK121	弥ST10	SK67
弥SI17	SI18	弥SI43	SI46	弥SK17	SK231	弥SK43	SK123	弥ST11	SK69
弥SI18	SI19	弥SI44	SI44	弥SK18	SK230	弥SK44	SK124	弥ST12	SK85
弥SI19	SI20	弥SI45	SI45	弥SK19	SK88	弥SK45	SK145	弥ST13	SK128
弥SI20	SI22			弥SK20	SK86	弥SK46	SK138	弥ST14	SK147
弥SI21	SI23			弥SK21	SK112	弥SK47	SK161	弥ST15	SK146
弥SI22	SI24			弥SK22	SK90	弥SK48	SK137	弥ST16	SK105
弥SI23	SI31			弥SK23	SK190	弥SK49	SK110	弥ST17	SK104
弥SI24	SI38			弥SK24	SK77	弥SK50	SK127	弥ST18	SK106
弥SI25	SI39			弥SK25	SK89	溝状遺構		弥ST19	SK108
弥SI26	SI27			弥SK26	SK92	弥SD 1	SD14	弥ST20	SK100

第11表　古墳時代遺構番号新旧比較表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
竪穴住居跡		土	坑	土	坑
古SI 1	SI36	古SK 1	SK38	古SK 6	SK57
古SI 2	SI41	古SK 2	P651	古SK 7	SK293
古SI 3	SI37	古SK 3	SK69	古SK 8	SK72
古SI 4	SI57	古SK 4	P653	古SK 9	SK81
古SI 5	SI47	古SK 5	SK39	古SK10	SK84

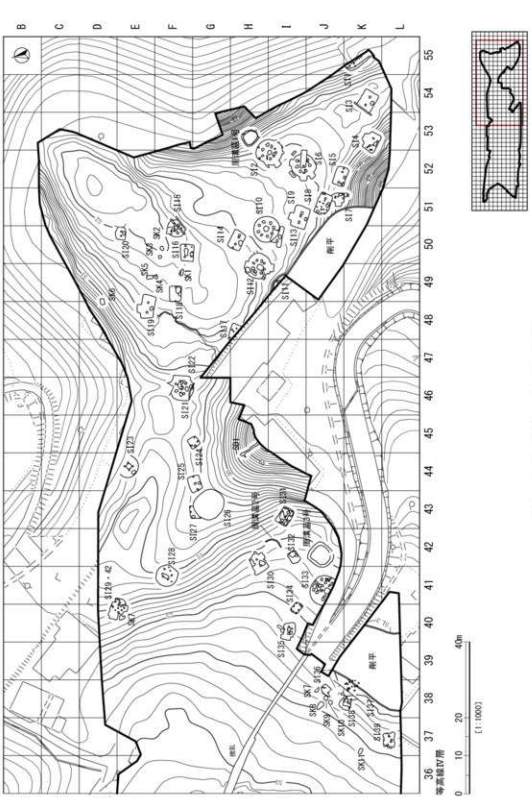
第12表　掘立柱建物跡番号新旧比較表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
掘立柱建物跡		掘立柱建物跡		掘立柱建物跡	
SB 1	SB 9	SB 5	SB24	SB9	SB32
SB 2	SB 8・1	SB 6	SB49	SB10	SB30
SB 3	SB 8・2	SB 7	SB35	SB11	SB29
SB 4	SB21	SB 8	SB33		

3　中期（第63・64図）

中期に帰属すると判断した遺構は，竪穴住居跡45軒，土坑50基，溝状遺構1条，周溝墓5基，土坑墓20基である。全体的には，調査対象区のおよそ東半分（台地先端に近い区域）に分布するが，特に集落と墓群は調査区内の谷を隔てて分布する。竪穴住居跡には，比較的大型の円形住居とそれより狭い方形住居があるが，両者ともに，後世の削平を受けた結果の形状であることを想定させるものも多い。周溝墓及び土坑墓は，個別の形状，相互の位置関係や一括遺物の出土状況などから判断した。

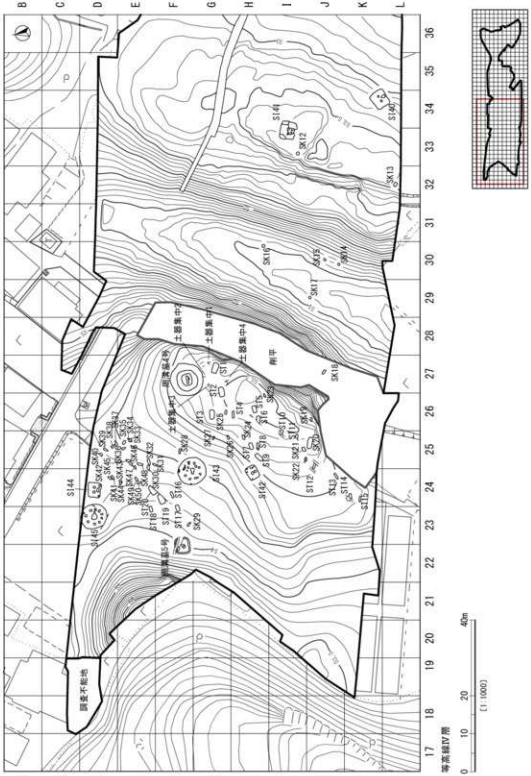
遺物では，住居跡から入来Ⅱ式土器，山ノ口式土器双方の特徴を有する資料，さらに，蓋や特異な器形の土器



第63図　弥生時代　東部遺構配置図

が出土した。また石器も多様な種類が出土した。土坑墓では，鉄鏃（第225図土坑墓19号，第227図土坑墓20号）と管玉（第219図土坑墓7号，第227図土坑墓20号）の出土が注目される。このほか，少量ではあるが擬朝鮮系無文土器との関係を想起させる資料も出土している。

なお，包含層出土の石器については，縄文時代晩期のものと区別する指標を設定できなかったため，ここで一括して紹介する。また，掘立柱建物跡11棟については，時期を特定できる情報がなかったため，「時期不明」の項で紹介することとする。



第64図　弥生時代　西部遺構配置図

(1) 遺構

①竪穴住居跡

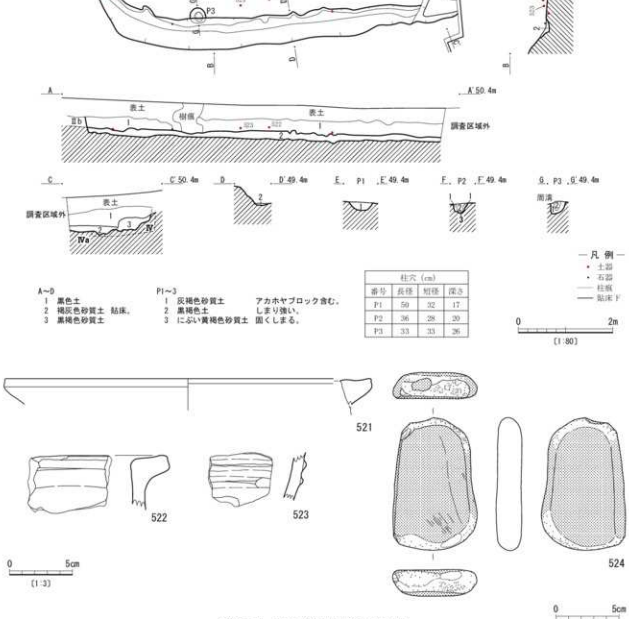
竪穴住居跡１号（第 65 図 521～524）

K－55 区のⅣａ層で検出した。東及び南側が調査区外に続く（特に東側は崖）ため全形は不明だが，１辺８ｍ程度の方形住居と考えられる。検出面からの深さ約 0.6ｍである。埋土は２枚で，下層は貼床とした。貼床を剥ぐと全体的に凹凸しており，掘削時のものと想定した。

付属構造物として壁帯溝と柱穴を確認できた。壁帯溝は，幅 20cm，深さ 10cmで，埋土は貼床の特徴に近く，貼床を切っている。柱穴は貼床直上で確認した。いずれも浅いが，Ｐ２及び３で柱痕跡を確認した。

遺物は，土器が貼床直上で出土した。いずれも入来Ⅱ式土器と考えられる。521 は大甕の口縁部で，口径 29cm である。胴部との接合面で割れており，そこから想定される胴部はやや樽状に膨らむ。522・523 は甕である。口縁部端の凹みや突帯の整形がやや甘い。

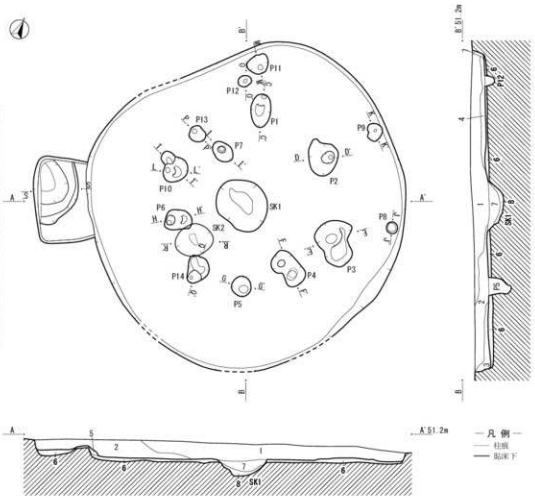
524 は，長さ 10cm，幅６cm，厚さ２cmの砥石である。砂岩が用いられ，主な砥面は正面並びに背面で光沢を帯びる。壁帯溝埋土上位から出土した。



第 65 図　弥生時代竪穴住居跡１号

SK・柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	117	98	21
SK2	81	67	27
P1	71	42	69
P2	70	64	71
P3	99	82	69
P4	80	48	30
P5	42	41	44
P6	56	42	63
P7	50	37	40
P8	25	24	5
P9	36	32	12
P10	68	37	66
P11	44	39	22
P12	29	24	20
P13	37	32	97
P14	57	44	61

柱穴間距離（cm）
P1-2	190
P2-3	171
P3-4	115
P4-14	201
P14-6	111
P6-10	111
P10-13	99
P13-1	163



A-B、SK1
1 黒褐色砂質土　池田降下軽石含む。
2 黒褐色砂質土　アカホヤブロック・池田降下軽石含む。
3 黒褐色砂質土　アカホヤブロック多く含む。
4 黒褐色砂質土　1層とアカホヤの混土。
5 にぶい黄褐色砂質土　貼床、固くしまる。
6 灰黄褐色砂質土　貼床、固くしまる。
7 黒色砂質土　しまりなし。
8 にぶい黄褐色砂質土　固くしまる。炭化物を多く含む。

P1～14
1 黒褐色砂質土
2 黒褐色砂質土　乳白色土を多く含む。
3 黒褐色砂質土　しまりなし。乳白色土含む。
4 淡黒褐色土　乳白色土を多く含む。
5 茶淡黒褐軟質土　粗く、灰を含む。
6 灰黄褐色砂質土　アカホヤ含む。
7 褐灰色砂質土
8 褐灰色砂質土　しまりなし。アカホヤ含む。
9 にぶい黄褐色砂質土　粘性あり。
10 黒褐色砂質土　にぶい黄橙・黒色のブロック含む。

SK2・床下掘り込み
1 灰黄褐色砂質土　アカホヤブロック含む。
2 黒褐色砂質土　しまりあり・V層含む。
3 褐灰色粘質土

0　2m
(1:80)

第 66 図　弥生時代竪穴住居跡２号（１）

竪穴住居跡２号（第 66～72 図 525～560）

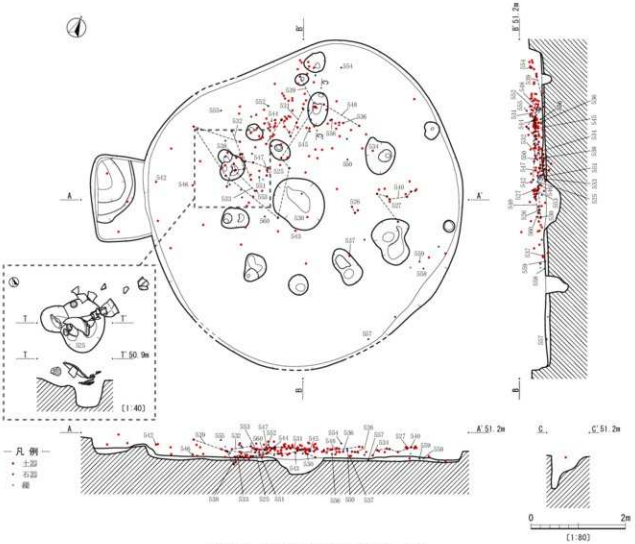
Ｈ・Ｉ－52・53 区のⅢ層上面で検出した。径約６ｍの平面略円形の住居である。西側に方形の張り出しを１か所伴う。張り出し部には，底面北西隅に落ち込みを確認した。また，住居床面の貼床と同質の土が充填していたことから，これを除去したところ，ほぼ同範囲の掘り込みを検出した。落ち込み内には他に埋土はなかったことから，この落ち込みは掘削時のものと考えられる。貼床と同質の土で平坦にしなかった理由は，不明である。

関連構造物として，張り出しのほか，住居中央に土坑１基（ＳＫ１）と，土坑の周囲を円形に囲むように柱穴を計 14 本検出した。

土坑（ＳＫ１）は，平面が径約 1.2ｍの略円形，断面が深さ 0.3ｍの擂鉢状を呈し，貼床を切って掘られている。焼土範囲等は確認できなかったが，底面付近には炭化物を多く含む層が堆積していた。

また，貼床を除去したところ，土坑（ＳＫ２）を検出した。この住居は，貼床を除去した面も比較的平坦であったことから，用途等は不明ながら住居掘削時の偶発的凹凸ではないと判断した。埋土上層には貼床材と同質の土の堆積を確認できたが，それより下位の埋土については，住居内に類似の埋土を確認できなかった。

検出した柱穴は，いずれも貼床を切っている。それらのうち，主に位置関係と断面形状などから，９本（Ｐ１～６・10・13・14）を主柱穴と想定する。ただし，深さについてはややばらつきがみられ，柱痕跡まで観察できたＰ４は最も浅く，Ｐ 13 は抜き取りを想定させるような，途中に段のある断面形状をしておらず，最も深い。さらに，Ｐ 10 では，525 が上から口縁部片，脚，胴部片の順に重ねられた状態で出土した（第 67 図左）。Ｐ 10 を埋めた後，意図的に割って置かれたとも想定されるが，埋土中の遺物の出土状況の傾向と積極的な差異を見い出し得ないため，これ以上の言及を控えたい。ちなみに，主柱穴は，相互の間隔がほぼ均等で，例えば張り出し部に対応するような，他の構造物と相関するような状況は観察されなかった。

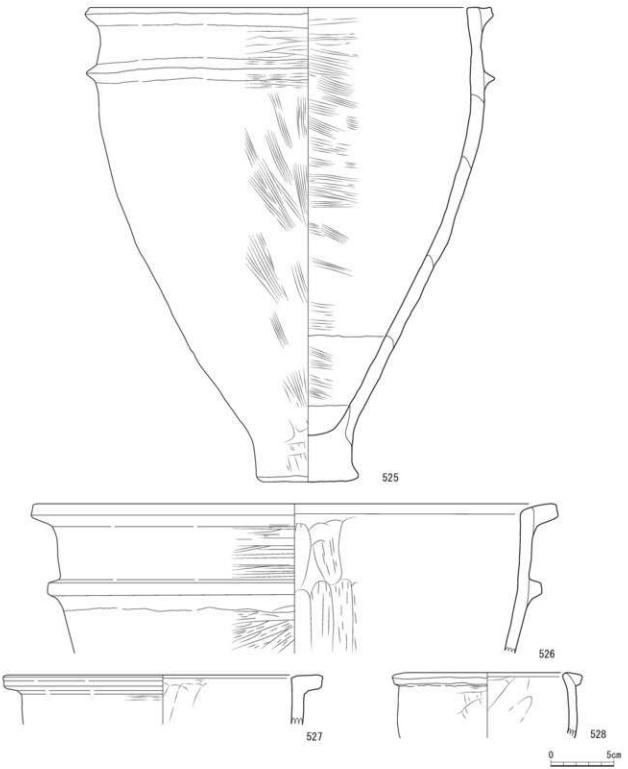


第 67 図　弥生時代竪穴住居跡２号（２）

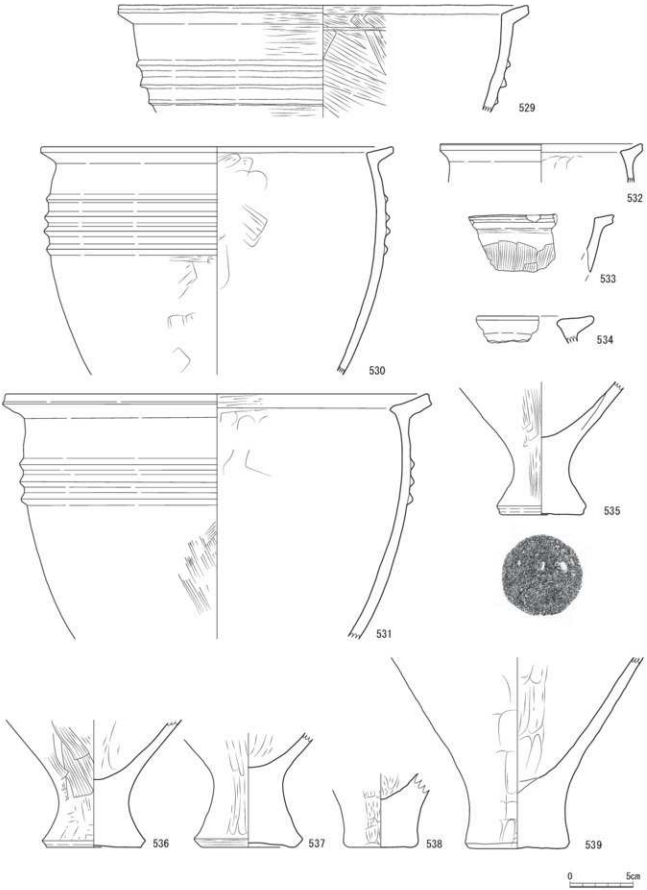
壁帯溝は，検出できなかった。

埋土は，土坑（ＳＫ１）の埋土を含めて８層観察でき，そのうち貼床は埋土５並びに６である。なお，埋土５は床面と張り出しの段差に沿って貼られた土であり，やや特異な堆積状況である。また，壁際には，一部で垂直堆積土層（埋土７）も確認した。全体的には，南西側からの土砂の自然堆積による埋没と考えられる。

遺物は比較的多く出土したが，やや北半部に偏る傾向が看取される。また，Ｐ10に伴うと想定した甕を含め，上位層である埋土１からの出土が多い。なお，製作途上の資料を含め，磨製石鏃が比較的多数出土していることから，２号の機能は石鏃製作場だった可能性があるが，



第68図　弥生時代竪穴住居跡２号（３）



第69図　弥生時代竪穴住居跡２号（４）

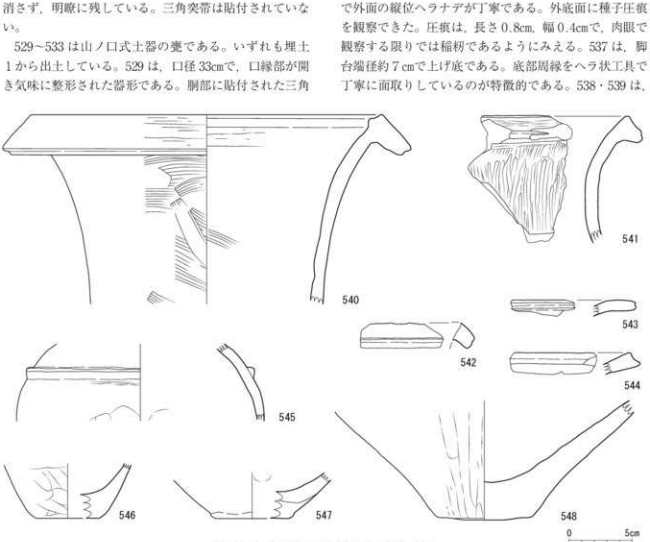
チップ類が出土していない。

525～528は入来Ⅱ式土器の甕である。525は，上述したP 10の埋土上で一括出土した。器高38cm，口径32～33cmだが，平面形はやや不整円形で歪み，底径は約8cmで脚長が短い。下部には，使用によると考えられるやや摩滅した部分がある。胎土には雲母を含む。口縁部は，端部に凹線状の浅い凹みを施して長さは短い。胴部の三角突帯は，口縁部寄りのやや高い位置に1条巡るが，器形に比してやや小振りである。入来Ⅱ式土器と山ノ口式土器の双方の特徴を併せ持つ資料と考えられる。526は，小振りの大甕である。口径41cmで，胎土に雲母を含み，口縁部及び胴部の突帯（1条のみ）は短く，断面は略方形に仕上げられる。内面には，指頭によるナデ調整の痕を残す。527と528は，比較的小形の甕である。口縁部も短く仕上げられている。527は，口径25cmで口縁端部に浅い凹線状の凹みを巡らせるものの，胎土には雲母を含まない。528は，口径15cmで口縁部が特に短く，断面を略方形に整形しており凹線状の凹みはほとんど確認できない。また，口縁部下面と胴部との接合線をナデ消さず，明瞭に残している。三角突帯は貼付されていない。

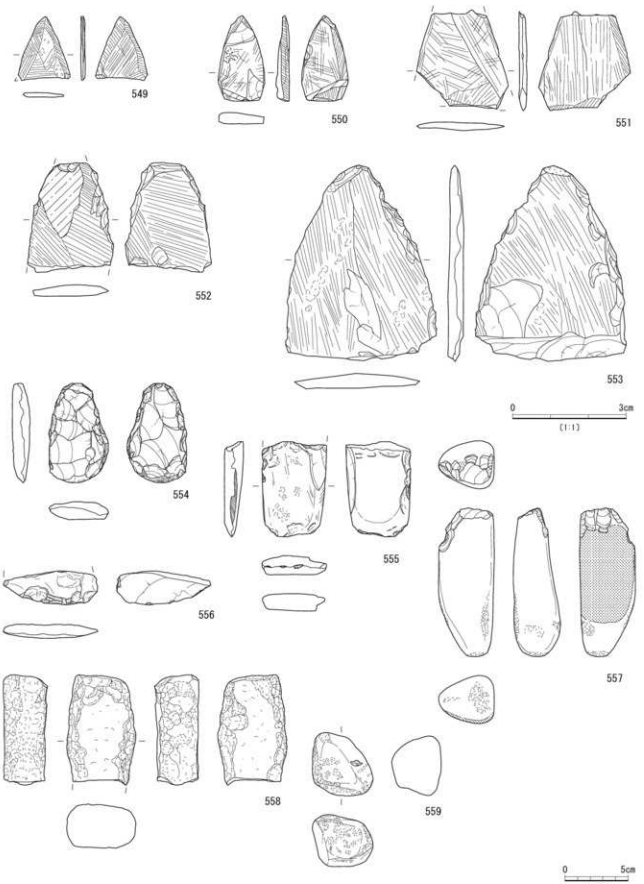
529～533は山ノ口式土器の甕である。いずれも埋土1から出土している。529は，口径33cmで，口縁部が開き気味に整形された器形である。胴部に貼付された三角突帯の仕上げは，やや粗い。530は，口径28cmで口縁部内面に明確な稜を形成している。丸く張った胴部の最大径付近に，やや粗い整形の三角突帯が4条巡る。法量に比して器壁が薄い。531は，口径33cmで，口縁部は端部に凹線状の凹みが巡り，内面屈曲部が鋤先状に軽く延びる。胴部は，530ほどではないが丸く張り，同じくやや粗い整形の三角突帯が3条巡る。破片によって色調の違いが顕著である。532は，小振りの甕である。口径16cmで，口縁部は立ち上がりがやや強く内面は稜を形成して屈曲する。533は，小片のため詳細が不明だが，530と類似した器形であり，外面のハケナデが，口縁部下面からやや隙間を開けて縦位に施されているのが特徴的である。床面直上から出土している。

534は，断面舌状でややしゃくれた口縁部形状や器面調整，胎土に雲母を含むものの，在地の甕とは異なる色調などの特徴から，黒髪式土器の甕と考えられる。埋土1から出土した。

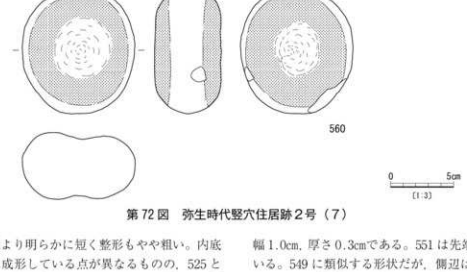
535～539は，甕の脚台である。538のみ埋土2から，他は埋土1から出土している。535は，脚台端径7cm弱で外面の縦位ヘラナデが丁寧である。外底面に種子圧痕を観察できた。圧痕は，長さ0.8cm，幅0.4cmで，肉眼で観察する限りでは稲籾であるようにみえる。537は，脚台端径約7cmで上げ底である。底部周縁をヘラ状工具で丁寧に面取りしているのが特徴的である。538・539は，



第70図　弥生時代竪穴住居跡2号（5）



第 71 図　弥生時代竪穴住居跡２号（６）



第72図　弥生時代竪穴住居跡２号（７）

脚部の成形が他より明らかに短く整形もやや粗い。内底面を尖り気味に成形している点が異なるものの，525と特徴が類似する。脚台端径は，それぞれ６cm弱と８cm弱である。

540～548は，入来Ⅱ式～山ノ口式土器の壺である。546のみ床面直上から出土している。540は口径27cm，長く延びる頸部から強く屈曲して下垂する口縁部に至る器形で，口縁端部及び屈曲部には凹線状の凹みがそれぞれ１条巡る。内面の剥落が著しいが，胎土は緻密な砂質土で混和材も他に比べて細かい。541は，540と類似するが口縁部が短く，屈曲部内面に三角突帯も貼付されていない。また，頸部外面及び口縁部内面はミガキ調整で仕上げられている。543・544は，広口壺である。543は口縁端部まで器厚が変化せず，わずかな平坦部を設けるのに対し，544は端部をわずかに肥厚させつつ外反させたままで仕上げる。どちらも，口縁端部には凹線状の凹みを巡らせる。545は，最大径が20cm弱に止まることから，小型の壺と考えられる。肩部には，頂部を上向きに成形した三角突帯が１条巡るが，整形はやや粗い。胎土に雲母を多量に含んでいるが，色調は全体的に黄褐色を呈し薩摩半島的である。器表面の剥落のため，調整の詳細は不明である。546は底径５cmで，残存状況で見る限りは立ち上がりの強い器形である。胴部に比して底部が著しく厚く成形されている。中央土坑とＰ10の間付近で出土している。内面にはコゲが付着している。547は，底径６cmで底部に粘土を追加して厚くしている。548は，底径７cmで，残存形状から比較的大型の壺の底部と考えられる。外面は，ミガキに近い縦位の丁寧なヘラナデで仕上げられる。底部は，胴部と外底面との境界に明確な稜を形成するものの丸平底に整形されている。器壁は全体的に分厚く，そのため重い。外面は，丹塗りされている可能性がある。

549～553は，頁岩製の磨製石鏃である。549・550は，両側辺を鋭利に研ぎ出さず，平坦に仕上げている。549は長さ1.7cm，幅1.3cm，厚さ0.1cm，550は，長さ2.0cm，幅1.0cm，厚さ0.3cmである。551は先端部等を欠損している。549に類似する形状だが，側辺は鋭利に研ぎ出されている。残存部で，長さ2.1cm，幅2.4cm，厚さ0.2cmである。552・553は，未成品と考えられる。研磨は正面と裏面のみで，552には節理面が，553の側辺部と基部は剥離面が残っている。553は長さ5.1cm，幅4.0cm，厚さ0.4cmである。549以外は埋土１から出土した。

554・555はホルンフェルス製の磨製石斧である。554は小型で，周縁から平坦剥離により整形し，軽く弯曲する刃部のみ研いでいる。長さ7.8cm，幅4.7cm，厚さ1.4cm，重さ63.4ｇである。555は正面観に比して厚みが薄く，剥離により整形し全面を磨いて整形している。刃部は弱凸強凸片刃に仕上げており，使用による刃部の潰れを観察できる。残存部で長さ7.5cm，幅4.7cm，厚さ1.4cm，重さ86.8ｇである。

556は打製石斧の刃部だが，風化が著しく観察が困難である。石斧類は，いずれも埋土１から出土した。

557～559は敲石，560は凹石・磨石である。557は安山岩製で，上端と下端を主な使用部位とするが，上端のみ敲打による剥離が生じている。敲打の対象が異なっていた可能性もある。また，裏面には軽い磨面も観察できる。長さ11.8cm，幅4.5cm，厚さ3.8cm，重さ216.2ｇである。558は砂岩製で，略直方体状を呈する素材礫の両側辺を主な使用部位とする。敲打に伴う剥離痕も多数観察される。被熱している。残存部で長さ9.7cm，幅5.5cm，厚さ3.5cm，重さ273ｇである。559は石英製で，下面及び左側面に敲打痕が集中する。長さ5.0cm，幅4.5cm，厚さ4.1cm，重さ約135ｇである。560は，安山岩製で，正面及び裏面に顕著な磨面と凹みが形成される。右下縁の欠損は使用によるものではないとみられる。長さ10cm，幅9.0cm，厚さ9.3cm，重さ764ｇである。いずれも埋土１から出土した。

竪穴住居跡３号（第73～75図561～575）

Ｋ－54区のⅢ層上面で検出された。北西壁は近代の溝に切られている。残存範囲で長軸５m，短軸４m，検

出面からの深さ0.2ｍで，全体的に削平が及んでおり残存状況には恵まれていないが，平面長方形の住居と考えられる。張り出し部は，直に接続しないような周辺部を含めて検出できなかったが，残存状況に起因する恐れもあると考えられる。

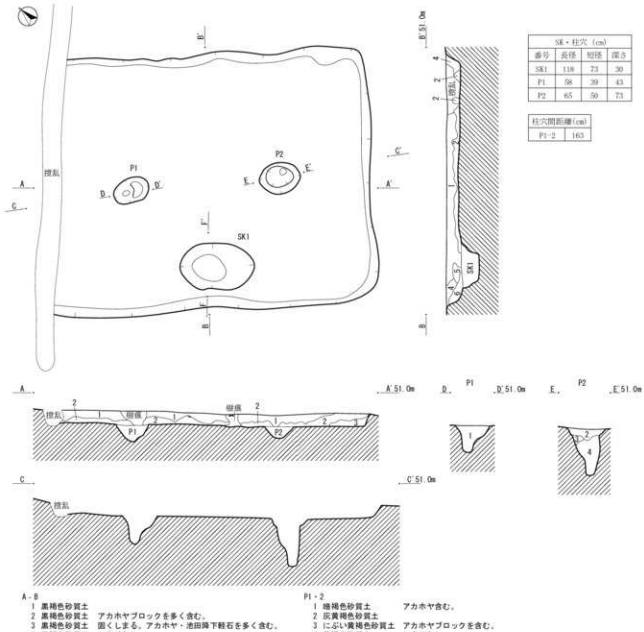
柱穴は２本（Ｐ１・２）検出された。これ以外に柱穴を検出できなかったことと住居内での位置関係から，主柱穴と認定した。Ｐ２がより深いが，断面形状はどちらも２段掘り状を呈すること，柱痕跡は確認できなかったことから，柱は抜き取られた可能性がある。

南西側の壁際で，土坑（ＳＫ１）を検出した。平面形は楕円形で断面は逆台形を呈する。底面近くから，割れていたものの，壺の下半部（572）が逆位で一括して出土している（第73図左上及び第74図）。土坑の埋土は分層できなかったことから，土坑は，572を含めて人為的に埋め戻された可能性がある。

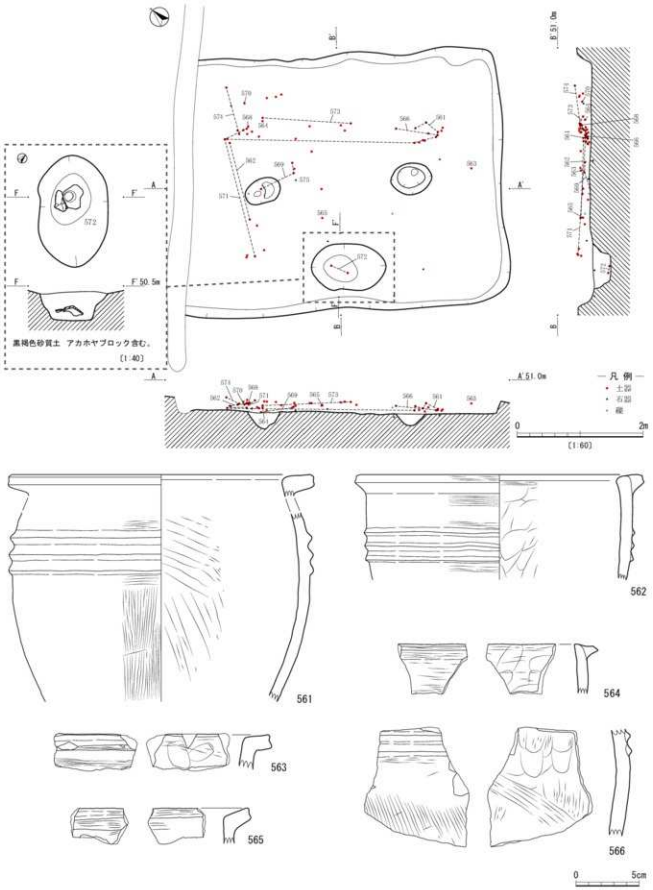
壁帯溝は確認できなかった。

埋土は６層に分層でき，おおむねレンズ状堆積となっていることから自然埋没と考えられる。貼床は確認されなかった。なお，貼床がなかったことと対応するのか，床面は極めて平坦であった。

遺物は，ほとんどが上位層である埋土１～２から出土



第73図　弥生時代竪穴住居跡３号（１）



第74図　弥生時代竪穴住居跡3号（2）

した。平面的には，東側に比較的偏っており，埋土の堆積状況とおおむね整合する。

561～566は，入来Ⅱ式土器の甕である。561は口径24cm，器面が全体的にやや摩滅しているが，口縁部の凹線状の凹みや外面の丁寧な縦位のハケ目などは観察できる。562は口径23cm，逆「L」字に屈曲する口縁部は，内面に稜を形成する一方で上面は丸みを持たせた整形である。口縁部の長さも短い。埋土1及びP2埋土中から出土した。564は内面に指頭押圧痕を残すほか，短い口縁部の端部が，凹線状の凹みが変形したような形状となっているのが目を引く。

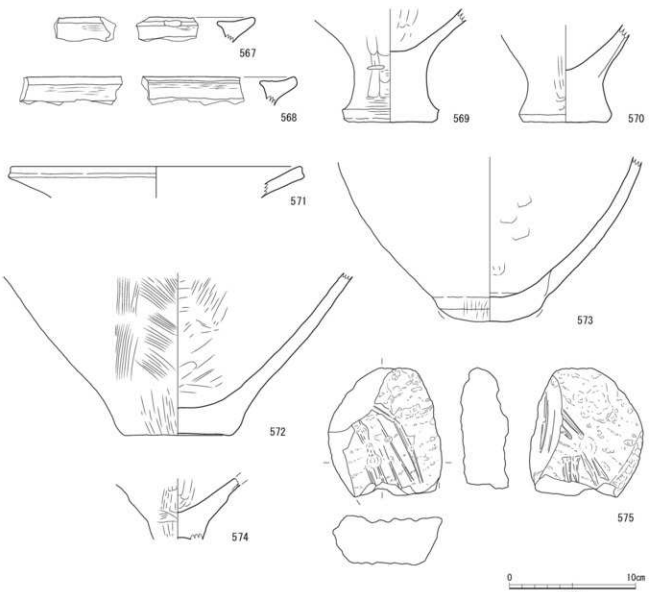
567・568は，ややしゃくれた平坦面と舌状に整形された断面，内面に勁先状の整形を有する口縁部形状，粒子の細かい胎土や灰白色を呈する色調など，小片であるが典型的な黒髪式の甕である。搬入品の可能性もある。

569・570は入来Ⅱ式土器の甕の脚台と考えられる。570では，断面に観察される接合痕から，脚台の製作方法を想定することができる。

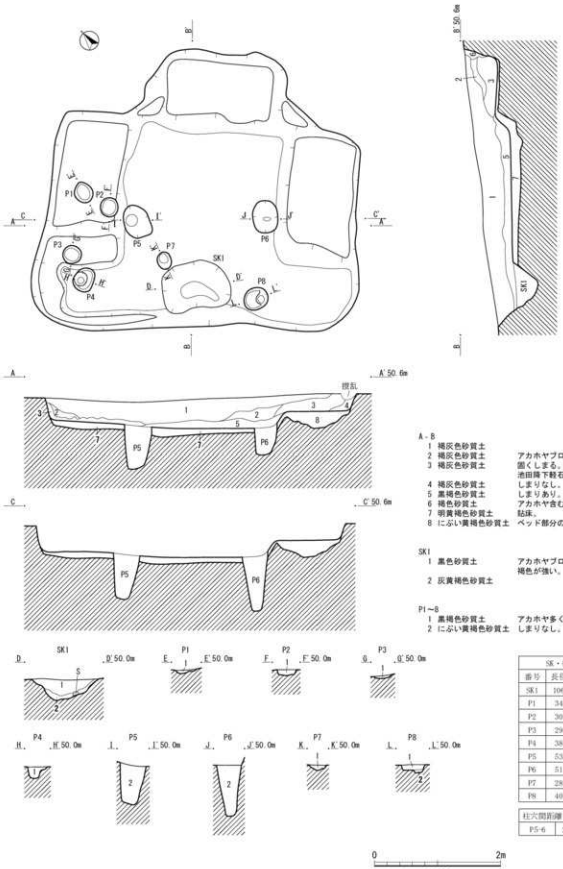
571～573は壺である。571は，入来Ⅱ式～山ノ口式土器の無頸壺の口縁部と考えられる。572は，底径約9cmで外面の丁寧なヘラナデとわずかに上げ底になる明瞭な平底が特徴である。573は，強い丸平底が目を引く資料である。この丸平底部分の色調については，輪状に変化していることから，二次的に整形されたもの（572のような形状だったのを端部のみ擦って仕上げた）であることがわかる。埋土1中から分散して出土している。

574は小形の台付鉢を想定している。上端部の断面形状等から，接合面付近と考えられる。

575は軽石製品で，左側面及び下部を欠損している。細い溝が，平坦に整形された正面及び裏面と右側面に複



第75図　弥生時代竪穴住居跡3号（3）



A－B

1	褐灰色砂質土	
2	褐灰色砂質土	アカホヤブロックを多く含む。
3	褐灰色砂質土	固くしまる。アカホヤ・ 酒田降下軽石を多く含む。
4	褐灰色砂質土	しまりなし。
5	黒褐色砂質土	しまりあり。アカホヤ少量含む。
6	褐色砂質土	アカホヤ含む。
7	明黄褐色砂質土	貼床。
8	にぶい黄褐色砂質土	ベッド部分の貼床。

SK1

1	黒色砂質土	アカホヤブロック含む。 褐色が強い。
2	灰黄褐色砂質土	

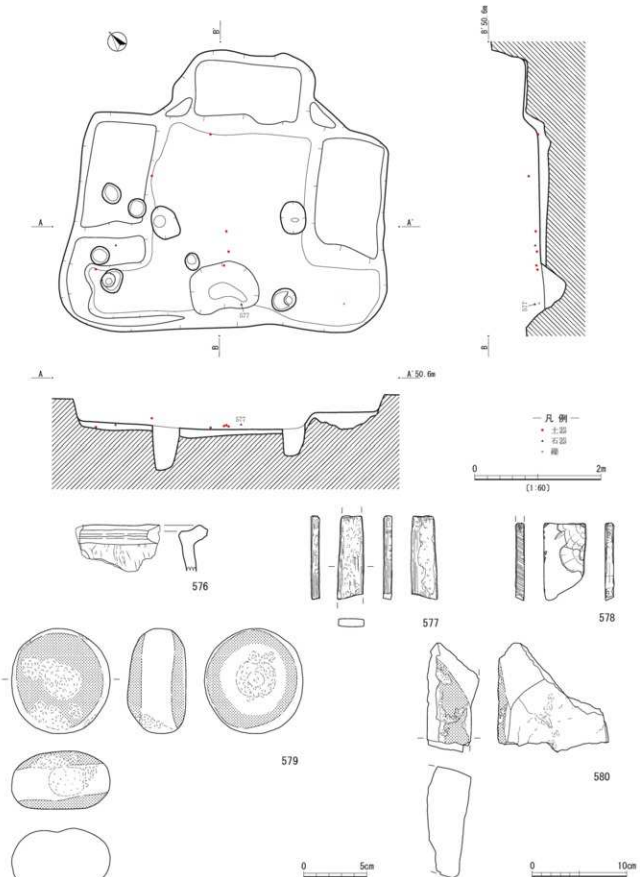
P1～8

1	黒褐色砂質土	アカホヤ多く含む。
2	にぶい黄褐色砂質土	しまりなし。

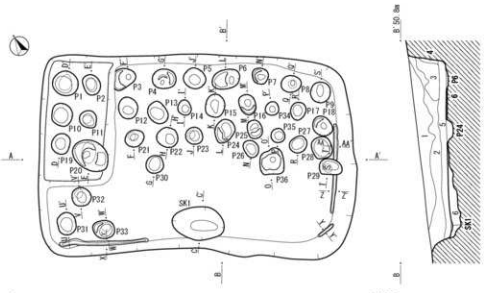
SK・柱穴 (cm)			
番号	長径	短径	深さ
SK1	106	77	33
P1	34	29	5
P2	30	28	9
P3	29	29	4
P4	38	32	18
P5	53	49	62
P6	51	40	81
P7	28	22	8
P8	40	34	13

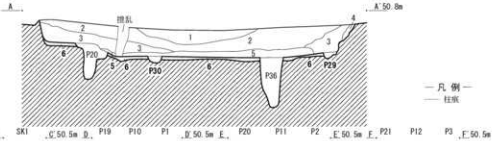
柱穴間距離 (cm)	
P5-6	214

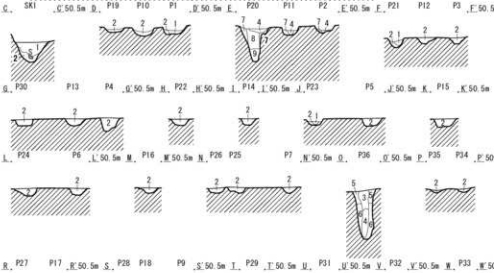
第76図　弥生時代竪穴住居跡4号（1）

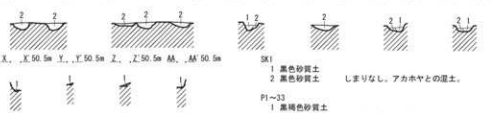


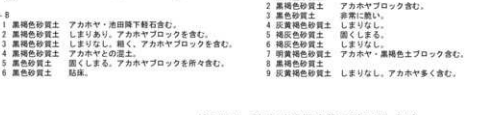
第77図　弥生時代竪穴住居跡4号（2）











A-B
1 黒褐色砂質土　アカホヤ・池田降下軽石含む。
2 黒褐色砂質土　しまりあり。アカホヤブロックを含む。
3 黒褐色砂質土　しまりなし。細く、アカホヤブロックを含む。
4 黒褐色砂質土　アカホヤとの混土。
5 黒色砂質土　固くしまる。アカホヤブロックを所々含む。
6 黒色砂質土　貼床。

SK1
1 黒色砂質土
2 黒色砂質土　しまりなし。アカホヤとの混土。

P1～33
1 黒褐色砂質土
2 黒褐色砂質土　アカホヤブロック含む。
3 黒色砂質土　非常に脆い。
4 灰黄褐色砂質土　しまりなし。
5 褐灰色砂質土　固くしまる。
6 褐灰色砂質土　しまりなし。
7 明黄褐色砂質土　アカホヤ・黒褐色土ブロック含む。
8 黒褐色砂質土
9 灰黄褐色砂質土　しまりなし。アカホヤ多く含む。

SK・柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	83	53	31
P1	41	29	12
P2	33	27	12
P3	(40)	31	9
P4	37	31	22
P5	34	32	12
P6	44	30	11
P7	26	26	9
P8	32	27	15
P9	33	32	8
P10	36	33	13
P11	27	27	13
P12	35	31	10
P13	36	29	11
P14	25	21	10
P15	36	30	13
P16	33	25	9
P17	29	24	12
P18	34	28	10
P19	33	29	8
P20	61	45	52
P21	31	27	15
P22	34	31	10
P23	27	27	9
P24	39	30	13
P25	29	23	9
P26	28	23	8
P27	29	25	11
P28	35	31	4
P29	36	25	13
P30	28	28	10
P31	36	29	8
P32	30	30	11
P33	34	29	9
P34	22	21	5
P35	23	22	4
P36	40	38	77

柱穴間離（cm）	
P20-36	294

0　2m
（1:60）

第78図　弥生時代竪穴住居跡5号（1）

数ほぼ平行に刻まれている。残存部で長さ10.2cm，幅9.0cm，厚さ3.9cm，重さ70.3ｇで埋土２から出土した。

竪穴住居跡４号（第76・77図576～580）

Ｋ－52・53区のⅢ層上面で検出した。当初は切り合い関係も想定されたが，調査の結果１軒と認定した。比較的残存状況に恵まれた遺構である。

長軸約５ｍ，短軸約４ｍの平面凸形を呈し，北東側に設けた張り出しと，張り出しの屋内側両袖にベッド状遺構を構築している。

柱穴の可能性があるピットは４か所確認できたが，主柱穴は，住居の軸線上に位置することと深さや径など個別の規模から，Ｐ５並びにＰ６の２本が該当すると想定される。この２本は，ごくわずかながら，お互いに向かって（住居中央に向かって）傾斜している。

この他，南西の壁際（張り出しの対面）で，平面楕円形，床面の不安定な土坑を１基確認した。貼床を切って掘られている。土坑内部からは，自然礫が出土した。

柱穴及び土坑は，貼床を切って構築されており，造り替えの様子はない。東側のベッド部分の一部は，掘削土を盛って構築している。

壁帯溝は，検出されなかった。貼床は，床面と張り出しなどの付属構造物に比較的厚く確認できたほか，床面と付属構造物との間の段差部分にも貼られていた。

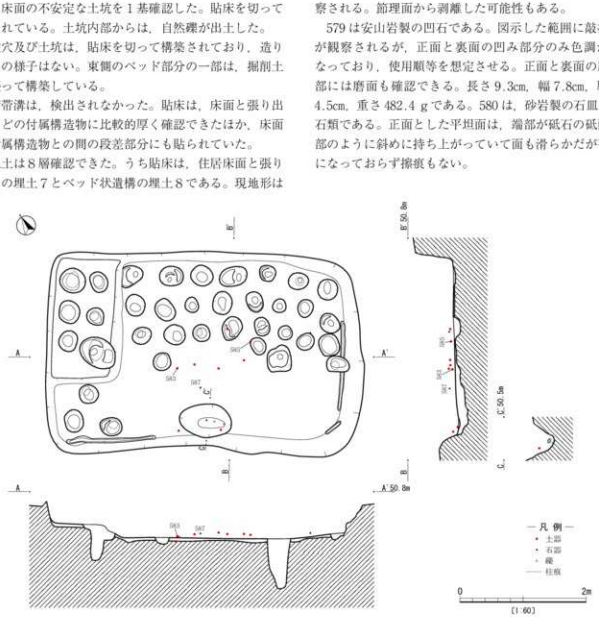
埋土は８層確認できた。うち貼床は，住居床面と張り出しの埋土７とベッド状遺構の埋土８である。現地形は北東から南西に向けて下る傾斜面となっているが，埋土の状況も，おおむね北東から南西に向けて堆積しており，旧地形があまり変化していないことが想定される。また，埋土１が厚く堆積していることから，付属構造物が埋まるまでと埋まった後では，埋没に要した時間が違っていた可能性がある。

遺物の出土量は比較的少なかった。床面直上で出土したものもあるが，ほとんどが埋土１から出土した。

576は，口縁端部を断面略台形に仕上げ，上部平坦面は凹ませる特徴的な整形である。霧島山麓に分布する甕の可能性もある。

577・578は砂岩製の砥石である。577は各面に砥面があることから携帯用の可能性がある。残存部で長さ6.6cm，幅2.1cm，厚さ0.7cm，重さ15.9ｇである。床面直上で出土した。578は，左右側面に幅の狭い砥面が観察される。節理面から剥離した可能性もある。

579は安山岩製の凹石である。図示した範囲に敲打痕が観察されるが，正面と裏面の凹み部分のみ色調が異なっており，使用順等を想定させる。正面と裏面の周縁部には磨面も確認できる。長さ9.3cm，幅7.8cm，厚さ4.5cm，重さ482.4ｇである。580は，砂岩製の石皿・台石類である。正面とした平坦面は，端部が砥石の砥面端部のように斜めに持ち上がっていて面も滑らかだが平滑になっておらず擦痕もない。



第79図　弥生時代竪穴住居跡５号（２）

竪穴住居跡５号（第 78～80 図 581～587）

Ｊ・Ｋ－52 区のⅢ層上面で検出された。長軸 5.0 m，短軸 3.1 m，深さ 0.35～0.51 m で比較的残りが良い。北西角にベッド状遺構が１か所あり，南壁沿い中央に平断面ともに不整形の小土坑が掘られている。住居の埋没とともに埋まったものと想定される。

壁帯溝は，南東壁の一部と南東角，及び南西壁の一部で検出された。いずれも幅７cm，深さ４cm で，部分的に掘られている点が７号と類似する。

この住居跡の特徴は，柱穴である。認定総数は 36 本で，屋内北側の２／３程度の面積を占める形で北壁側に 31 本がほぼ３列に並び，３本が列から外れてまとまっている。いずれも貼床直上で検出した。これらのうち，主柱穴は，深さと位置関係からＰ 20（柱は抜き取られている）とＰ 36 と考えられる。このほかの柱穴は，総じて浅い（貼床を剥ぐ程度）が，柱痕跡らしき痕跡を観察できるものもあることから，何らかの屋内施設を構成する柱穴である可能性が想定される。

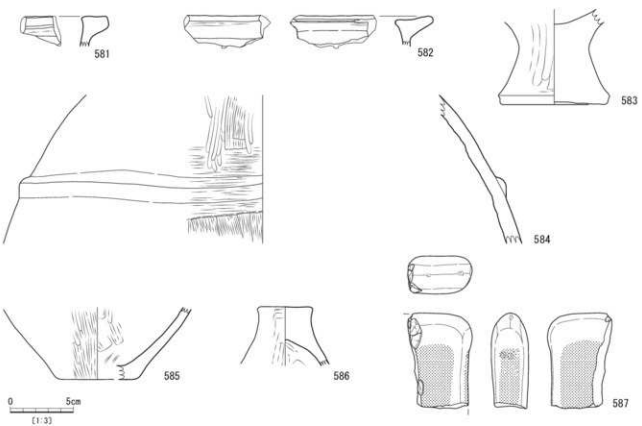
ただし，主柱穴と異なるこれらの浅い柱穴は，柱穴だけみると配置に規則性があるようにも見えるが，ベッド状遺構や壁帯溝など他の付属構造物に干渉しており，屋内施設と想像した場合，いささか具体性に欠ける遺構群でもあるといえる（両者を切り合い関係とみて，住居の構造変更あるいは用途自体の変更が生じたために，浅い柱穴を新たに設置したなどの可能性もなくはないが，情報が不足しており想像の域を出ない）。

なお，本遺跡では，７号や 17 号など，複数例確認されている。それぞれに本数の多寡や住居内での位置関係などに相違点が見られるし，上記した問題点や「そもそも柱穴なのか」という原則論まで含むものの，今後に向けて留意すべき点である。本遺跡以外では，本例ほど密集してはいないものの，上野原遺跡第２地点（本県霧島市）の例がある。

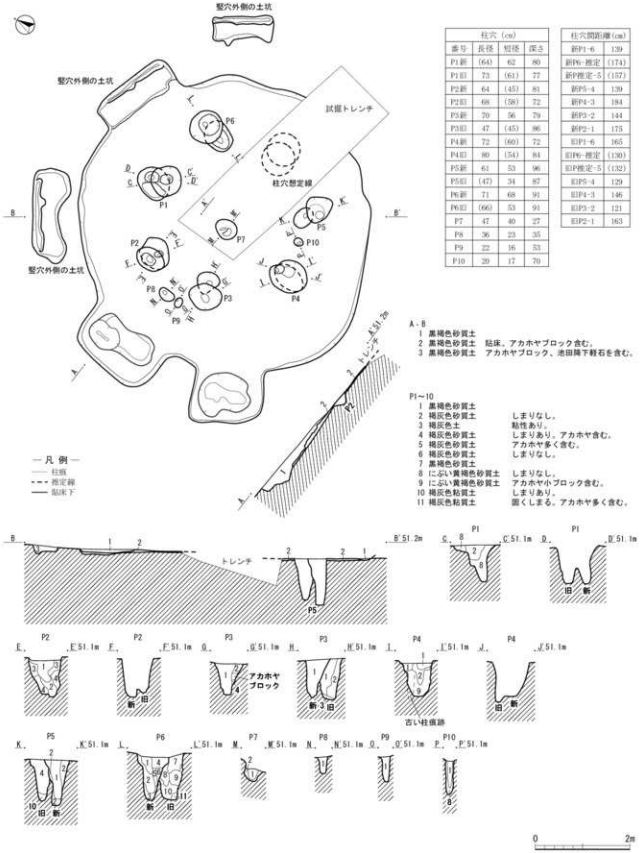
埋土は，残りの良さもあって６層に分層できた。うち埋土６が貼床である。全体的にレンズ状に堆積していることから，主に地形的に高い北側からの土砂の流入による自然堆積と想定できる。また，北東壁面及び南東壁面で垂直堆積層（埋土４）を確認したが，埋没に伴う自然堆積層と考えられる。なお，埋土２では小石が数点出土した。加工や使用の痕跡は認められず，出土状況にも意図的なものを読み取ることができなかった。

遺物の出土は少ない。比較的住居の中央部に多く出土しているが，接合資料がなかったことや埋土の堆積状況を踏まえると，流れ込みと考えられる。

581 は入来Ⅱ式土器，582 は黒髪式土器の甕である。特に 582 は，器形や胎土の特徴などから搬入品の可能性がある。埋土２から出土している。583 は入来Ⅱ式土器の甕の脚台で，床面直上の埋土５から出土した。



第 80 図　弥生時代竪穴住居跡５号（３）



柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1新	(64)	62	80
P1旧	73	(61)	77
P2新	64	(45)	81
P2旧	68	(58)	72
P3新	70	56	79
P3旧	47	(45)	86
P4新	72	(60)	72
P4旧	80	(54)	84
P5新	61	53	96
P5旧	(47)	34	87
P6新	71	68	91
P6旧	(66)	53	91
P7	47	40	27
P8	36	23	35
P9	22	16	53
P10	20	17	70

柱穴間距離（cm）
新P1-6　139
新P6-推定　(174)
新P推定-5　(157)
新P5-4　139
新P4-3　184
新P3-2　144
新P2-1　175
旧P1-6　165
旧P6-推定　(130)
旧P推定-5　(132)
旧P5-4　129
旧P4-3　146
旧P3-2　121
旧P2-1　163

第81図　弥生時代竪穴住居跡6号（1）

584は大型壺の肩部付近である。やや長胴形の器形になると想像される。内面は全体的に剥落しているが，それでもなお器壁は厚い。肩部付近にやや鈍い整形の三角突帯が1条巡る。色調も褐色を呈しており特徴的である。埋土2から出土した。585は，壺の底部である。埋土5から出土した。外面はミガキ調整が施され，色調は黒味が強いことから，「黒塗り壺」の可能性がある。

586は，頂部平坦面に焼成後についたと考えられる擦痕等が観察されないことや，内面にコゲ痕がないこと等から，甕や鉢の底部でなく，蓋のつまみ部分と想定した。埋土2から出土した。

587は，砂岩製の磨・敲石である。作業面は正面，裏面と右側面に観察されるほか，側面には磨りの後に敲打作業を行っている。床面直上から出土した。残存部で長さ7.6cm，幅5.1cm，厚さ3.0cm，重さ176.4gである。

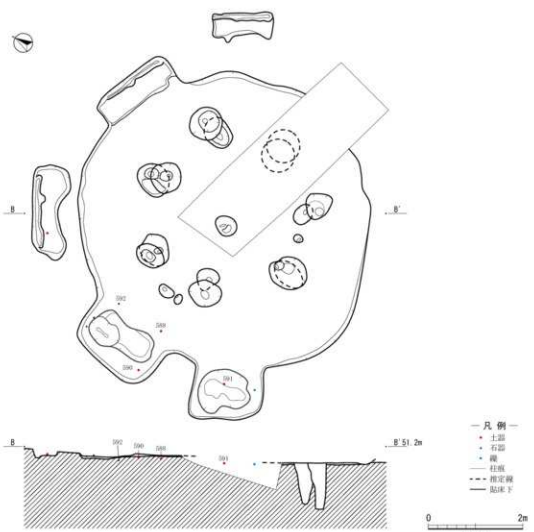
竪穴住居跡6号（第81～83図588～592）

Ⅰ・J－52・53区のⅢ層上面で検出した。直径約6mの円形住居跡である。宅地造成等に伴う削平のため残存状態が非常に悪く，全体的に床面近くまで削られており，なかでも住居の南東部分は，検出面がほとんど床面という状況だった。

張り出し部は，3か所確認した。さらに，北西～北東にかけて，壁帯溝と想定される細い溝を伴う方形の浅い土坑も2か所確認した。これらは，住居に伴い検出した張り出しとの比較，住居外周に沿うような検出状況や田原迫ノ上遺跡（本県鹿屋市）例などから，住居の張り出し部と認定できる。また，後述する柱穴の状況から，西側で検出した2か所の張り出し部は，建て替えに伴う再掘削の結果である可能性がある。なお，これらの張り出し部の底面には，掘削時のものと考えられる浅い掘り込みも確認した。

壁帯溝（張り出し部を除く）及び貼床については，検出できなかった。

柱穴は13本検出した。そのうち，住居中央で検出さ



第82図　弥生時代竪穴住居跡6号（2）

れたＰ７を除く12本については，Ｐ７を囲むように環状に，かつ切り合った状態で検出された。これらの柱穴は，切り合っていても深さが１ｍ近くになるものが多かった。また，各柱穴の切り合い状況は，いずれも内側が埋め戻され，外側に柱痕跡や根固め痕が残っているという状況だった。ちなみに，確認できた柱痕跡などから，柱径は20cm前後と推測される。このことから，これら12本（切り合い状況を踏まえると６本一組）はいずれも主柱穴と考えられ，内側から外側へという先後関係を想定できる。なお，試掘記録にはないが，位置関係から試掘箇所にも１本（２本）あったと想定できるので，本来，この住居の柱は14本（７本一組）だった可能性がある。

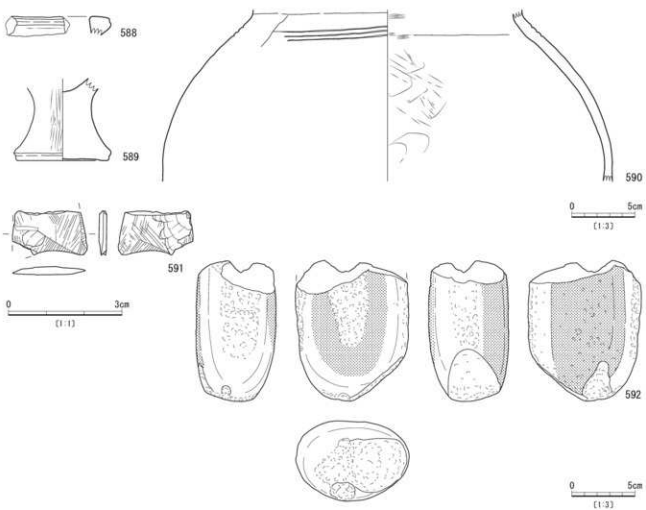
住居中央で検出したＰ７については，試掘調査で床面から0.2ｍほど掘り下げられていることから，本来の形状等は不明である。ただ，本遺跡の他の円形住居の状況を踏まえると，住居中央には柱穴ではなく土坑が配置される場合が多いことから，Ｐ７もこれらと同様の土坑だった可能性がある。

冒頭記した残存状況のため，掲載した資料は，試掘トレンチ跡から出土した589を除き，ほぼ床面直上から出土している。また，591が出土していることから，磨製石鏃の製作場所だった可能性も想定できるが，残存状況が悪いため確証に欠ける。

588・589は入来Ⅱ式土器の甕の口縁部と脚台である。

590は入来Ⅱ式土器の壺と考えられる。外面はミガキに近いヘラナデ調整が施されており色調も黒味が濃く，「黒塗り壺」の可能性がある。また，頭部と胴部の境界付近に横位のごく浅い沈線が３～４条巡っている。

591は頁岩製の磨製石鏃未成品である。上半部を破損している。残存部で長さ1.0cm，幅2.0cm，厚さ0.2cm，重さ0.6ｇである。床面直上から出土した。592は砂岩製の磨・敲石で，上端が欠損しているが，上端面の残存部分に，わずかだが破断面を潰している敲打痕が観察されることから，欠損後も上端を作業部位として使用していたことがわかる。残存部で長さ11.2cm，幅9.1cm，厚さ6.4cm，重さ868.9ｇである。



第83図　弥生時代竪穴住居跡６号（３）

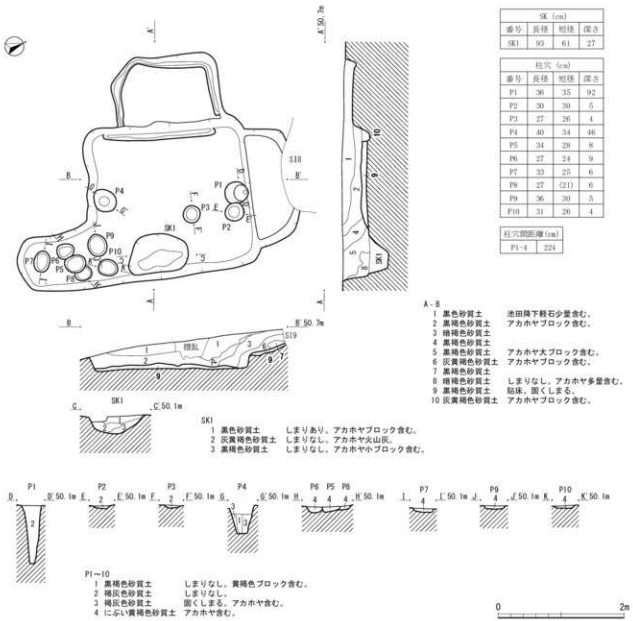
竪穴住居跡７号（第 84～86 図 593～597）

Ｊ・Ｋ－51 区のⅢ層上面で検出した。北側張り出しの壁際は，中程で８号住居の南角に切られている。規模は，南北３m，東西 3.5 m，深さ 0.15～0.45 m で，平面形は略凸形を呈し，比較的残りは良い。

張り出し部は，北壁と西壁で検出した。貼床面との高低差はどちらも 20cm あり，比較的高く施工されている。北側張り出し部については，床面が傾斜していた（住居中央側が低く外壁側が高い）。貼床は，どちらの床面にも確認された。

壁帯溝は，西側張り出し部の壁際には連続して巡っていた（張り出し床面からの深さ５cm）が，北側張り出し部には検出されなかった。また，住居本体床面では，西壁際にのみ，幅，深さともに 10cm の壁帯溝を検出した。壁面全長には及ばないが，張り出し部分よりは長く掘られている。住居本体床面並びに西側張り出し部の壁帯溝は，溝の立ち上がりと壁が一体化している。このように壁帯溝が部分的に掘られる例は，５号と類似する。

また，南壁の東隅には，南側へ細長く伸びる拡張部があり，浅い柱穴が６本，一部で切り合う状況もみせつつ拡張部の床面を充填するように検出された。本数は異なるものの，５号の状況を想起させる検出状況である。ただし，５号の柱穴群が規則的な配置をうかがわせる状況だったのに対し，この住居ではそのような規則性は見い出せなかった。なお，この拡張部には，床面との高低差は確認されなかった。



SK（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	93	61	27

柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	36	35	92
P2	30	30	5
P3	27	26	4
P4	40	34	46
P5	34	28	8
P6	27	24	9
P7	33	25	6
P8	27	(21)	6
P9	36	30	5
P10	31	26	4

柱穴間距離（cm）	
P1－4	224

第 84 図　弥生時代竪穴住居跡７号（１）

本体床面の貼床は，平坦ではなく凹凸が目立つ状況だったほか，北側や西側では確認できない範囲もあった。むしろ，貼床を剥いだ掘削面の方が平坦で，他の住居で散見される掘削に伴うと考えられる掘り込みなどは検出されなかった。

東壁際で，土坑が検出された。平面楕円形，断面逆台形を呈する。周辺に貼床がみられなかったため住居使用期間との関係は不詳だが，埋土や596の出土状況を見る限りでは，まず土坑がある程度埋まった後に，住居の埋没が始まったことが想定される。

柱穴は，南壁東隅の拡張部で検出した浅い６本以外に，４本検出した。そのうち主柱穴は，個々の規模が大きく，住居の軸線上に位置するＰ１並びにＰ４の２本が該当すると考えられる。

埋土は10層に分層できた。うち貼床は埋土９である。全体的に北東から南西に傾斜した堆積状況を呈していることから，北東側からの土砂の流入による自然堆積で埋没したものと想定できる。

遺物の多くは，埋土中～上位から出土しているが，比較的床面近くから出土したものを図化した。

593・594は入来Ⅱ式～山ノ口式土器と想定される甕の口縁部である。器壁は比較的薄く焼成は良好で，三角突帯の整形も丁寧である。593はＰ１の埋土中から出土した。595は，外面が縦位の粗いヘラナデで仕上げられているのが特徴的である。埋土１から出土した。

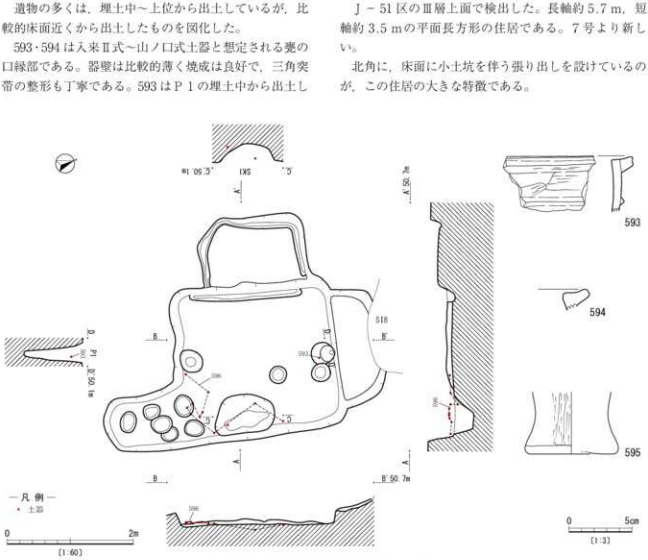
596は蓋の完形品である。東壁際の小土坑から南側の張り出しにかけての範囲で床面直上から出土した。口径30cm，つまみ部の径７cm，器高17cmである。外面は，全体的に縦位のミガキに近い丁寧なヘラナデで仕上げ，大きく開く口縁部近くには三角突帯を１条巡らせる。つまみ部は，上端中央をレンズ状に軽く凹ませるとともに端部のみ平坦に整えている。また，口縁部内面端部には，図に示したように，ススが５cm程度の幅で付着しているのを観察できる。付着帯の内径が21cmであることから，この蓋は，口径20cm程度の甕に外蓋として用いられていたものと考えられる。

597は，砂岩製の棒状敲石である。埋土１から出土した。敲打痕は下端や側面で観察できるほか，裏面以外の面は磨り面としても使用されている。長さ15.0cm，幅4.5cm，厚さ2.9cm，重さ311.4ｇである。

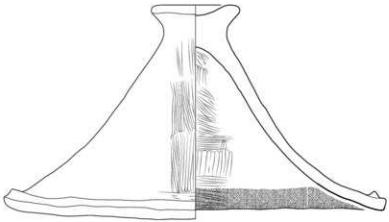
竪穴住居跡８号（第87～89図 598～621）

Ｊ－51区のⅢ層上面で検出した。長軸約5.7ｍ，短軸約3.5ｍの平面長方形の住居である。７号より新しい。

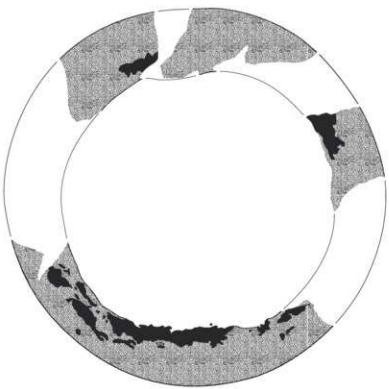
北角に，床面に小土坑を伴う張り出しを設けているのが，この住居の大きな特徴である。

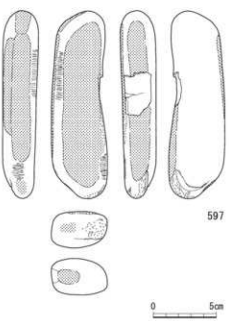


第85図　弥生時代竪穴住居跡７号（２）



596





第86図　弥生時代竪穴住居跡７号（３）

Ｐ16・17については，本遺跡の住居に散見される，住居長辺側の片方の壁際に掘り込まれる小土坑と想定していたが，断面形状等から柱穴と判断した。土坑のような形状である点については，抜き取りに伴う掘削が原因と想定している。

張り出しは，住居床面との比高差が40cmあまりと，かなりの段差を設けている。貼床が一部に確認されたが，基本的に掘削で床面を整えている。なお，張り出しの東西両脇のＰ６とＰ14があるテラス状の高まりは，貼床面とほぼ同じレベルであり，掘り残しと想定される。

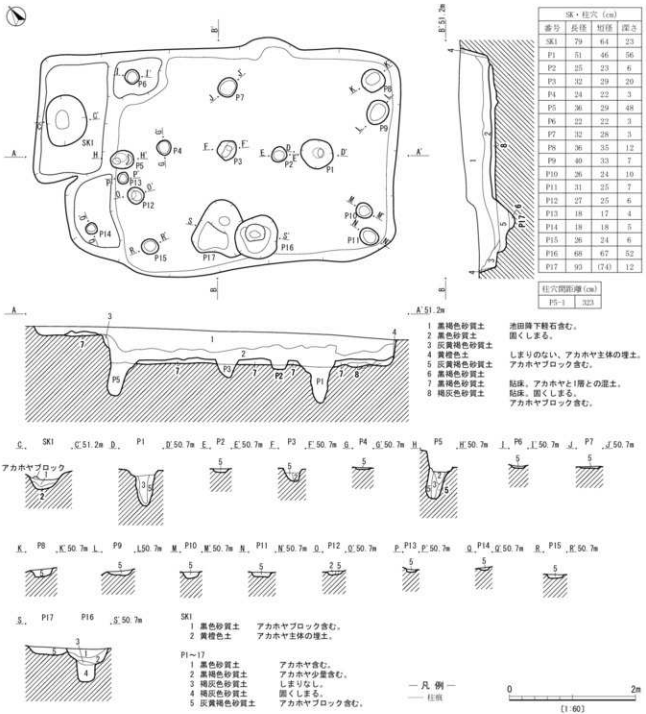
柱穴は床の四隅など数か所に集中するように検出されたが，規模や位置関係から，主柱穴はＰ１及びＰ５と想定する。どちらも柱痕跡を観察できたほか，Ｐ５は柱を抜き取られている可能性を想起させる埋土状況である。

壁帯溝は検出されなかった。

埋土は９層に分層でき，うち貼床は埋土７及び８である。貼床は，２枚とも明瞭で固く厚く，特にＰ１と東南壁の間の区域では貼り替えの痕跡も記録できた。全体的に水平堆積のような状況だが，自然堆積と考えられる。

遺物は，多くが埋土１～２から出土しているものの，一部を除き床面から30～40cm浮いた状態だった。

598～607は入来Ⅱ式土器の甕である。598は口径

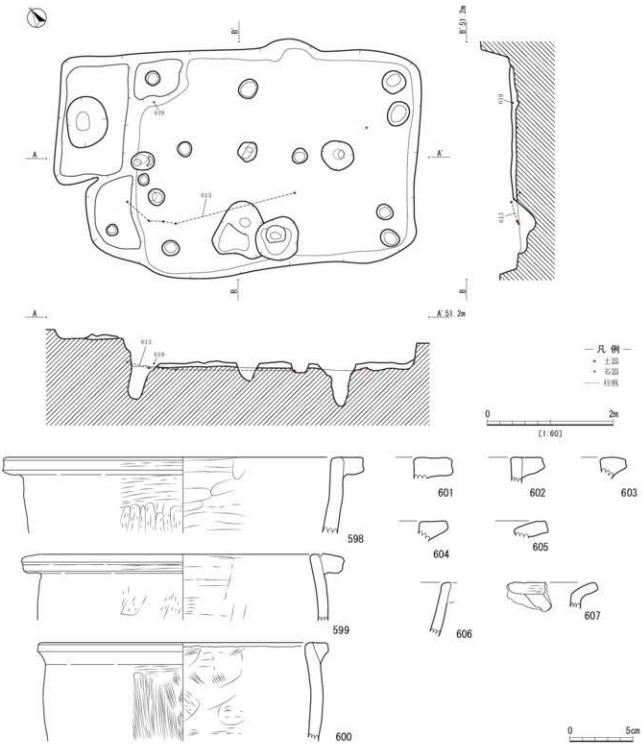


第 87 図　弥生時代竪穴住居跡８号（１）

28cmで胴部は張らず，口縁部は逆「L」字形で断面略方形に整形され，端部を浅く広く凹ませる。599 は口径26cmで，破片の一部が包含層から出土している。600 は，口径 23cmで，厚みの割に張り出しの短い口縁部は，断面形状がやや丸みを帯びる箇所がある。胴部外面の縦位のハケ目も特徴的である。突帯は貼付していない。606 は口縁部が剥落している。

607 は甕の口縁部と想定される。胴部と厚みに変化のない口縁部は，内面で明確な稜を形成して「く」の字状に屈曲し，断面方形に整形された端部に至る，小片だが特徴的な器形である。

608～612 は，入来Ⅱ式土器の壺である。608 は口径26cmで，破片の一部が６号のＰ６（埋土４）から出土している。住居間接合資料である。軽く下垂する口縁部は，上面がやや丸みを帯び，端部は凹線状に凹む。612 は広口壺の口縁部と考えられる。内外面とも横位の丁寧なヘ

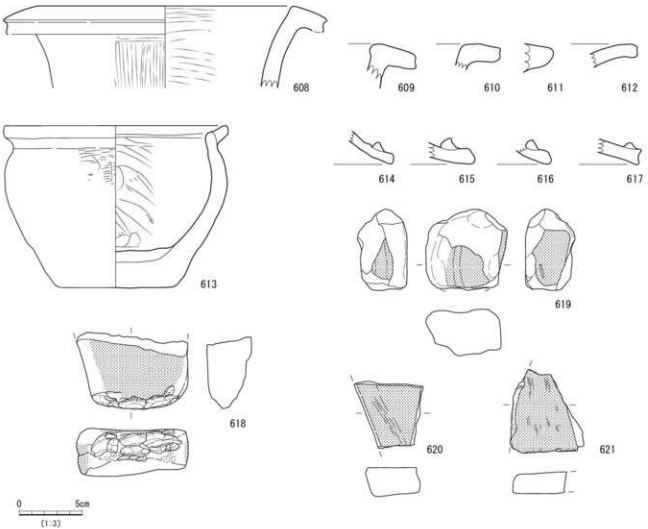


第88図　弥生時代竪穴住居跡8号（2）

ラナデ調整が施される。

613は鉢の完形品で，口径18cm，底径9cmである。特徴的な器形をしており，口縁部の角度から山ノ口式土器に属すると想定しているが，張り出しは短く端部も丸く仕上げる。胴部は，やや口縁部寄りに最大径部分があり，底部までを直線的に成形している。器壁は，法量の割に厚く，特に底部は内側に胎土を継ぎ足してまで分厚くしている。外面調整は，下半部がほとんど剥落しているため詳細不明だが，内面は丁寧である。また，外面の上半部は全体的にススが付着し，下半部は被熱していることから，火にかけられていたことがわかる。

614～617は蓋と考えられる。617が端部を凹線状に凹



第 89 図　弥生時代竪穴住居跡８号（３）

ませるなど入来Ⅱ式土器の特徴を看取できるのに対し，614～616 は，突帯の仕上げが接合から整形まで粗いほか，口縁端部の整形が方形を意識しつつも徹底していないなど細部の仕上げに著しい差違があるのが特徴である。

なお，これらは小片であるため不確定要素を含むものの，本遺跡における住居内からの蓋の出土数としては多い。また，蓋の形式的バリエーションを示す好例である。

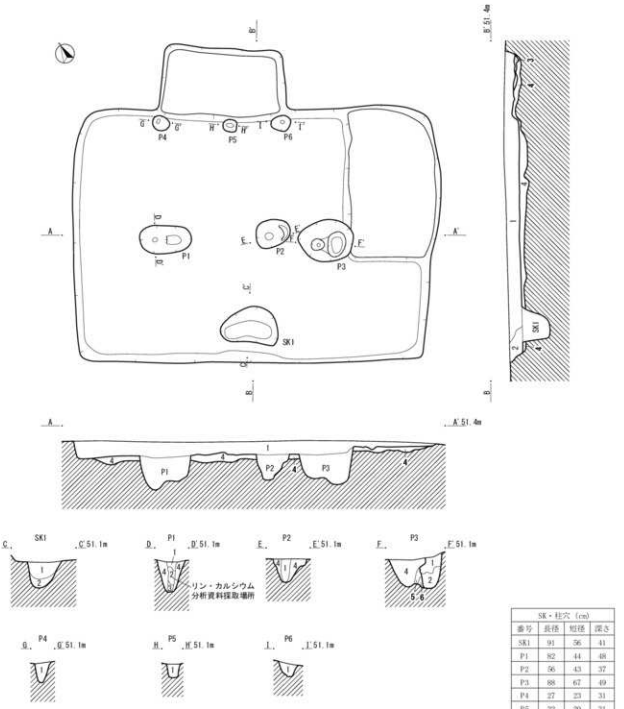
618～621 は，いずれも砂岩製の砥石である。618 はすべての平担面が砥面に使用されている。砥面との関係から，下端にある剥離や敲打痕は意図的な行為ではない可能性がある。Ｐ３埋土から出土した。残存部で長さ 6.1cm，幅 8.9cm，厚さ 3.8cm，重さ 271.7 g である。619 は破損が著しいが，正面と両側面に砥面が残る。床面直上から出土した。620，621 は正面のみ砥面が観察される破片資料だが，粒子が均質な砂岩を用いている。

竪穴住居跡９号（第 90～92 図 622～631）

Ｉ～Ｊ－50・51 区のⅢ層上面で検出された。長軸約６m，短軸約４m の平面長方形の住居である。検出面からの深さは約 0.3 m で全体的に削平を受けており，残存状況としては恵まれなかったが，張り出し部等の付属構築物を確認することができるなど，住居構造についての情報は比較的得ることができた。

北東壁に張り出し部を１か所設け，南東角にベッド状遺構を設ける。どちらも，住居床面との高低差は約 10cm であまり大きな段差はない。また，全形を含め，住居や構築物の壁は直線的で隅も直角に近く，規格の整った施工がなされている。

柱穴は，床面中央付近に３本と，張り出しが接する壁際にもそれらよりも規模の小さい柱穴が３本検出された。これら６本のうち，主柱穴は，以下にまとめる状況から前述の３本（Ｐ１～Ｐ３）が該当すると考えられる。この３本は，住居の長軸線上に位置するほか，個々の平



SK・柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	91	56	41
P1	82	44	48
P2	56	43	37
P3	88	67	49
P4	27	23	31
P5	22	20	21
P6	29	25	20

柱穴間距離(cm)	
P1-2	180
P1-3	288

A・B
1 黒色砂質土　　アカホヤ・池田降下軽石含む。
2 灰黄褐色砂質土　アカホヤを多く含む。
3 黒色砂質土　　貼床。固くしまる。
4 黒色砂質土　　貼床。アカホヤ、V層、黒色土の混土。

SK1
1 黒色砂質土　　アカホヤブロック含む。
2 灰黄褐色砂質土　弱い粘性あり。

P1～6
1 黒色砂質土
2 灰黄褐色砂質土　しまりなし。
3 灰黄褐色砂質土　しまりあり。
4 黄褐色砂質土　　アカホヤを多く含む。
5 黄橙色土　　アカホヤ主体。
6 暗灰黄色砂質土　しまりなし。アカホヤ含む。

0　2m
(1:60)

第90図　弥生時代竪穴住居跡９号（１）

面形（楕円）の長軸も住居の長軸線にほぼそろっている。また底面には段差があるが，特にＰ１とＰ３は住居外側が深くなっており，対称関係にあるように見える。Ｐ１では，壁際の埋土が軟質，Ｐ３では埋土の切り合いといった特徴も見られた。さらにこの３本は，全て貼床面を切って掘り込まれていた。これらの状況から，この住居は，建て替えとそれに伴う柱の抜き取りがあったことが想定される。

残りの３本については，径や深さの近似性，北東壁張り出し部にあわせたかのような位置状況から，住居の構造ではなく張り出し部の機能と関連する柱などの痕跡と考えられる。

土坑は，北東壁張り出し部の対面にあたる南西壁際中央で１基検出された。平面楕円形，断面「Ｕ」字状を呈し，貼床を切って掘られている。住居と同質の土が堆積していることから，住居廃棄時は開口していたと想定される。

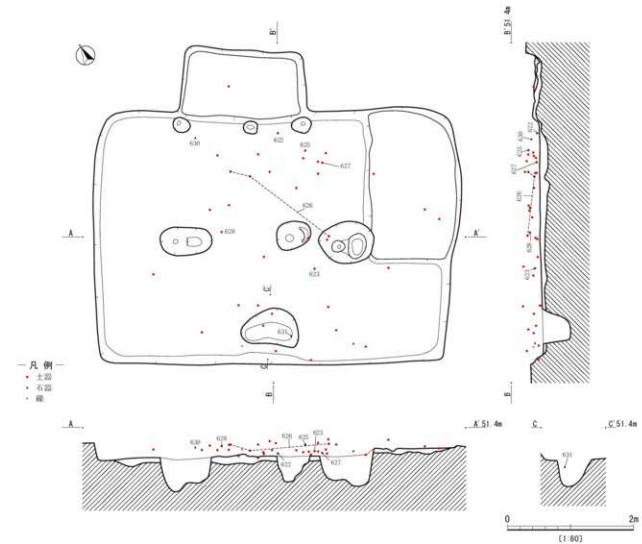
貼床は，住居本体に加え，付属構築物の床面にも広く貼られていた。断面の状況から，９号の付属構築物の段差は，貼床によって設けられていることがわかる。また，どちらの床面も，本遺跡の住居のなかでは比較的厚く貼られているが，やや凹凸している。さらに，北東壁の張り出し部には，貼床が２枚貼られた部分があった。理由は不明だが，当該部分は掘削時の掘り込みが深い部分であることから，貼床材を追加したのかもしれない。

貼床を剥いだところ，底面は全体的に細かく凹凸していたが，図化するほどの掘り込みは確認されなかった。

壁帯溝については，確認されなかった。

埋土は４層に分層できた。貼床は埋土３及び４である。残存状況に恵まれなかったこともあり，主な埋土は１である。よって，堆積過程の想定はできなかった。

遺物は，床面近くから出土する状況もみられたが，ほとんどは貼床面から 20～30cm程度浮いた状態で出土した。また，一括資料や接合資料もほとんどなかった。



第 91 図　弥生時代竪穴住居跡９号（２）

622～624は，入来Ⅱ式～山ノ口式土器の甕の口縁部である。3点とも，口縁端部には明瞭に凹線状の凹みを巡らせるが，口縁部の角度は微妙に異なっている。

625～627は，同時期の壺の口縁部と考えられる。625は屈曲してやや下垂する口縁部で長さは比較的短い。端部には，凹線状の凹みがわずかに確認される。626・627は口縁端部に凹線状の凹みが巡る広口壺と想定される。

628は小片のため詳細は不明だが，蓋の口縁部と考えられる。端部の整形は丸くやや大雑把な印象を受けるが，貼付されている三角突帯の整形は丁寧である。

629は，頁岩製の磨製石鏃である。先端部を欠損する。正面及び裏面の稜はやや不規則であるが，両側辺は鋭く研ぎ出されており，刃部があったと考えられる。基部も研磨してやや薄く仕上げている。残存部で長さ2.2cm，幅2.0cm，厚さ0.2cm，重さ1.2ｇである。630は頁岩製の打製石斧刃部である。裏面中央やや下部に見える抉りは，製作に伴う剥離等ではなく節理面等からの割れと考えられる。631は砂岩製の棒状敲石である。作業面は上下の端部に集中する。肉眼で観察する限りだが，正面や裏面などに，擦り面は認められない。長さ12.0cm，幅4.6cm，厚さ2.8cm，重さ224.7ｇである。

竪穴住居跡10号（第93～97図632～659）

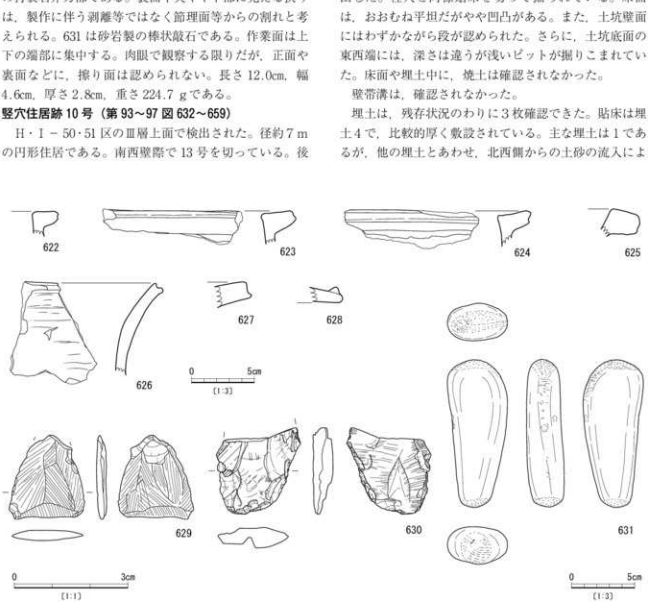
H・I－50・51区のⅢ層上面で検出された。径約7ｍの円形住居である。南西壁際で13号を切っている。後世の削平が著しい区域にあったため，全体的に深さは20cm程しか残存していなかった。この住居では張り出しを確認できなかったが，こうした残存状況が影響している可能性がある。

柱穴は，ほぼ等間隔で環状に巡っているのが8本確認された。平面楕円形を呈するものや円形を呈するものがあるが，確認された柱痕跡から柱径は20cm前後と推定される。深さは，他の円形住居同様1ｍに達するものがある一方で，0.6ｍ程度にとどまるものもあり不揃いな状況だったが，すべて貼床を切って掘られていた。また，底面に段差等は確認されなかったものの，途中に様々な状態の段を伴うものが多く検出面が楕円形状を呈することを踏まえると，建て替えはなかったものの柱は抜き取られたことが想定できる。

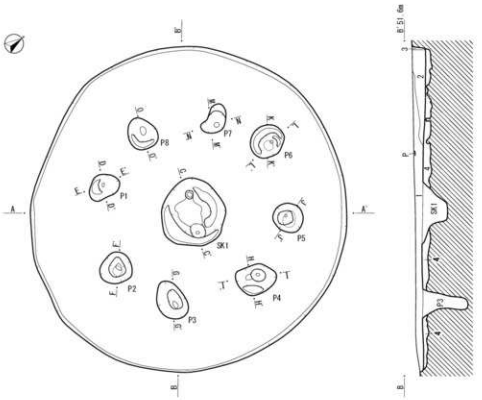
住居中央では，平面円形，断面略方形の土坑を1基検出した。柱穴と同様貼床を切って掘られている。床面は，おおむね平坦だがやや凹凸がある。また，土坑壁面にはわずかながら段が認められた。さらに，土坑底面の東西端には，深さは違うが浅いピットが掘りこまれていた。床面や埋土中に，焼土は確認されなかった。

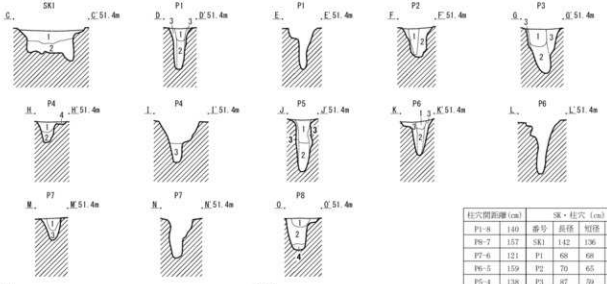
壁帯溝は，確認されなかった。

埋土は，残存状況のわりに3枚確認できた。貼床は埋土4で，比較的厚く敷設されている。主な埋土は1であるが，他の埋土とあわせ，北西側からの土砂の流入によ



第92図　弥生時代竪穴住居跡9号（3）





柱穴間距離(cm)		SK・柱穴 (cm)			
P1-8	149	番号	長径	短径	深さ
P8-7	157	SK1	142	136	70
P7-6	121	P1	68	68	86
P6-5	159	P2	70	65	61
P5-4	138	P3	87	59	93
P4-3	183	P4	80	62	87
P3-2	144	P5	65	61	109
P2-1	178	P6	75	67	110
		P7	64	44	81
		P8	70	60	67

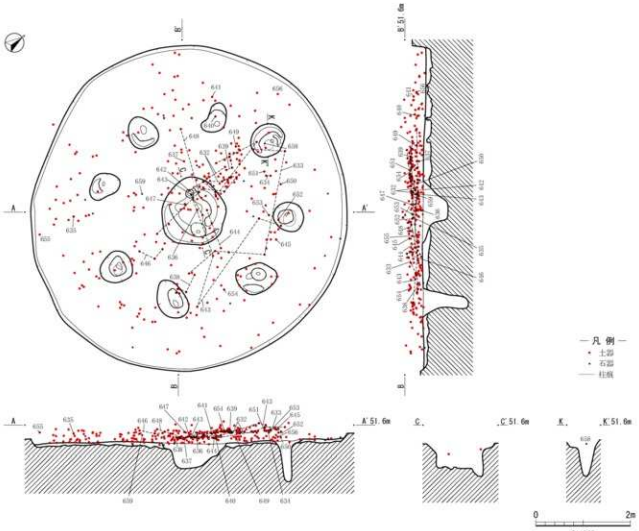
A-B
1 黒褐色砂質土　アカホヤ・池田降下軽石含む。
2 黒褐色砂質土　3~5cm大のアカホヤブロック含む。
3 灰黄褐色砂質土　しまりなし。
4 灰黄褐色砂質土　粘床。固くしまる。アカホヤと黒色土の混土。

P1~8
1 黒褐色砂質土　アカホヤ・池田降下軽石含む。
2 黒褐色砂質土　しまりなし。
3 灰黄褐色砂質土　アカホヤ多く含む。
4 灰黄褐色砂質土　アカホヤと黒色土の混土。

SK1
1 黒褐色砂質土
2 にぶい黄褐色砂質土　粘性あり。V層とアカホヤの混土。

0　2m
(1:80)

第 93 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（1）



第 94 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（2）

る自然堆積と想定できる。また，北西壁際では，垂直に堆積している埋土３を確認した。

貼床を剥いだ床面は，図化できるような大きな掘り込みはみられなかったが，細かい凹凸が全面に不規則に広がっていた。掘削に伴う工具痕と想像できるだろうか。

遺物は，まず，表土と埋土１の境で土器が多量に検出された。出土状況から，これらは周辺から廃棄された土器（「土器捨て場」として使われた）と判断し，「10 号住居跡上面」として取り上げ，その後の調査中に検出された遺物を 10 号関連の遺物として取り扱った。

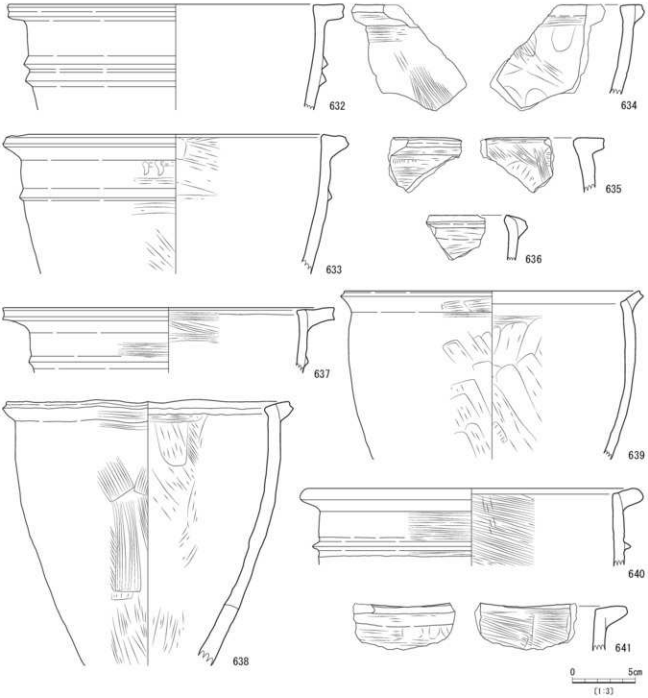
遺物には磨製石鏃の未成品が散見されることから，チップ類がないが，石鏃製作場だった可能性がある。

632～641 は入来Ⅱ式～山ノ口式土器の甕である。これらを主に口縁部形状に着目して，入来Ⅱ式土器の傾向が看取される資料（632～636：口縁部がほぼ水平・端部整形が断面方形を基本とする），山ノ口式土器の傾向が看取される資料（637～640：口縁部が立ち上がる・端部整形が断面方形に縛られない）とに便宜上分けて説明する。

632 は，口径 26cm，断面方形の口縁部が水平に長く伸び，端部には凹線状の凹みを明瞭に施す。口縁部と内面は調整も丁寧である。633～636 は，口縁部が短い。633 は口径 27cm で，口縁部が，端部の凹線状の凹みはやや上向きで不明瞭で口縁上面がやや凹む，やや特異な整形をしている。また，器外面の口縁部直下には，ヘラ状工具か爪のようなものでつけた縦長の短い凹圧痕がほぼ等間隔で巡っている。口縁部の貼り付けと整形は，この押圧痕のあとに行われている。634 は口縁端部の凹みが不明瞭である。口縁部下には斜位のハケ目が施され，突帯は貼付されていないようである。636 は，口縁端部の凹線状の凹みは明瞭だが，口縁部は短く断面三角形である。これらは，いずれも埋土２から出土している。

637 は，口径 26cm で，口縁部は長く伸びて端部の凹線状の凹みも明瞭だが，わずかながら角度を明確に立ち上

げている。三角突帯は比較的小さく，口縁部に近い位置に貼付される。638は，口径23cmで残存部から想定する限りではやや長胴形の器形である。口縁部は短いが屈曲部に稜を形成して立ち上がる。端部に凹みも巡らせる。ただ，成形・整形ともに粗く，口縁部上面は平坦面を作らず，調整も胴部と同じ工具で行っている。また胴部のハケ目調整が，底部側から口縁部に向けて斜位または縦位に施されているのも特徴的である。内面は，特に底部近くで表面の微細な剥離が著しい。三角突帯は貼付されない。639は，口径23cmで，胴部がやや張る点以外は，口縁部の造作を含め全体的なつくりは638と類似する。640は，口径26cmで，口縁端部を断面舌状に仕上げる点と胴部の三角突帯が細く成形されている点が特徴である。器面調整は内外面ともに丁寧である。641も，640と類似した特徴である。639が埋土2から出土したほかは，埋土1から出土している。



第95図　弥生時代竪穴住居跡10号（3）

642～644は，甕の底部である。642は，525や539と同様に脚長が短い。埋土１～２にかけて出土している。

645は，山ノ口式土器の大甕と考えられる。口縁部は剥落しているが，内面には立ち上がる屈曲部が残存している。三角突帯は想定される法量に比べて小さく，口縁部寄りに貼付される。外面にはススが付着する。混和剤が細かく緻密である。遺構検出レベルで出土した。

646～651は，甕と同時期の壺と考えられる。646は広口壺の口縁部から頸部である。器壁が薄く，胎土は黒色砂粒を多く含む一方で雲母をまったく含まず，灰白色を呈する。須玖式の影響を想像させる資料で，宮崎平野部などからの搬入品の可能性がある。頸部径は約16cmで，埋土１中から出土した。647も胎土や調整などの諸特徴が646と類似する資料で，胴部に巡る突帯は，恐らく甕の口縁端部に巡る凹線状の凹みと同じ技法で整形されているが，M字突帯を彷彿とさせる。埋土１から出土した。648は，色調や外面の調整から「黒塗り壺」とも想定される。細身に整形されている底部がかなり分厚く作られている点が目を引く。内面の剥落が著しい。埋土１～２にかけて出土している。649は，肩部に断面台形の突帯が巡るようである。650・651は，648と底部厚が異なる。

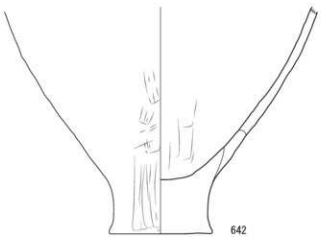
652・653は蓋と考えられる。652はつまみ径８cm，上面の凹みが顕著で端部は丸みを帯びており，整形は比較的粗い。なお，つまみ部の形状から蓋と判断したが，他器種の可能性もある。653は，口径29cm，内外面とも器面の剥落が著しいが，かろうじて口縁部内面端部に幅広くススの痕跡を確認できることから蓋と判断した。なお，口縁端部に突帯は貼付されていないようである。埋土２から出土した。

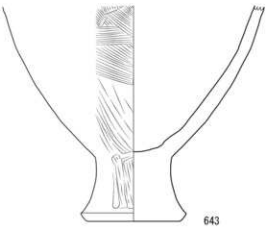
654～656は，小片のため確証はないが，鉢と想定している。いずれも貼付される突帯は低く小振りである。

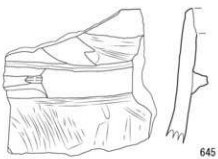
657は，打製石斧である。ホルンフェルス製で，左側辺と刃部のみ研磨して仕上げる。より大きな磨製石斧の破片を再利用した可能性がある。長さ8.7cm，幅5.2cm，厚さ0.8cm，重さ56.5ｇである。658・659は砂岩製の敲石である。特に658は，上端と下端に敲打痕が集中する。長さ5.6cm，幅5.0cm，厚さ4.2cm，重さ149.4ｇである。659は長さ5.3cm，幅及び厚さ4.8cm，重さ187.0ｇである。

竪穴住居跡11号（第98図660～665）

Ⅰ－49区のⅢ層上面で検出された。調査区境界で半

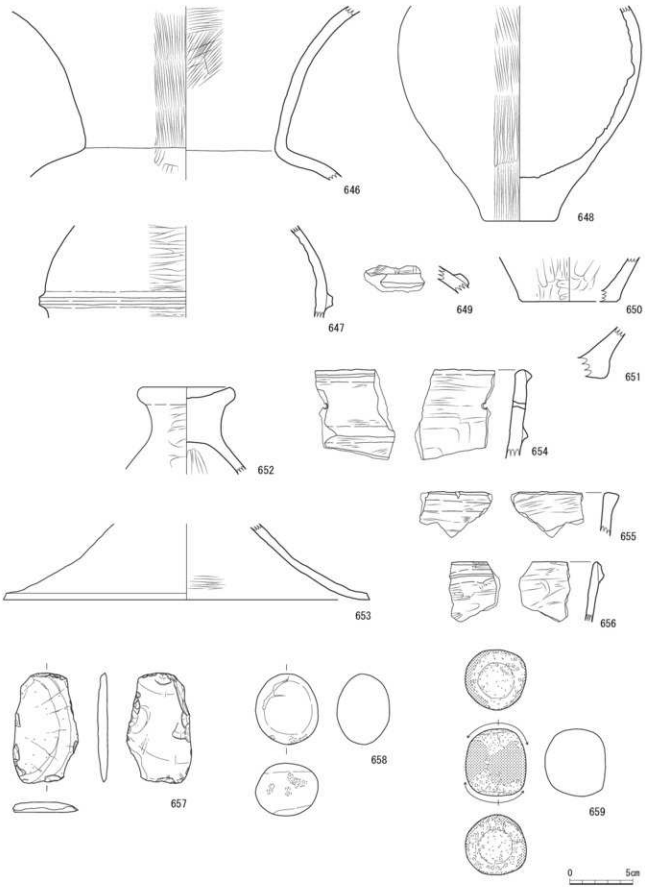






0　5cm
(1:3)

第96図　弥生時代竪穴住居跡10号（４）



第 97 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（5）

分程度削平されていたうえに，電柱や樹による撹乱も受けており，かろうじて残存した部分を調査した。残存範囲でおよそ２m，平面方形だったと推測される。深さも20cm程度であり，張り出し・柱穴や壁帯溝などの付属構造物は検出できなかった。埋土は１枚，貼床も確認できなかった。

遺物は，埋土中からある程度まとまって出土したが小片であった。

660～662は，入来Ⅱ式～山ノ口式土器の甕と考えられる。663は，雲母を含むなど胎土と色調には在地の特徴を看取できるものの，口縁部の成形や断面形状，器外面の縦位の工具ナデなどに，在地の甕と異なる特徴を有している。665は，比較的大形の壺の肩部と考えられる。

竪穴住居跡 12 号（第 99～101 図 666～681）

Ｈ・Ｉ－49・50 区のⅢ層上面で検出された。直径約７mの大型の円形住居である。これも後世の削平が著しく，深さ30cm程度しか残存していなかった。

南壁と北壁に１か所ずつ張り出し部を確認した。どちらも床面より少し高くなっており貼床がある。また，西壁には２か所で内側にわずかに突出した部分を確認した。そのため西壁は全体的に不整形にみえるが，削平の影響を踏まえると，この突出は，本来間仕切だった可能性がある。

土坑は，床面中央（ＳＫ１）と北端の張り出し横（ＳＫ２）の２か所検出された。どちらも，平面形は略円形で断面はレンズ状を呈する。貼床より後に掘り込まれており，焼土は検出されなかった。

柱穴は，中央土坑の周囲を巡るように８本（Ｐ１～８）検出されたほか，貼床の下にも２本（Ｐ９・10）検出された。前述の８本が主柱穴と考えられる。主柱穴は，平均して１m近くの深さがあり，抜き取り痕も観察された。土坑２基と主柱穴８本は，共に貼床に近い土で埋められていた。また，位置関係などから，Ｐ９はＰ３に掘り直したと想定できる。貼床下の柱穴は，埋土にアカホヤを多く含んでおり，埋土からも時期の違いを判断できた。

壁帯溝は，検出されなかった。

埋土は，主に黒色土，壁際に垂直堆積土層と貼床の３枚を確認した。

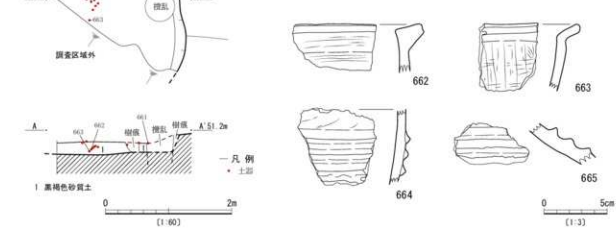
遺物は，比較的に東側で多く出土しており，北東側から流れ込んでいるようにも見えるが，多くは床面から浮いている。磨製石鏃未成品，砥石が出土している。

666～668は，口縁部の形状にややバリエーションがみられるが，入来Ⅱ式土器の甕と考えられる。668は，口径24cmで，縁部の製作方法や不揃いな細かい刻目が特徴的である。

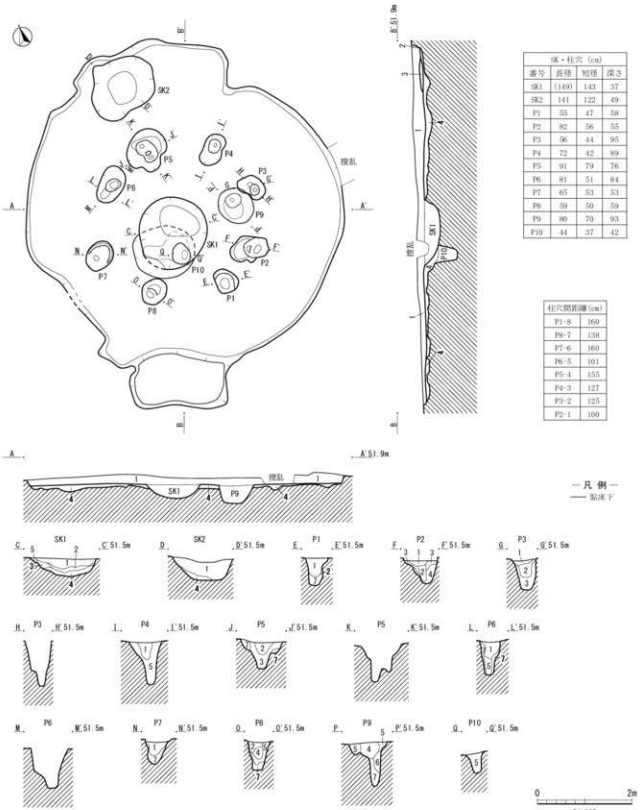
669・670は，中溝式土器，あるいは下城式土器の甕と考えられる。669は縦位の三角突帯，670は外面の粗い縦位のナデ調整と薄い器壁が特徴である。

671は，在地甕の脚台である。672は，小形鉢を想定している。口縁端部を方形に丁寧に整形し，外面も縦方向の丁寧なナデ調整を施している。一部は床面直上で出土している。

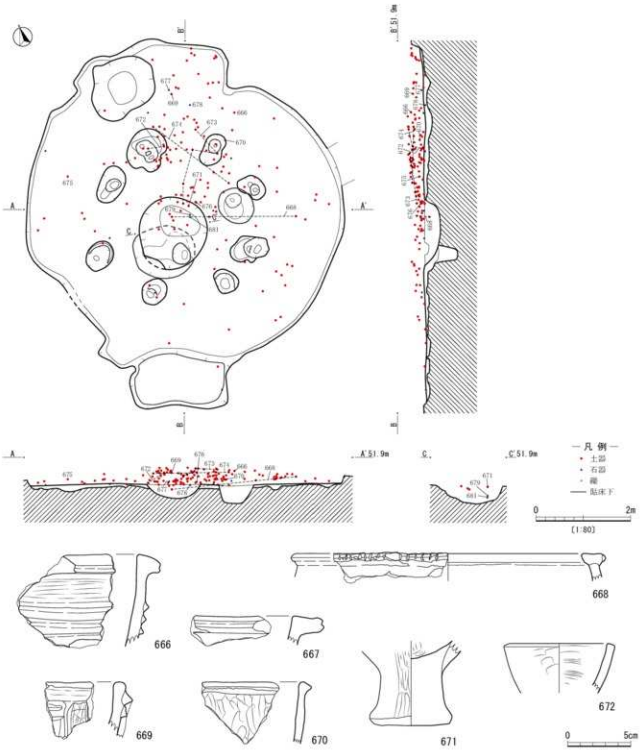
673は，山ノ口式土器の大甕であるが，大甕のなかでは小振りな部類に属するか。胴部には，口縁部寄りに厚みの薄い三角突帯が１条巡る。突帯の下面には，ススが付着している。口縁部の形状には入来Ⅱ式土器の痕跡をうかがえるが，口縁部の角度や胴部突帯の位置や形状から山ノ口式土器に含めた。住居中央部付近で比較的上層



第 98 図　弥生時代竪穴住居跡 11 号



第 99 図　弥生時代竪穴住居跡 12 号（1）

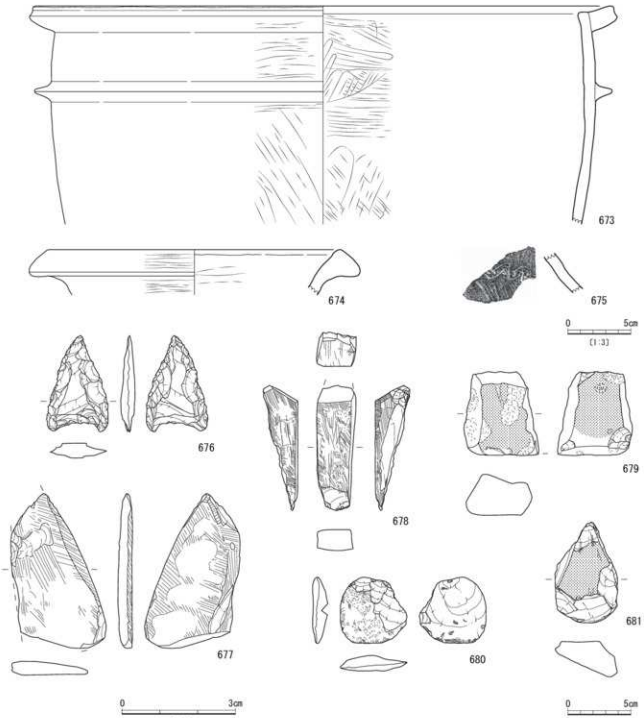


第 100 図　弥生時代竪穴住居跡 12 号（2）

から出土した。

674・675 は，壺である。674 は，山ノ口式土器と考えられ，口縁部に凹線状の凹みなどは施されていない。675 は，頸部～肩部の変換点あたりに，3 条 1 単位の波状文を横位に 1 条巡らせている。波状文はどちらかといえば流麗ではなく，器壁は比較的薄いが胎土には雲母を含むことなどから，在地の土器と考えられる。

676 は鉄石英製の石鏃である。正面，裏面ともに主要剥離面を残し，周縁部のみ剥離調整を加え整形している。677 は頁岩製で，磨製石鏃と想定している。ただし，裏



第 101 図　弥生時代竪穴住居跡 12 号（3）

面と左側辺に，現形状に合わせた研磨痕が観察されることから，別の用途に用いられた可能性もある。現状で長さ 4.1cm，幅 2.5cm，厚さ 0.4cmである。床面直上から出土している。

678～681 は砂岩製の砥石である。678 は，正面・左側面のほか右側辺に砥面を観察できる。特に正面と左側面は砥面が光沢を帯びる。床面直上出土。679 は，正面と裏面に砥面があり，軽く光沢を帯びている。中央部小土坑の埋土 4 から出土。また，678 と 679 では，各砥面の中央部がごくわずかに凹み（その部分は長い擦痕や整形時の敲打痕が残る）その周辺部に平滑な面があるという共通した特徴が看取される。681 も，正面上端がわずかに凹み敲打痕が残る。

竪穴住居跡 13 号（第 102～103 図 682～692）

Ⅰ－50・51 区のⅢ層上面で検出された。調査区のなかでも後世の削平の影響が特に著しい区域にある。残存

部分で長軸5.5m，短軸約2.8m，深さ0.2mである。北東部は10号にも切られている。残存状況はよくないが，竪穴の規模，形態，主柱穴の位置から，本来は4号と類似した構造だったものと推測される。東西壁の南端に拡張部があり，西側のみ床が1段高くなっている。

柱穴は，東西壁と南東壁の際で，拡張部に隣接して2本検出した。うち東側の1本（P1）では抜き取り痕も確認された。

南壁の近くで，土坑（SK1）を1基検出した。貼床を切って掘られており，平面形は隅丸方形で住居と長軸を揃え，断面は略方形である。また，床面の東西両端に2基の小ピットを検出した。主観ながら底面がやや硬くなっていたことから，柱などが存在した可能性がある。この構造は，18～20の各号と類似する。

壁帯溝は，検出されなかった。

埋土は3枚に分層でき，うち1枚は貼床である。

遺物は埋土1出土のものが多く，ほとんどは床面から浮いた状態だったが，軽石製品（692）は床面近くから出土した。

また確認調査の際，2トレンチから石剣（690）が出土したが，整理作業で出土位置等を比較検討し，この住居に帰属すると判断した。

682・683は入来Ⅱ式土器の甕と考えられる。683は，資料の外面上端に帯状の剥離痕が観察されることから，三角突帯が少なくともあと1条あったことがわかる。

684は，断面舌状に整形された薄い口縁部がほぼ水平に伸びる器形が極めて特徴的である。ただし，胎土に雲母を含むなど作り方は在地の特徴を備える。埋土1の比較的上位で出土した。

685～689は，いずれも壺と考えられる。685はやや特異な口縁部形状だが，小形の広口壺と想定される。686・687は，分厚い器壁と小振りな三角突帯に部分的に施されている鋭利な工具による連続刻目が，共通する特徴である。687の胴径は約40cm，比較的床面近くで出土している。688は，現在残る三角突帯の上位に帯状の剥離痕が確認されることから，三角突帯は少なくともあと1条あったことがわかる。

690は，頁岩製の磨製石剣である。刃部の上半部を欠損しており，残存長8.1cm，幅3.0cm，厚さ0.7cmである。丁寧な研磨が全面に及び，刃部は，中軸の鎬から左右に研ぎ分けた鋭い刃縁が作出されている。一方，柄部は比較的平坦で，刃部の付根部分を抉って境界とし，末端部を面取りする。右側縁には，使用痕とみられる微小剥離痕を観察できる。確認調査で出土しており，住居との詳細な関係については，残念ながら不明である。

691は砂岩製の砥石である。正面が砥面として使用されているが，裏面にもわずかに擦り面が観察される。また，上下端には敲打痕とそれに伴う剥離があることから，臨機的に敲石にも利用していたと推察される。P2埋土中の上位から出土した。

692は軽石製品である。表面が風化しているため整形痕などは観察できないが，正面には径の大きな凹み面があり，裏面は平坦である。どちらも面は滑らかになっている。長さ14.3cm，幅11.2cm，厚さ4.7cmである。

竪穴住居跡14号（第104～105図693～710）

G・H－50区のⅢ層上面で検出された。長軸約5m，短軸約3.4mの平面長方形を呈する住居である。南東壁際が1段高くなっており，ベッド状遺構と考えられる。

柱穴は，全部で4本検出したが，住居の短軸側壁面近くで2本ずつ住居主軸線をとおるように並んでいた。内側の2本（P1・2）はほぼ垂直に掘られていたが，両端の2本（P3・4）は，内側の2本より規模が大きく，さらに主軸線上を住居の中心に向かうように斜めに掘られており，柱痕跡も確認した。このほか，P1・2とP4では柱の抜き取り痕を観察できた。このような状況から，これら4本が主柱穴と考えられる。

南東側の壁際では，中央部に土坑（SK1）を検出した。貼床を切って掘られており，平面形は不定形で断面は漏斗状を呈する。土坑上端で，壺の頸部（704）が出土している。

壁帯溝は，検出されなかった。

埋土は2層確認したが，うち1枚は貼床で，壁際に垂直堆積土層がある。

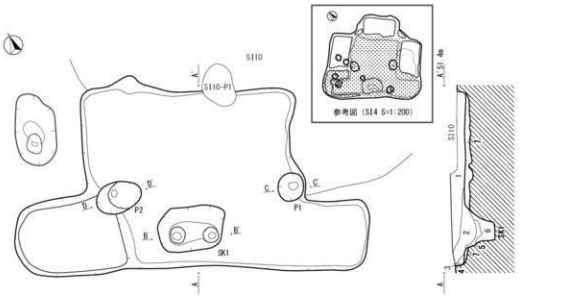
693は，短いが水平に成形された口縁部に凹線状の凹みが見られないことから，入来Ⅰ式土器の甕と考えられる。本遺跡では稀少例だが，小片で埋土中でも中位から出土しているので，住居に伴うものとは想定しづらい。

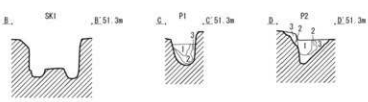
694～700は入来Ⅱ式土器の甕と考えられる。全体的に口縁部が短い。697は胴部の三角突帯がもともと貼付されていない可能性がある。699は床面直上から出土している。

701・702は，どちらも断面略方形に整形した口縁部に三角突帯を貼り付けている。器面は内外面とも丁寧な横ナデ調整が施される。小片のため詳細不明だが，東九州系の甕と想定しておきたい。

703～707は壺である。703は口縁端部に凹線状の凹みが観察されることから，入来Ⅱ式土器と考えられる。704は，資料上端に強く外反していくことを想像できる反りと器面調整の変化点を観察できることなどから，口縁部直下からの頸部資料と考えられる。出土状況を踏まえると，資料下端は接合面で削り揃えられているようにも見える。やや短頸だが，入来Ⅱ式土器と考えられる。705は，資料上端付近の内面並びに外面にススの付着が観察される。比較的床面付近から出土している。707は，入来Ⅱ式土器に伴う小形壺の口縁部と想定している。

708は，小振りだが大甕の口縁端部である。口縁端部



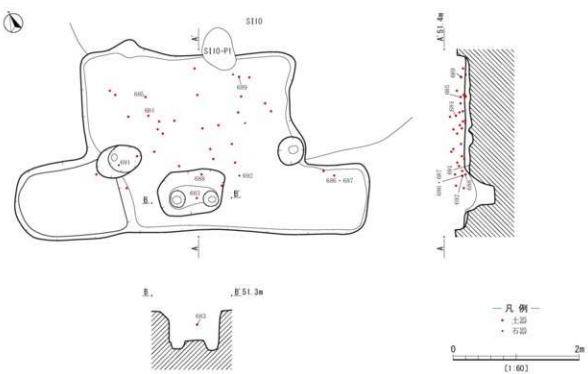


SK・柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	102	70	63
P1	65	41	52
P2	74	49	51

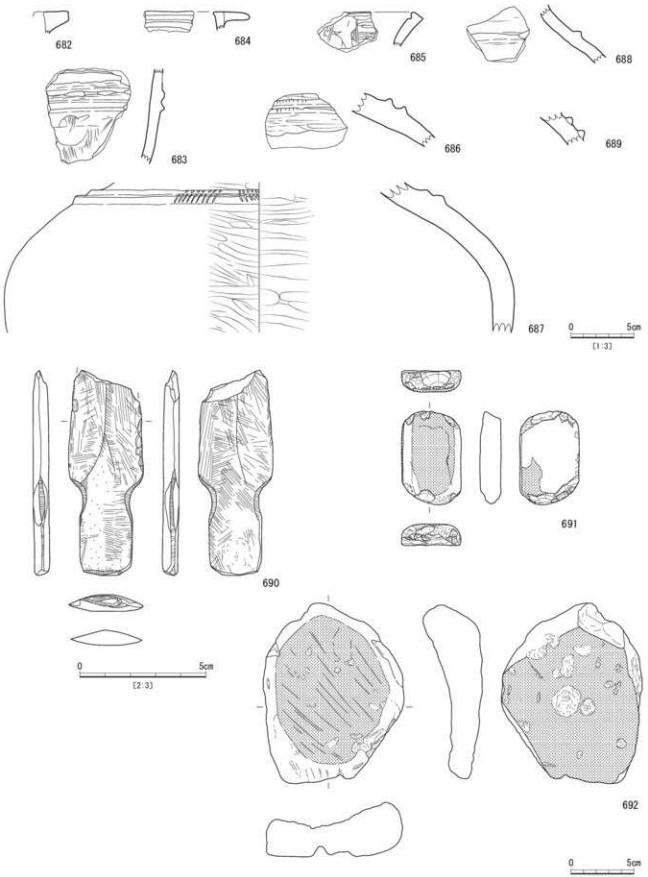
柱穴間距離（cm）	
P1-2	283

A SK1
1 黒褐色砂質土　アカホヤ・池田降下軽石含む。
2 黒色砂質土　固くしまる。
3 黒褐色砂質土　しまりなし。アカホヤ含む。
4 黄橙色土　アカホヤ主体のしまりのない埋土。
5 黒褐色砂質土　しまりなし。
6 灰黄褐色砂質土　V層多く含む。
7 灰黄褐色砂質土　貼床。固くしまる。アカホヤと黒色土の混土。

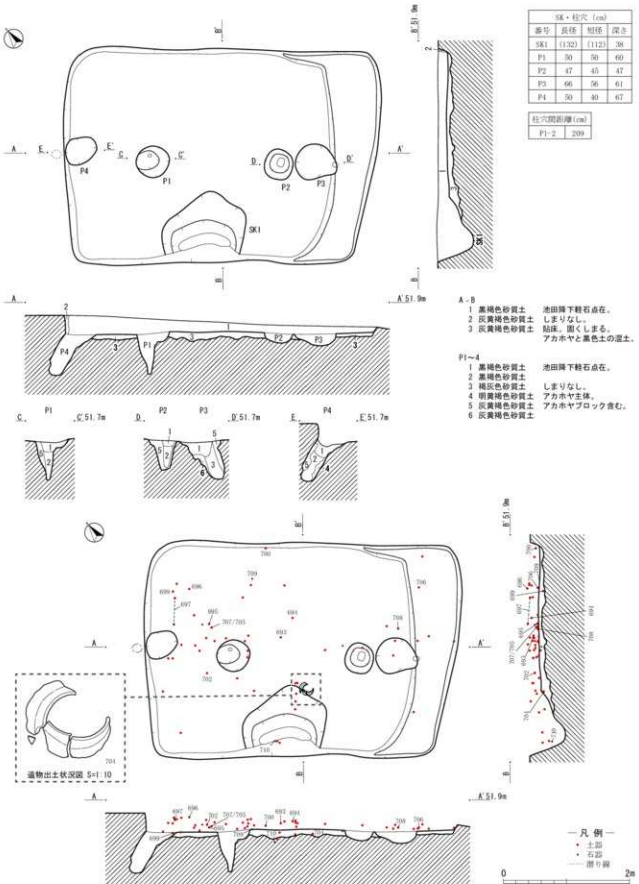
P1・2
1 黒色砂質土
2 黒褐色砂質土　明黄褐色土含む。
3 褐灰色砂質土　しまりなし。



第 102 図　弥生時代竪穴住居跡 13 号（1）



第 103 図　弥生時代竪穴住居跡 13 号（2）



第 104 図　弥生時代竪穴住居跡 14 号（1）

第 105 図　弥生時代竪穴住居跡 14 号（2）

の凹線状の凹みも見られるが，口縁部の角度や胴部突帯の位置や形状から，山ノ口Ⅱ式土器に伴うものとしたい。比較的床面近くから出土している。

709 は，砂岩製の砥石である。一部稜線上に敲打痕とそれに伴う剥離が観察されるが完形品で，形状は使用の結果によるものである。素材の砂粒は比較的粗い。5 面観察できる砥面のうち，右側面には面中央に顕著な凹面がある。凹面は裏面にもわずかに観察できる。また，上面と裏面の間の稜は丸味を帯びているが，ここも砥面として利用された可能性がある。長さ 9.0cm，幅 7.3cm，厚さ 5.5cm，床面直上で出土している。

710 は，砂岩製の台石と考えられる。正面，左側面，上面に敲打痕が観察されるが，正面中央は凹みも生じている。裏面には平滑な面が形成されており，砥面として使われた可能性がある。住居内の小土坑内から出土した。現状で，長さ 16.9cm，幅 13.2cm，厚さ 6.1cm，重さ 1914 g である。

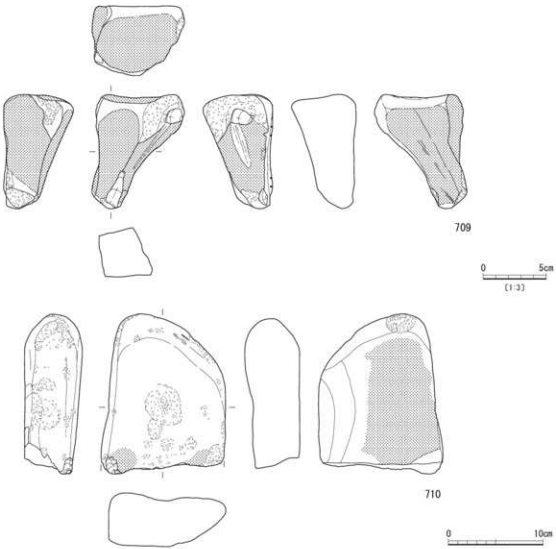
竪穴住居跡 15 号（第 107～108 図 711～716）

F－50・51 区のⅢ層上面で検出された。直径 4.8 m の円形住居であるが，後世の撹乱や削平のため，全体的に残りがよくない。壁際には，貼床を切って，全周の 2／3 程度にわたって壁帯溝が巡っている。

床面中央で土坑を検出した。平面形は略円形，断面形は残存部分から想定すると逆台形状になる。貼床を切って掘られている。

柱穴は，中央の土坑を環状に囲むようにＰ１～Ｐ６まで検出したが，位置関係から，主柱穴は５本（Ｐ１～５）と考えられる。また，Ｐ２は，断面形状から柱が抜き取られた可能性がある。Ｐ４については，底面で柱痕跡が２か所検出されたが，うち南側のものが貼床に覆われていたことから，これらは新旧関係にあることがわかった（南→北へ移動）。

中央に土坑があり，その周囲に柱穴が巡る構造は，大型円形住居と類似する。



第 106 図　弥生時代竪穴住居跡 14 号（3）

出土遺物はそれ程多くなかったが，削平等の影響も考慮する必要がある。

711・712 は入来Ⅱ式土器の甕である。711 は口径約 22cmとやや小振りで，三角突帯は，貼付は丁寧だがやや波打っている。713 はこれらに伴うと考えられる壺である。外面はススの付着も観察されるが，黒褐色の色調を呈しており「黒塗り壺」の可能性がある。内面は表面の剥落が顕著だが，外面同様丁寧なナデ調整で仕上げられていたようである。胴径約 26cmである。

714・715 はいずれも緻密安山岩製の打製石鏃，716 は軽石製品である。716 は，床面近くから出土した。長さ約 8 cm，幅約 10cm，厚さ約 5 cmで，被熱痕跡は確認されない。全面を擦って整形しており，特に裏面は極めて平坦である。左側面上部のみやや凹凸しているが，加工による可能性がある。

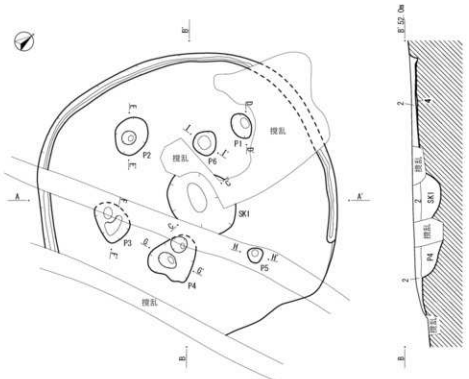
竪穴住居跡 16 号（第 109～111 図 717～737）

F・G－50 区のⅢ層上面で検出された。長軸約 4 m，短軸約 3.5 mの，平面長方形の住居である。張り出しやベッド状遺構，壁帯溝は確認できなかった。

柱穴は 2 本検出した。ただ，P 1 は深くて柱痕跡も確認できたが，P 2 は浅く柱痕跡も確認できなかった。

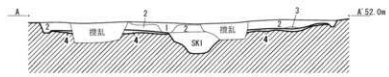
南壁に接して，中程に土坑（SK 1）がある。貼床を切って掘られており，平面形は不整楕円形，断面形状は皿状である。底面にはさらに 2 基の小ピットがあり，西側のピットは，灰黄褐色砂質土（アカホヤを多く含む）が堆積していたが，東側は，住居全体の埋土と同じ黒色土が堆積していた。このことから，2 基のピットの時期差と土坑の形態変遷がわかる。

貼床は，床面中央が他の部分と倍以上厚く施工されていたが，貼床を除去したところ，その厚く貼られていた

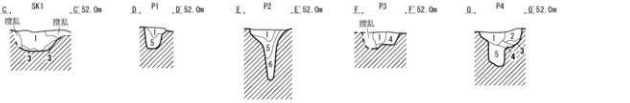


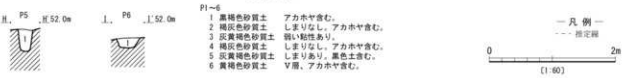
SK・柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	119	(88)	30
P1	42	31	34
P2	63	52	80
P3	(63)	(48)	26
P4	(71)	69	54
P5	24	24	16
P6	38	36	34

柱穴間距離(cm)
P1-5 207
P5-4 116
P4-3 129
P3-2 123
P2-1 183

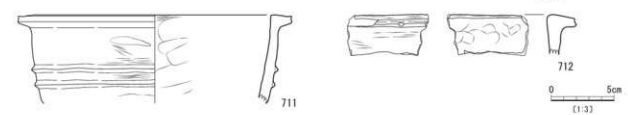


A－B,SK1
1 黒褐色砂質土　しまりなし。
2 黒色砂質土　しまりあり。
3 黒褐色砂質土　しまりなし。アカホヤ含む。
4 灰黄褐色砂質土　粘床。固くしまる。
アカホヤと黒色土の混土。

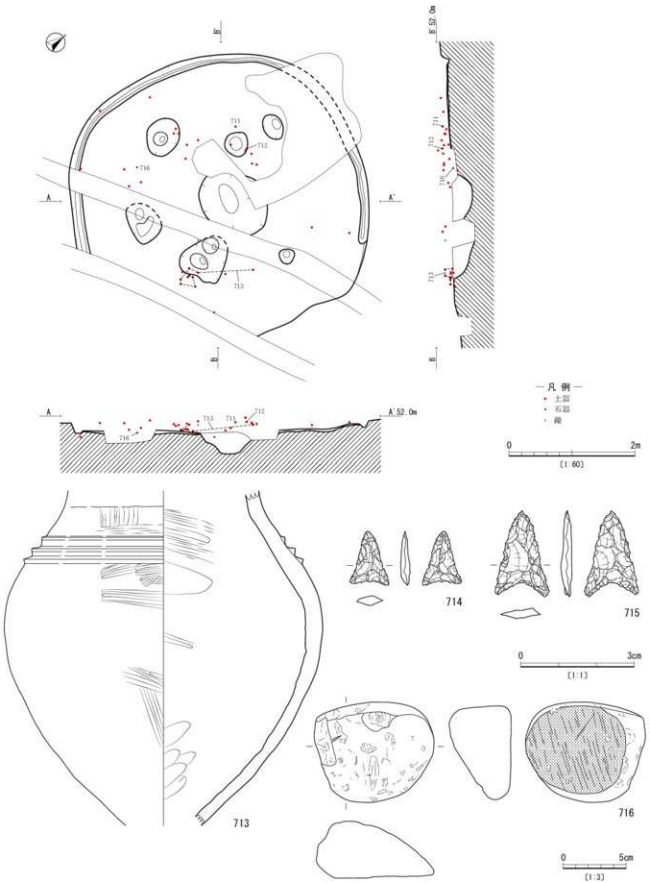




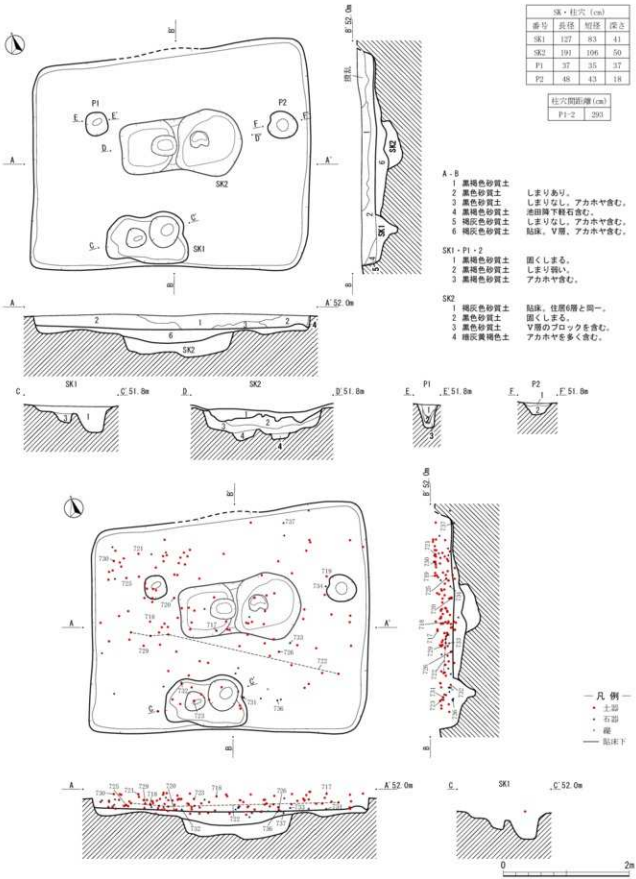
P1～6
1 黒褐色砂質土　アカホヤ含む。
2 褐灰色砂質土　しまりなし。アカホヤ含む。
3 灰黄褐色砂質土　弱い粘性あり。
4 褐灰色砂質土　しまりなし。アカホヤ含む。
5 灰黄褐色砂質土　しまりあり。黒色土含む。
6 黄褐色砂質土　V層。アカホヤ含む。



第 107 図　弥生時代竪穴住居跡 15 号（1）



第 108 図　弥生時代竪穴住居跡 15 号（2）



第 109 図　弥生時代竪穴住居跡 16 号（1）

部分で新たに土坑（ＳＫ２）を検出した。

土坑（ＳＫ２）の平面形は，略長方形で住居の平面形と向きが揃う。床面には中央に土手状の高まりがあり，仕切られた床面に１基ずつ浅い小ピットがあるという，２基の小土坑が連結したような形状である。ただし，埋土は全体的にレンズ状に堆積しており切り合い等は確認されなかったことから，ひとつの土坑と判断した。当初は，床面中央に位置していたことから，この住居に伴う施設と想定していたが，他の土坑埋土と類似した土が堆積していたこと，床に貼り直しの痕跡が確認できなかったこと，土坑内から住居埋土中出土土器よりも古そうな土器が出土したこと等から，この住居より先行する施設である可能性がある。また，貼床が厚かったのは，この土坑があったためと考えられる。さらに，この住居と土坑（ＳＫ２）の時期差はそれほど開かないと考えられる。

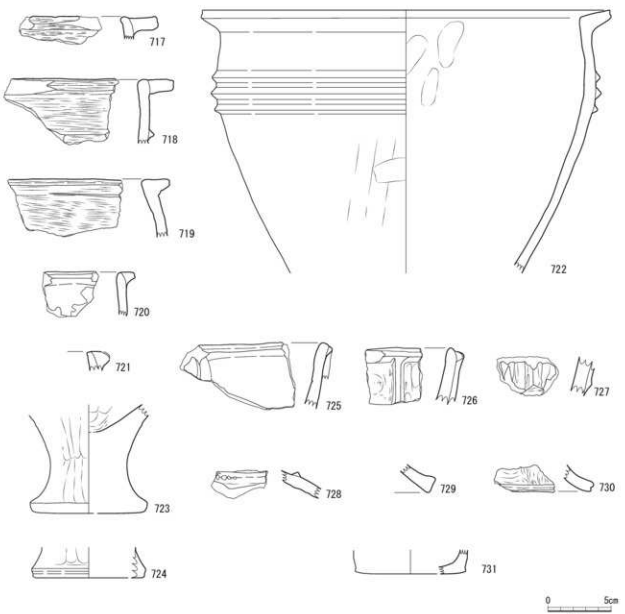
埋土は６層に分層でき，貼床は埋土６である。主として西側からの自然堆積と想定されるが，壁際には垂直堆積層（埋土４）がある。

遺物は，埋土１下位に集中する傾向があり，縄文の石鏃等も混じっていた。

717～721は，口縁部の長さに差違があるものの，入来Ⅱ式土器の甕と想定される。いずれも小片のため，詳細は不明である。720は特に小振りである。

722は山ノ口式土器，723と724は入来Ⅱ式～山ノ口式土器の脚台である。

725～726は，口縁部外面に小さな三角突帯が１条巡



第110図　弥生時代竪穴住居跡16号（２）

り，さらに縦位の同規模の三角突帯を貼り付ける。器壁は比較的薄く胎土に雲母を含まない。これらは，いずれも下城式土器など東九州系の甕の口縁部と考えられる。

728は，外面が丹塗りされ，胎土はきめが細かく肌色を呈していることから，須玖Ⅱ式土器の壺と想定される。

729・730は小片だが，どちらも外面に縦位のミガキ調整があること，730は内面にススが付着している等の特徴が，本遺跡で出土している蓋（7号住居596他）と一致する。

731は入来Ⅱ式土器に伴う小型の鉢の底部と考えられる。器壁は薄く，被熱している可能性がある。

732は砂岩製の小型磨製石斧である。直刃で，本来の幅と厚みは現状とあまり変わらないと想定される。

733～737は砥石である。石材は砂岩製である。736以外の砥石には，13号の691と同様，端部に敲打痕を観察することができる。また，734には，14号の709と同様，正面中央に溝状に凹んだ砥面が形成されている。

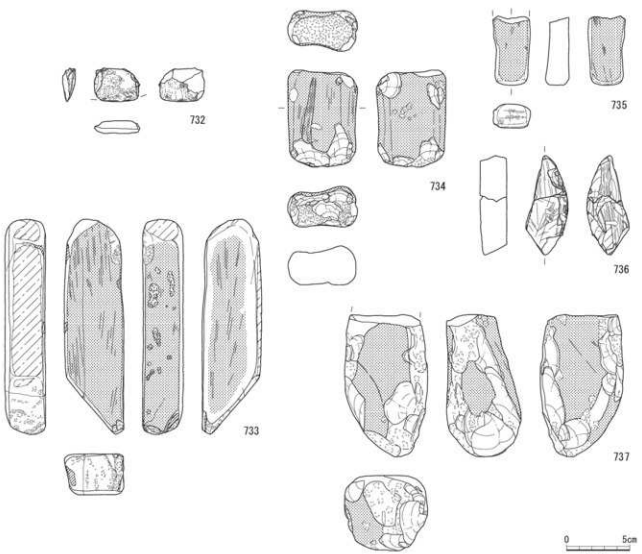
竪穴住居跡17号（第112～114図738～757）

F－48・49区のⅢ層上面で検出された。すでに削平されている調査区域外に続く。残存部で長さ約4.4m，幅約2m，深さ約0.5mである。張り出し，ベッド状遺構や壁帯溝は確認できなかった。

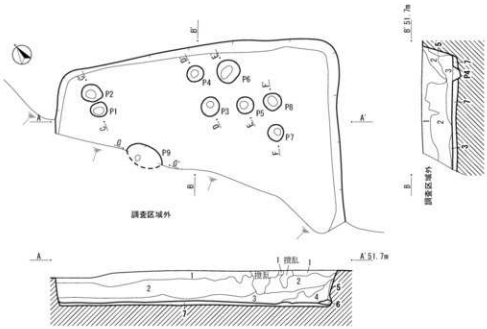
柱穴は，P9が深く大きいので主柱穴とも想定されるが，位置的には確証に欠ける。また，北側に8本，浅い柱穴が2本1対であるかのように確認された。5号や7号の事例と類似する状況である。

貼床の下の掘削面は，凹凸が少なく比較的平坦だった。

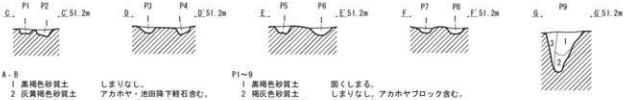
埋土は，細かいものを含め7層に分層できた。貼床は埋土7でやや厚いが，ほぼ一定の厚さで貼られている。壁際には垂直堆積層の埋土5も観察された。埋土は，おおむね西方向に傾斜していることから，東方向からの土砂流入による自然堆積で埋没したものと想定される。



第111図　弥生時代竪穴住居跡16号（3）

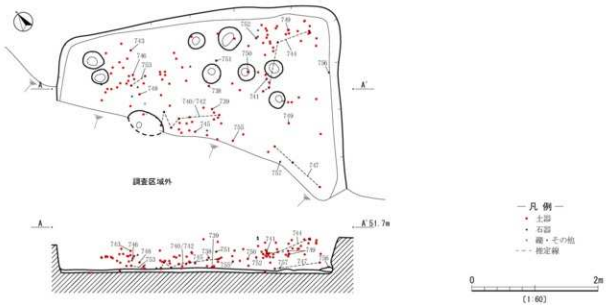


柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	26	23	7
P2	34	27	11
P3	31	29	9
P4	27	25	11
P5	27	27	11
P6	37	35	12
P7	26	25	8
P8	28	28	9
P9	60	(35)	64



A-B
1 黒褐色砂質土　しまりなし。
2 灰黄褐色砂質土　アカホヤ・池田降下軽石含む。
3 灰黄褐色砂質土　アカホヤブロック含む。
4 黒褐色砂質土　しまりあり。
5 褐灰色砂質土　脆い。
6 にぶい黄褐色砂質土　アカホヤブロック含む。
7 黒褐色砂質土　貼床。V層含む。

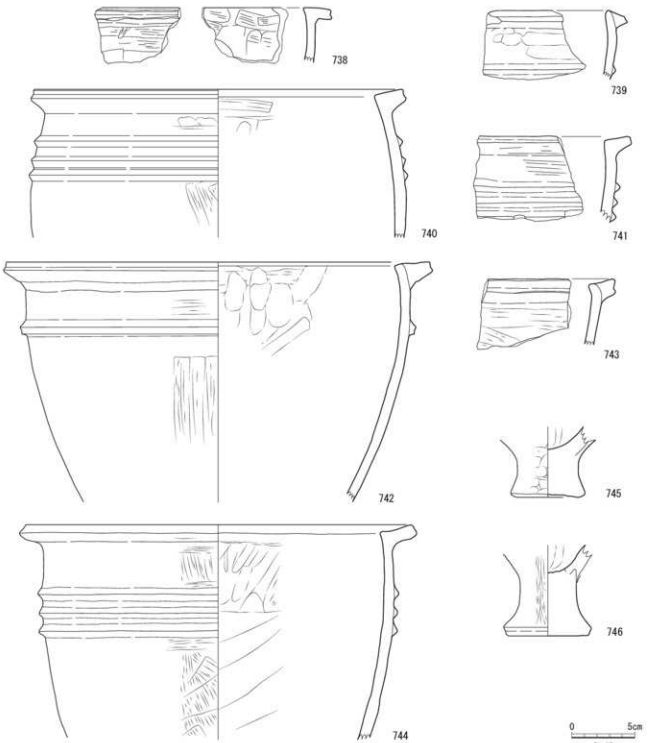
P1～9
1 黒褐色砂質土　固くしまる。
2 褐灰色砂質土　しまりなし。アカホヤブロック含む。
3 明黄褐色砂質土　アカホヤ主体。



第112図　弥生時代竪穴住居跡17号（1）

738・739は，小片であるが入来Ⅱ式土器の甕である。どちらも口縁端部に凹線状の凹みを明瞭に施す。739の胴部突帯は小振りだが丁寧に貼付されている。738は埋土２，739は埋土３から出土している。

740～744は，山ノ口Ⅰ式土器の甕である。740の胴部突帯は，１条目と２，３条目との間隔が空いている。口径約29cm，埋土２出土。742は，口縁下部にナデ調整による段差が明瞭に残る。また，断面略台形状に成形された胴部突帯が特徴的である。突帯下側の貼り付けが粗い。復元口径は約34cmで，甕としてはやや大形である。743・744は口縁部上面がわずかに凹み，屈曲部が内側にやや突き出す。744の口径は約34cm。741～743は埋土



第113図　弥生時代竪穴住居跡17号（2）

1～2にまたがって出土している。

745・746は入来Ⅱ式～山ノ口式土器の甕の脚台と考えられる。

747～752は入来Ⅱ式～山ノ口式土器の壺である。747は口径約29cm，入来Ⅱ式土器の大型壺の口縁部である。一部が床面から出土している。口縁端部と屈曲部の内側を凹線状に凹ませる。器内面は，表面の剥落が薄く広がる。748は大型壺の頸～肩部である。最大径約34cmで，外面にはススが広く付着している。埋土2から出土した。751・752は，どちらも口縁部がやや弯曲し，端部の凹線状の凹みも不明瞭であることから，山ノ口式土器の口縁部と考えられる。

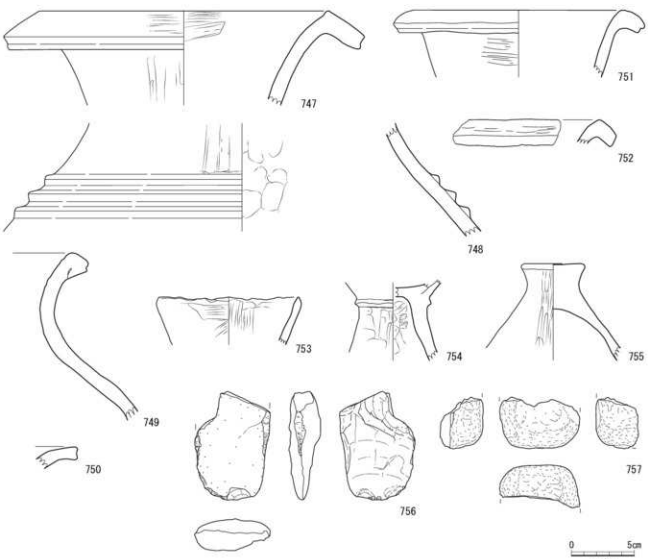
753は鉢（埋土3出土），754は高坏の脚部と考えられる。754は山ノ口式土器に伴うと想定される。755は外面の縦位のハケ目とつまみ部の形状から蓋と想定している。床面直上で出土した。

756はホルンフェルス製の磨製石斧だが，風化が著しく詳細不明である。757は石英製の磨・敲石である。敲打部分はよく使い込まれている。どちらも床面直上で出土した。

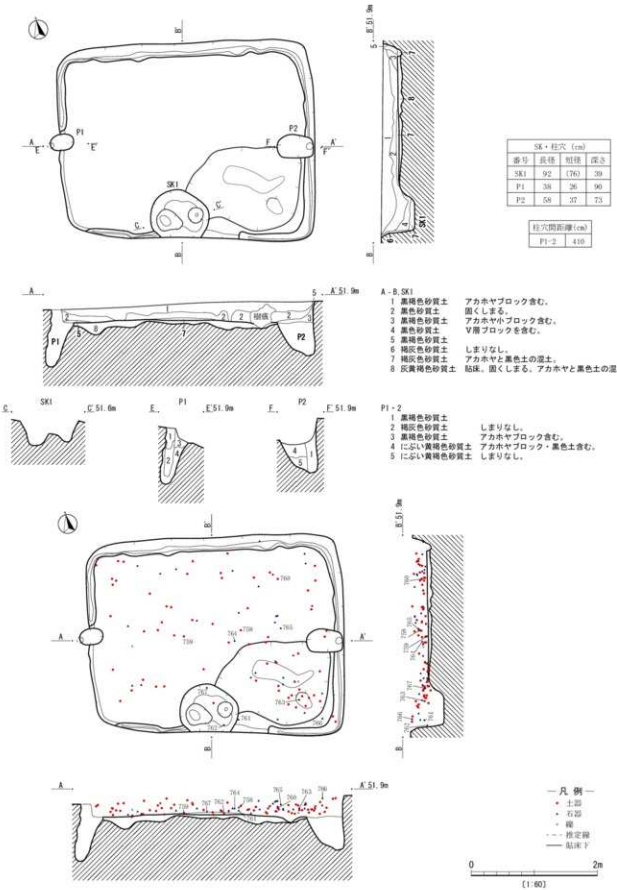
竪穴住居跡18号（第115・116図758～767）

F－48・49区のⅢ層上面で検出された。長軸約4m，短軸約3mの平面長方形の住居である。壁帯溝は，貼床を切ってほぼ全周に掘られているが，南西側のみ一部で掘られていなかった。

柱穴は，短軸側の東西壁の中央に1本ずつ，壁に接して住居の中央に向けてやや傾斜した状態で検出された。それぞれ，貼床と壁帯溝を切っており柱痕跡も観察された。どちらも主柱穴と考えられ，14号と類似する（13号も類似に含まれるか）。西側柱穴の底面には，径14cm程



第114図　弥生時代竪穴住居跡17号（3）



SK・柱穴 (cm)			
番号	長径	短径	深さ
SK1	92	(76)	39
P1	38	26	90
P2	58	37	73

柱穴間距離(cm)
P1-2　410

第 115 図　弥生時代竪穴住居跡 18 号（1）

度の灰白色の硬化面も確認できた。

南壁中央に接して，土坑（ＳＫ１）を検出した。貼床を切って掘られており，平面形は楕円形，断面は逆台形で，南側は住居壁面と一体化している。底面には東西両端にピットが確認された。13・19・20の各号と類似する。

貼床を除去したところ，南東隅で広く浅い掘り込みを検出した。貼床と同じ土で埋められている。掘削面は全体的に凹凸しているため，掘削によるものと考えられる。

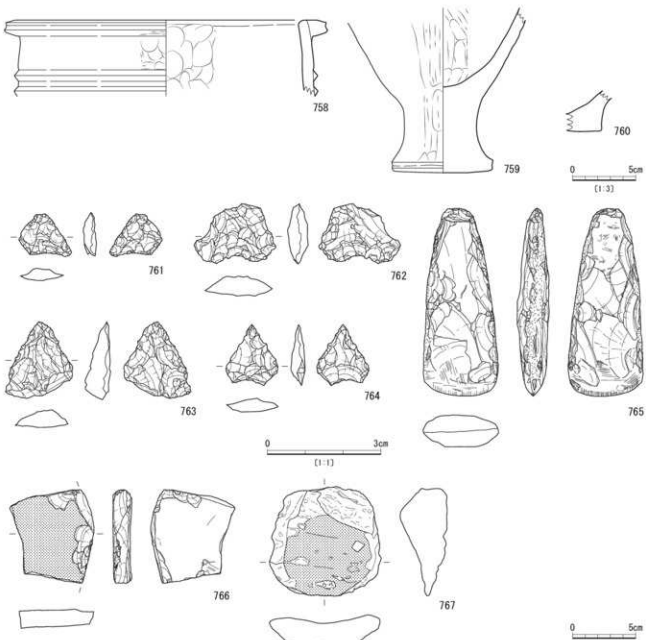
埋土は，８層に分層され，貼床は埋土８である。おおむねレンズ状堆積であるが，壁際には垂直堆積層（埋土５・６）がある。

遺物は，壁から中央に向かって埋土とともに流れ込んだような出土状況を呈しており，浮いた状態のものも多かった。小礫の剥片や突帯文土器も混ざっていた。

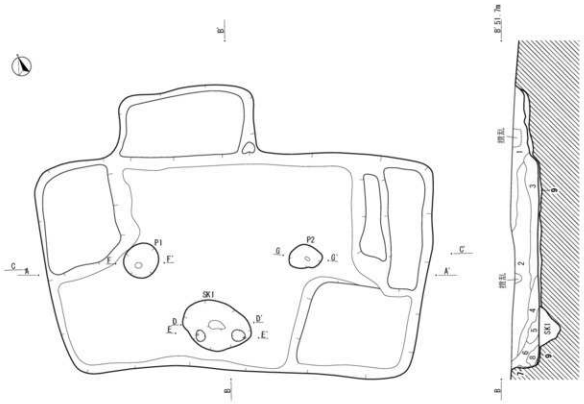
758～760は，入来Ⅱ式土器の甕と脚台，壺底部である。758は，外面の色調が黒～暗赤褐色を呈する。

761～764は，打製石鏃である。761・762が床面直上から，763は埋土２から出土している。762のみ未成品である。石材は，761が黒曜石（腰岳産か），762と763が水晶，764は緻密安山岩である。

765は，頁岩製の磨製石斧である。剥離と敲打により整形し，刃部のみ磨いている。刃部はゆるやかに外弯す



第116図　弥生時代竪穴住居跡18号（２）



SK・柱穴 (cm)			
番号	長径	短径	深さ
SK1	111	77	52
P1	52	53	61
P2	52	37	63

柱穴間距離(cm)	
P1-2	265

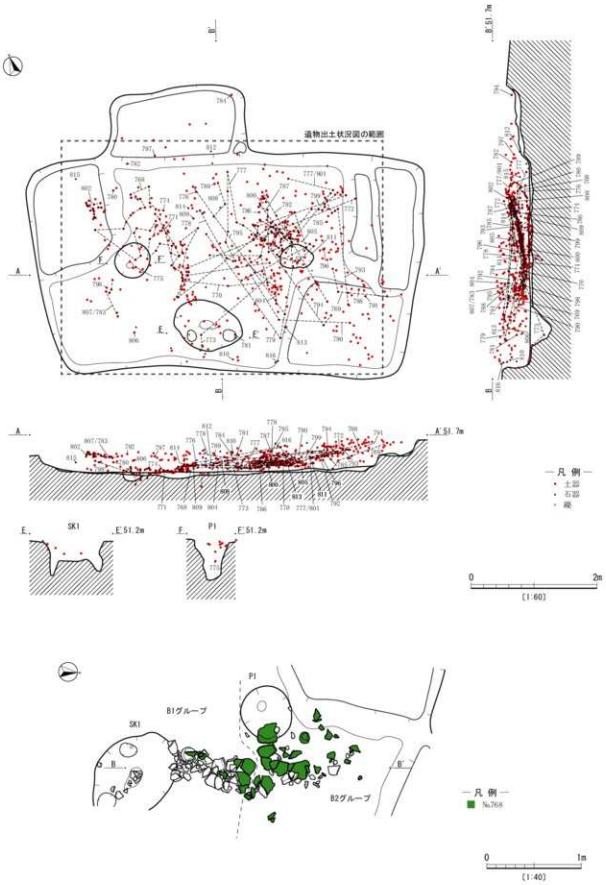
A-B
1 灰黄褐色砂質土
2 黒褐色砂質土　アカホヤ含む。
3 黒色砂質土　きめ細かい。
4 黒色砂質土　池田降下軽石含む。
5 黒色砂質土
6 黒色砂質土　黒色強い。
7 黒褐色砂質土　しまりなし。アカホヤ含む。
8 黒褐色砂質土　アカホヤブロック含む。
9 黒褐色砂質土　粘質。アカホヤを多く含む。

SK1
1 黒色砂質土　しまりあり。
2 黒色砂質土　アカホヤ少量含む。
3 褐灰色砂質土　固くしまる。
4 褐灰色砂質土　しまり弱い。

P1・2
1 黒褐色砂質土
2 褐灰色砂質土　しまりなし。
3 に ぶい黄褐色砂質土　アカホヤ・V層を含む。

0　2m
(1:60)

第 117 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（1）



第 118 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（2）

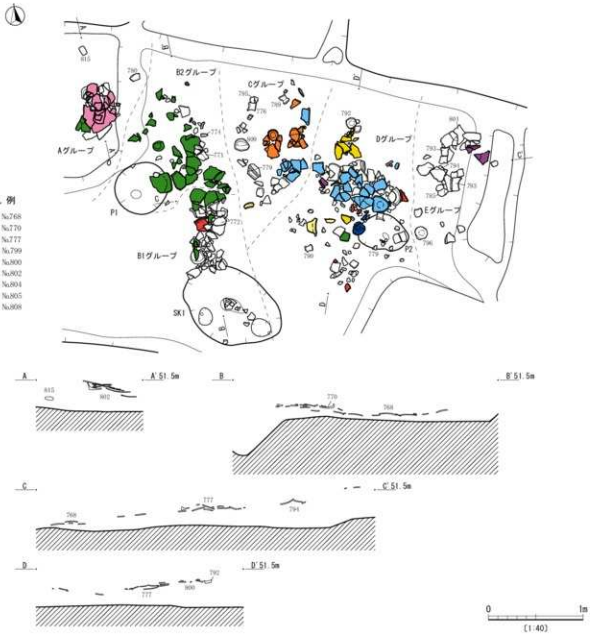
る両凸刃で，右半分に刃潰れをわずかに確認できる。長さ約15cm，幅約6cm，厚さ約3cmと，弥生の磨製石斧としては小さい。

766は砂岩製の砥石である。破片だが，厚さは現状のままと考えられる。砥面は正面のみで，上面右端のみ敲打痕とそれに伴う剥離が観察される。

767は軽石製品である。正面にレンズ状に凹む大きな擦り面が形成されている。擦るなどして現形に整えていると考えられ，下端が細くなっているのは正面の擦り面を使用した結果である可能性が高い。埋土2層出土。

竪穴住居跡19号（第117～128図768～816）

E・F－48・49区のⅢ層上面で検出された。長軸約6m，短軸約4.5m平面長方形の住居である。検出面からの深さも0.4m程度あり，残存状況は比較的良好である。北東壁に方形の張り出しがあるほか，短軸側の北西隅と南東壁沿いにベッド状遺構が設けられている。南東側のベッド状遺構は，北東壁側のみ上下2段の構造となっている。北西隅ベッド部は床面からの高さが13～15cmであるのに対し，南東側は，南東隅で床面からの高さ5～6cm程とあまり高低差がない。壁帯溝は確認されなかった。



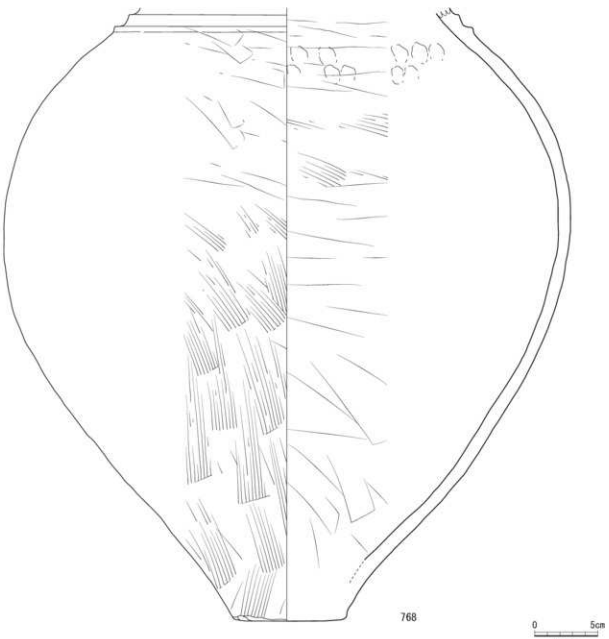
第119図　弥生時代竪穴住居跡19号（3）

柱穴は，貼床を切って掘られているのが２本検出された。他に検出されなかったこと，住居平面プランとの位置関係や深さなどから，この２本が主柱穴とみられる。柱径は10cm程度，柱間は265cmである。なお，西側の主柱穴上から大型の土器片が出土したが，意図的なものではなく住居の埋没過程で生じた現象と考えられる。

床面南側の中央付近で，土坑（ＳＫ１）を検出した。貼床を切って掘られており，平面形は楕円形で断面は漏斗状を呈する。この土坑にも，主柱穴と並びを揃えるように小ピットが２基，南側壁面に検出された。これらは，互いに向かって斜めに掘られており，主柱穴の柱痕跡と類似した褐灰色砂質土が堆積していた。ピットの位置，断面形状と角度が異なるものの，全体的な構造は，13・18・20の各号と類似する。

埋土は，９層に分層できた。そのうち貼床は埋土９である。おおむね，地形の高い南東側から埋土が流れ込んで住居を埋めたと想定できる。また，埋土７は垂直堆積層のように見えるが，アカホヤが混じっていることから，壁面の軽微な崩落状況などの自然的現象を反映していると考えられる。

遺物は，埋土中から多量に出土した。土器捨て場として利用されていたものと想定される。ただし，第118図にあるように，768～776など，床面直上またはそれに近い位置で出土しているものと，埋土１～２あたりのより上位の埋土から出土しているものとに分かれる傾向が看取されるようである。

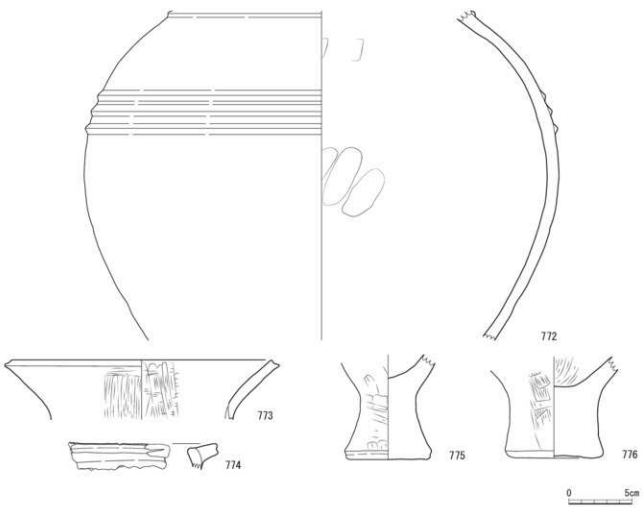


第120図　弥生時代竪穴住居跡19号（４）

第 121 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（5）

768～776は，住居内の主柱穴Ｐ１の東隣から土坑北端にかけて一括して出土した。含まれていた器種の多くは壺で，いずれも山ノ口式土器と考えられる。土器片は，重複せず細長く平面的に出土したが，完形に復元できた資料はなかった。

768は大型の壺である。一括出土域で最も破片点数が多かった。頸部から上の部分を欠くが，現存部の胴径約45cm，底径約９cm，現状器高約49cmである。胴部最大径はやや高い位置にあり，そこから窄まりながら底部に至るという，やや腰高の整った器形を呈する。外面は，縦位基調（主に掻き上げ）のハケナデで整形するが，さらにヘラナデで仕上げている。内面は，表面の剥落が浅く広く及んでおり詳細が不明ながら，器形に即した方向の工具ナデが施されているようである。頸部付近では指オサエの痕跡も確認できる。法量に比して器壁が薄い。頸部と胴部の境付近には，水平に巡る三角突帯が２条残存している。整形は丁寧だが，全体的に器形に対し小振りで，頂部もわずかに丸味を帯びている。胎土に雲母を含む。769は，大型壺の口縁部である。口径約33cm，分厚い口縁部がやや強く折り返しているのが特徴である。口縁端部の凹線状の凹みは明瞭に施される。屈曲部は，三角突帯こそ貼付されないものの，屈曲を強調するかのように鋭角的に整形されている。770も，大型の壺に属すると考えられる。口径約23cm，残存部胴径約40cm，器高約36cmである。胴部に比して口縁部～頸部がやや大振りな器形で，胴部も長胴形を呈していた可能性がある。口縁部内面には，頸部との接合面が残る。外面は，縦位基調のハケナデで仕上げられ，胴部付近のみさらに軽くナデられているようである。口縁部は，端部に凹線状の凹みが１条明瞭に施されているが，口縁部と頸部の屈曲部は稜を形成せず丸く仕上げられ，三角突帯なども付されておらず，全体的に簡素な形状である。頸部に３条貼付された三角突帯は，所々波打っているほか，頂部が尖らずわずかな平坦面がみえるような整形である。なお，三角突帯は，上記した箇所のみ確認され，胴部には貼付されていない。771は，一般的な法量の壺の口縁部である。口径約20cmで，調整は，内外面ともにミガキで仕上げているが，口縁部外面下位には，頸部との接合面がわ



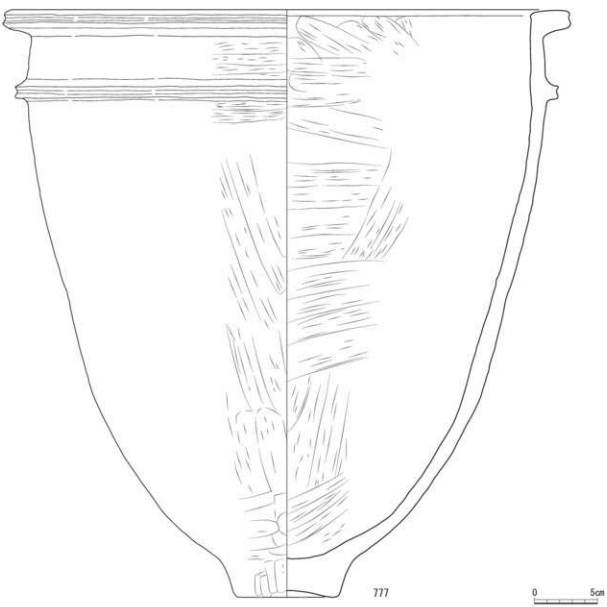
第122図　弥生時代竪穴住居跡19号（６）

ずかに残っている。口縁部は，内面で頸部との境に明瞭な稜を形成する。端部は丸く仕上げられ，凹線状の凹みは施されていない。772は，胴径約38cm，頸部～口縁部と底部を欠くが，丸味の強い器形である。想定される法量に比して器壁が薄いが，内外表面の剥落も著しいため調整とともに詳細は不明である。胴部最大径部分よりやや上側に三角突帯が3条巡るほか，残存部上端（頸部との境界か）にも三角突帯が1条ある。773は，広口壺の口縁部と考えられる。口径約20cm，器壁は薄く，内外面ともに縦方向の丁寧なナデ調整が施される。口縁部は，断面方形で直線的に開き，やや厚みを増した端部に凹線状の凹みが施されている。胎土に雲母を含まず，色調は灰色系を呈する。破片の一部は，土坑（ＳＫ１）埋土から出土した。

774～776は，一括出土域から出土した甕である。776は，脚長が比較的短く略円筒形に成形されており，2号で出土した525のような器形が想像される。

ここからは，埋土中から出土した主な遺物について概説する。

777は小振りの大甕である。全体の半分ほどが，埋土2中のまとまった範囲から出土した。器高約47cm，口径約45cm，脚台端径約9cmである。口縁部は短いが水平に伸び，端部には凹線状の凹みが巡る。胴部は鬼弾形を呈し，器壁は法量に比して薄い。底部は分厚く，上げ底状に成形され，鬼弾形の器形から突き出している。器面調整は，内外面ともにナデが丁寧に施されており，特に脚台外面は，上げ底の部分まで含めて丁寧にナデている。胴部には黒斑が観察される。突帯は，やや口縁部寄りに



第123図　弥生時代竪穴住居跡19号（7）

貼付される。胴部から長く伸びず，端部には口縁部と同様の凹線状の凹みが施されるため，断面は「M」字状を呈する。器面に明瞭な被熱痕跡は視認されないが，胴部にはわずかにススも付着している。

778～792は，甕である。口縁部の長さや胴部の三角突帯の条数に差違はあるものの，いずれも口縁部をやや立ち上げる整形が共通しており，由ノ口Ⅱ式土器と想定される。778は口径約30cmで，口縁部がやや細く伸び，胴部はあまり張らない。稜線の整形は丁寧だが，口縁部はやや波打つなど成形はやや粗い。三角突帯は，３条とも頂部がやや丸味を帯びる。埋土２～３で出土した。779は口径約30cm，器面の風化が著しく調整等の詳細が不明である。想定される法量に比して器壁が薄い。色調は橙色系を呈する。三角突帯は，風化による剥落の可能性もあるが，幅に比して突出が低い。埋土２下位～１で出土した。780は資料が小片だが，焼成が良好で，色調は橙色系を呈する。内外面とも丁寧にナデられている。口縁端部は略方形に整形され凹線状の凹みは痕跡器官的に残る程度である。２条残っている三角突帯はやや下向きだが強く突出させており頂部も鋭く仕上げている。口径約33cmで，埋土２上位で出土した。781は大型の甕である。口縁部はやや立ち上がるが伸びず，口縁端部の凹線状の凹みは明瞭に施される。埋土２で出土した。782も大型の甕である。口縁部は，端部に凹線状の凹みを施すが，しゃくれるように立ち上がり，内面を鋤先様に小さく突出させる。三角突帯は，口縁部寄りに１条貼付されるが，想定される法量に比して小振りである。埋土１で出土した。783は口径約27cmで，成形・整形ともに丁寧な資料である。器壁は比較的薄い。口縁部は端部に向けて薄く成形され，かつわずかにしゃくれるように整形されている。口縁端部には，わずかに凹線状の凹みが施される。４条貼付された胴部の三角突帯は，頂部をやや下向きに整形している。最も下位の突帯のみ，頂部がやや丸味を帯びる。突帯下位及び口縁部下面に広くススが付着している。埋土１で出土した。

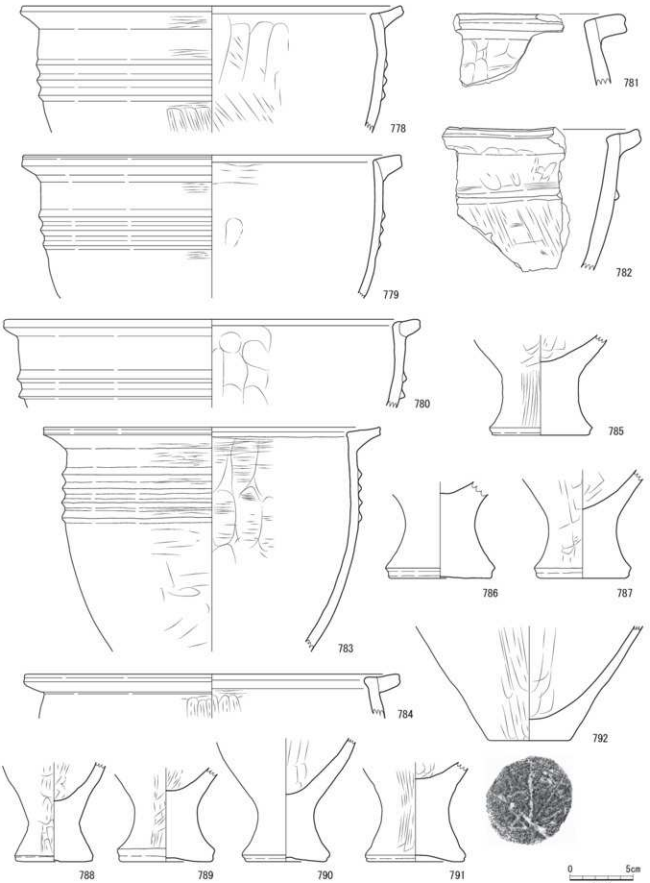
785～791は，脚台である。785～787は埋土２，788～790は埋土２上位～１，791は埋土１上位で出土している。785は，残存する底部の形状から，かなり胴張りする器形であることが想定される。788は，外面の一部に接合痕が残るなどやや粗い成形である。789も，底部平面形が楕円形を呈しており，やや粗い。脚台端径は，788が約６cmでこれらの中では最も小さく，787と791が約８cmで最も大きい。

792は他の平底資料と比較して底部が薄く，胴部の立ち上がり角度も急で直線的であることなどから，甕の底部と想定した。胎土には雲母をわずかに含むが，石英などの白色砂粒も多く含む。底部には広葉樹の木葉痕が残る。器面調整は，板状の工具を縦方向に用いて行っている。幅が狭いが，その理由があて方なのか器径によるのかは不明である。宮崎平野部などとの関連が想定される。

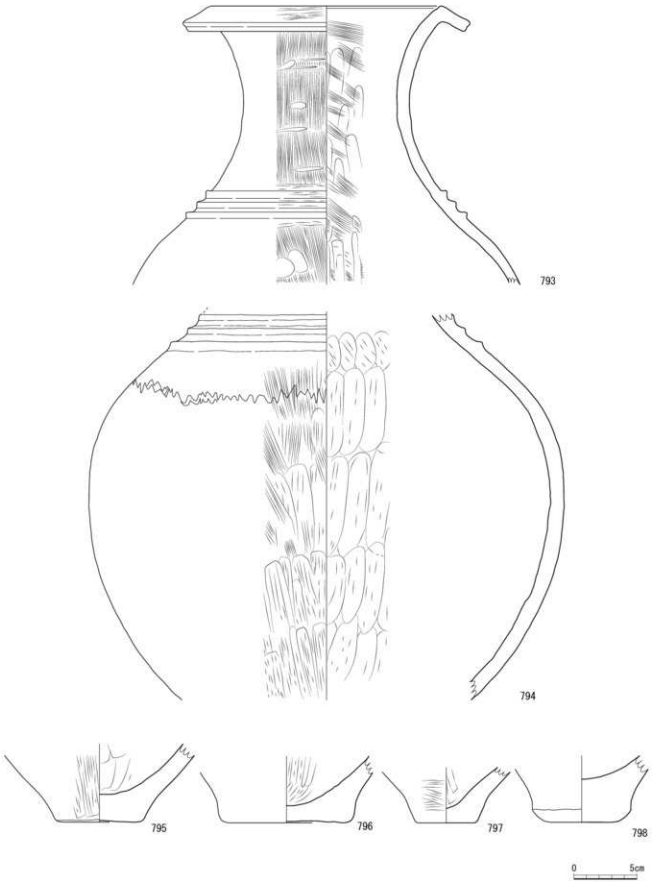
793・794は，壺である。793は，口径約23cm，比較的器壁が薄く，内面には，最上位の三角突帯の上側接合部あたりの位置にわずかに接合面を確認できる。器面調整は丁寧に施されているが，内面には前工程の指オサエの痕跡を消し切れていない。一方頸部外面は，角度と間隔を意識しているかのように，均等にナデている。口縁部は，頸部と厚みを変えずに「へ」の字状に折れ曲がり，端部に凹線状の凹みを施す。３条の三角突帯は頂部を上向きに鋭く成形し，丁寧な横ナデで仕上げている。794は，胴部最大径が約38cmである。口縁部～頸部，底部を欠くが，直線的に開く肩部から丸く張る胴部という器形を呈している。目を引くのは肩部と胴部の境付近に施文された小波状細沈線である。鋭い施文具を用いて，器面調整の後に施されているが，全体的に浅く，消えている部分もある。その一方で，部分的に２条描かれているようにみえる部分もあるが，それは一度描いた線の消し残りである。沈線としては，１条描くことを意識していたようである。三角突帯は３条確認され，やや丸味を帯びるものの頂部を上向きにした丁寧な仕上げとする。器面調整は，成形時の凹凸を若干残すものの全体的に丁寧である。外面は，底部から最大径付近までは縦基調，そこから上位は斜位も追加されたヘラナデが施されている。内面は，ヘラナデの前工程の指オサエの痕跡が残る。このほか，外面には，わずかながらススの付着も観察される。

795～798は，壺の底部である。いずれも比較的上位の埋土中から出土している。795は，777がまとまっていた範囲に混在していた。底径約７cmである。796は，793・794がまとまっていた範囲に混在していた。内底面の曲線的な整形が丁寧である。底径約11cmである。798は，外底面の周縁部が稜を持たず丸味を帯びて，かつ器壁内部の胎土色が環状に露出している。当該部分の形状が変じているため，焼成後，意図的に再整形した可能性も想像される。底径約８cmである。

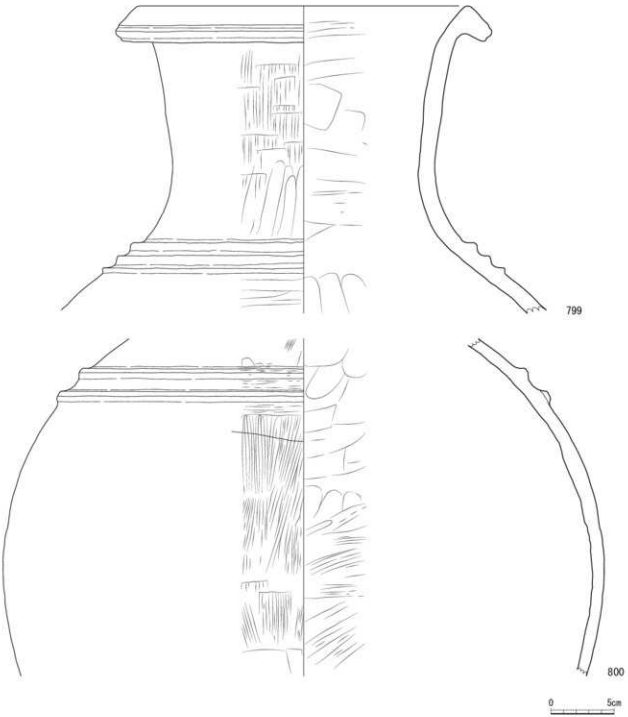
799～803は，大壺並びに底部と考えられる。799は，口縁部～肩部の資料で，平面的には主柱穴Ｐ２の北隣付近に，800とともにまとまって出土した。口径約26cmで，口縁部は短いが強く折れ曲がる。頸部外面は，縦位のヘラナデが丁寧に施されている。三角突帯は３条貼付され，基本的には丁寧な整形で仕上げられているが，最上位の突帯のみやや粗い仕上げになっている。口縁端部に施されている凹線状の凹みは，断面が一般的なレンズ状ではなく「L」字状になっている。さらに，端部上端にも段状の凹みが巡っている。この資料の特徴である。埋土２で出土した。800は，口縁部～頸部と底部を欠くが，胴径約48cmでほぼ球形を呈する。器壁は，想定される法



第 124 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（8）

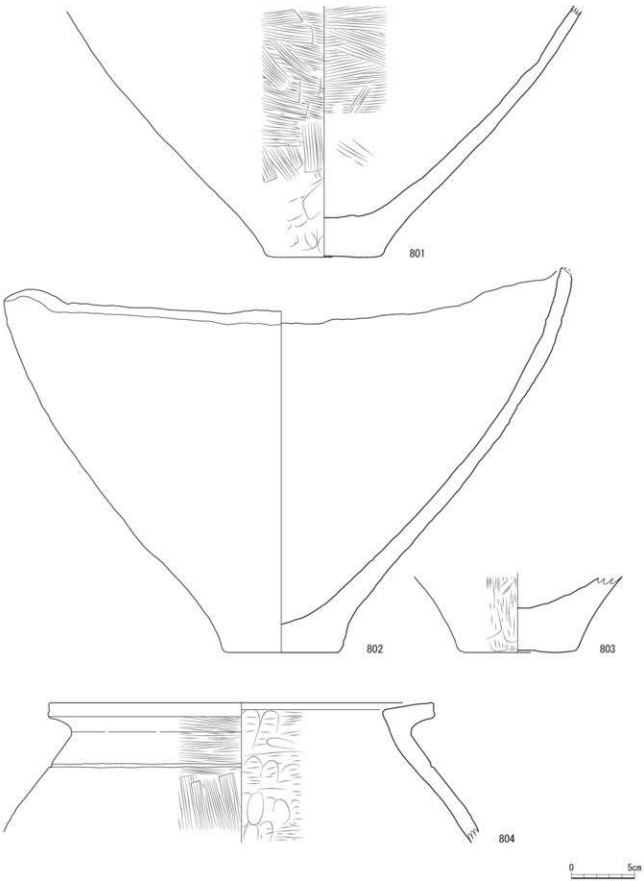


第 125 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（9）



第 126 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（10）

量に比して薄い。外面の調整は，縦基調のナデが丁寧に施されているが，内面の調整は，ナデられてはいるものの成形時の器厚の凹凸を整え切れていない。突帯は，肩部付近に２条貼付されている。それぞれ細かく波打つやや雑な貼り付けだが，調整は丁寧である。また，断面は台形に仕上げている。埋土２下位で出土した。801 は，東隅の２段構造のベッド状遺構から主柱穴Ｐ２の北あたりにかけて，やや散在して出土した。底径は約９cmで，内外ともに平底（厚さ約３cm）に整形され，ほぼ直線的に開きつつ胴部へ向かう器形である。底部に比して胴部の器壁は薄く，対照的である。内外面ともに横基調の工具ナデが丁寧に施されるが，底部付近のみ縦位のハケナデに加えてヘラでナデて仕上げている。器形の微妙な曲線を意識した調整と考えられる。埋土２上位～１下位にまたがって出土している。802 は，割れていたがほぼ正立状態で一括して出土した。ただし，平面上の出土位置



第 127 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（11）

は北西隅のベッド状遺構の平坦面だが，出土層は埋土１で，遺構面とは明らかに間層を挟んでいる。平底だが，内底は丸く整形されている。器壁は，底部を含め想定される法量に比して薄いが，これは器表面が内外ともに著しく剥落していることに起因する恐れもある。この剥落のため，調整は不明である。一方，上端部は，剥落しているものの，おおよそ舌状の断面形状をしていることが視認できるので，接合面で割り揃えられた可能性がある。出土位置及び状態，器表面の著しい剥落，全体形状などの情報が，意図的な状況を想像させる資料である。底径約９㎝，現状上部径約 45㎝，同高さ約 27～31㎝である。803 は，底径が９㎝あまりで，801 と同程度の壺である。

804 は，無頸の大型壺と考えられる。壺棺に見えなくもない器形である。口縁部は，甕とほぼ同様の整形で，上部平坦面は特に丁寧にナデられる。胴部は縦基調のハケナデが施され，その後，口縁部周辺に横ナデが加えられている。内面は，成形時の指頭押圧の痕跡をわずかに残すものの，丁寧な横ナデが施されている。口縁端部には凹線状の凹みが巡るほか，口縁部下に，先端が方形を呈する棒状工具により，ごく浅い沈線が１条横位に巡っている。沈線は，わずかながら乱高下しており，口縁部周辺の滑らかな横ナデとは明らかに異なる。あるいは波状文を意識したのかもしれないが，遠く及ばない。口径約 31㎝，胎土には雲母を含む。主に埋土２下位から出土しているが，接合資料の一部は埋土１でも出土している。

805 は，小型の無頸壺と考えられる。斜位に立ち上がるごく短い口縁部から胴部は略楕円形に張り平底の底部に至る器形となるが，図にあるとおり，自立するものの大変歪である。器面は，風化のため詳細不明だが，本来は内外ともに丁寧にナデられていたと想定される。底部は平底だが，外面は砂地に置かれたかのようにざらついている。胴部下半には，黒斑が観察される。口縁部上端は平滑に整形されており，口縁端部には，細い凹線状の凹みが１条巡る。また，口縁部には，焼成前に上部平坦面から穿たれた貫通孔が１対ある。90 度程度ずれた箇所には痕跡を含め何も視認されず，その他の部位には観察されない。口径約 15㎝，底径約７㎝，器高約15～18㎝，胎土に含まれる雲母はごくわずかで，ほとんど目立たない。主柱穴Ｐ２の西側上端から出土している。

806～809 は，鉢と考えられる。807 は，小片のため器形等の詳細は不明だが，接地面に沈線が２条施されているのが確認される。胎土に雲母を含まない。808 は完形品で，口径約 26㎝，底径約 10㎝，器高約 18㎝である。二叉状口縁壺の口縁部～頸部のような形状からそのまま平底となる，大変特徴的な器形である。器面は風化して調整の詳細は不明だが，外面は縦位のヘラナデ，内面は斜位のヘラナデが，どちらも丁寧に施されていると考えられる。底部の整形も内外ともに丁寧である。二叉状の口縁部には，下位側端部のみ縦位の細い刻目が施されるが，確認されない範囲もあることから，本来も半周程度しか施されていない可能性がある。埋土２で出土した。809 は，808 と類似した器形の底部と考えられる。こちらは，底部が内側も平面に整形されているほか，器壁も胴部より厚く作られている。底径約 11㎝，埋土２出土。

810～813 は，いずれも頁岩製の磨製石鏃である。810 は形状が略正三角形を呈し，鋭利な両側辺を形成する。左の下端部を欠損している。残存部で長さ 1.6㎝，幅 1.7㎝，厚さ 0.3㎝，埋土２で出土。811～813 は，形状が二等辺三角形を呈し，812・813 は大型である。いずれも両側辺は断面方形に研磨されているのが特徴である。いずれも先端部を欠損する。811 の裏面の剥離は素材の主要剥離面である。残存部で長さ 2.1㎝，幅 1.3㎝，厚さ 0.3㎝，埋土２で出土した。812 は，両側辺の下端をやや丸く窄ませている。正面先端部の剥離は，欠損時に生じたものである。残存部で長さ 4.2㎝，幅 2.3㎝，厚さ 0.5㎝，床面直上で出土した。813 は，基部のやや深い抉りが目立つ。残存部で長さ 4.2㎝，幅 1.1㎝，厚さ 0.5㎝，埋土２で出土した。

814・815 は，砂岩製の敲石である。814 は，棒状の素材礫の下端部に作業面が集中している。残存長 6.3㎝，幅 2.8㎝，厚さ 2.3㎝，重さ 76ｇ，埋土１出土。815 は，磨製石斧を転用した敲石である。下端部（磨製石斧における基部）に最も作業面が集中しているほか，正面と裏面にも部分的に作業面が形成されている。上端部（同刃部）には顕著な敲打痕は観察されない。長さ 9.2㎝，幅 6.0㎝，厚さ 3.8㎝，重さ 350ｇ，埋土２下位から出土した。なお，形状から磨製石斧としても長く使われていたことが想定される。

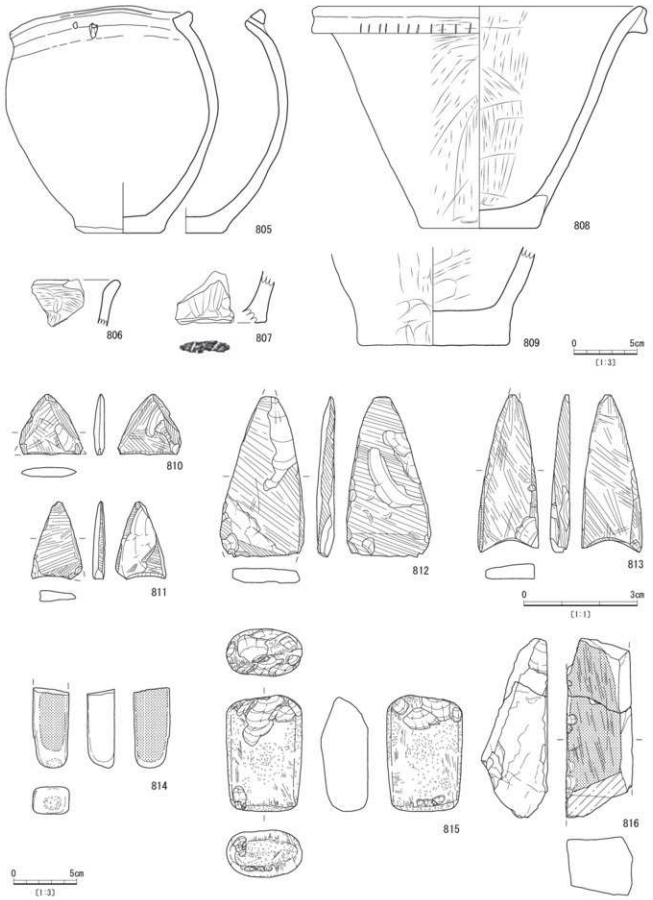
816 は砂岩製の砥石の破片で，正面にわずかに凹む砥面がみられる。残存部で長さ 14.2㎝，幅 5.3㎝，厚さ 5.2㎝，重さ 445.6ｇ，埋土１から出土した。

竪穴住居跡 20 号（第 129・130 図 817～825）

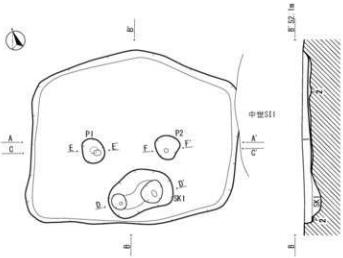
Ｄ・Ｅ－50 区のⅢ層上面で検出した。長軸約 3.3ｍ，短軸 2.8ｍ，検出面からの深さ 0.1ｍの，平面長方形の住居である。東側の一部を中世の竪穴建物１号に切られているほか，後世の削平も広く全体に及んでいる。そのため，張り出しは確認できなかった。ベッド状遺構や壁帯溝は設けられていないようである。

柱穴は２本，住居の東西主軸線上で検出された。観察できた柱痕跡から推定される柱径は 17㎝程度である。貼床を切っており，どちらも主柱穴（柱間 111㎝）と考えられるが，東側は西側の半分ほどしか深さがない。なお，このように２本の主柱穴の深さが異なっているのは，他に３号・５号・７号でみられる。

南壁の中央付近に土坑（ＳＫ１）を検出した。平面形は楕円形で断面は椀形を呈する。貼床を切って掘られて



第 128 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（12）



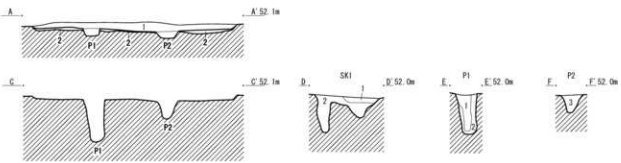
SK・柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	104	65	59
P1	40	34	62
P2	38	37	27

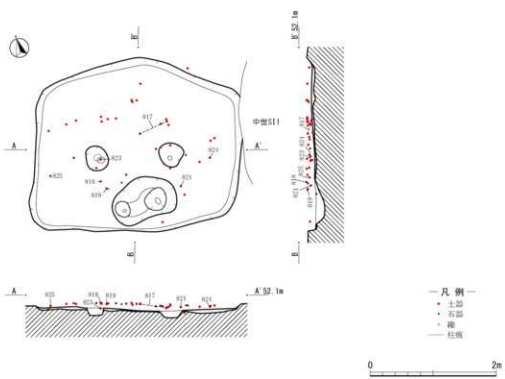
柱穴間距離(cm)	
P1-2	111

A-B
1 黒褐色砂質土　池田降下軽石含む。
2 黒褐色砂質土　貼床。アカホヤ含む。

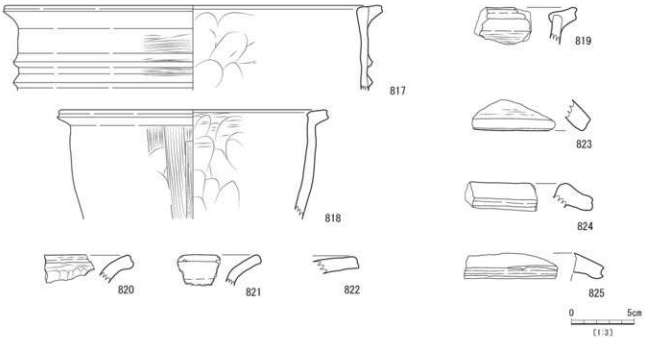
SK1
1 黒色土
2 黒色土　池田降下軽石含む。

P1・2
1 黒褐色砂質土
2 黒褐色砂質土　アカホヤブロック多く含む。
3 黒色土





第 129 図　弥生時代竪穴住居跡 20 号（1）



第 130 図　弥生時代竪穴住居跡 20 号（2）

おり，底面の東西両端（土坑長軸上）に小ピットを伴う。13・18・19 の各号と同様の構造である。

遺物は，多くが床面から浮いた状況で出土している。

817～819 は，山ノ口Ⅰ式土器の甕と考えられる。いずれも口縁部が弱く立ち上がり，長さが短い。817 は胴部に三角突帯が 2 条以上巡るが，整形はやや粗い。しかし，器壁は薄く焼成は良好である。復元口径約 30cm。818 は，上記の特徴に加えて，小振りな法量と器外面に施された丁寧な縦位のハケ目が目を引く。口縁端部の凹線状の凹みは明瞭に施されるが，三角突帯は貼付されていない。口径約 21cm。819 は口縁部の接合方法が独特である。

820～825 は，山ノ口式土器の壺と考えられる。820～822 は広口壺，823～825 は口縁部が外反する壺と想定される。823 のみ床面直上から出土しているが，これを含めて小片のため，詳細は不明である。

竪穴住居跡 21 号（第 131～135 図 826～847）

F－46 区のⅢｂ層上面で検出された。平成 24 年度調査時に，東側の一部が検出されていた住居跡である。径約 6.4 m，検出面からの深さ約 0.2 m の，大型円形住居である。後世の撹乱や削平が激しく残存状況が良くないため，張り出し部などは確認できなかったが，柱穴，土坑，壁帯溝など住居内の他の構造物は検出することができた。

調査着手当初は，北側に張り出し部のある大型円形住居と想定していたが，南北軸上に位置する柱穴 2 本のみ埋土に柱痕跡を観察できなかったこと，この 2 本と類似する埋土が堆積する 22 号の土坑 1 が検出されたことなどから，平面プランを含め詳細に再検討した結果，本住居跡と 22 号が切り合っていると判断した。

両者の先後関係については，貼床が 1 枚しかなく，どちらの掘削物も貼床を切っていたため，床面では判断できなかったが，上述した 22 号の土坑 1 を切っている柱穴（Ｐ１）が，21 号の平面プランや他の同色の埋土のある柱穴と位置関係に無理がないことから，22 号→ 21 号と判断した。本遺跡では，数の少ない切合い関係を観察できた遺構である。

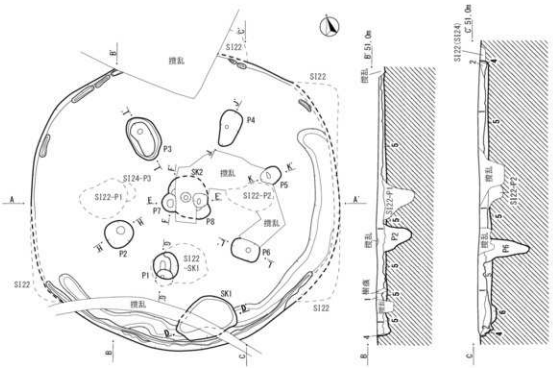
なお，両者の時期差については，床の貼り直しが見られないことから，ほとんどないものと想定される。

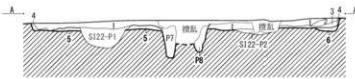
21 号の主柱穴は 6 本と考えられる。柱痕跡を伴うものが多く，基本的な埋土は黒色土で，柱痕跡の周辺には黒褐色土でアカホヤを多く含む埋土がある。また，貼床からの深さは平均 1 m 前後と深いが，断面形状から建て替えがあったと想定される。また，Ｐ２とＰ４では，暗褐色土のしまりがあまりない埋土が下部に見られた。

住居中央部と南壁近くで，土坑を 2 基検出した。どちらも貼床を切って掘られている。床面中央で検出した土坑は，撹乱のため全体形状は不明であるが，残存していた埋土は黒褐色土が主体で，住居内埋土とほぼ同一であった。床面に住居の中心軸線に沿うように小ピット（Ｐ７・８）を確認できた。ピットの埋土は明るい暗褐色土で柱痕跡は確認できなかった。

住居南端で検出した土坑は，壁帯溝に接している。平面楕円形で断面は皿状と浅く，底面にアカホヤが薄く堆積していた。

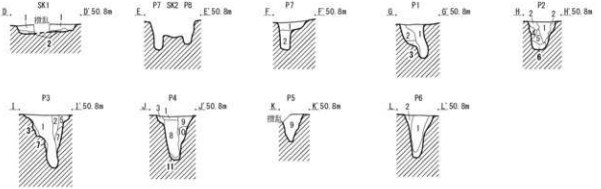
壁帯溝は，住居南側の壁面沿い（全体の 2 ／ 3 程度）に確認できたほか，北側でも壁面沿いに断続的に確認できた。形状や埋土の特徴がほぼ一致することから，本来





A－B

1 黒褐色土　しまり強、粘性なし。
2 明黒褐色土　しまり強、粘性なし。
3 黒色土　しまり強、粘性なし。
4 褐色土　しまり中、粘性なし。
5 黒褐色土　貼床、しまり強、粘性なし。
6 黒褐色土　しまり中、粘性なし。



SK1－2

1 黒褐色土　しまり中、粘性なし。
2 黄褐色土　しまり中、粘性なし。

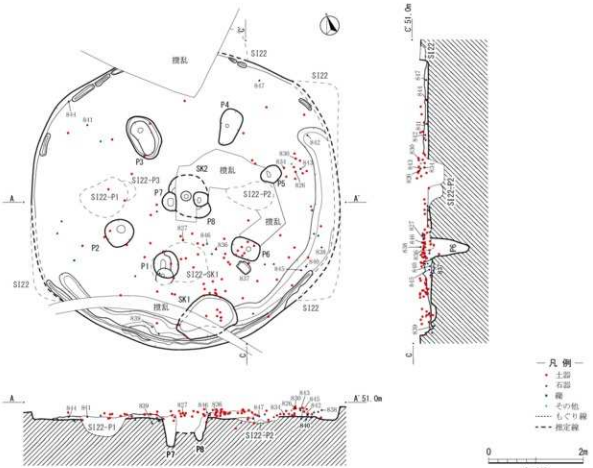
P1～8

1 黒色土　しまり強、粘性なし。
2 黒褐色土　しまり強、粘性なし。
3 にぶい黄褐色土　しまり中、粘性弱。
4 黄褐色土　しまり弱、粘性弱。
5 黒褐色土　しまり弱、粘性なし。
6 暗褐色土　しまり弱、粘性弱。
7 明黒褐色土　しまり弱、粘性なし。
8 黒色土　しまりなし、粘性なし。
9 褐色土　しまり中、粘性なし。
10 暗褐色土　しまり弱、粘性なし。
11 暗褐色土　しまりなし、粘性なし。

SK・柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	127	74	14
SK2	104	82	38
P1	56	52	71
P2	59	57	59
P3	97	61	111
P4	78	45	92
P5	44	35	58
P6	62	41	90
P7	40	33	58
P8	38	28	49

柱穴間距離（cm）	
P1-2	113
P2-3	220
P3-4	183
P4-5	135
P5-6	163
P1-6	189

第 131 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（1）



第 132 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（2）

は壁沿いに一巡していたものと想定される。

この住居では上記遺構の他に，周溝のような施設を南～東側の壁面沿いに確認した。壁帯溝に切られているが，幅は住居の内側に向けて壁帯溝の倍近く広く，断面形状は逆台形，床面は壁帯溝に比べてやや凹凸があり壁帯溝の底面より深い箇所と浅い箇所がある。用途は不明である。

埋土は主に２層で，貼床は埋土５である。黒褐色土であるが，アカホヤを多く含むためか色調はやや明るめである。また，垂直堆積層（埋土４）も確認された。全体的な堆積状況はレンズ状堆積と判断でき，流入方向は不明ながら自然堆積による埋没したものと考える。

遺物は，入来Ⅱ式土器や山ノ口Ⅰ式土器が多く出土した。特に，床面近くから磨製石鏃や未成品と砥石が出土したほか，石英も出土している。フローテーションの結果，全体的には頁岩のチップが検出されたが，床面南側では石英のチップがまとまって検出された。

また，床面南東部では石皿（837）も出土した。

826～829 は，入来Ⅱ式土器の甕である。口縁部は短いが水平またはわずかに下傾し，端部に明瞭な凹線状の凹みを１条巡らせる。826 では胴部に三角突帯を２条確認できるが，他は小片のためもあって突帯の貼付は確認できない。827 は，内外面のハケナデが丁寧に施される。

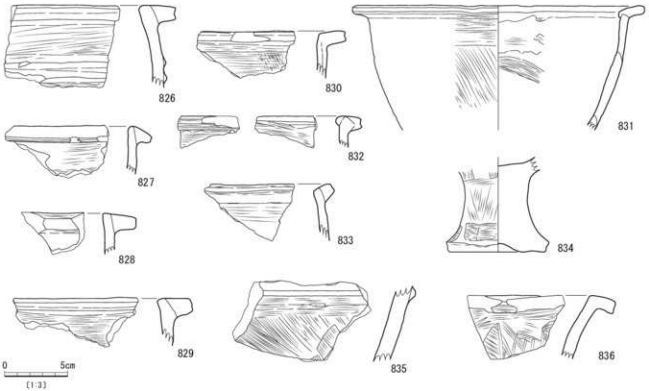
830～833 は，山ノ口式土器の甕である。口縁部の整形に差違があるが，総じて器壁が薄い。831 は，口径約 21cm と小振りで，口縁部の接合を含め全体的に器面調整がやや粗い。胴部に突帯は貼付されていない。832 は，831 と口縁部の接合方法並びに屈曲内面を鈍く突出させる形状が類似する。833 は，短い口縁部が明確に立ち上がる。

834 は，入来Ⅱ式～山ノ口式土器の甕の脚台である。外底面中央を断面略台形に凹ませているのが特徴的である。外端は面取り整形をしているが，凹線状の凹みは施されていない。内底面は水平にはなっていないが，平坦に仕上げられている。

835 は，断面台形の突帯が１条貼付された大型の資料で，山ノ口式土器の大甕と想定される。

836 は，入来Ⅱ式～山ノ口式土器に伴う壺の口縁部である。外面はハケナデとミガキを交互に施して丁寧に仕上げている。

837 は，砂岩製の石皿である。Ｐ６の南隣から床面直



第 133 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（3）

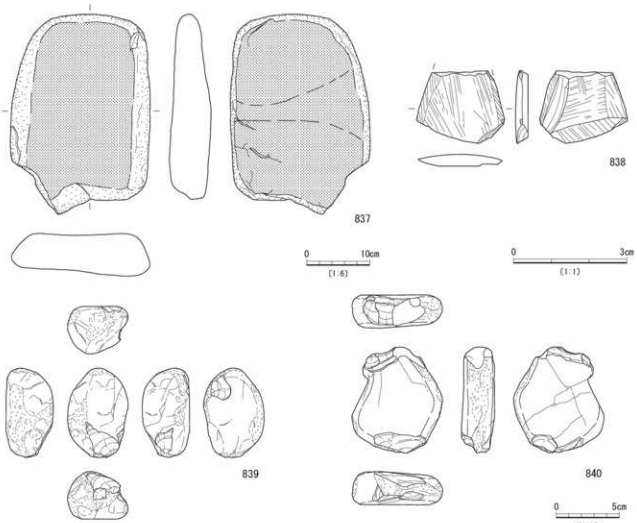
上で正面を上にした状態で出土した（第 132 図）。正面左下端を欠くが，稜線が丸く擦れていることから，破損後も使用を続けていたものと考えられる。正面と裏面双方に使用面が観察されるが，正面の方が軽く光沢を帯びており，主な使用面と想定される。正面は平坦ではなく，面の短軸線上がわずかに凹み，逆に，裏面は面の短軸線上がわずかに張る。そのため，床に置くとやや不安定である。長さ約 31.5㎝，幅約 22㎝，厚さ約 7㎝，重さ約 7㎏である。

838 は，頁岩製の磨製石鏃である。先端部を欠損している。基部は，主軸に対して斜めになっているが摂理面を利用して仕上げており，歪ではあるが欠損しておらず，裏面に残るステップとともに，この鏃の特徴となっている。

839・840 は，敲石である。839 の石材は石英で，上下端部に敲打部が集中しており，作業時に生じたと考えられる剥離も観察される。このほか敲打痕は，稜線上にも確認される。長さ 9.4㎝，幅 6.4㎝，厚さ 5.0㎝で重さ 377.9 g で，床面直上から出土した。840 の石材は砂岩で，敲打痕等の特徴は 839 とほぼ類似する。表裏面は平坦だが磨痕等が観察されないため，磨石としては利用されなかったと想定される。841 は磨石である。石材は砂岩で，ほぼ全面に磨面が観察され，敲打痕は見られない。

842 は，頁岩製の砥石である。破片であり，正面にわずかに砥面が残るのみで，裏面，右側面及び下面は破損している。また，上面並びに左側面も表面が剥落している可能性がある。

843～847 は軽石製品である。他の住居に比して多数出土している。843 は，全面を整形してほぼ対称形にしているが，左上端部のみ欠損している可能性がある。正面中央部には，縦 3.5㎝，最大幅 1.3㎝の貫通孔があるほか，孔の上隣には径 1 ㎝強の未貫通の穿孔が正面及び裏面にある。また，この未貫通孔の左下隣（左側面部上位）には，ほぼ同径と想定される穿孔の痕跡を確認できる。さらに，中央の縦長の貫通孔も，形状から，まず孔両端にあたる 2 か所を穿孔し，その後この 2 孔をつないで貫通させたと考えられる。被熱痕跡は見られない。長さ 8.6㎝，幅 6.4㎝，厚さ 3.2㎝，重さ 31.6 g。844 も全面を整形しているが，裏面上部には，成形時もしくは破損時の剥離面が観察される。両側面は，わずかだが明瞭に抉りが入る。正面には平面長楕円形，断面レンズ状の凹部が形成されているほか，この凹部の下側にもごく浅い溝状の凹みが観察される。また，中央の凹部表面にのみ，縦方向の擦痕と考えられる浅い条線が観察される。被熱痕跡は見られない。長さ 13.1㎝，幅 7.5㎝，厚さ 3.9㎝，重さ 95.5 g。845 は，同じく全面を整形しており非対称形だが破損品ではない。正面並びに右側面の整形が最も丁寧である。下縁部は成形痕もしくは剥離痕が残ってい



第 134 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（4）

る可能性がある。わずかに被熱痕跡を認める。長さ10.5cm，幅 11.2cm，厚さ 4.7cm，重さ 111.9 g と軽石製品のなかでは比較的重量がある。846 は，正面左上部の切り込み状の部分を含めて全面を整形している。正面はわずかに凸レンズ状に仕上げている。裏面には，整形後に筋状の掘り込みまたは切り込みが3か所確認できる。長さ 6.8cm，最大幅 6.3cm，最大厚 3.9cm，重さ約 33.5 g。表面には部分的にやや赤く変色している範囲を認めるが，被熱痕跡であるかは不明である。847 は，正面にみられる 1 ～ 2 か所の浅い凹みと，右側面の大きな穿孔が目を引く。右側面は，孔の上下で面が一致しないことなどから，穿孔後の破断とみられるが，破断後に面を整えている可能性もある。他の面は，表面の風化が著しく整形の程度を判別できない。また，裏面には穿孔の痕は見当たらない。843 と類似する特徴を観察できることから，同じような用途に使われた可能性がある。現状で，長さ 8.5cm，幅 4.4cm，厚さ 3.2cm，重さ 25.9 g。被熱痕跡は確認されない。

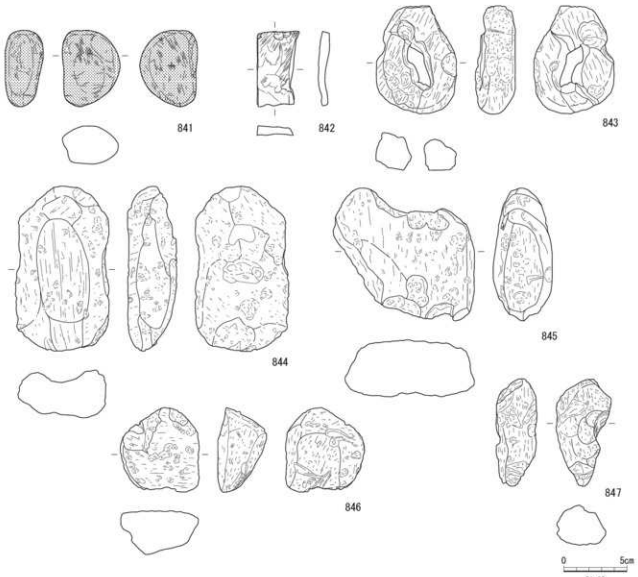
竪穴住居跡 22 号（第 136 図 848・849）

F － 46 区のⅢ b 層上面で検出された。21 号と切り合い，21 号に先行する住居である。

長軸約 6 m，短軸は推定約 5.4 m，検出面からの深さは約 0.2 m の，本遺跡における平面長方形プランの住居の中では，大型に類する。

21 号及び後世の攪乱のため，具体的には不明な部分も多いが，基本的な構造は，北壁に張り出しがあり東西壁際にベッド状遺構を設けていたと推定される。4 号などと同様の構造と想定する。

この住居に伴う柱穴としては，21 号で記したように埋土と当該遺構の全体的な位置関係からＰ１とＰ２を想定している。どちらも貼床を切って掘られており，平面楕円形で，断面は中央付近がわずかながら最も深くなっている。2 本とも主柱穴と考えられるが，柱痕跡が観察されなかったこと，類似した埋土で双方とも埋められてい



第135図　弥生時代竪穴住居跡21号（5）

ることから，柱は抜き取られ，21号の建築に伴い埋め戻されたと想定している。

主柱穴の南側で，主柱穴の埋土と類似する土が堆積した土坑（ＳＫ１）を検出した。21号の主柱穴（Ｐ１）に半分ほど切られていたものの，残存状況は比較的良好である。想定される平面形は楕円形，断面は略方形で，底面東端に小ピットを検出した。18号の事例などを踏まえると，西端にも小ピットがあった可能性がある。

埋土の堆積状況は不明で，21号で述べたように貼床は再利用されたものと想定する。

遺物は，南東隅から出土したもののみ，本住居に伴う可能性があると判断した。

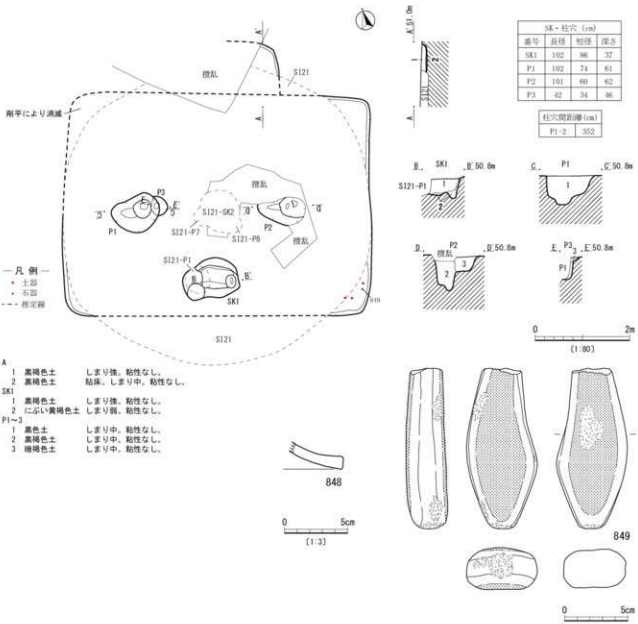
848は平たく開く形状や外面の縦位ハケナデなどの特徴から，小片だが壺の口縁部と想定している。

849は正面と背面に平坦面のある棒状の砂岩を用いた敲石である。上端を欠損する。裏面や左側面にも敲打痕を観察できるが，痕跡からみる限りは下端部の使用頻度が最も多いと考えられる。また，正面と裏面に，光沢をもつ程ではないが磨り面を伴う。残存長12.7cm，最大幅5.6cm，最大厚3.3cm，重さ341.0ｇ。

竪穴住居跡23号（第137図850）

Ｅ－44区のⅢｂ層上面で検出された。径約5.6ｍの平面円形の住居と想定される。北東部を含め全体的に著しく削平されていたため，詳細な全体構造，埋土堆積状況や遺物出土状況についてはほぼ情報がなかったが，貼床が中心部から南西壁にかけて残っていたため，柱穴や一部の付属構造物については記録をとることができた。

柱穴は，貼床面で多数検出したが，規模，位置関係や埋土状況などから図示した４本（Ｐ１～４）が本住居に伴う主柱穴と想定した。削平の影響を考慮しても，他の



第 136 図　弥生時代竪穴住居跡 22 号

円形住居と比較して，径は小さく，深さも極めて浅い。

また，住居のほぼ中央部，主柱穴に囲まれる位置に中央土坑（ＳＫ１）を検出した。平面形は円形で断面は皿状で極めて浅い。さらに，この住居では西端にも土坑（ＳＫ２）を検出した。中央土坑より平面形は一回り小さいが断面形状や深さは類似する。

このほか，壁面を検出できた範囲では，あわせて壁帯溝も確認できた。貼床を切って掘られている。

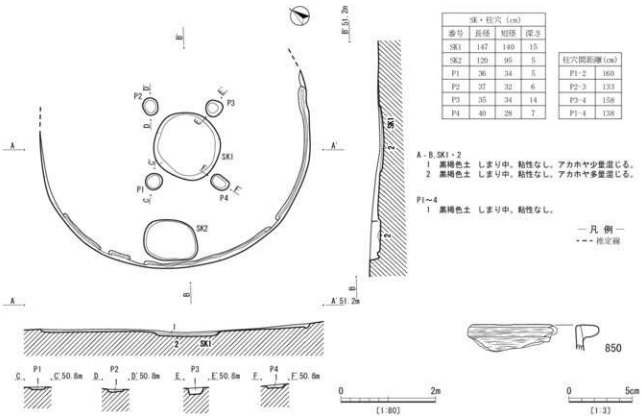
この住居は，全体的には大型円形住居に分類される特徴でありながら，柱穴の配置や掘り込みの浅さなどに差違が認められる。類似した特徴は 28 号住居にも観察されることから，本住居のみの特徴では収まらない可能性もある。大型円形住居の上部構造を考える上で興味深い事例である。

上記したとおり，住居内の埋土堆積状況は極めて薄く，検出した土坑などの埋土状況と明確な差異を見いだせなかった。

出土した遺物（850）は，甕の口縁部と考えられる。口縁部は水平に整形されるが，端部を丸く仕上げているほか，口縁部下面も丸味を持たせた仕上げとしているのが特徴的である。

竪穴住居跡 24 号（第 138 図 851～853）

Ｆ・Ｇ－ 45 区のⅢｂ層で検出した。１辺約２ｍと，本遺跡の平面方形プランの住居の中では小型の部類に入



第 137 図　弥生時代竪穴住居跡 23 号

る。残存状況は比較的良いが，本来の規模については確証を欠く。

小振りな住居だが，南西・北西・北東の各隅にベッド状遺構を設ける（北東隅は，ベッド状遺構というよりは「段」とするのが適当かもしれない。）という，複雑な構造をしている。床面との比高差は，北東と南西隅で５cm前後，北西隅では13cm程度である。３か所のベッド状遺構のため，床の平面形は，北側に弧がくる略半円形を呈する。貼床，壁帯溝は検出されなかった。

柱穴は５本検出したが，位置関係からは主柱穴を容易には認定できなかった。掘削面の主軸からやや西にずれるが，軸線はほぼ共通する点，一定の深さがある点から，Ｐ４とＰ３またはＰ５が主柱穴となる可能性がある。Ｐ３とＰ５は，柱の建て替え，もしくは本柱－控柱の関係にある可能性もある。

土坑（ＳＫ１）は，住居西壁近くで，ベッド上遺構の間に検出された。平面略方形で断面は皿状を呈する。底面はやや凹凸がみられるが，小ピットなどの構造物は検出されず，焼土等も確認されなかった。

この住居は，平面方形で小振りであるが，壁際にしっかりした柱穴があることは他の方形住居のように張り出し部等があった可能性を想起させる。

埋土は，２層確認したが貼床は確認されなかった。堆積状況はおおむねレンズ状堆積を示しており，南東側からの土砂流入による自然堆積で埋没したと想定される。

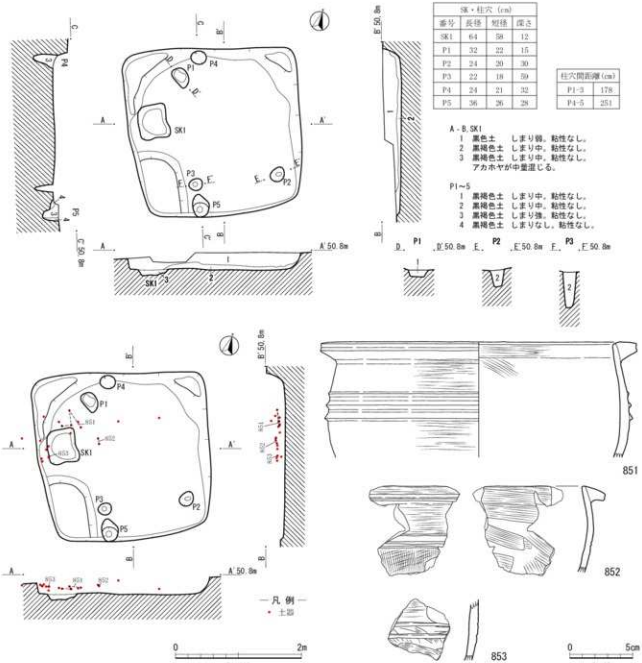
遺物は，埋土上位層である埋土１中ではあったが，埋土２による埋没が及んでいない土坑周辺に集中して出土する傾向が見られた。

851～853は，入来Ⅱ式土器の甕である。851は，口縁部が短く上面がやや丸く仕上げているが，端部の凹線状の凹みは明瞭に施されている。復元口径約 25cm。852・853は，胴部の三角突帯が貼付される位置に，横位の細沈線文が施文されているのが特徴である。852は，口縁部がやや強く下向きに整形される。

竪穴住居跡 25 号（第 139～140 図 854～862）

Ｆ・Ｇ－44 区のⅢｂ層で検出した。長軸約４ｍ，短軸約３ｍの平面長方形の住居である。検出面からの深さは 0.4 ｍ弱と，比較的残存状況はよかったが，周辺に張り出し等の施設は確認できなかった。一方，床面には，北西隅と北東隅にベッド状遺構が設けられていた。そのうち北東隅は，約２ｍ×１ｍの規模で，床面に対し一定程度の面積を占めている。床面との比高差は，どちらも５cm前後である。使用面はアカホヤ層で，構築に伴う盛土や貼床は確認されなかった。

柱穴は，東西壁の立ち上がり際に，掘削面の長軸側主軸に沿うようにＰ１（深さ約 0.7 ｍ）並びにＰ２（深さ



孔・柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	64	58	12
P1	32	22	15
P2	24	30	30
P3	22	18	59
P4	24	21	32
P5	56	26	28

柱穴間距離（cm）	
P1-3	178
P4-5	251

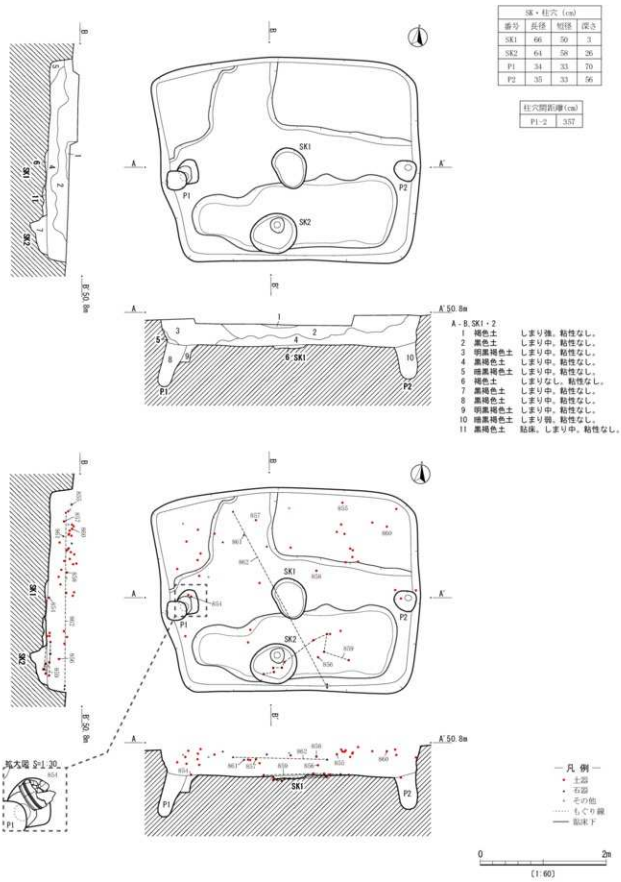
第 138 図　弥生時代竪穴住居跡 24 号

約 0.5 m）の２本が検出された（柱穴間 357cm）。これ以外には検出されなかったこともあり，この２本が主柱穴と考えられる。また，14 号・18 号などと同様に，２本の柱穴は住居中心に向けて傾斜をつけて掘られていた。また，どちらも柱痕跡は確認できなかったが，Ｐ１については，段掘り状の断面形状であることを確認した。なお，柱穴埋土は，住居埋土４と特徴が類似する。

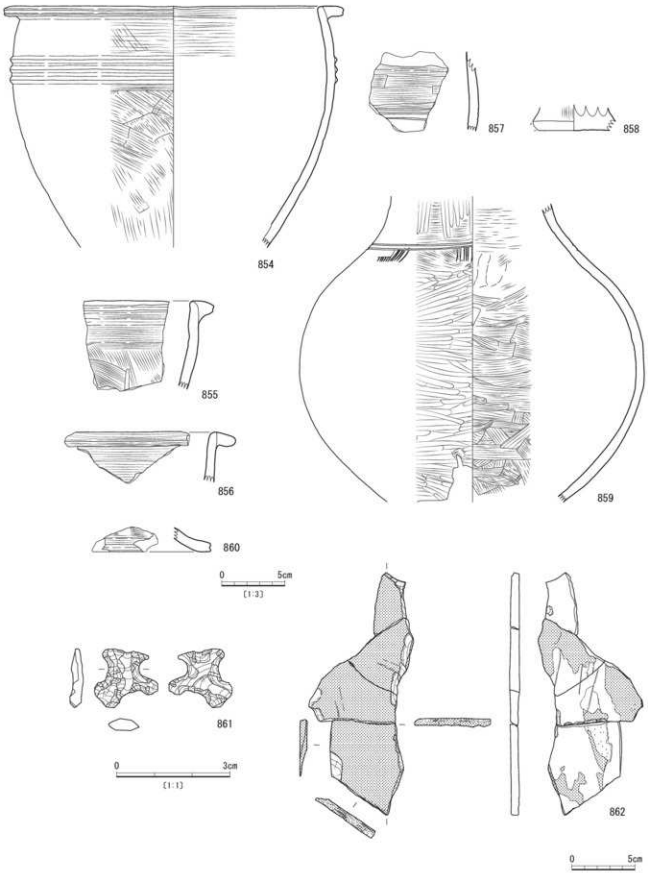
土坑は，住居中央付近に１か所（ＳＫ１）と南壁際の中程に１か所（ＳＫ２）の２か所で確認した。中央の土坑は，平面不整円形で断面は皿状を呈し，非常に浅い。しかし，埋土中に焼土と疑われた赤褐色土が検出されたため，土坑と判断した。南壁際の土坑（ＳＫ２）は，中央部土坑の形状と平断面ともに類似するが，底面北隅に小ピットを１基伴う。また，焼土は確認されなかった。

この他，床面南半分には，平面不整形の浅い凹みが広がっているのも検出したが，用途は不明である。ちなみに，土坑（ＳＫ２）は，この凹みが埋まった後に掘られている。壁帯溝は確認されなかった。

この他，掘削面の壁には，幅約２～３cmの細かい凹凸を多数確認した。住居掘削時の工具痕もしくは杭跡と思



第 139 図　弥生時代竪穴住居跡 25 号（1）



第 140 図　弥生時代竪穴住居跡 25 号（2）

われる。同様の痕跡は21号や33号などでも見られた。

貼床は施されるが，南北で厚さに大きな差異があるのが特徴的で，南側は非常に厚く，北側はほぼアカホヤ層を使用面として捉えることができる。

埋土は，部分的なものを含めて5層確認した。うち貼床は11層である。埋土は，おおむね東西方向の斜交葉理状の堆積状況を示していることから，主に東西からの土砂流入による自然堆積で埋没したものと想定される。

遺物は，P１の埋土上に入来Ⅱ式の甕の破片が出土した（第139図左下拡大図及び854）こと，並びに南側土坑（ＳＫ２）周辺で，入来式段階と考えられる壺（第139図及び859）が集中して出土したことが注目させる。出土状況から，埋没過程での流れ込みではなく，人為的に割って置いた可能性（例えば，住居廃棄儀礼等に伴う行為）が想定できる。この他の遺物は，埋土上位からの出土が多い。

854～857は，入来Ⅱ式土器の甕である。854は，口径約27cm，口縁部は水平に長く伸び，端部はやや丸味を帯びるが明瞭な凹線状の凹みが巡る。胴部の三角突帯は，頂部が丸味を帯びた仕上げである。口縁部下にはススが付着する。855は口縁部が短く断面略台形に整形される。胴部に三角突帯は貼付されないようだが，調整は突帯が付される位置辺りで方向が変わっている。856は口縁部下の接合面のナデ消しがやや甘く，指頭押圧の痕跡などを残す。857は，胴部に３条の横位細沈線文が巡る。855～857は埋土２から出土した。858は入来Ⅱ式土器の脚台と考えられる。

859は胴径約27cmで，口縁部と底部を欠くが，丸く張る胴部から緩やかに窄まる頸部に連続する器形は，入来式としても古手の様相を示す。器壁は薄く，内面は丁寧なハケナデが施されている。外面は，ハケナデの後に施文し，そして施文部を避けて，大変念入りなミガキ調整を施して仕上げている。胴部と頸部の境界に，先端の鋭利な工具を用いた２条の平行沈線文を施し，その後，下側の平行沈線文に接して，縦位の連続短沈線（長さ1.5cm程度）９条～11条（？）を１単位とする櫛描状文を，やや不等間隔ながら９か所に施文している。外面の色調は暗赤褐色から黒褐色を呈しており，いわゆる「黒塗り壺」である可能性がある。ススも広範囲に付着している。胎土には雲母を含む。

860は，小片であるが器形から蓋と考えられる。口縁端部は，断面「Ｖ」字状に強く凹む。埋土２から出土した。

861は，異形石器である。黒曜石のやや弯曲した剥片の３辺に，正面並びに裏面から剥離を加えて抉りを入れて整形している。上辺からも同様に抉りを入れているが，わずかに入った時点で止めている。長さ1.5cm，幅1.7cm，厚さ0.4cmである。

862は，板状に剥離した，粒子が細かく揃った砂岩を用いた砥石である。４点の破片のうち，図上端の小片は竪穴住居跡26号の埋土１から，残りの３片は本住居の埋土２から出土した，住居側接合の石器である。正面並びに裏面ともに砥面が観察されるが，主に使用されたのは正面側のようである。本来の形状は不明だが，実測図に示すとおり，側面や接合面に磨り痕が観察される破片もあることから，現在の形に割れてからも（或いは敢えて割って）砥石として利用されたことがわかる。出土状況と合わせ，興味深い資料である。

竪穴住居跡26号（第141～147図863～908）

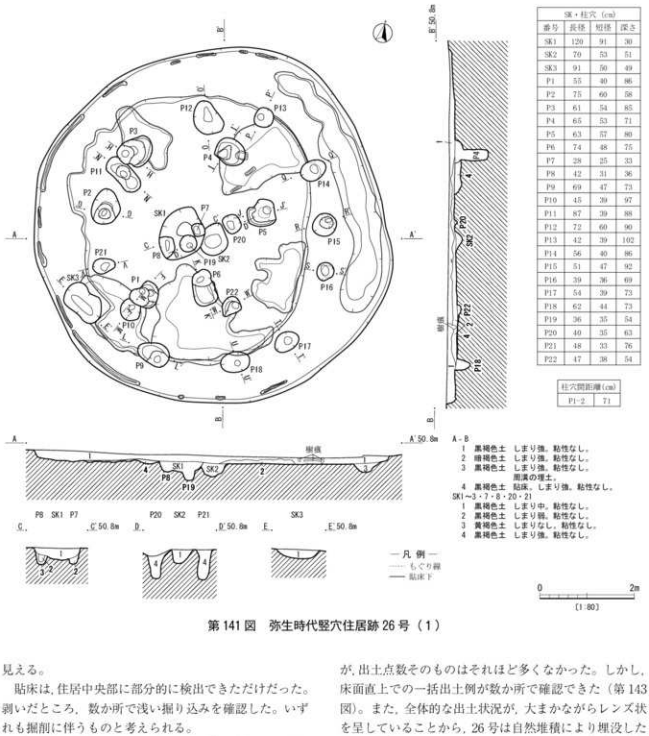
Ｇ－43区のⅢｂ層で検出された。径約7.5ｍの円形大型住居である。ただ，全体的に削平されており，残存状況は良くない。床面は２段掘りになっているが，段差は極めてわずかで，ベッド状遺構が巡るとも，床面中央部を浅く掘り窪めているとも受け止められる構造である。

東側を除き，壁際には壁帯溝が断続的に巡る。

壁帯溝のなかった東側壁際には，平面形が不定形で断面はおよそ逆台形状を呈する溝状の落ち込みがある。幅約0.6ｍ，長さ約５ｍ，深さ約0.15ｍの規模で，貼床がなかったため，どの段階で掘られたかは不明だが，埋土は住居全体を覆う土とは特徴が異なっていた。この住居で最も目を引くが，機能等の想定が困難な施設である。

柱穴は，住居中央部と，中央部の土坑を囲むような大小２つの環状に合計23本検出した。貼床が部分的にしか検出されなかったこと，配置状況と各柱穴の埋土に顕著な相関が認められなかったことから，これら23本の詳細な先後関係は不明である。しかし，先述した平面的な位置関係と径や断面形状など個別の状況を比較すると，内側の環を形成する６本（Ｐ１～Ｐ６）は，平均が上面径約59cm，深さ約76cmで，断面形状がラッパ状や段堀状を呈するものが多い一方，外側の環を形成する11本（Ｐ９・Ｐ10・Ｐ12～19・Ｐ22）は，平均が上面径約47cm，深さ78.5cmで，断面形状は柱状を呈するものが多く，わずかながら相関を見出すことができる。また，Ｐ１～Ｐ３列とＰ10－Ｐ22－Ｐ12列は，重複している。なお，外側の環を形成する11本には，底面近くで締まりの強い埋土が薄く平面的に堆積している状況を確認した柱穴もあった。柱痕跡についてはどちらの環の柱穴も不明である。

土坑については，住居中央部に２基（ＳＫ１，ＳＫ２）と南西壁際に１基（ＳＫ３）を検出した。特に中央部の２基は，平面略円形，断面略碗形，両脇に小ピットを伴うという基本構造が一致しており，掘削位置の共通性と併せて同じ機能だった可能性が高い。先後関係については，直接の切り合い関係からＳＫ２→ＳＫ１となる。一方ＳＫ３は，平面楕円形で断面レンズ状を呈し，先述した東側の溝状の落ち込みの対面に位置しているようにも



第 141 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（1）

見える。

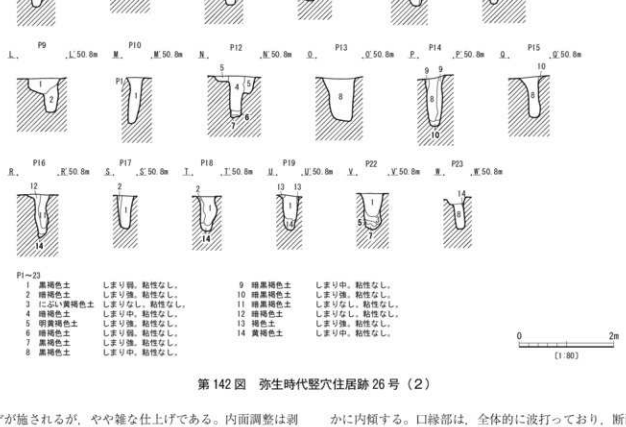
貼床は，住居中央部に部分的に検出できただけだった。剥いだところ，数か所で浅い掘り込みを確認した。いずれも掘削に伴うものと考えられる。

床面形状，柱穴や土坑など付属構造物に見られる上記のような配置状況から，この住居は，同一地点で建て替えられたと考えられる。冒頭述べた床面の２段掘りは，張り出しやベッド状遺構ではなく床面の再構築の痕跡と考えられる。貼床が中央部にわずかしかみられないのは，建替工事の簡素化の結果と解釈しておく。

埋土は，わずかしか残っていなかったが付属構造物の埋土を除いて３層確認できた。うち貼床は埋土４である。

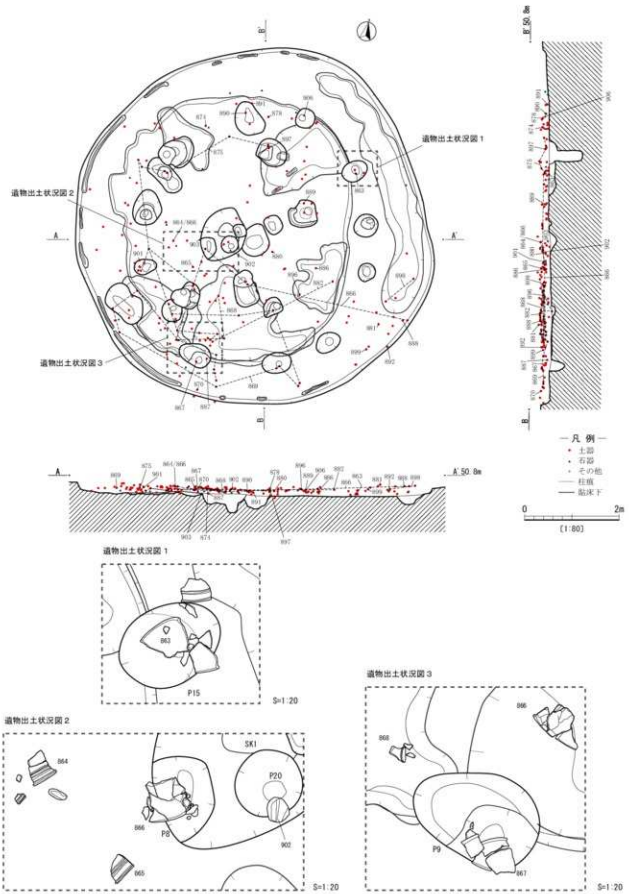
遺物は，遺構の残存状況も影響していると考えられるが，出土点数そのものはそれほど多くなかった。しかし，床面直上での一括出土例が数か所で確認できた（第 143 図）。また，全体的な出土状況が，大まかながらレンズ状を呈していることから，26 号は自然堆積により埋没したものと想定される。さらに，埋土中の遺物に大形の破片が多いことから，土器棄て場として利用されていた可能性もある。

863～868 は，床面直上で出土した土器である。863 は，Ｐ 15 の直上で出土した。口径約 28cm，胴部から口縁部にかけて膨らまず，比較的直線的に開く器形である。口縁部は全体的に波打っており，屈曲部には稜を形成するが，上部平坦面の整形も甘く断面形状は丸味を帯びる。長さも短い。器壁の厚みは一定していない。外面調整は，三角突帯より上位は横位，下位は縦位基調のハケナ

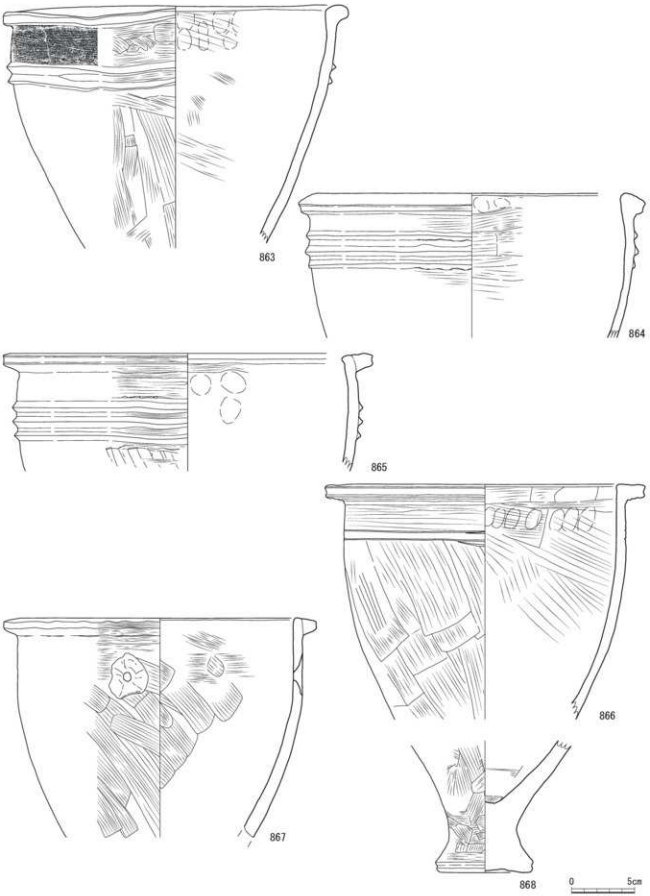


第142図　弥生時代竪穴住居跡26号（2）

デが施されるが，やや雑な仕上げである。内面調整は剥落等のため詳細が不明だが，口縁内面などに成形時の指頭押圧の痕跡が残る。三角突帯はやや小振りで，２条貼付されている。貼付は粗く，全体的に波打っているほか，２条の間隔も不揃いである。また，口縁部と三角突帯の間の外面に，線刻のようなものが１か所ある。土器の製作状況から，偶然器面に貼り付いた繊維を放置して製作を続けた結果とも想像されるが，拓本にて図示した。口縁端部には，凹線状の凹みを意図したような平坦面がみられる。864は，ＳＫ１付近で出土した。口径約27cm，863と同様に胴部があまり膨らまずに口縁部に至る器形を呈するが，863よりも口縁部は直立する。器壁が口縁部に向けてわずかに厚みを増していく。器面は，内外ともに横基調のハケナデが施されている。口縁内面には，指頭押圧の痕跡が残る。口縁部は稜を形成せず丸く屈曲し，壺口縁部のように下垂するが，太く短くまとめられる。口縁端部には，幅広の凹線状の凹みが巡る。三角突帯は，863よりも口縁部寄りの位置に３条貼付される。ただ作業は粗く，３条とも上部は横ナデで接合痕等を消しているが，下部は丁寧に調整していないため接合痕が残っており，突帯頂部も丸く仕上げられて断面が三角になっていない。865は，864と同じくＳＫ１近くで出土した。口径約29cm，胴部はほぼ直立し，口縁内面がわずかに内傾する。口縁部は，全体的に波打っており，断面略方形でごくわずかに上向きに伸びる。上面はおおむね平坦に整形されるが，徹底していない。内面の屈曲部をわずかに突出させている。口縁部直下の胴部が軽く凹んでおり，調整で消していない。調整は，内外面ともに丁寧に施されており，外面には，口縁部と突帯間を横基調に，突帯以下の胴部は工具を換えて縦基調に施しているのを観察できる。口縁端部には，幅広の凹線状の凹みを丁寧に施す。三角突帯は，864よりは口縁部から離れた位置に３条貼付される。整形は丁寧だが，やや波打って貼付されているほか，下部の接合痕を消しきれていない。866は，ＳＫ１に伴う小ピット上を中心に，床面南側一帯に分散した状態で出土した。口径約25cm，底部付近から弯曲しつつ直立する口縁部に至る器形で，細身な印象を受ける。口縁部は，稜を形成してほぼ直角に屈曲し水平に伸びる。器壁の厚みは，比較的薄く一定である。器面調整は内外いずれも丁寧に施されており，さらに，外面は２条の平行沈線を境に方向と工具を換えているほか，内面も口縁部付近とそれ以下で調整方向と工具を換えていることが看取できる。また，内外ともに，工具のハケ目を浅いものの明瞭に残している。口縁端部には幅広の凹線状の凹みを丁寧に巡らせている。口縁部下面にみえる凹凸は，ハケ目である。また，口縁部下には２条



第143図　弥生時代竪穴住居跡26号（3）

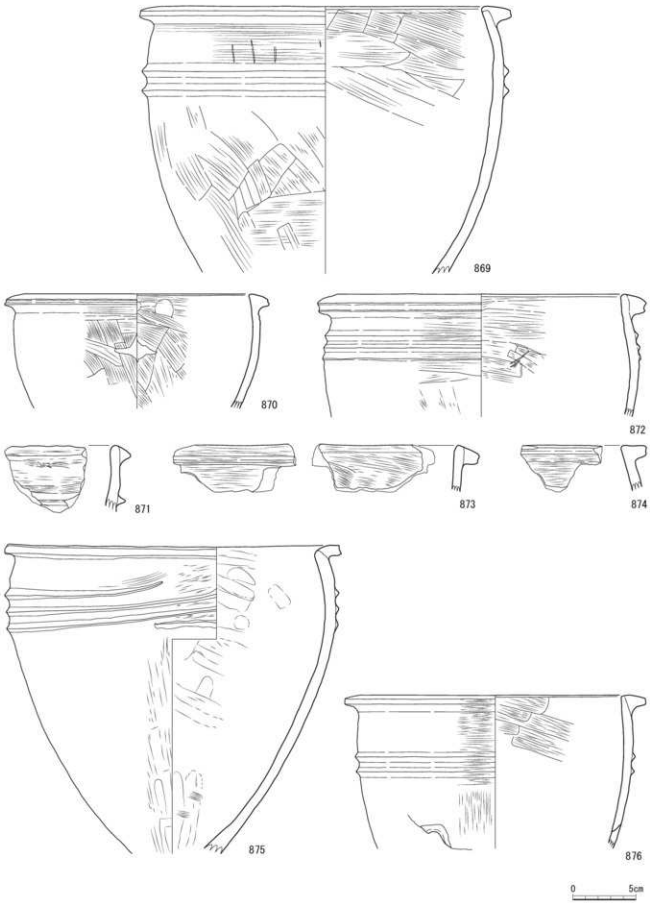


第 144 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（4）

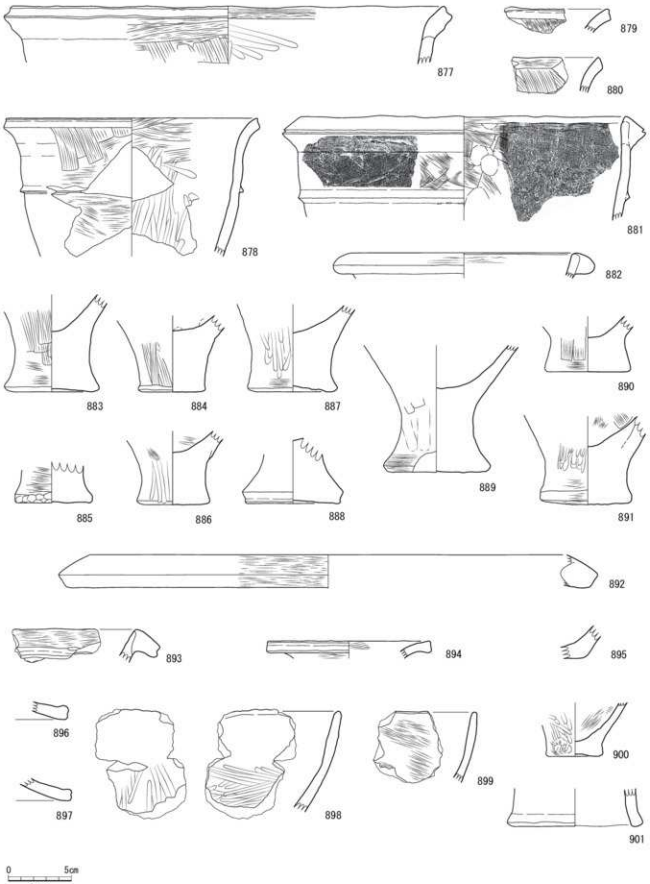
の平行細沈線が，細く鋭利な工具を用いて（わずかにうねるものの胎土のはみ出しもあまりなく）丁寧に施文されている。ただし，線は結合させていない。なお，2条は個別に施文されている。外面に種子圧痕がある。867は，住居南西隅近くのＰ９上で出土した。口径約25cmで，器形と器面調整の特徴は866と類似するが，外面調整は全体的に斜位のハケ目が施され，口縁部周辺のみ横ナデで胴部が無文であり，さらに口縁部形状がやや異なる。口縁部は短めで，断面台形状に整形されるためやや下傾してみえる。また，丁寧なハケナデが観察されるものの，微妙に細かくうねっており，胴部との接合痕が明瞭に残るなど整形は粗い。口縁端部は工具でナデられており，凹線状の凹みはみられない。このほか，口縁部下に，焼成後穿孔が１か所ある。孔は内面側が小さく外面に向けて傘状に広がっていることから，内側から穿孔されたことがわかる。内面の孔は径約0.7cmの略円形であり，上記した孔の形状を踏まえると，鑿（たがね）か釘のような形状で，硬いが先端のあまり鋭くない工具が用いられたと想定される。また，孔周辺の器面にはススが付着しているが孔面にはススが付着していないこと，発見時，孔のある破片は外面が上を向いていたことなどから，土器（或いは住居？）を廃棄する際に穿孔された可能性が考えられる。868は，867の近くで出土した。脚台端径約7cm，脚台高（外底面～内底面）は約5.5cmで，比較的低い。整形は丁寧になされており，器面や脚の平面形が歪になっている部分はみられない。ただ，胴部は左右で展開角度が違っており，全体としてはややひずんだ器形だったと思われる。外面に残されたハケ目から，脚台と胴部で工具を換えていることがわかる。脚台端部には凹線状の凹みが明瞭に巡る。外底面は滑らかな上げ底に整形されているが，接地部分には焼成前についた植物等の繊維痕が多数観察される。なお，内外面に，種子圧痕が複数看取される（未解析）。

869～882は，甕である。埋土中から出土した。869は，住居南端辺りの床面近くから埋土上層まで分散して出土した。口径約30.5cm，胴部から口縁部内面屈曲部まで丸味を帯びた器形で，口縁部は，やや内傾した屈曲部からほぼ水平に伸びるが，微妙に波打っており平面形もやや楕円状に歪む。器壁は比較的薄く一定の厚みを保つ。器面調整は，866・867などと類似するが，胴部外面は，ハケ目の間隔が異なる２種類の工具を使っている。口縁端部には，凹線状の凹みが浅く施される。三角突帯は，口縁部寄りに成形された胴部最大径付近に２条，やや近接して貼付されている。あまりうねっておらず整形も比較的丁寧である。このほか，口縁部と突帯の間の外面に，一定の間隔を空けて縦位の沈線がある。調整工具の端部を軽く打ち込んだような形状であるが，器面の横ナデの後に施されているので調整痕とは異なる。870は口径約21cmと比較的法量が小さいが，器形や器面調整の特徴は，これまでの資料と類似する。器壁は薄く一定の厚みに整えられている。口縁部は短めで，稜を形成して屈曲する。断面台形に整形されるためやや下傾して見えるが，端部の面を狭く仕上げているため他の資料より下傾の度合が急に見える。狭い端部には凹線状の凹みが巡るが，先端が角度のついた工具を用いているようで，他より凹みの断面形状が鋭角である。871は小型の甕と考えられる。口縁部形状並びに胴部三角突帯の形状が特徴的な資料である。872は口径約26cmで，やや下傾する短く太い口縁部の端部に，凹線状の凹みが巡る。三角突帯は，胴部最大径部分より上位の口縁部寄りに３条貼付される。いずれもかなり小振りで，頂部は突帯中心より下垂する。875は口径約26cmで，底部から胴部にかけて直線的に開き，胴部最大径付近で丸味を持たせてすぐに口縁部につなげるという，膨高な印象を持つ器形である。この甕のみ，器表面の剥落が非常に顕著で口縁部や三角突帯などの貼付部分や器面調整の観察はもとより，接合復元作業に大変苦労した。以下，残存部で観察できた範囲を記す。口縁部は，内弯気味の屈曲部からほぼ水平に伸びるが，短く納める。凹線状の凹みは幅広く浅く施される。三角突帯は，口縁部近くの胴部最大径付近に，螺旋状に巻き付ける方法で，小振りの突帯が近接して貼付されている。最上列の突帯が消失する部分が剥落しておらず器面と突帯の状況が観察できたこと，２列目，３列目の突帯が，最上列の突帯の消失部分で角度を変えていること，最下列の突帯が，角度の変わる辺りで消失していることから想定できる。876は，口径約24cmで，胴部があまり張らず直立する口縁部に至る器形で，細身な印象を受ける。器壁の厚みは薄く一定で，器面調整などの特徴は他と類似するが，ハケ目をあまり残していない。口縁部はほぼ水平に短く伸びるが，他と比べて薄く成形されている。端部に凹みは施されず，面が整えられているのみである。三角突帯は小振りで，胴部の角度が変化する辺りに２条貼付される。断面三角形に整形されるが，下側の接合痕を残すなど，仕上げはやや粗い。また，867と同様の焼成後穿孔と考えられる痕跡が１か所ある。場所が破断部分であり接合資料を発見できなかったので確証を欠くが，胴部下位にあり，穿孔方法は同じと想定される。孔径は不明である。穿孔であった場合，867と同じく廃棄に伴い穿孔されたものと思われる。

877～880は，口縁部形状が特徴的な甕である。877は口径約34cm，878は口径約20cmで，口縁部は短くわずかに外弯するのみで，胴部形状は外反または直立する（丸く張らない）と想定される。器面調整にも特徴があり，外面は口縁端部まで縦位基調のハケ目調整を施し，内面は口縁部こそ横ナデだが，胴部は縦位のミガキ調整を施す。なお，調整の仕上がり具合には資料間でばらつきが



第 145 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（5）



第 146 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（6）

ある。878の三角突帯は，明瞭に突出するものの小振りで薄く，頂部も下傾しており，在地の甕や壺のそれとは異なる。一方，胎土に雲母を含む点や色調，口縁端部の凹線状の凹み（技法を含む）は，入来Ⅱ式土器や山ノ口式土器の甕の特徴とおおむね共通する。なお，877は，周辺の包含層出土資料とも接合している。

881も，口縁部形状がやや独特な甕で，屈曲するというよりも直立する口縁部に大振りの三角突帯が貼付される，という表現の方がふさわしいような形状である。その頂部上側に細い凹線が強く施文されているが，入来式の凹線状の凹みとの関係性をどの程度まで解釈するか。胴部突帯は，断面三角形に仕上げるがかなり小振りである。器面調整は，内外面ともに丁寧なハケ目調整を施す。器壁は薄く焼成は極めて良好である。復元口径約25cm。

882は，口縁部が玉縁状を呈する。接合状況は不明だが，下面も横ナデがなされており，接合痕は見えない。

883～891は，埋土中から出土した甕の脚台である。883は脚台端径約7cm，脚台高（前掲同，以下略）約4.5cmで，外面の調整を反時計回りに施している。884は，接地面に向けて窄まる器形を呈し，脚台端の平面形が楕円形（径平均5.4cm）で，脚台高約5cmである。脚台端の微少な隆起は，製作時の偶発的な「胎土のはみ出し」である。内底面はほぼ平坦に成形されており，指頭押圧による整形の痕跡を観察できる。885は，脚台端径約6cmとやや小径である。脚台端部に粗い面取り整形があるほか，その整形に伴い外底面側に胎土がはみ出している。このことから，或いは，この甕は焼成後さほど使用しないうちに割れたかもしれない。886・887・890・891は脚台端部の踏ん張り成形が弱く，凹線状の凹みなども施されない点が共通する。886・887・891については，外面調整にミガキが用いられている点も共通する。886は脚台端径約6cm，脚台高約4cm，887は脚台端径約7cm，脚台高4.5cm，888は脚台端径約7.5cm，脚台高約5cm，889は脚台端径約7cm，脚台高約7cm，890は脚台高が約3cmと特に低く，脚台端径は約7cmである。891は脚台端径約7cm，脚台高約4.5cmで，出土傾向は，883及び885は埋土2，884はP2埋土，886～891は埋土1である。

892～895は，埋土中から出土した壺である。甕に比べて出土点数が少ない理由は，上記した住居の残存状況のため不明である。892は，口径約43cm，下垂する口縁部分である。端部の凹線状の凹みは形骸化している。頸部との接合面を観察できる。894は口径約13cmで，器面調整の特徴から小型の広口壺と考えられる。895は，壺の底部である。

896・897は，埋土中から出土した蓋と考えられる。どちらも口縁下端が平坦に仕上げられている。

898～900は，埋土中から出土した鉢と考えられる。898は，内外面ともにミガキ調整がなされている。色調が黒褐色を呈するため，黒色磨研土器と見間違うようである。900は，想定される法量と底部や胴部などの器壁の薄さから，甕ではなく鉢の底部と想定した。平面形が楕円形で，径は平均約4cmである。

901は，高坏の脚と想定している。接地面はやや歪んでいる。端部の径は約11cmである。

902は，SK1上，866の近くで出土した軽石製品である。全形を板状の工具で削ったあと磨って整形している。裏面には一部未加工の面を残しているほか，正面左端には剥離面もある。粗いが平坦に整えられた正面には，断面「U」字形の溝が彫られている。溝内面に溝長軸に平行する条線がみられることから，溝よりも幅が狭く作業面が鋭利でない工具で彫られたことが想定できる。長さ12.3cm，幅11.2cm，厚さ5.7cmである。

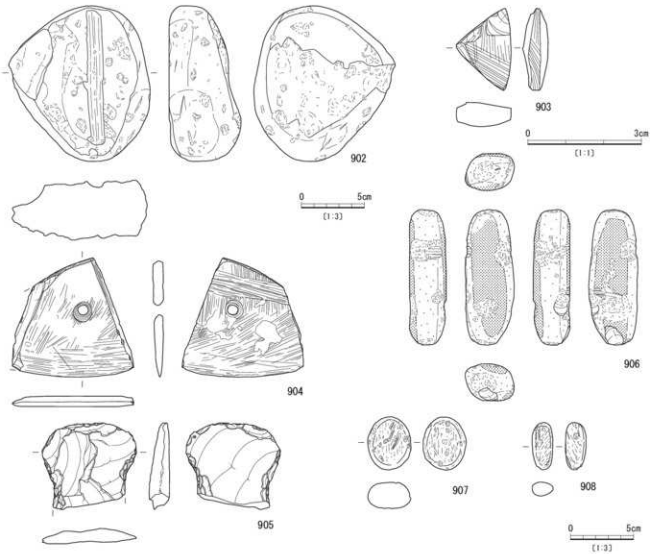
903は磨製石鏃片である。床面直上から出土した。頁岩製で裏面は全面剥離しており，側面は3面とも研磨している。ただし何らかの石製品の可能性もある。現状で長さ2.1cm，幅1.5cm，厚さ0.7cm，重さ1.9gである。

904は，埋土2から出土した石庖丁である。頁岩製で，全面を研磨して整形し，穿孔している。裏面上位には，浅く幅広の溝も切られている。現状，右は節理面で，左は何らかの衝撃で折れた「破片」であるが，本来の形状を想定した場合，現状の刃部の弯曲が小さくなってしまうことから，破断後も何らかの利器（石庖丁を含む）として再利用されたと想定される。長さ9.5cm，幅9.7cm，厚さ0.8cm，重さ89.9gである。

905は，埋土2から出土した打製石斧の基部である。ホルンフェルス製で，裏面は主要剥離面を広く残す。

906は，埋土1から出土した敲石である。砂岩製で，主な使用部位は上端と下端と考えられるが，上下端から3cmほどの正面，裏面，側面にも敲打痕がみられる。特に裏面と左側面の敲打部には揉いたような条痕も複数観察される。さらに，左側面に観察される敲打痕は深く抉れており，硬いものを敲いたことが想定される（上下端の作業面は潰れており個々の敲打痕の観察ができない）。また，正面と裏面には擦痕が見られることから磨石としても使用された可能性もある。被熱痕跡が認められる。長さ10.7cm，幅3.9cm，厚さ2.9cm，重さ173.7gである。

907・908は，埋土1から出土した軽石製品である。907は全面を磨って整形している。正面右上端には，同じ方向の切り込みも数本観察されるが，意図的な加工ではないと想定される。長さ4.2cm，幅3.4cm，厚さ2.1cm，重さ8.5g。908も全面を磨って整形しているが，正面をより平坦に仕上げている。正面左上端には板状の工具による削り込みのような浅い面が観察される。被熱している。長さ3.7cm，幅1.7cm，厚さ1.1cm，重さ2.1gである。



第147図　弥生時代竪穴住居跡26号（7）

竪穴住居跡27号（第148図909～911）

F・G－43区のⅢb層上面で検出された。竪穴住居跡26号に切られており，残存部で長軸約3m，短軸約3mである。26号同様削平が著しい。調査中は，26号の張り出し部とも想定したが，埋土状況が異なること，張り出しに伴う柱穴とは判断しづらい柱穴が，壁際で複数検出されたことなどから，26号とは別個の遺構と認定した。

検出された柱穴は4本で，径はどれも20cm程度と一定，床面からの深さも30cm程度に収まる。さらに，北側の3本はほぼ等間隔で立てられており，他の住居よりも，掘削面と柱穴の関連性を強く感じさせる状況である。

住居の北西角で，浅い土坑を検出した。平面形は略方形で深さ5cm程度とごく浅い。土坑の位置関係も，他の住居と異なる。

住居中央部には，径約50cm程度に渡って，床面が褐色に変色した範囲を確認した。焼土域と想定される。

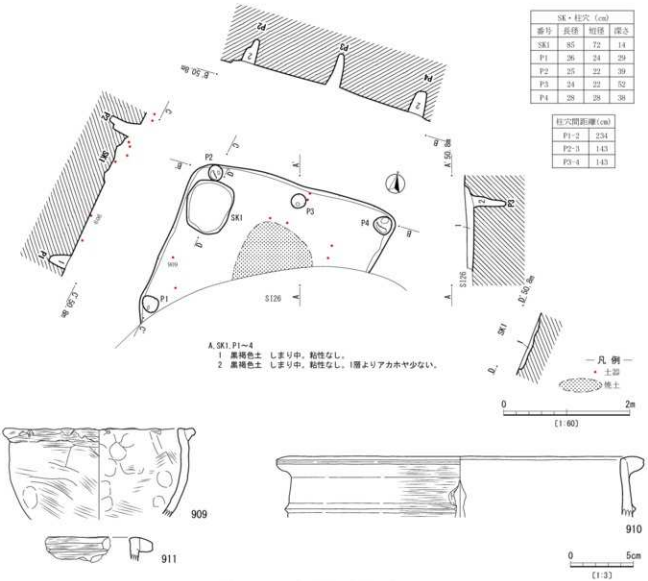
埋土は1枚で，貼床は確認されなかったが，床面はかなり平坦に整えられていた。

遺物は，埋土中に散在した状況で出土した。

909は，口径約15cm，小振りだがやや特異な資料である。全体的に整形が大雑把で，ハケナデを施すものの指オサエや胎土のヨレ・ワレを残す。胴部内面には，黒斑状のシミをかすかに観察できる。胎土には雲母を含む。口縁部は短く，端部に平坦面をつくるものの仕上げは雑である。口縁下部には，胴部との接合面も残す。910，911は，口縁部がやや短く丸味を帯びるが，どちらも入来Ⅱ式土器の甕と考えられる。910には，口縁部下に内側からの加撃による穿孔の痕跡を確認できる。

竪穴住居跡28号（第149～150図912～922）

Ⅰ－42区のⅢb層で検出された。径約5.5mの円形住居である。円形住居としては，本遺跡では小型に属し，



第 148 図　弥生時代竪穴住居跡 27 号

周辺に張り出し部等の構造物は検出されなかったが，削平が全体に及んでいるため，断定は難しい。なお，貼床や壁帯溝は，確認されていない。

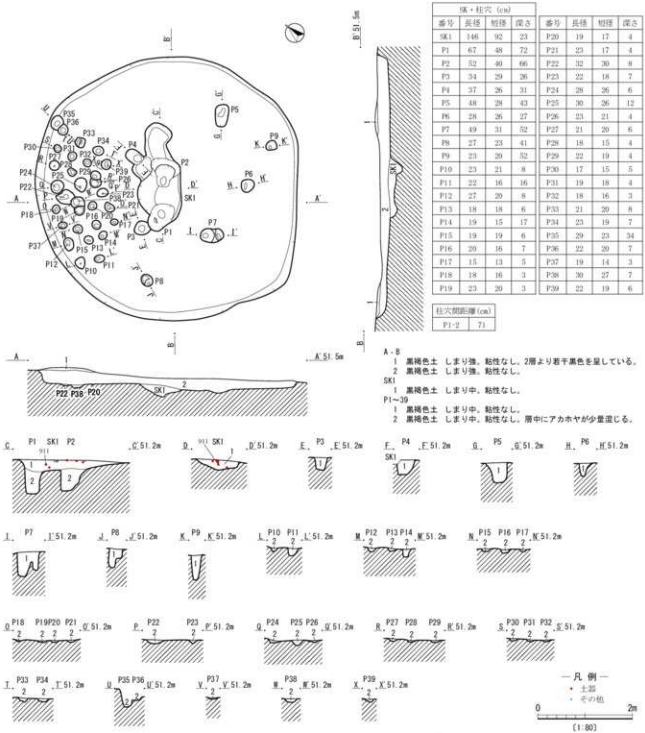
柱穴は，床面中央に掘られた土坑の底面で検出した２本（Ｐ１・２）の他，この２本に関連する可能性がある２本（Ｐ３・４）と，平面プランと配置が一致しない柱穴が７か所で検出された。いずれも柱痕跡は観察されなかったが，平面プランとの位置関係から，Ｐ１・２を主柱穴と想定する。さらに，本住居の特徴として，住居の北西部分から，ごく浅い柱穴が 30 本，中心部から壁に向けて扇状に集中して検出された。これは，方形プランである５号住居などで確認された状況と類似する。

中央部の土坑（ＳＫ１）は，北東－南西に長い平面不整楕円形で断面はレンズ状を呈する。埋土や掘り込み面に焼土は確認されなかった。なお，先述の柱穴（Ｐ１・２）は土坑埋土を除去してから確認されている。

埋土は２枚確認しているが，削平されているため堆積過程の想定には至らなかった。

他方，遺物は埋土中から比較的多く発見された。ただし，柱穴等との関連を想定させるような出土状況は確認されなかった。

912 は，土坑内から出土した入来Ⅱ式土器の甕である。口径約 24cm，口縁部は，やや丸く仕上げた端部に凹線状の凹みが巡る。法量に比して器壁が薄い。内外面ともに丁寧なハケナデが施されており，外面は突帯の上下で方向に変化がない。胴部は張らず，細身の器形を呈する。胴部には三角突帯が３条巡るが，３条とも頂部が下垂気味に仕上げられている。913・914 も同じく入来Ⅱ式土器



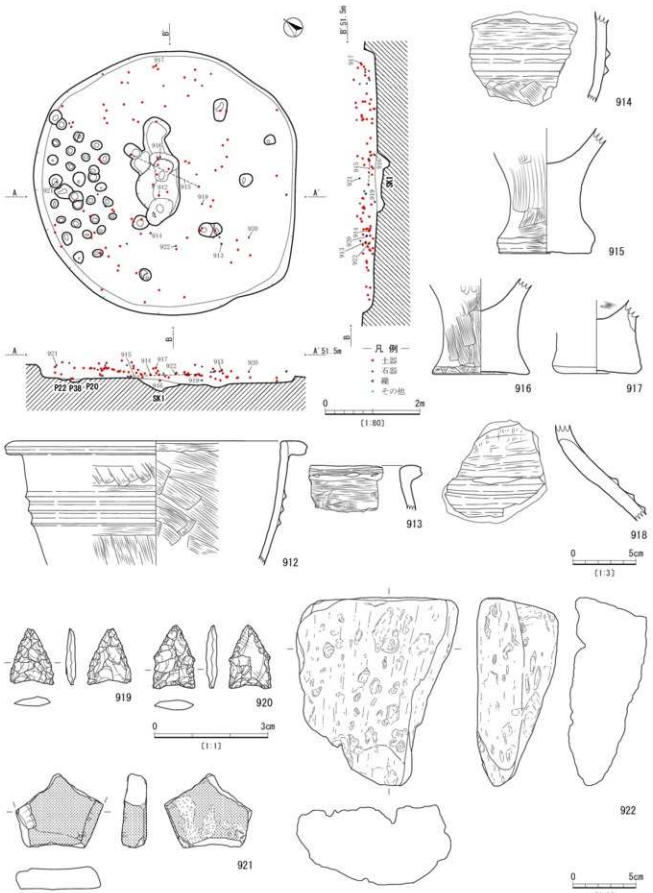
SK・柱穴 (cm)							
番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
SK1	146	92	23	P20	19	17	4
P1	67	48	72	P21	23	17	4
P2	52	40	66	P22	32	30	8
P3	34	29	26	P23	22	18	7
P4	37	26	31	P24	28	26	6
P5	48	28	43	P25	30	26	12
P6	28	26	27	P26	23	21	4
P7	49	31	52	P27	21	20	6
P8	27	23	41	P28	18	15	4
P9	23	20	52	P29	22	19	4
P10	23	21	8	P30	17	15	5
P11	22	16	16	P31	19	18	4
P12	27	20	8	P32	18	16	3
P13	18	18	6	P33	21	20	8
P14	19	15	17	P34	23	19	7
P15	19	19	6	P35	29	23	34
P16	20	16	7	P36	22	20	7
P17	15	13	5	P37	19	14	3
P18	18	16	3	P38	30	27	7
P19	23	20	3	P39	22	19	6

柱穴間距離 (cm)
P1-2　71

第 149 図　弥生時代竪穴住居跡 28 号（1）

の甕と考えられる。どちらも埋土２から出土している。

915・916は，甕の脚台と考えられる。915は26号の埋土１・２中から出土した破片と接合した，住居間接合資料である。脚台端部からすぐに窄まり，垂直に近く立ち上がりながら底部に至る安定感のある形状に整形されている。端部に形成された凹みの上端に面取り状の整形がみられる。脚台端径約７cm。この住居から出土した破片は埋土２に包含されていた。916は高さが，915より低く，脚台端部が鋭角的に整形されているのが特徴であるが，915に見られた面取り状の整形の痕跡が看取され，技法が共通していることをうかがわせる。やや上げ底状を呈する。内面にはコゲが厚く付着している。脚台端径約８cm，埋土２出土である。917は，高さが低いのが特徴である。平面形もやや歪，器面は摩耗しており調整等



第 150 図　弥生時代竪穴住居跡 28 号（2）

は不明だが，やや上げ底に整形されている。脚台端径は6.4～7cmである。

918は，壺の肩部である。小片かつ内面の剥落も多いため詳細は不明だが，あまり弯曲していないことから，大型の壺の可能性がある。三角突帯は3条確認できる。色調が濃茶褐色を呈することから，いわゆる「黒塗り壺」の可能性もある。

919・920は打製石鏃である。弥生時代中期の住居から出土している意味は不明だが，どちらも完形品である。919は，緻密安山岩製で，いくらかの平坦剥離と丁寧な調整剥離により整形が行われており，裏面には主要剥離面が残る。長さ1.5cm，幅1.2cm，厚さ0.3cm，床面直上で出土した。920は黒曜石製で，製作技法はおおむね919と同様だが，いわゆる「五角形鏃」に仕上げられている。長さ1.7cm，幅1.1cm，厚さ0.3cm，埋土2で出土した。

921は，砂岩製の砥石の破片である。粒子が細かく均質な砂岩を素材としている。正面は資料上端に向けてわずかにレンズ状に凹んでいるほか，下端に向けて傾斜する砥面も観察される。また，裏面並びに右側面にも明瞭な砥面が形成されており，特に右側面は，正面側の縁のみわずかに凹んでおり，使用頻度の高さがうかがわれる。

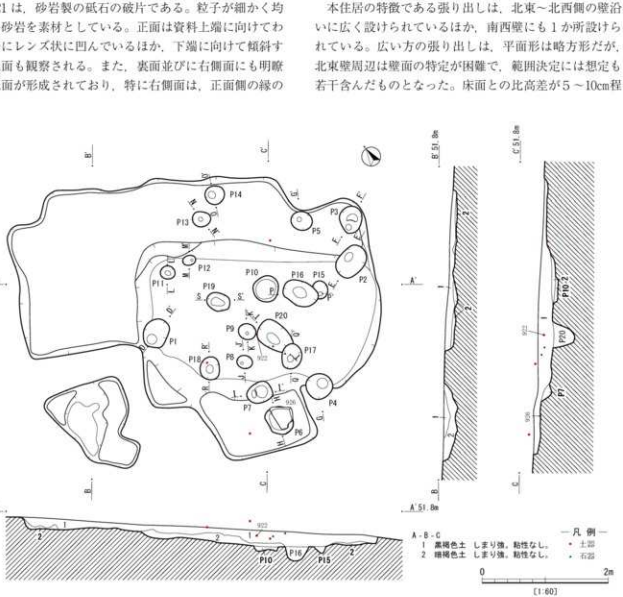
922は，軽石製品である。表面が風化しているため詳細は不明だが，完形品と考えられ，少なくとも正面，上面及び右側面は加工して面を形成している。また，正面上部には穴を2か所確認できるが，右側は人工的に穿たれたものである。左側は，気泡の可能性もあり人工的なものか確証を欠く。長さ14.8cm，最大幅12.9cm，最大厚6.4cm，重さ260.3gで，軽石としても軽い。埋土2からの出土である。

竪穴住居跡29号（第151・152図923～926）

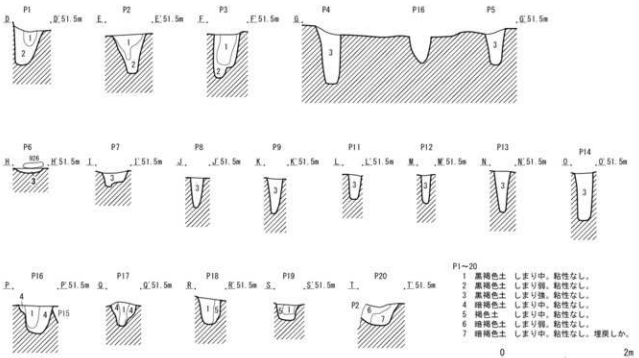
D・E－40・41区のⅢb層上面で検出された。他の住居と同様全体に削平が及んでおり，残存状況は良くなかったが，かろうじて張り出し部を把握することができた。

長軸約6m，短軸約5mで，平面長方形の住居である。本遺跡の方形プランの住居では大型に属する。

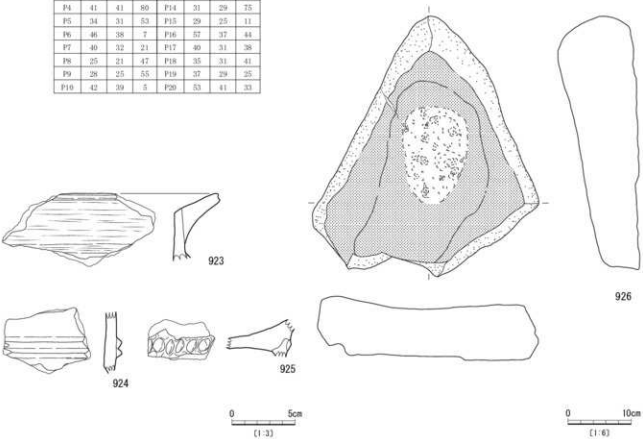
本住居の特徴である張り出しは，北東～北西側の壁沿いに広く設けられているほか，南西壁にも1か所設けられている。広い方の張り出しは，平面形は略方形だが，北東壁周辺は壁面の特定が困難で，範囲決定には想定も若干含んだものとなった。床面との比高差が5～10cm程



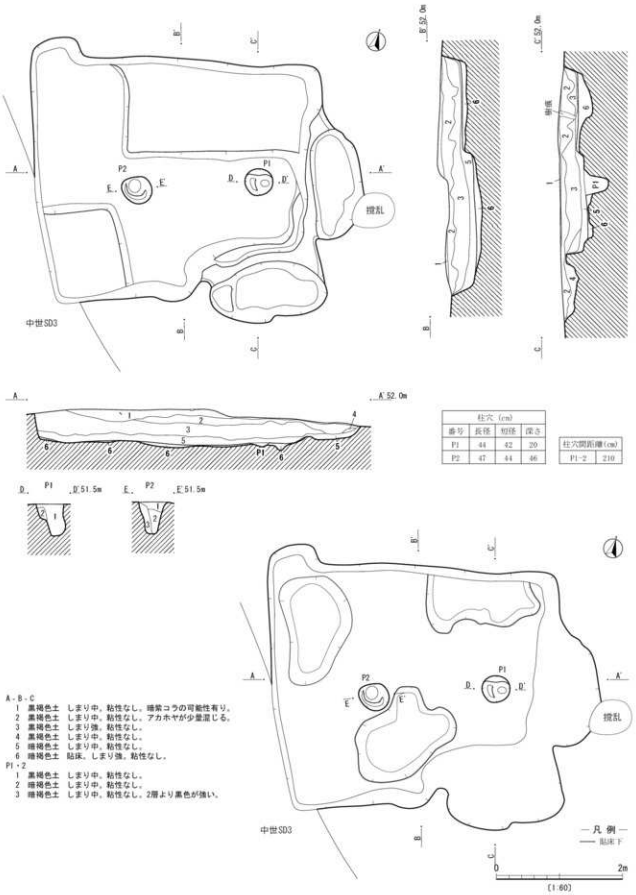
第151図 弥生時代竪穴住居跡29号（1）



柱穴 (cm)							
番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	48	40	56	P11	23	21	39
P2	55	40	61	P12	21	16	44
P3	43	36	69	P13	28	24	65
P4	41	41	80	P14	31	29	75
P5	34	31	53	P15	29	25	11
P6	46	38	7	P16	57	37	44
P7	40	32	21	P17	40	31	38
P8	25	21	47	P18	35	31	41
P9	28	25	55	P19	37	29	25
P10	42	39	5	P20	53	41	33



第 152 図　弥生時代竪穴住居跡 29 号（2）



柱穴 (cm)			
番号	長径	短径	深さ
P1	44	42	20
P2	47	44	46

柱穴間距離(cm)
P1-2 210

A・B・C
1 黒褐色土 しまり中。粘性なし。暗紫コラの可能性有り。
2 黒褐色土 しまり中。粘性なし。アカホヤが少量混じる。
3 黒褐色土 しまり強。粘性なし。
4 黒褐色土 しまり中。粘性なし。
5 暗褐色土 しまり中。粘性なし。
6 暗褐色土 貼床。しまり強。粘性なし。

P1・2
1 黒褐色土 しまり中。粘性なし。
2 暗褐色土 しまり中。粘性なし。
3 暗褐色土 しまり中。粘性なし。2層より黒色が強い。

第 153 図　弥生時代竪穴住居跡 30 号（1）

度でやや凹凸がある。南西壁沿いの狭い方の張り出しは，平面長方形で整っており，床面との比高差は15cm弱でほぼ平坦である。この他，南西隅には平面三角形の「段」も構築されている。床面との比高差は20cm以上あり，2か所の張り出しよりも高い。さらに，この段の外側延長上で，平断面ともに不整形の掘り込みも確認された。埋土が住居のそれとほぼ一致することから，削平された張り出し等に伴う掘り込みとも想定されるが，その場合，隣接する張り出しとの高低差など構造上の疑問点が生じるため，現状ではこれ以上の想定を控えたい。

床面は，上端では略長方形であるが下端では特に南西側が不安定な形状となっている。

柱穴は，床面及び張り出し部を含めて合計15本検出された。総じて深い柱穴が多い（50～80cm程度）が，住居の平面形と容易に整合しない位置関係にあり，主柱穴の想定は困難である。ちなみに，柱痕跡は，Ｐ１～３で観察されている。

調査中，住居平面形と柱穴の状況を整合させる検討を進める中で，重複する住居の存在（ＳⅠ42）も想定されたが，調査期間中には結論が出なかった。整理作業に移行後も検討を進めたが，「ＳⅠ42」の存在を抽出できる解釈は成立せず，「ＳⅠ42」は欠番とし，29号住居の構造の解明は今後に託すこととした。

埋土は主に2枚確認できた。おおむねレンズ状堆積をしていることから，堆積過程は想定できないが，自然堆積と想定する。

923は，山ノ口式土器の甕である。口縁部は長く伸びて斜位に立ち上がり，外面はなだらかに胴部に続く。口縁部下に貼付される三角突帯は，1条が確認される。いわゆる大甕ではないが，大型の甕の可能性がある。924は，甕の胴部と考えられる。三角突帯は2条貼付されているが近接しており，M字状突帯を彷彿とさせる形状である。下側の突帯が先に貼付されているようである。

925は，残存形状から鉢の脚台の基部と考えられるが，詳細は不明である。外面は赤色系の色調を呈しており被熱している可能性があるが，内面は白色系の色調でコゲ等は観察されない。また，外面には刻目突帯文土器にみられるような連続刻目状の文様が観察されるが，風化等のため確証を得られない。胎土には雲母を含んでいないようである。

926は花崗岩製の石皿である。一部を欠くがほぼ完形品である。正面が使用面で，浅く広くレンズ状に凹む。裏面は浅い段差が各所にみられるが，据えると安定する。長さ51cm，厚さ13cm，重さ18500ｇである。

竪穴住居跡30号（第153～155図927～933）

Ｈ－41・42区のⅢ b 層上面で検出された。長軸約5ｍ，短軸約3.5ｍの平面長方形の住居である。深さも約0.5ｍ程残っており，南西隅を中世の溝で切られているものの，本遺跡では比較的残存状況が良い。長楕円形の平面形を呈する張り出し部が，東壁と南壁東端に1か所ずつ検出された。どちらも床面を一旦掘り凹めている。張り出し部の屋内側壁面には，床面との高低差はほとんどないものの，壁沿いに「L」字に段が設けられていた。また，北壁と南西隅にはベッド状遺構が1か所ずつ設けられていた。床面との比高差は，平面長方形で広い北壁側が10cm程度，平面正方形で狭い南西隅側は5cm弱である。なお，北壁側ベッド状遺構は，凹んだ掘削面を貼床材で盛り土することによって，全体を構築している。

柱穴は2本（Ｐ1・2）検出された。規模や平面形との位置関係などから，この2本が主柱穴と考えられる。また，Ｐ1には途中に段があり，Ｐ2は断面逆台形を呈することや2本とも柱痕跡が確認されなかったことから，柱は抜き取られた可能性がある。

床面に，土坑は検出されなかった。

貼床を除去したところ，先述した北側ベッド状遺構下部の掘り込みの他，北西隅とＰ1の南西側一帯の2か所に浅い掘り込み確認した。本遺跡内の類例として，26号・33号がある。

埋土は6層確認した。うち貼床は埋土6である。埋土2・3の境界面がやや乱れているものの，おおむね西側からの土砂流入による自然堆積の状況を呈している。

遺物は，第154図のように，比較的上位の埋土層から出土したが小片が多く，接合状況を追跡できたり図化できるような資料は1層出土のもののみであった。

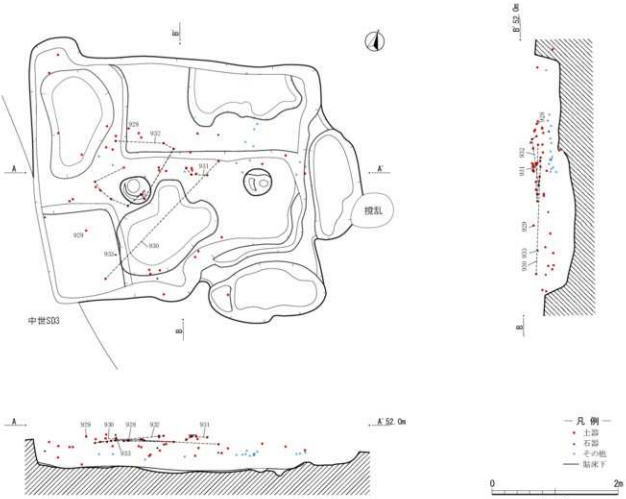
927は，入来Ⅱ式土器の甕の口縁部と考えられる。口縁部は水平だが，断面がやや丸味を帯びる。

928は，小片のため詳細が不明だが，口縁部の小振りな三角突帯や外面のミガキに近いナデ調整などの特徴から，中溝式土器など東九州系の甕の口縁部と想定される。

929は入来Ⅱ式～山ノ口式土器の甕の口縁部と考えられる。口縁部はわずかに立ち上がり，端部に向けて細く整形される。口縁端部の凹線状の凹みは，浅く施されている。

930は，山ノ口式土器の甕である。口径約36cm，口縁部は斜位に長く立ち上がり，端部には凹線状の凹みがごくわずかに残る。三角突帯は，口縁部下に2条確認できるが，口縁部の規模に比してかなり小振りである。

931・932は，上記甕に伴うと考えられる壺である。931は，埋土1からの出土だが完形に復元できた資料で，上半部と下半部の接合部から大きく割れている（意図的に割られた可能性も想定できなくはない）。口径約14cm，胴部最大径約25cm，底径約6cm，器高約32cmである。ラッパ状に開く口縁部は，頸部との屈曲部にわずかな突帯を巡らせ，下垂する口縁端部には凹線状の凹みは施さず丸味を帯びた方形に仕上げる。頸部は短く，なだらかに径を広げつつ胴部に向かう。突帯や沈線文は施さ



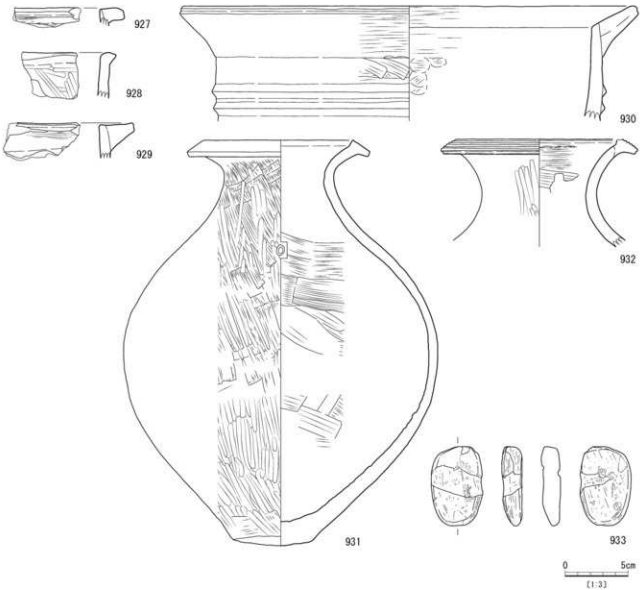
第 154 図　弥生時代竪穴住居跡 30 号（2）

れていない。丸く張った胴部から丸味を残しつつ底部に至るが，底部周辺のみやや先細りとなる。底部は丸平底に整形される。外面調整は，縦方向を基調とするハケナデを施した後，縦位のミガキで仕上げている。ミガキは，下部に至るにつれて密に施される傾向である。内面調整は，口縁部から肩部上端付近まで丁寧なナデ調整が施されており，調整痕跡をほぼ視認できない。肩部以下では，縦位基調の指オサエの後，肩～胴部最大径付近は横位，それ以下は斜位基調のハケナデ調整を観察できた。ただ，前者では工具が軽く当てられていたようで単位の抽出が困難で，後者ではハケナデの後に工具を使わないナデで仕上げられており，視認しづらい部分もあった。また，ナデに用いた工具は，上半部の内外，下半部の内外で共通するようである。このほか，頸部に種子圧痕を1か所確認でき，外底面にも植物質の繊維圧痕を確認できる。932 は，26 号の埋土中出土破片と接合した，住居間接合資料である。口径約 16cm，器形は 931 とほぼ同様と考えられる。外面には縦位のミガキを観察できる。口縁端部には凹線状の凹み，頸部との屈曲部には突帯を巡らせるのに加えて，口縁部平坦面には，横位の平行沈線文が5条施文している。この沈線文は，1条ずつ深く鮮明に施文されており，瀬戸内地方の凹線文に見られる技法とは明らかに異なる。

933 は，軽石製品である。全面を小判形に加工している。正面から右側面をまわり裏面中央まで，横位にごく浅い凹みが観察される。また，浅い凹み内のみ，特に表面の色調が白味を増している。裏面に観察される穴は，人工ではなく気泡と考えられる。被熱痕跡等は視認されない。長さ 6.3cm，幅 4.1cm，厚さ 1.6cmである。

竪穴住居跡 31 号（第 156～158 図 934～953）

Ⅰ－43 区のⅢb 層上面で検出された。長径約 4.8 m，短径約 3.6 mの，およそ南北に主軸をおく平面長方形の竪穴住居跡である。検出面からの深さが約 0.4 mと，残存状況は比較的良好だったが，張り出し，ベッド状遺構や壁帯溝などの付属構築物は検出されなかった。また，貼床は，住居中央付近及び西壁沿いの 3 か所に確認できたが，住居掘削に伴うと考えられる凹み部分を充填するような状況だった。



第155図　弥生時代竪穴住居跡30号（3）

柱穴は，住居主軸線上に大きく深い２本（Ｐ１・２）とそれらより一回り小さい１本（Ｐ３），北西壁と南東壁付近で壁面に沿うように，浅く径の小さい柱穴（深さ0.1ｍ程度）が合計11本（北西４本，南東７本）検出された。主柱穴は，住居平面との位置関係や規模などから，Ｐ１並びにＰ２の２本が相当すると考えられる。また，どちらの主柱穴にも建て直した状況を看取できたほか，明瞭な柱痕跡も観察できた。

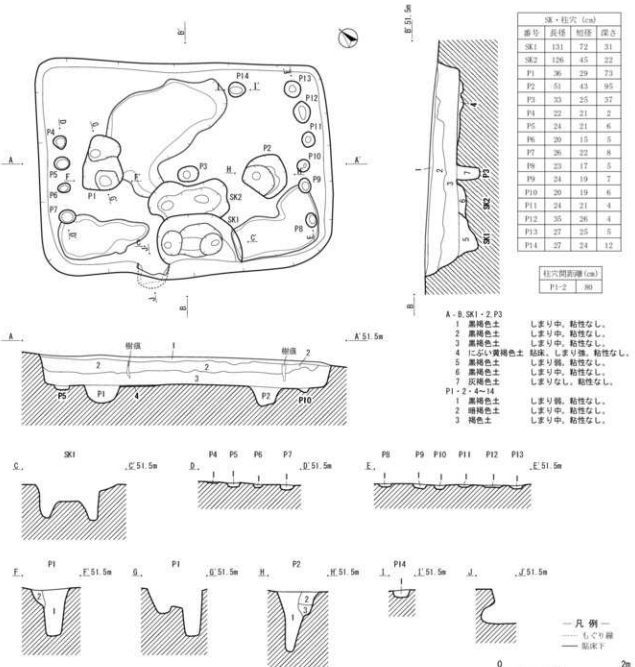
11本検出された柱穴は，本数だけみると５号や28号と類似するような印象を受けるが，それらに比べ本数は少なく，配置状況も31号は短軸側の両壁面に沿うように検出されており，相違がある。

土坑は，南西壁際の中程で，切り合い関係にある２基を検出した。平面形こそ形状が異なるが（新しいＳＫ１は楕円形，古いＳＫ２は不整楕円形），断面はどちらも略逆台形で，さらに底面の長軸方向両端部に小ピットが掘られている点，埋土の特徴も共通する。深さは，新しいＳＫ１が深くなっている。

このほか，南西壁の中央やや北寄りのところで，小規模な横穴を検出した。縦約20cm×横約30cm，奥行き約25cm，ほぼ水平に掘られ，底面は住居床面とほぼ同じであった。内部には埋土３が堆積しており，埋没状況に意図的なものは見いだせなかった。遺物は出土しなかった。

主柱穴や土坑の状況は，住居の建て替え等を想起させるもので，貼床が一部しか確認できないことも建て替えが関係する可能性がある。ただし，平面形からは建て替えの状況を直接的に読み取れない。

埋土は，主に４層確認した。うち貼床は埋土４である。おおむね水平堆積で，東側からの土砂流入による自然堆

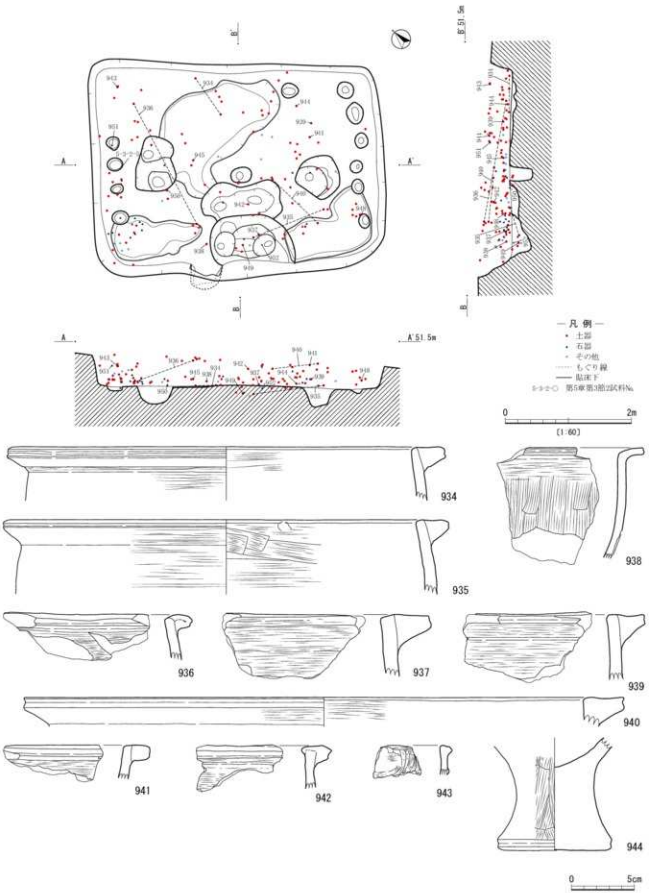


第 156 図　弥生時代竪穴住居跡 31 号（1）

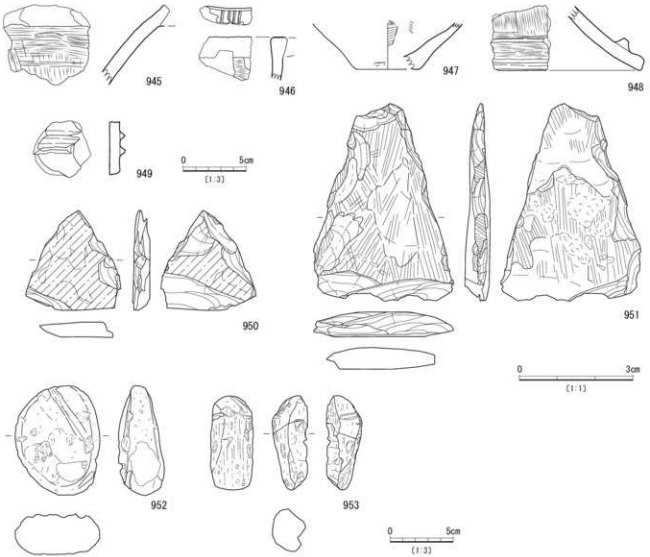
積と考えられる。なお，埋土２・３にはアカホヤや池田降下軽石が含まれていたことから，住居掘削時に出た土砂が住居近辺に置かれていた可能性も想定される。

遺物は，完形品や一括出土など，特筆すべき状況はみられなかったが，土坑付近で比較的大形の破片が多く出土する傾向が看取された。

934～944 は，甕である。いずれも入来Ⅱ式土器に属すると考えられるが，これらのうち，934～939・944 は床面直上～埋土３で出土し，940～943 は埋土２で出土している。934 は，口径約 35㎝で平面形がやや楕円形を呈するものの，残存する器壁は薄い。胴部に向けてやや張ると想定される。口縁部は，上端を水平，断面を台形に整形され，やや角張る端部には凹線が１条施される。935 は，破片の一部がＳＫ１の埋土中から出土している。口径約 35cm，934 とは部分的に差異があるものの，全体的には類似しており，同一個体の可能性がある。外面下端には，ヨコナデの工具と力の入れ方が変わっているために横位の細沈線が巡っているように見える部分がある。936 は口縁部を上向きに軽く弯曲させた整形が特徴である。937 は口縁部の造形が大きい。小片のため詳細は不明だ



第 157 図　弥生時代竪穴住居跡 31 号（2）



第 158 図　弥生時代竪穴住居跡 31 号（3）

が，大甕の可能性がある。938 はわずかに張る胴部から口縁部が曲線的に開く，特徴的な器形である。器壁は，口縁部から胴部までほぼ一定の厚さで，口縁端部のみわずかに肥厚する。器面調整も全体的に丁寧に施されており，胴部の内外面に縦位のハケ目調整を施した後，口縁部の横ナデを行っている。胴部外面のハケ目は特に丁寧である。胎土に雲母を含む。口縁端部には，浅い凹線状の凹みを施している。940 は口径約 48cmの大型甕と考えられる。942 は短くやや厚く成形された口縁部の端からやや下側に，比較的幅の広い凹線状の凹みが施される。943 は小片のため全体が不明であるが，口縁部に 2 条の三角突帯が渦巻状に貼付されているのが特徴である。胎土に雲母を含む。944 は，脚台端径約 8 cmで脚台端を一部欠く。外底面はほぼ平坦に整形される。外面を縦位のハケナデの後に斜位のハケ目調整で仕上げており，ハケ目調整を装飾的に用いているのがわかる。

945～947 は壺と考えられる。945 は口縁部である。口縁端部は剥離しており，接合状況を観察できる。946 は小片で全形を把握できないが，945 同様に口縁端部が剥離した資料と想定される。上端に 4 条の沈線文を確認できる。947 は底径約 5 cmで上げ底と想定される。

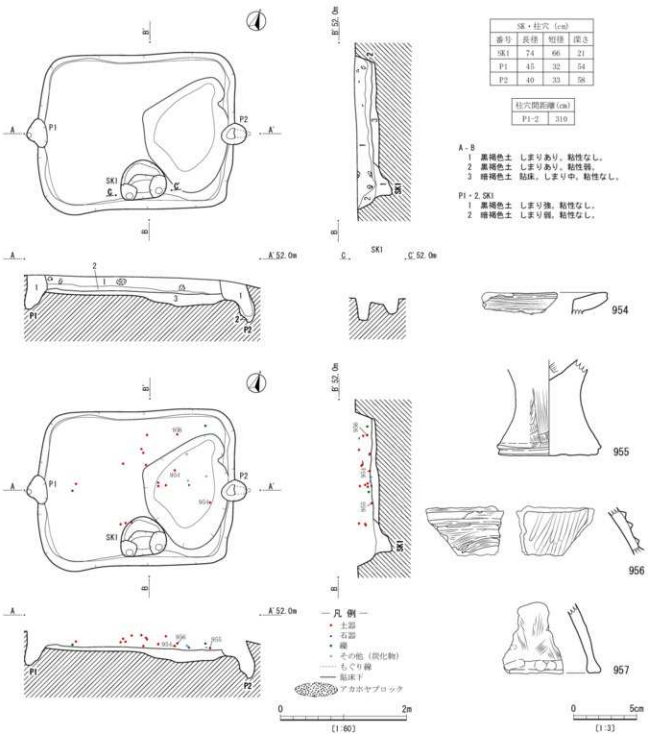
948 は器形や調整方法から蓋と考えられる。内外面ともハケナデが丁寧に施されているほか，突帯の整形も丁寧である。端部には凹線状の凹みがごく浅く施される。

949 は甕の破片を用いた円盤形土製品と想定される。縄文時代後期の土製円盤のように破断面を擦って整形していないが，輪郭が丸くなるように加工している。

950・951 は，磨製石鏃の未成品である。950 は，正面及び裏面に節理面が残っており研磨痕は見られない。長さ 2.6cm，幅 2.5cm，厚さ 0.4cm，床面直上で出土している。951 は，先端部と基部以外に研磨痕を観察できる。両側辺には平坦な研磨面も数か所で確認される。長さ

5.2cm，幅3.7cm，厚さ0.6cm，重さは13.3 gである。埋土1から出土した。

952・953は軽石加工品である。952は，全体を擦って整形しており，特に正面を平坦に仕上げている。また，正面右上部には，鋭利な工具による筋状の切り込みもある。長さ8.8cm，幅6.8cm，厚さ3.7cm，重さ42.5 g，床面直上で出土している。953は，裏面側を欠損していると考えられる。正面側は鋭利な工具で面的に削って整形されており，左側面には切り込み痕もある。下端は磨製石斧の刃部のような形状に整形されており，上部の丸い形状と対照的である。現状の長さ7.5cm，幅2.8cm，厚さ3.4cm，重さ19.2 gである。一括取上げのため出土層位は不明である。



第159図 弥生時代竪穴住居跡32号

竪穴住居跡 32 号（第 159 図 954～957）

Ⅰ－42 区のⅢｂ層で検出された。長軸約３ｍ，短軸約 2.4 ｍ，検出面からの深さ約 0.4 ｍ，本遺跡では比較的小型の平面方形の住居跡である。張り出し部，ベッド状遺構や壁帯溝などの付属構造物は確認されなかった。

柱穴は，住居主軸線と壁が交わる位置に２本，それぞれ住居中央に向けて傾斜して掘られている。埋土の状況から，埋没時まで柱が残っていた可能性を想定できる。他に柱穴と認定できる遺構を確認できなかったことを含め，この２本が主柱穴と考えられる。

南壁床面中央付近に，貼床を切って土坑が掘られている。平面楕円形で断面は皿状で浅い。底面には，長軸側両端部に２か所，深い小ピットが掘り込まれている。

柱穴と土坑の配置状況は，14・18・25 の各号などの構造と類似している。

貼床は，床全面に比較的厚く貼られている。Ⅱｂ層にアカホヤを均等に混ぜたような，褐色の強い色調を呈していた。剥いだところ，床面西半分一帯に浅い掘り込みを検出したが，ほぼ貼床で埋められていたことから，掘削時の凹凸の可能性がある。

埋土は３層確認した。うち貼床は埋土３である。それほど複雑な堆積状況を示しておらず，自然堆積による埋没と想定される。このほか，住居北東側には炭化物もまとまって検出された。

遺物は，復元できるような資料は出土しなかったが，床面近くで 954 が出土しており，時期比定の参考になると考えられる。

954 は小片で器形等の詳細は不明だが，口縁部は長く，内面の屈曲部の状況から斜めに立ち上がると想定される。端部に凹線状の凹みが施される。山ノ口式土器の甕の口縁部と考えられる。

955 は甕の脚台と考えられる。端部には凹線状の凹みを明瞭に施し，縦位のハケナデを丁寧に入れている。

956 は壺の肩部である。三角突帯が確認できるが，水平方向に２条，その下位に弧状に１条という，特徴的な貼付をしている。小片のため，展開モチーフの全容は不明である。

957 は高坏などの脚部と想定している。器壁は薄く，指頭押圧などの成形痕を残す。文様は確認できない。

竪穴住居跡 33 号（第 160～168 図 958～1029）

Ｊ－41 区のⅢｂ層上面で検出された。一部が調査区外に広がる。残存部最大径約８ｍ，検出面からの深さ 0.4 ｍ弱の，平面やや楕円形の住居である。

ベッド状遺構は，東側の一部を除く壁際に３か所連続して巡っている。これらは，中央に位置する部分がその両脇による部分より 20㎝程度高くなっており，高低差をつけている。

壁帯溝はやや特徴的な検出状況を示しており，床面とベッド状遺構の境界，ベッド状遺構と壁面の境界及びベッド状遺構の境界にそれぞれ確認された。幅は５㎝程度だが，約 40㎝間隔で工具痕のような穴が確認された点も注目される。なお，ほとんどが貼床（にぶい黄褐色土：黄褐色のアカホヤブロック及びパミスが多量に混じる）で埋められていた。

柱穴は比較的多数検出された。それらのうち，主柱穴と考えられるのが，規模と位置関係から２群検出された。ひとつは５本（Ｐ１～５）で，ほぼ環状かつ等間隔に並び，いずれも貼床を切って掘られている。Ｐ３・４については ベッド状遺構も切っている。もう一つは４本（Ｐ15～18）で，５本の群の一回り内側に，床面とベッド状遺構の境界線と沿うように同じく環状に並んでいる（Ｐ14 はＰ 15 の添柱か？）。この４本については，貼床を剥いだ段階で検出されたことから，５本の群より前に掘られたものと考えられる（埋土の特徴も硬さを除いて貼床と類似）。この他Ｐ４・５・17 からは柱痕跡が観察され，Ｐ４・５の底面には硬く締まった土の堆積も確認された。

柱穴については，東側壁面近くでも６本（Ｐ６～11）検出された。略方形に並んでおり，径と深さも約 30㎝と約 10㎝で規格性がある。また，これらと壁の間にはわずかながら北隣のベッド状遺構とほぼ同じ高さの段があり，段の下端には壁帯溝も設けられていた。ただし，これらと貼床との関係では，Ｐ 11 のみ貼床を剥いだ段階で検出されている。Ｐ６～10 については，本数は少ないものの，28 号で検出された柱穴群の状況を想起させる。

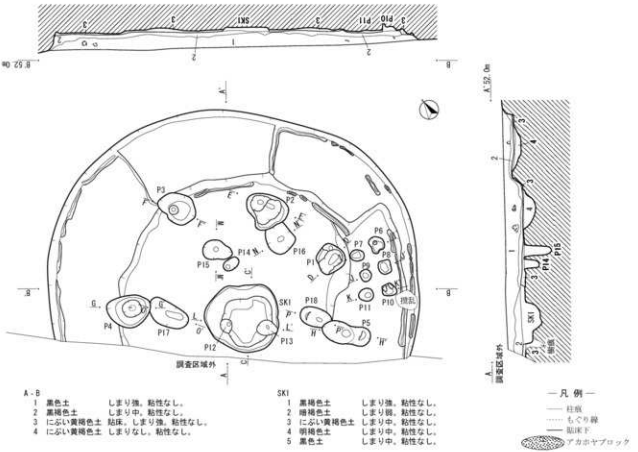
床面中央には，土坑（ＳＫ１）が検出された。平面は不整円形で，断面は貼床の部分で広さが変わる特異な２段掘り状を呈する。また，土坑壁面には，土坑のほぼ中央をとおる柱穴Ｐ１－４（Ｐ 18 －17）軸上に２基の小ピットも掘られている。

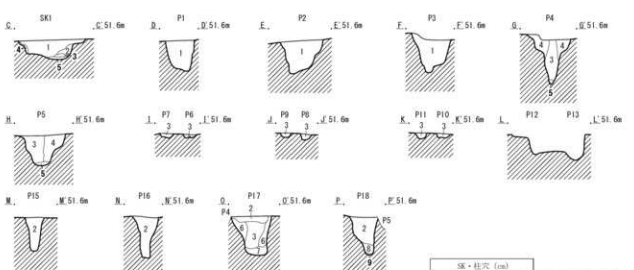
こうした付属構築物の状況から，この住居は建て替えがあったものと考えられる。土坑については，埋土の一部に貼床と特徴が類似する土があることと，それを含めた堆積状況から，建て替えの前後で利用され続けたことが想定される（掘り直しや拡張の可能性はある）。５本の小ピット群については，建て替えに伴いベッド状遺構の一部を掘削して設置された可能性もある。土坑内の小ピットの設置時期については，追求できなかった。

貼床を剥いだところ，不整形の掘り込みが数か所で確認された。特に最も高いベッド状遺構部分に深い掘り込みがあった。ただ，これらについては平面形や柱穴等の位置関係との相関を見出しにくく，掘削に伴う掘り込みと想定しておきたい。

埋土は４層確認できた。うち貼床は埋土３である。おおむねレンズ状に堆積しており，自然堆積で埋没したと想定される。壁際に垂直堆積層などはみられなかった。

遺物は，土坑とＰ４の間の床面近くから山ノ口Ⅱ式土

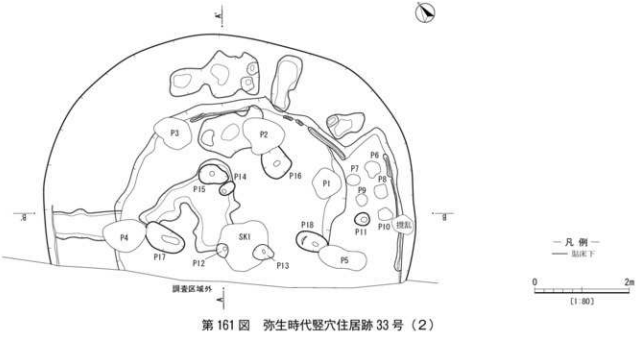




柱穴間距離(cm)
P5-1	175
P1-2	205
P2-3	200
P3-4	227

SK・柱穴 (cm)							
番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
SK1	159	142	41	P10	30	27	9
P1	60	57	65	P11	31	27	13
P2	91	78	69	P12	31	25	37
P3	84	63	70	P13	45	32	54
P4	88	68	93	P14	36	22	32
P5	104	37	63	P15	63	41	71
P6	36	31	7	P16	59	57	86
P7	30	24	9	P17	91	49	83
P8	29	27	12	P18	68	39	79
P9	25	23	9				

第 160 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（1）



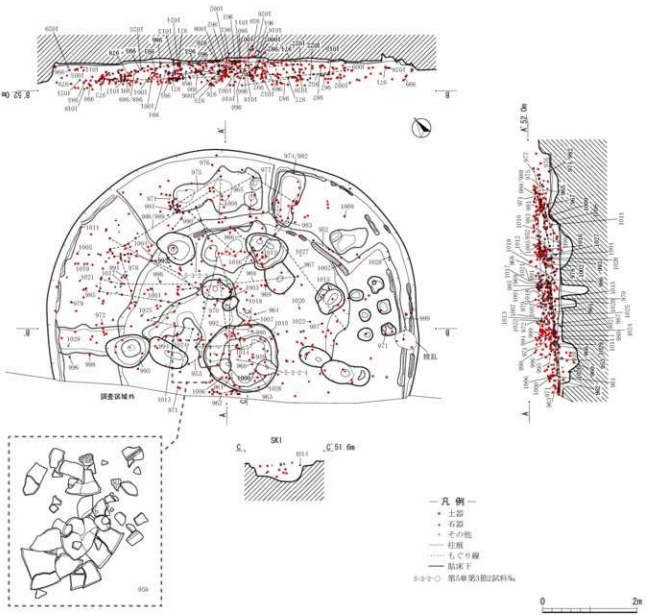
第 161 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（2）

器の甕が 1 個体出土した（第 162 図及び第 163 図 958）。この住居からは，他にも土製勾玉 3 点（1011～1013），磨製石鏃（1014～1019），砥石（1023～1025），炭化種子など他の住居に比べて多種多様な遺物が多数出土したが，ほとんどは埋土中の出土だった。

958 は口径約 30㎝，脚台端径約 8 ㎝，脚台高約 6 ㎝，器高約 28㎝である。平面形がやや楕円形を呈するが，胴部はわずかに丸味を帯びつつやや外開きに立ち上がり，口縁部は短いが斜め上方に伸びる。器壁は比較的厚いが，底部から口縁部まであまり変化しない。表面は，内外ともに下半部で広範囲に薄く剥落している。器面調整は，観察できる部分でみる限り，外面は縦基調のハケ目，内面は横位のハケ目のあとに縦位のヘラナデが丁寧だが薄く施される。口縁端部には凹線状の凹みが浅く巡るが，脚台端部は面取り整形のみである。三角突帯は部分的に波状を呈し，頂部も丸味を帯びるなどやや粗い仕上げである。959 並びに 960 は，小片がＳＫ１から出土した。

961～970 は，床面直上から埋土 1 にかけて出土した，甕及び脚台である。961 は，口径約 31㎝，口縁部は短く厚みがあり水平に整形される。屈曲部は鈍く突出する。端部には，幅広の凹線状の凹みを巡らせる。962 は，口径約 17㎝の小型の甕である。底部からあまり張らずに胴部に至り，口縁部付近はわずかに内弯する。口縁部は短く端部を丸く整形し，上面は水平にナデでいる。屈曲部には稜を形成する。963 は，26 号で出土した 877～880 と類似した器形である。965・966 は，口縁部の断面形状にやや差違が認められるものの，口縁部の立ち上がり具合やあまり張らない胴部など，器形の特徴が類似した甕である。その他，965 には外面調整に縦基調のハケ目調整が観察されること，966 の方が口縁部の整形や三角突帯の貼付にやや粗さがみえることなどがある。どちらも，口縁端部には凹線状の凹みを明瞭に施す。965 は口径約 30㎝，966 は口径約 26㎝である。964 は，破片だが形状が両者に似る。967 は，口径約 19㎝の小型甕である。強く丸く張る胴部からそのまま口縁部に向けて内弯する球形の器形で，口縁部は短く斜め上方に立ち上がる。無頸壺とするには口径がやや広い。器外面が摩耗しており，残念ながら調整やススの付着等を観察できない。口縁端部は摩耗しているが，凹線状の凹みをかろうじて観察できる。968 は，脚台端径約 9 ㎝，脚台高約 6.5㎝である。「ハ」の字状に弯曲しながら開く器形を呈し，脚台接地面は上げ底に整形される。脚台外面は縦位のハケ目調整を丁寧に施すほか，脚台端部には凹線状の凹みが巡っている。969 は脚台端径約 7 ㎝，脚台高約 6 ㎝であり，968 よりも脚台端部の開きが少ない。脚台接地面は，上げ底に整形したあと，さらにミガキ調整を施して仕上げている。970 は脚台端径約 9 ㎝で，接地面は平底に整形するが，中央部のみ工具を回転させて調整している。外面は横位のナデ調整で仕上げている。

971～986 は埋土 1 から出土した甕と脚台である。971 は口径約 33㎝，脚台端径約 8 ㎝，器高約 29㎝，脚台高約 5 ㎝である。器壁は比較的薄く，さらに器面が内外ともに薄く剥落している。そのため調整の詳細な観察が難しいが，胴部外面と器内面下半部は縦位のヘラナデが施されているようである。底部から胴部へはわずかに丸味を帯びて立ち上がり，胴部から口縁部へはごくわずかに開く器形である。短い口縁部は稜を形成して屈曲し，しゃ

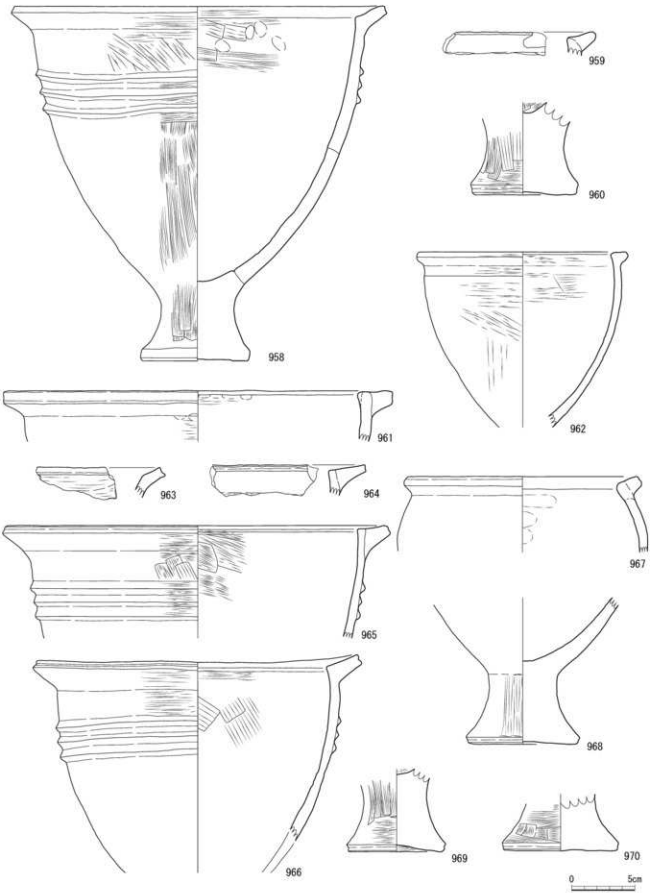


第 162 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（3）

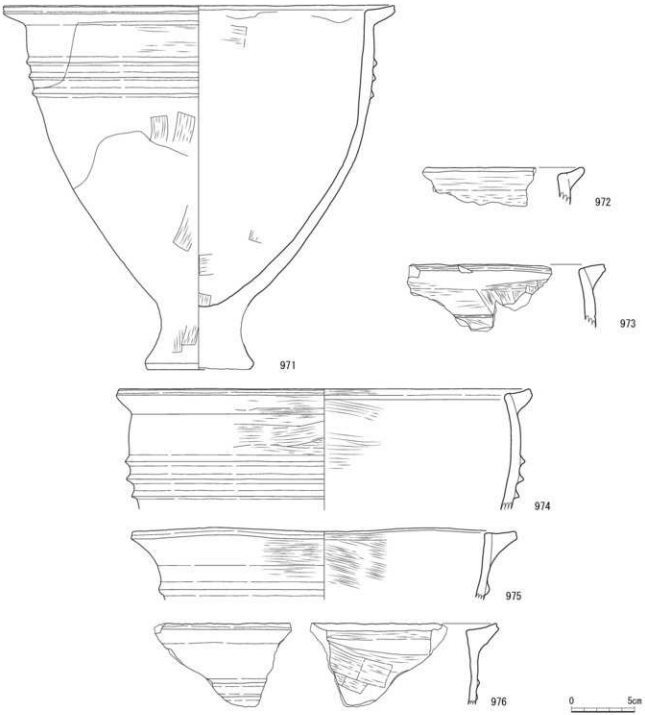
くれながら水平よりも微妙に角度をつけて立ち上がる。器高に比して脚台は低い。口縁端部にはやや細い凹線状の凹みが巡る。3 条の三角突帯は，やや小振りだがほぼ水平に貼付され，整形も丁寧である。972 は口縁部の形状が 971 と類似する。973 は胴部に細沈線を施している。外面には縦位基調の調整が見える。974 は口径約 33cmで，丸味を帯びた胴部からそのまま内弯して口縁部に至る器形を呈する。短い口縁部は，しゃくれながら斜め上方に立ち上がる。屈曲部の稜は丸く整える。器面調整は，内外面ともに横位のハケナデ調整が施される。975・976 は胴部からの開き具合に差違があるものの，口縁部形状や三角突帯が口縁部寄りに貼付される点が類似する。975 は口径約 30cmである。

977～979 は口縁部の厚さが変化せず，むしろ端部のほうが厚みを増すような断面略長方形を呈する資料である。器面は，判明した資料では内外面とも横位のナデ調整が施される。口縁端部は下端をやや丸め，凹線状の凹みはごく軽く施される程度である。977 は口径約 38cm で，屈曲部の整形が目を引く。

980～983 は口縁部が斜め上方に長く伸び，端部の凹線状の凹みはごく軽く施されるか，施されない資料である。器面調整は，判明した資料では内外面とも横位のナデ調整が施される。982 は口径約 24cmである。また，977・982・983 の三角突帯は，小振りで口縁部寄りに貼付される傾向が看取される。なお，983 は口縁端部を横ナデではなく指オサエで整形している点が特徴的である。その



第 163 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（4）

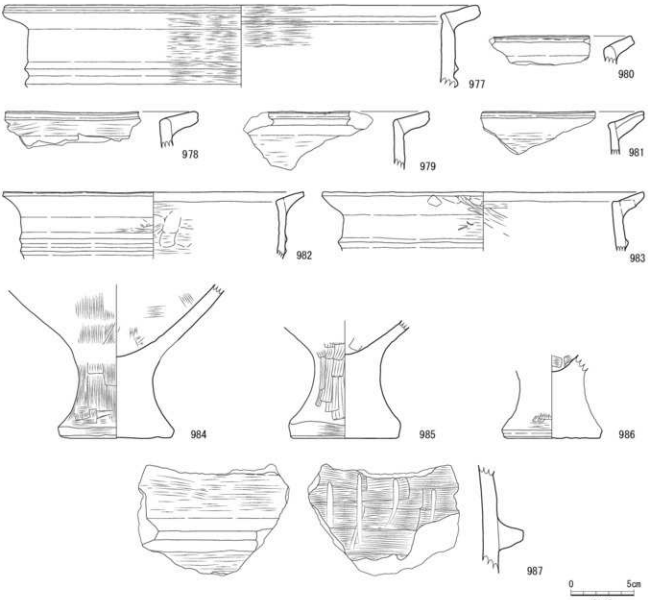


第 164 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（5）

ため，口縁部下面に軽い凸部が形成されている。口径は約 26cmである。

984 は脚台端径約 9 cm，脚台高約 6.5cmである。外面は縦位のハケナデ調整を薄いが丁寧に施す。端部は面取り整形で仕上げている。胴部に向けてはかなり開いている。985 も脚台端径約 9 cm，脚台高約 6.5cmと 984 とほぼ同規格で，脚端部の整形と外面調整も類似するが，脚端部の面取り整形の幅と脚の最小径の位置が高いために，984 よりも細身に見える。底部接地面が非常に平滑である。986 は脚台端径約 7.5cm，脚台高約 5 cmである。器面の剥落が著しいが，脚台端部には凹線状の凹みが浅く巡っている。

987 は埋土 1 から出土した大甕で，資料上端がわずかに屈曲することから，口縁部直下の資料である。器壁は

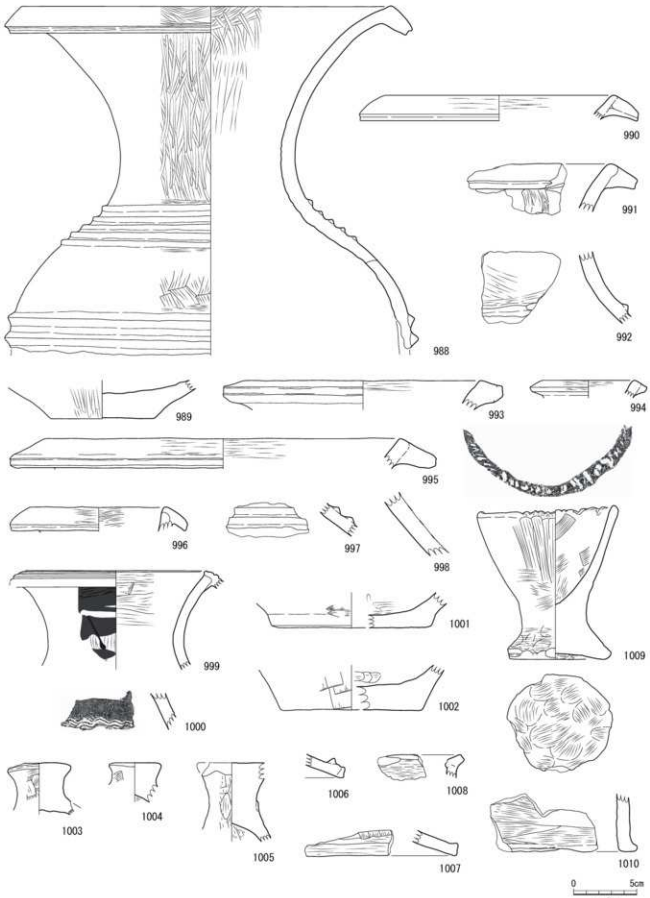


第 165 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（6）

比較的薄く，器面は横位のハケナデ調整で仕上げられている。内面には間隔を空けた縦位の擦痕を，ハケナデ調整のあとからつけているのが観察される。また，突帯の端部から下面にかけてススの痕跡も見受けられる。

988・989 は床面直上から埋土 1 にかけて出土した大壺で，胎土の特徴から同一個体と考えられる。988 は口径 32cm，高さ 27.5cm（現状）で，想定される胴部の法量に比して頸部から口縁部のつくりが大きい，不安定な器形である。器面は，頸部から口縁部にかけては器形に即した方向のミガキ調整が内外面とも丁寧に施されているほか，胴部も縦基調のハケナデ調整が薄く施される。頸部から胴部の内面は剥落が顕著で詳細な観察ができない。やや厚みのある下向する口縁部は，端部に凹線状の凹みを明瞭に巡らせている。屈曲部に突帯は付されていない。また，肩部には 5 条の三角突帯が巡り，胴部には肩部のものよりも大振りの三角突帯が 2 条残っている。どちらの突帯も頂部はやや丸味があるものの丁寧な整形である。989 は底径約 8 cmで平面観はやや楕円形となる。外面は縦位のミガキ調整が施されるが，内面は剥落が全体に及んでおり観察できない。なお，この壺は，埋土中に散在して出土したが，整理作業の結果，胴部下半の破片が少なくとも住居埋土中には見つからず，図示した復元結果となった。さらに，胴部の破断面は接合面付近で揃っている。単に胴部接合面から破損しただけかもしれないが，想像をかき立てられる資料である。

990～992 は埋土 2 から出土した壺である。990 は口径約 22cm で，器面は丁寧な横ナデが施される。991 の外面は縦位のハケナデ調整で仕上げている。992 は肩部で，



第 166 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（7）

外面の色調が濃茶褐色を呈している。

993～1002は埋土１で出土した壺である。993と994は口縁部がかなり短く，下向するというより断面台形状を呈すると表現した方が適当に思われる程である。口縁端部の形状も簡素で，994は方形に整えて済ませている。993の口径は約22cm，994は約９cmである。他方，995と996は，口縁部がやや長く下向し，端部には凹線状の凹みが巡る。口径は，995が約34cm，996が約14cmである。997，998は肩部の小片である。998は三角突帯が剥落しており，痕跡から４条貼付されていたことがわかる。また，突帯の隙間にあたる部分の器面は特徴的な濃茶褐色を呈している。999は，口縁部上面に施されたヘラ描きの平行沈線文と，頸部外面に暗文のような淡黒色の塗彩が目を引く資料である。器壁も比較的薄く器面調整も丁寧（外面：縦位ミガキ，内面：横位ハケナデ）であるが，口縁部の文様は凹線文ではなく平行沈線文であり，胎土には雲母を含み，器形は在地の特徴を示している。口径は18cm弱と想定される。1000は，柳描波状文が施文された肩部資料である。胎土に雲母を含むものの，混和剤は少なく焼成は良好で，器面は内外面とも丁寧にナデられている。1001と1002は，底部と考えられる。底径は，1001が約11cm，1002が約12cmであることから，比較的大型の壺の底部と想定される。1001の内面は，丁寧なミガキ調整である。

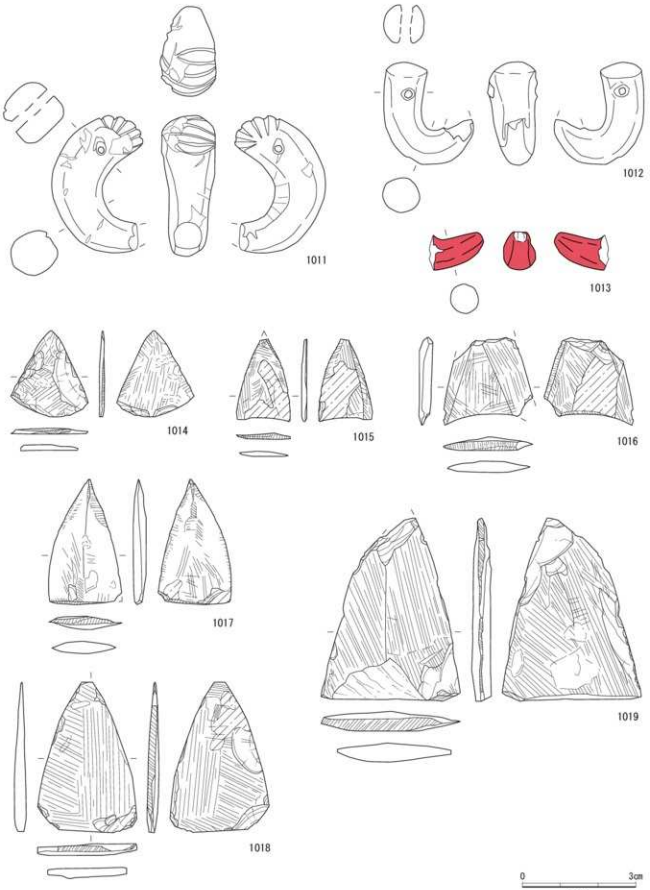
1003～1007は埋土２～１から出土した蓋と考えられる資料である。甕の脚台と比較して，大きさ，端部に凹線状の凹みや面取り調整を施していないことや内面にコゲの付着や痕跡が観察されないことなどが異なる。鉢との比較では，内面の整形に微妙な違いが認められる。1003はつまみ部の径約５cmで，外面の縦位のハケナデ調整は，やや強めに施されている。1004のつまみ部径は約４cmで，つまみ部上面を平坦に仕上げている。1005は，つまみ部を縦長に成形している点が特徴的である。残存部で径約４cmである。1006・1007は口縁部で，どちらも端部に凹線状の凹みを巡らせ，外面に縦位のハケナデ調整が看取される。また，どちらも口縁部内面にススの付着は認められない。異なるのは，1006は突帯が貼付され色調は暗褐色を呈し，1007は突帯がなく色調は明褐色を呈する点である。

1008・1009は，鉢と考えられる。1008は床面直上で出土した。小片のため詳細は不明だが，端部に凹線状の凹みが明瞭に施されていることなどから，小型の鉢または甕と想定される。色調は明るい橙色を呈する。1009は口径約11cm，底径約８cm，器高約12cmで，体部を１／３程度欠損する。東壁沿いに設けられたベッド状遺構の床面上で一括して出土した。通常の甕と同等規格の脚台は，手捏ね成形の跡を明瞭に残すが，端部には部分的に面取り整形や凹線状の凹みを施している。体部は，外面に縦基調のハケナデ調整を施し，内面は斜位のナデ調整を施す。断面略舌状に整形された口唇部には，板状工具（「施文部」が二叉状を呈するものと，そうでないものの２種類を使用）で連続刻目を施している。顕著な被熱痕跡は看取されないが，外面には広くススの痕跡が認められる。全体に比して不釣り合いに大きい脚台のせいか，持ち重りのする資料である。

1010は，端部から内面にかけて器面の剥落が著しく，詳細な観察ができないが，高坏の脚と想定している。

1011～1013は土製勾玉である。1011は，北西壁際の壁帯溝が途切れている箇所で床面直上から出土した。尾部を欠損しているものの丁字頭勾玉である。残存部で長さが４cm，幅が２cm，厚さが1.5cmあり，焼成前穿孔で，径は比較的狭い。孔端部の平面形が，右面と左面の両面ともに水滴のような形状になっており，「紐擦れ痕」を想像させる。尾部の破断面には，修正等を行った形跡は見られない。また，右面が左面よりもわずかに平坦になっていることから，右面を下にして製作した可能性がある。1012は，残存部で長さ３cm，幅2.5cm，厚さ1.5cmであり，尾部先端を欠損している。頭部を平坦に整形し，沈線等の文様は施していない。焼成前穿孔で，径は1011より大きく，孔端部の形状は穿孔当時を保っているようである。この資料は，左面が平坦の度合いが強く，尾部も左寄りになっている。1013は尾部のみの資料で，器面は丹塗りされている。1012と1013は埋土１で出土した。

1014～1019は，磨製石鏃及び磨製石鏃未成品で，いずれも頁岩製である。1014は未成品である。節理面で剥離した剥片を用いているため，厚さがとりわけ薄い。長さ2.3cm，幅2.0cm，厚さ0.1cm，重さ0.7ｇである。1015は先端を欠損するが製品である。1014と同様に薄く，正面と裏面に節理面を残す。両側縁は刃部を研ぎ出している。残存長2.2cm，幅1.4cm，厚さ0.1cm，重さ0.5ｇである。1016は上半部を欠損する製品である。上記２点と形状は類似するが，規格が一回り大きく厚い。裏面に節理面を残す。両側縁は鋭利に研ぎ出している。残存長並びに幅2.3cm，厚さ0.4cm，重さ2.2ｇである。1017は製品で，平基式であるが，左側辺がやや外弯し先端が中心軸からずれている。しかし，先端部を中心に鏑を形成するほど丁寧に研いでいる。また，大きさの割に厚みがある。転用品の可能性も想定される。長さ3.3cm，幅1.9cm，厚さ0.3cm，重さ0.7ｇである。1018と1019はどちらも未成品であるが，より大型の1019に，鏑が形成され刃部の研ぎ出し作業に入っているなどの違いが看取される。長さ，幅，厚さ，重さについては，1018が4.0cm，2.6cm，0.3cm，3.5ｇで，1019が4.8cm（現状），3.7cm，0.5cm，9.7ｇである。出土層位は1016のみ埋土２であり，他は上位の埋土１の中から散在して出土する状況であった。



第 167 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（8）

1020は，打製石斧の基部片である。ホルンフェルス製で裏面の剥離は大きく，破断後に剥離した可能性がある。そのために厚みがない。埋土1から出土した。1021は，磨製石斧の基部片である。ホルンフェルス製で全面を磨いているが，素材の形状を生かしてそれほど成形していない可能性がある。想定される全体形状及び頭部に観察される微細な剥離と潰れの状況から，鑿（たがね）のような使い方をしていたことが想定される。現状で重さ7.1ｇである。埋土1から出土した。

1022は砂岩製の敲石である。作業面は上端と下端のそれぞれほぼ1点に集中しており，敲打痕が潰れて平坦面を形成するほどである。正面と裏面には磨り面も観察される。長さ7.7㎝，幅2.8㎝，厚さ1.9㎝，重さ64.9ｇで，埋土1から出土した。

1023～1025は，砥石である。1023は頁岩製で埋土2から出土した。短冊形の破片で，正面，左側面及び上面の砥面は鏡面のようになっていることから，金属器の研ぎ出しに使われていたと考えられる。裏面は剥離面だが，部分的にわずかに光沢が認められることから，曲面を生かした研ぎを行っていた可能性が想定される。現状で長さ3.5㎝，幅4.0㎝，厚さ1.6㎝，重さ21.8ｇである。1024は土坑1の北側で床面近くから出土した。砂岩製で，各面とも擦痕はごくわずかに観察される程度だが極めて平滑になっている。さらに，下部の破断面との稜線も，左側面を除いて擦れて角がとれている上に破断面の稜線も一部擦れており，よく使い込まれていたことがわかる。長さ9.8㎝，幅3.8㎝，厚さ1.6㎝，重さ83.5ｇである。1025は，砂岩製で節理面から剥がれた転礫を素材としている。砥面は平滑で周縁部も丸く擦れているが，剥離面の凹凸が残っていることから，軟質素材の研磨用かと想定される。埋土1から出土した。

1026は，砂岩の板状礫を用いた石皿である。中央部で割れており全形は不明だが，現状で長さと幅が28.5㎝，厚さ8㎝，重さ8520.0kgである。正面にほぼ平坦な磨り面と敲打部が確認されるほか，裏面には敲打部が広がる。埋土1から出土した。

1027～1029は軽石製品である。散在した出土状況だが，どちらかといえば床面近くで出土する傾向がみられた。1027は，Ｐ1とＰ2の間の床面近くで出土した。表面が風化しており詳細は不明だが，正面にある深い凹みは，底部に細い溝が数本見られることから，斧のような道具で何回も切り込まれて形成されたと考えられる。また，左側面は鋭利な工具で切られている可能性がある。現状で長さ15.1㎝，幅14.5㎝，厚さ8.0㎝，重さ292ｇである。1028は住居東側の浅いピット群が検出された区域で，壁際の段差部分から出土した。上端を欠損するが，残りの面はすべて使用されて平面になっている。特に正面と右側面は砥石に見られるような擦痕が顕著に観察されるうえ，面の形状も，正面はレンズ状に凹み，右側面は辞典の背表紙のような凸面となる。対象は不明だが，砥石として使用されていたと想定される。長さ12.4㎝，幅7.8㎝，厚さ3.3㎝，重さ92ｇである。1029もレンズ状に凹む正面，右側面及び裏面に顕著な擦痕が観察されることから，1028と同様に砥石のような使い方をしていたと想定される。住居西壁近くの埋土1下位で出土した。

竪穴住居跡34号（第169図1030）

Ⅰ－40・41区のⅢｂ層で検出された。長軸約3ｍ，短軸約2ｍ，検出面からの深さ約0.3ｍの平断面が長方形を呈する住居だが，本遺跡では最も小規模な部類に入る。張り出しなどの付属構造物は検出されていない。調査当初は中世の竪穴建物跡を想定したが，埋土中から弥生土器しか出土しなかったため，当該時期の遺構として認定した。

柱穴は，壁沿いに8本検出した。おおよそ等間隔に掘られており，径はいずれも30㎝前後，深さは北側の5本が南側の3本よりも深いが，それぞれの深さの平均は揃っている（北側：約52㎝，南側：約38㎝）。また，断面形状や柱穴埋土の観察から，柱は抜き取られたものと考えられる。

床面は平坦だったが，貼床は確認できなかった。

埋土は4層確認した。レンズ状堆積をしていないことと各層に大小のアカホヤ土塊が多量に確認されたことから，人為的に埋め戻されたと想定される。

規模，柱穴の状況，埋土堆積状況など，総じて特徴的な遺構である。

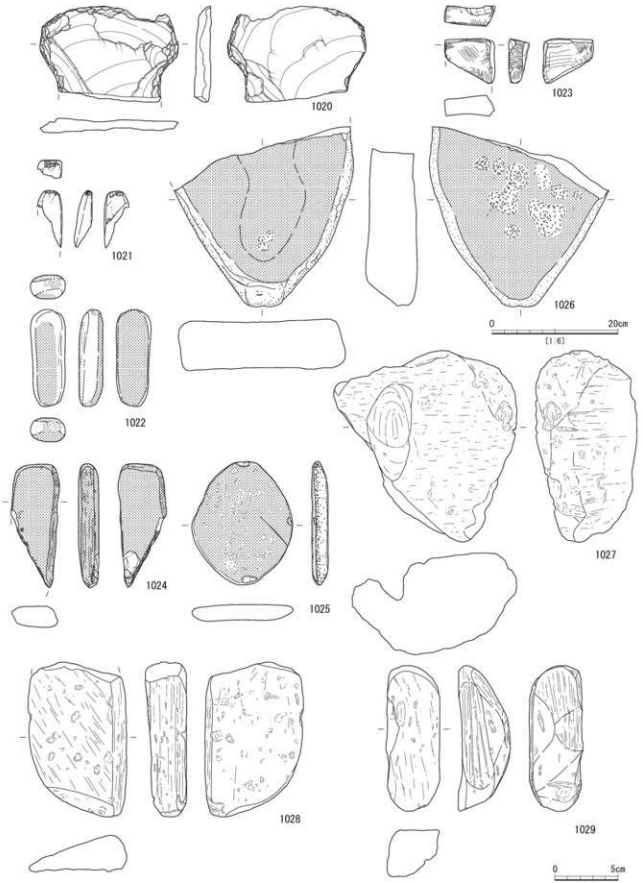
遺物は，いずれも小片で埋土中に散在した状況であり，接合資料もなかった。

1030は入来Ⅱ式土器の甕と考えられる。口縁部の外面下端は断面逆台形状に強く凹んでいる。口縁部の整形に伴う偶然と想定されるが，凹線を引いたかのようである。

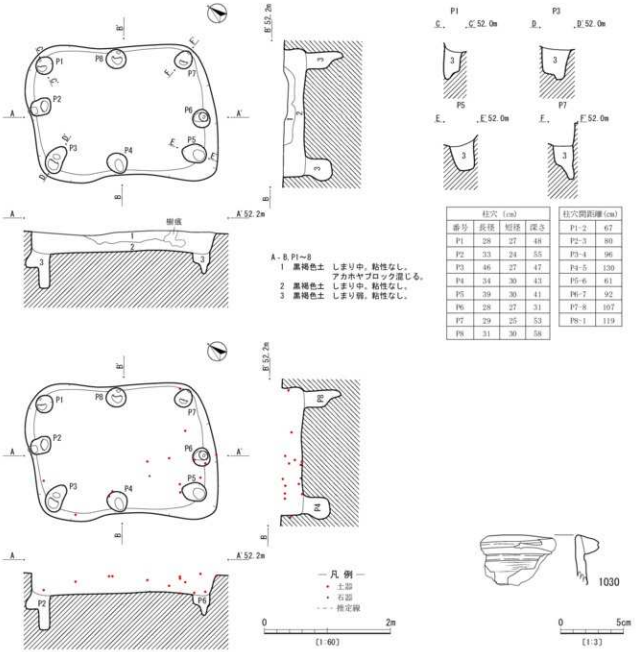
竪穴住居跡35号（第170図1031・1032）

Ⅰ－40区のⅢｂ層で検出された。長軸約5ｍ，短軸約4ｍで検出面からの深さ約0.2ｍの住居である。埋土と包含層の特徴が似通っており，プランの確認や認定が困難だった。平面形は略長方形だが，北西角から西壁にかけてと南壁には張り出し部を設けるほか，北東角にはベッド状遺構も設置されている。ただし，南壁の張り出し以外は，床面との高低差は数㎝とごくわずかである。

柱穴は，住居の主軸線上に3本検出された。いずれも貼床を切って掘られており，他には確認されなかったことから，主柱穴と考えられる。また，東側にＰ2及び3がほぼ同規格で隣接して掘られていること，西側のＰ1には底面が2か所確認されたことから，柱の建て替えがあったことが想定できる。いずれの柱穴にも柱痕跡は観



第 168 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（9）



柱穴（cm）				柱穴間距離（cm）
番号	長径	短径	深さ	
P1	28	27	48	P1-2　67
P2	33	24	55	P2-3　80
P3	46	27	47	P3-4　96
P4	34	30	43	P4-5　130
P5	39	30	41	P5-6　61
P6	28	27	31	P6-7　92
P7	29	25	53	P7-8　107
P8	31	30	58	P8-1　119

第 169 図　弥生時代竪穴住居跡 34 号

察されなかった。

土坑は，この住居では検出されなかった。壁帯溝も検出されていない。

貼床は，中央付近のごく一部で確認されたのみである。

埋土は３層確認された。うち貼床は埋土３であるが，前述のとおりごく一部しかない。流入方向は不明だがレンズ状の堆積をしており，自然堆積で埋没したものと想定される。全体的に，埋土中にアカホヤを多く含むことから，住居の周囲に掘削時の排土を利用した土手等を設けていた可能性が想定される。

遺物には山ノ口式土器の甕などが見られたが，床面近くのものは少なく，多くは埋土上層から出土した。

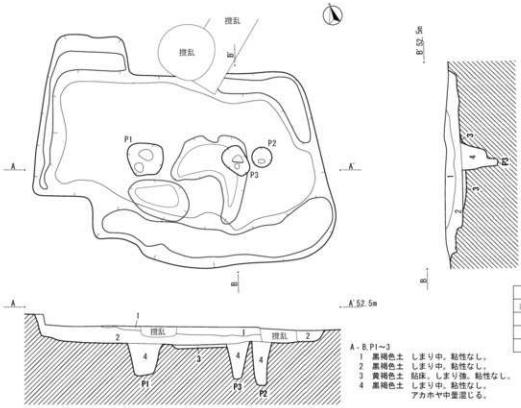
1031 は，入来Ⅱ式～山ノ口式土器の甕の胴部と考えられる。小振りの三角突帯は，下端部に接合痕が残る。

1032 は 1031 と同時期の壺の底部と考えられる。接地面は，皮系の敷物の跡がついたような仕上げである。

竪穴住居跡 36 号（第 171 図 1033～1035）

Ｊ－38 区のⅢｂ層で検出された。中世の土坑に一部削平されていた。残存部で短辺約２m，検出面からの深さは約 0.2 m の平面隅丸長方形の住居である。張り出し部は削平された可能性も考慮されるが，壁帯溝や土坑も検出されていない。

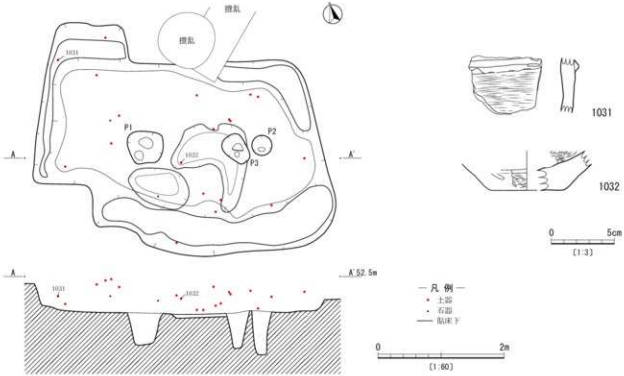
柱穴は２本，住居中央に傾斜するように掘られたものが検出された。一部削平されているため確証はないが，



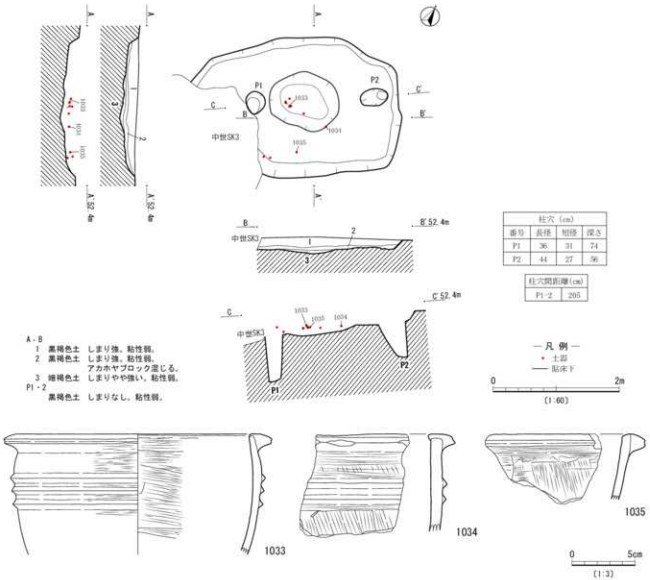
柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	56	50	51
P2	32	32	56
P3	59	32	69

柱穴間距離（cm）
P1-2	186
P1-3	144

A－B P1～3
1　黒褐色土　しまり中，粘性なし。
2　黒褐色土　しまり中，粘性なし。
3　黒褐色土　粘質，しまり強，粘性なし。
4　黒褐色土　しまり中，粘性なし。
　　アカホヤ中量混じる。



第 170 図　弥生時代竪穴住居跡 35 号



柱穴 (cm)			
番号	長径	短径	深さ
P1	36	31	74
P2	44	27	56

柱穴間距離(cm)
P1-2　205

第 171 図　弥生時代竪穴住居跡 36 号

位置関係や他に検出されなかったことから，これらが主柱穴と考えられる。住居平面部の規模に比して過度に深い。柱痕跡等は観察されなかった。

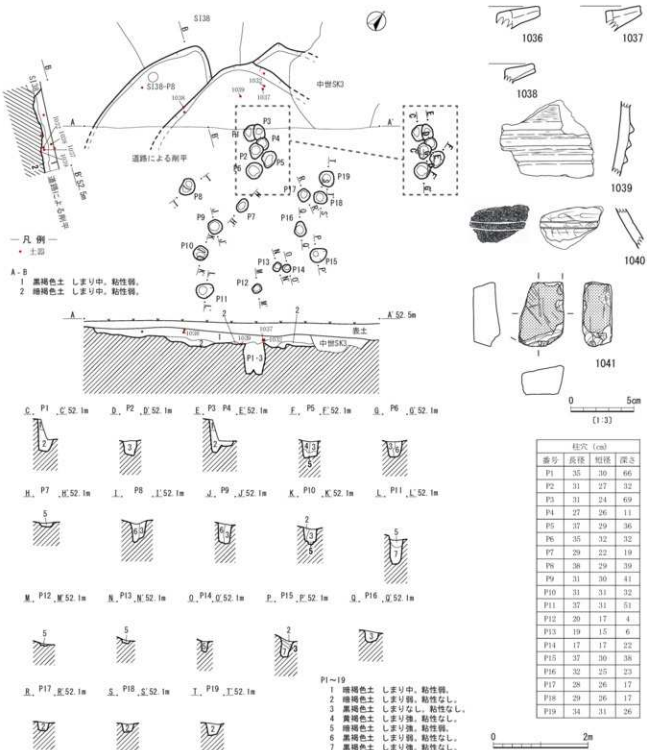
床面中央で掘り込みを確認したが，ごく浅く，後述する埋土との関係も踏まえ，付属構築物の土坑ではなく住居掘削時の掘り込みと判断した。

埋土は３層確認した。貼床は，検出面から床面までが浅かったことなどから確認できなかったが，堆積状況などから埋土２が貼床だった可能性が高い。

遺物は，土器片のみ少数出土したが，埋土中の下位で比較的中央部にまとまっていた。

なお，この住居周辺やＫ－36 区一帯では，黒褐色土のしまりが強い埋土の柱穴が分布しており，弥生時代のものの可能性がある。

1033～1035 は，入来Ⅱ式土器の甕と考えられる。1033 は，口径約 21㎝で丸味を帯びた胴部からやや内傾して口縁部に至る。口縁部は水平に屈曲し，断面が台形状に成形されているために端部がやや下がる。器壁は比較的薄い。器面調整は，内外ともに横基調のナデが丁寧に施されている。３条貼付されている三角突帯は，いずれも比較的細いが断面三角形に丁寧に整形されている。２条目，３条目と下がるにつれて突帯の頂部が下がる傾向にある。細くなった口縁端部には，凹線状の凹みが明瞭に施される。口縁部～突帯間をのぞき，外面全体にススが付着する。1034 は内外面ともにハケナデ調整が縦基調で施されているのが特徴的である。口縁部寄りに貼付された三角突帯は，２条とも頂部が丸く仕上げられているが，成形等丁寧である。1035 は，やや外開きの器形に丸味のある口縁部が特徴的な資料である。1034 と同じく，外面は縦基調のハケナデ調整が施される。器壁は薄い。



柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	35	30	66
P2	31	27	32
P3	31	24	69
P4	27	26	11
P5	37	29	36
P6	35	32	32
P7	29	22	19
P8	38	29	39
P9	31	30	41
P10	31	31	32
P11	37	31	51
P12	20	17	4
P13	19	15	6
P14	17	17	22
P15	37	30	38
P16	32	25	23
P17	28	26	17
P18	29	26	17
P19	34	31	26

第 172 図　弥生時代竪穴住居跡 37 号

竪穴住居跡 37 号（第 172 図 1036～1041）

J・K－38 区のⅢb 層上面で検出された。この住居を含むJ～L－38～40 区は，農道整備に伴う撹乱をⅤ層付近まで受けており，この住居は撹乱範囲を重機で除去した後の包含層残存部の調査で検出したものである。

残存部は，長さ約 4.5 m，奥行約 1.8 mある。中世の土坑にも一部削平されており，残存部は床面と張り出し（2 か所）の一部であると想定されるものの全形の詳細は不明である。なお，西側は 38 号を切っている。

柱穴は，撹乱範囲境界付近から撹乱土を除去した後の住居中央と想定されるあたりにかけて 19 本検出した。これらは，位置関係や個々の形状にばらつきがあるもの

の，埋土の特徴が類似すること（アカホヤ土塊を多く含みしまりがある），周辺に同様の柱穴が検出されなかったことから住居に伴うものと認定した。

埋土は２層確認したが，貼床などは特定できなかった。

遺物は，小片が埋土中に散在する状況だったが，土器だけでなく石器も発見された。

1036～1039 は，山ノ口Ⅱ式土器の甕と考えられる。1036～1038 は口縁部が斜め上方に長く伸びる。口縁端部には，わずかに凹線状の凹みが施されている。1039 は，資料上端がわずかに反ることから口縁部近くと考えられ，三角突帯がかなり口縁部寄りに貼付されていることが想定される。

1040 は，壺の肩部と考えられる。鋭利な工具による横位の平行細沈線が２条巡っている。外面は，斜位のナデと横基調のミガキが施されている。

1041 は，砥石である。粒子はやや粗いが均質な砂岩を使用している。正面並びに右側面に砥面が残っており，どちらもおおむね長軸線方向の擦痕を観察できる。正面は図左上に向かってレンズ状に凹んでいる。色調が部分的にやや赤味を帯びており，破損前に被熱した可能性がある。現状で長さ５cm，幅及び厚さ2.5cm，重さ59.5 g である。

竪穴住居跡 38 号（第 173～174 図 1042～1045）

Ｊ－38 区のⅢｂ層で検出された。全体的に広く削平を受けていたほか東側を 37 号に切られているため，全形は不明だが，残存部で長軸３m以上，短軸約３m，検出面からの深さ約 0.2～0.4 m の平面隅丸長方形の住居だった可能性がある。中央部は約２m四方の方形に一段深く掘り下げられており，この方形掘り込みの西側と北～東側に張り出し部を設けている。この２か所の張り出し部は，わずかな高低差（約３cm）を設けて区切られている。

柱穴は，方形掘り込みに５か所と張り出し部に３か所検出したが，住居との配置関係や相互の位置関係に規則性を見いだせず，主柱穴等の特定はできなかった。これら８本のうち，比較的径が大きく深いのはＰ６～８の３本である。

中央部方形掘り込みの南壁際中程に土坑（ＳＫ１）を検出した。壁面に接して掘られており，平面半円形断面碗形を呈する。住居を埋めた土と特徴がやや異なることから，廃棄時に埋められるなど，住居本体の埋没と異なる埋没過程にあった可能性がある。なお，南壁際の中程に土坑を設ける例は，本遺跡の他の平面長方形の竪穴住居で散見される構造である。

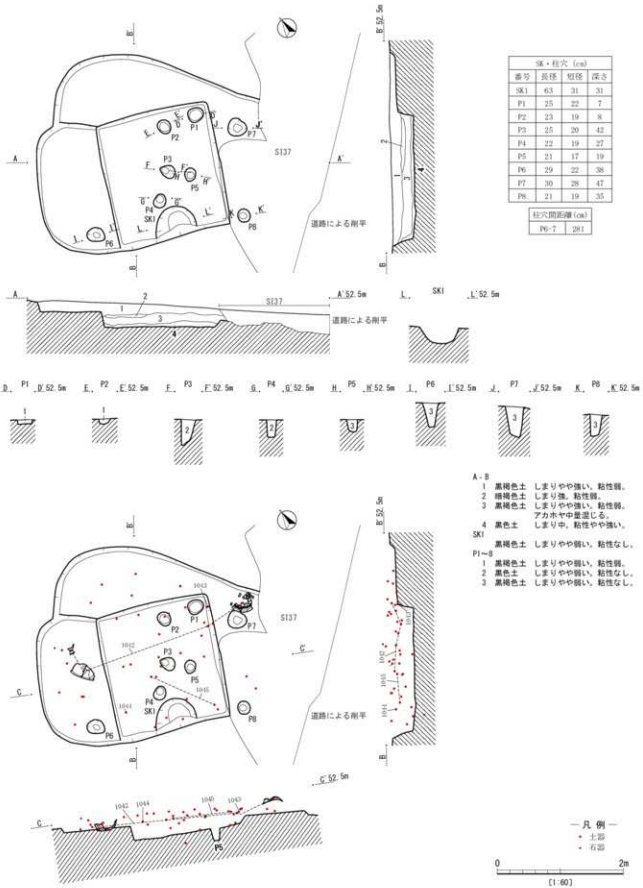
埋土は４層確認できた。貼床は特定されていないが，堆積状況から埋土４が想定される。残存条件の関係で詳細は不明だが，観察できた範囲では，埋土はおおむねレンズ状に堆積しており，土砂の流入方向は不明ながら，自然堆積で埋没したものと想定される。

遺物は，埋土中から散在して出土したが，上層からの出土が多い傾向にあった。ただし，1042 については，中央部方形掘り込みをまたいで，西側の張り出し部床面と東側張り出し部の埋土中からほぼ半割された状態で出土している（第 173 図下参照）。

1042 は，山ノ口式土器の甕である。口径 31cm，脚台端径９cm，器高 33cm，脚台高７cmで，胴部と脚部の中心軸がややずれており，やや大雑把な整形である。そのため，底部から口縁部まで砲弾のように曲線的な立ち上がりをする器形を基本とするようだが，部分的にひずんでいる。器壁は，底部付近がやや厚く，口縁部に向けて漸移的に薄くなっている。器面調整は，外面が口縁部付近まで縦位基調のハケナデを丁寧に施すが，内面は特に口縁部下周辺で指頭押圧の痕跡を残す。口縁部は，内面に鈍い稜を形成して斜め上方に屈曲する。断面形状は，直線的ではなくやや上反りする。口縁端部の凹線状の凹みは，ほぼ形骸化している。胴部の三角突帯もやや大雑把な貼付及び整形で，ヨコナデ調整の際に生じた混和剤の引き摺り痕も残している。突帯下部付近から口縁部までススが広く付着する。1043 は口径 16.5cmとなる小型の甕で，口縁部と胴部の径がほぼ同じとなる長胴形の器形が想定される。器壁が薄いため，手に取ると軽い。口縁部は断面三角形で短く，上面をわずかに凹ませ，端部を丸く仕上げる。口縁部の粘土を胴部上端にかぶせるように接合しているが，内面の接合痕を残しており，やや雑な整形である。器面は，外面のハケナデ調整が縦位に長く施されている。内面は丁寧なナデ調整である。突帯は貼付されていない。外面全体にススが付着している。1044 は口縁部が斜め上方に長く伸び，端部に凹線状の凹みが浅く巡る。色調は橙色を呈する。1045 は，口径が約 41cmに及ぶ大型甕の口縁部である。口縁部は短いが斜め上方に立ち上がる。器面調整は，内外ともに横ナデである。口縁端部は断面方形に整形され，凹線状の凹みは形骸化している。

竪穴住居跡 39 号（第 175～176 図 1046～1048）

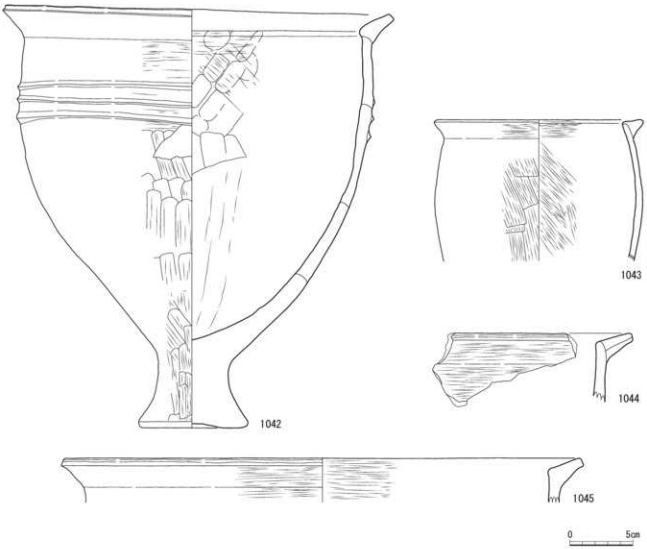
Ｌ－37 区のⅢｂ層上面で検出された。遺構全体が広く削平を受けているため残存状況は悪く，特に東側部分などは検出面がほぼ床面という状態だった。さらに，中世の掘立柱建物跡及び柱穴群にも撹乱を受けており，住居の形状が各所で破壊されていた。残存部で長軸約 3.5 m，短軸約３mの平面方形を基調とした住居である。なお，検出面からの深さは最も深い箇所でも 0.1 mである。北壁の東端，東壁の南端，南壁の西端の各１か所が，平面台形にわずかに突出するのが特徴的で，張り出し部とするには，面積もやや狭く床面との高低差も設けられていないため，用途などの想定が困難である。他方，住居の西北側一帯は，平面形がやや不整形ながら広く浅く一



SK・柱穴 (cm)			
番号	長径	短径	深さ
SK1	63	31	31
P1	25	22	7
P2	23	19	8
P3	25	20	42
P4	22	19	27
P5	21	17	19
P6	29	22	38
P7	30	28	47
P8	21	19	35

柱穴間距離 (cm)	
P6-7	281

第 173 図　弥生時代竪穴住居跡 38 号（1）



第174図　弥生時代竪穴住居跡38号（2）

段掘り下げられている。このような構造について，調査時の所見では，突出部のある一段高い東～南側一帯をベッド状遺構と解釈している。

土坑は検出されていないが，住居中央やや南寄りに検出された柱穴2本（P2・3）の間に，平面楕円形で断面レンズ状の浅い落ち込みが検出されている。本遺跡では，住居南側の床面に小ピットを伴う土坑の検出例が複数みられることを踏まえると，39号の場合も，形状の詳細は異なるが同様の用途等を備えた施設である可能性が想定される。

柱穴は，上記のとおり中世の柱穴群と住居に伴う柱穴との弁別が困難だったが，上記した2本の他に3本（P1・4・5）をこの住居に伴う柱穴と認定した。これら3本は，住居の主軸線状に位置することと，深さや断面形状がおおむね類似することから，主柱穴と想定される。P1に見える段掘りと主柱穴にはやや浅い印象のP3・4については，それぞれP1とP5の添柱或いは建て替えの可能性を想定したい。

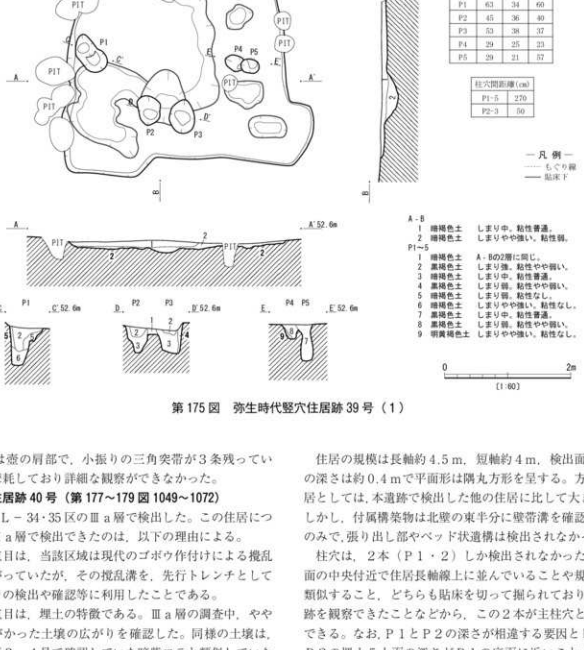
埋土は2層確認したが，貼床は確認できなかった。堆積過程も不明である。

遺物は，残存状況のわりには多く出土したが，小片が散在する出土状況であった。

なお，本住居から北東へ約10m離れた地点では竪穴住居跡37・38号が検出されており，埋土中の土器の特徴も類似することから，39号はこの2軒とほぼ同時期の住居跡と想定できそうである。

1046は，小型甕の口縁部と考えられる。口縁端部の厚みを増すような整形である。

1047は，山ノ口式土器の壺の口縁部で，口径は屈曲部で約22.5cmである。口縁端部を欠く。おおよそ丁寧な整形だが，口縁部下側の接合痕を残す。外面の色調は特徴的な濃茶褐色を呈するが，全面に及ぶか不明である。



第175図　弥生時代竪穴住居跡39号（1）

1048は壺の肩部で，小振りの三角突帯が3条残っている。摩耗しており詳細な観察ができなかった。

竪穴住居跡40号（第177～179図1049～1072）

K・L－34・35区のⅢa層で検出した。この住居についてⅢa層で検出できたのは，以下の理由による。

1点目は，当該区域は現代のゴボウ作付けによる攪乱が広がっていたが，その攪乱溝を，先行トレンチとしてプランの検出や確認等に利用したことである。

2点目は，埋土の特徴である。Ⅲa層の調査中，やや褐色がかった土壌の広がりを確認した。同様の土壌は，周溝墓3・4号で確認していた暗紫コラと類似していたことから，関係者で検討し，当該土壌の広がりが周溝墓である可能性を想定して一帯の調査を精査に切り替えて進めた。

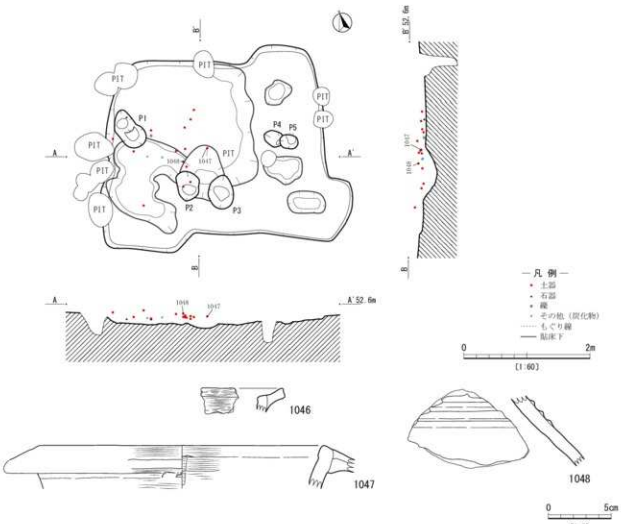
その結果，隅丸方形で環状になるプランを検出したが，プランにやや不明瞭な部分があったため，上記のゴボウ攪乱溝を先行トレンチに活用して土層断面で遺構の立ち上がりを調査したところ，土壌の潜り込みが周溝墓のようにはならず，厚く深く広がることが判明した。引き続き平面プランの検証とゴボウ耕作溝を利用した遺構の把握に努めた結果，住居跡であることを確認した。

住居の規模は長軸約4.5m，短軸約4m，検出面からの深さは約0.4mで平面形は隅丸方形を呈する。方形住居としては，本遺跡で検出した他の住居に比して大きい。しかし，付属構築物は北壁の東半分に壁帯溝を確認したのみで，張り出し部やベッド状遺構は検出されなかった。

柱穴は，2本（P1・2）しか検出されなかった。床面の中央付近で住居長軸線上に並んでいることや規模が類似すること，どちらも貼床を切って掘られており柱痕跡を観察できたことなどから，この2本が主柱穴と判断できる。なお，P1とP2の深さが相違する要因として，P2の埋土5上面の深さがP1の底面に近いことから，部材の上端を整えるために，P2を埋土5で埋め戻して柱穴の深さを調節した可能性が考えられる。

土坑は，南壁際の中程に1基（SK1）検出された。平面形は略五角形で断面は略逆台形を呈し，貼床を切って掘られている。土坑の底面や壁面に小ピットなどは確認されなかった。

床面はほぼ平坦に整えられていたが，貼床は，北壁際と西壁際の2か所では確認されなかった一方で，南側や西側などでは20cm近くまでその厚さが及ぶところもあるなど，貼床工法の特性を最大限生かして効率的に床面



第176図　弥生時代竪穴住居跡39号（2）

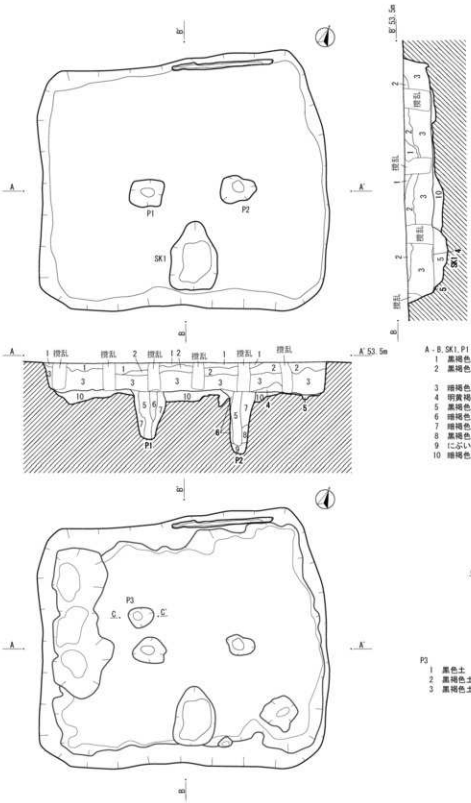
を構築していたことがわかる。黒色土とアカホヤ腐植土を混ぜた土を床材としていた。

貼床を剥いだところ，掘り込み面は本遺跡の住居の中では，かなり凹凸が著しかった。特に西壁際には，不整形ながら長く浅い落ち込みを検出した。また，Ｐ１の北隣でＰ３を検出した。２本の主柱穴よりは径並びに深さともに一回り小規模である。

埋土は４枚に分層できた。うち上記した貼床は埋土５である。埋土の観察はゴボウ撹乱溝のため困難だったが，おおむねレンズ状堆積を示していると認識できたことから，流入方向は不明ながらも自然堆積で埋没したものと想定される。これらの埋土のうち，冒頭で述べた周溝墓の埋土と類似すると認識した埋土は埋土２で，実際に暗紫コラを含んでいた。なお，埋土４は，色調が明黄褐色を呈し粘性が強いという，他の埋土と特徴が著しく異なっていた。堆積状況も床面近くで部分的に残っているという他と異なる堆積状況を示していたが，人為性を見出すには至らなかった。

遺物は，埋土１～３にかけて多数出土したが，埋土３の中位から上位に出土する傾向があり，床面直上の遺物は少なかった。その中にあって，小型甕または鉢形土器（1049）は住居のほぼ中央，主柱穴（Ｐ１）の左隣で床面直上から一括して出土した。また，鉢形土器（1050）は，住居の北半域中央辺りの埋土３下位から１ｍほど離れた半割状態で出土した（どちらも第178図下）。他にも，小片ながら鉢形土器と考えられる資料が本遺跡の住居のなかでは比較的多く出土している点が目を引く。

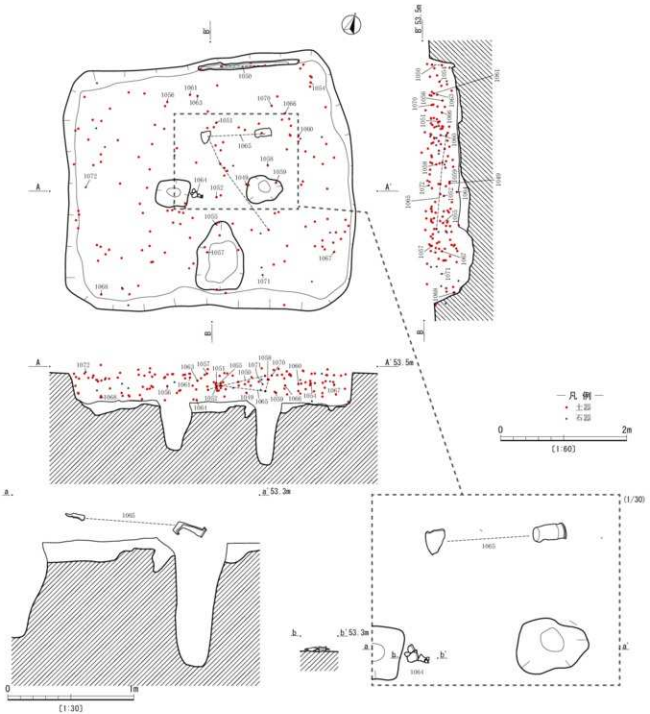
1049は，口径約12.5cm，脚台端径約５cm，器高約13cm，脚台高約4.5cmで，小型である点を除いて山ノ口Ⅱ式土器の甕の特徴を備える。底部から胴部にかけてはあまり張らず，わずかに外開きの角度で口縁部に至る細身の器形である。口縁部は，内面屈曲部に稜を形成しやや上向きの弧を描きつつ斜め上方に伸びる。口縁部外面は屈曲せず曲線的に整形される。調整は，内外面とも，口縁部周辺はヨコナデだが，突帯付近から下位は縦位のハケナデ（外面）とナデ（内面）である。口縁端部は断面方形



SK・柱穴 (cm)			
番号	長径	短径	深さ
SK1	109	73	65
P1	53	43	76
P2	56	41	99
P3	40	32	51

柱穴間距離 (cm)
P1-2 148

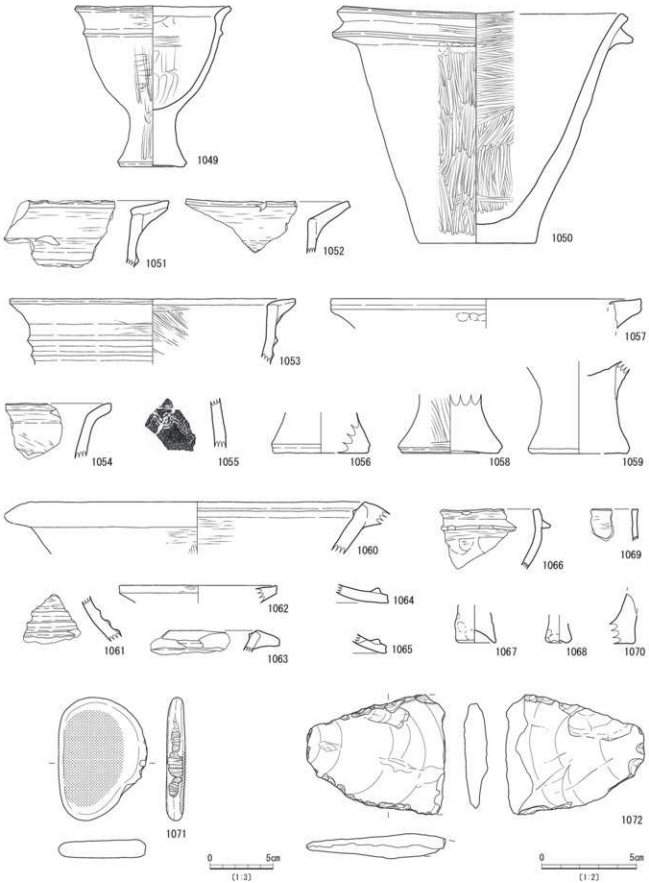
第 177 図　弥生時代竪穴住居跡 40 号（1）



第 178 図　弥生時代竪穴住居跡 40 号（2）

に整形され，凹線状の凹みはない。三角突帯は口縁部寄りに１条，細いが丁寧に整形される。突帯の頂部はやや下向きである。脚台は，高さこそ全形に比してやや高いが，33 号の 1009 などと違いバランスを崩していない。脚台端部には凹線状の凹みを１条明瞭に巡らせる。底面は上げ底状になっているが，全体の仕上げの割に粗い仕上げで，１方向のミガキ状の調整が簡素に施されるのみで粘土粒などを付着させたまま仕上げている。外面全体にススが付着する。

1050 は，口径 24cm，底径 9.5cm，器高 18.5cmの，現代の蘭鉢のような器形をした土器である。平板な平底から，やや開きながら直線的に口縁部に至る器形を呈する。器壁は胴部下端が最も厚く，口縁部にかけてやや薄くなるが，全体的に法量の割に厚手である。そのため重量がある。器面は，外面は縦位，内面は上半が横基調で下半が縦位の，ともに丁寧なミガキ調整で仕上げられる。口縁部周辺のみ横ナデである。端部のみわずかに外反する口縁部は，端部に凹線状の凹みを明瞭に施し，さらに口



第 179 図　弥生時代竪穴住居跡 40 号（3）

縁部下に大振りの三角突帯を１条巡らせる。この三角突帯の頂部にも細く凹線状の凹みを施す。破片で出土すれば二叉状口縁壺の口縁部と判断しそうな口縁形状である。重いが全体的に丁寧なつくりの土器であるが，口縁部下の三角突帯の下面には接合痕が残り，やや粗い仕上げとなる。外面には，ススの痕跡が看取される。

1051～1059は山ノ口式土器の甕と考えられる。1053は，口径約22.5cmで，口縁部は斜め上方に立ち上がり長く伸びる。また，口縁部外面は屈曲を残さずに曲線的に整形している。三角突帯は２条残っているが，小振りで口縁部寄りに貼付されている。1051も1053と類似した特徴を観察できる。1052は先の２点よりも口縁部が細長く整形されている。1054は上記３点と口縁部形状が異なる上に，胎土に雲母を含まず色調も淺黄橙色を呈しており，特徴的な甕である。1055は小片のため詳細は不明だが，形状から甕の胴部と想定した。外面に横位の細沈線が１条巡り，その下位にやや粗雑な櫛描波状文が見える。胎土や色調などは，在地の土器に類似する。1056は脚台である。径約８cmで，器面の剥落が著しい。ここまでの資料は，埋土３から出土した。

1057は口径約24.5cmで，胴部との接合面から剥離している。外面下端に指頭押圧の痕跡が見える。1058と1059は脚台である。1058は径約7.5cm，1059は接合面などを観察できるが，器面の剥落などが激しく詳細な観察ができなかった。脚台端径約８cm，脚台高約６cmである。これらは，埋土１から出土した。

1060～1063は壺と考えられる。1060は屈曲部での径が約26.5cmで，屈曲部内面に小振りの三角突帯を１条巡らせる。屈曲部も突帯状に軽く突出させる整形のため，この凸部と三角突帯の空間が幅広の凹線のようにも見える仕上げとなっている。埋土３から出土した。1062も小片のため詳細が不明だが，小型壺の口縁部と想定した。口径約12.5cm，口縁部外面は軽いミガキ調整，その他の面はヨコナデ調整が施されている。埋土２から出土した。1061は頸部から肩部にかけての小片で，３条残っている三角突帯は，いずれも頂部がやや丸味を帯びる。埋土３から出土した。1063は，1060と器形が類似するが，器壁はより薄いため，法量が1060より小さくなる可能性がある。埋土１から出土した。

1064・1065は小片だが，特徴から蓋と想定した。1064には，口縁部内面下端にススの痕跡が帯状に残る。

1066～1070は，鉢形土器と思われる。1066は，内弯する口縁部とその下位に貼付された，羽釜の羽のような１条の横位突帯が特徴である。また，口縁部は断面方形に整形し，丁寧なヨコナデで仕上げている。埋土２で出土した。1067・1068は，脚台と想定される。どちらも手捏ねで上げ底に整形している。1067には種子圧痕のような小穴がある。どちらも埋土３から出土した。1069の口縁端部は，明瞭にナデで平面を意識した整形をしている。1070は底部である。壺の底部の可能性もある。

1071は砥石である。粒子の均質な砂岩の板状礫を利用して，主に正面を砥面にしているが，裏面の縁辺部にも砥面が散見される。右側面に，リタッチャーのような筋状の痕跡がある。表面の色調が赤変しており，被熱した可能性がある。長さ10cm，幅７cm，厚さ1.5cm，重さ158ｇである。

1072はホルンフェルス製の横刃形石器の破片である。表面が風化しており，詳細な観察ができなかった。長さ６cm，幅7.5cm，厚さ1.5cm，重さ63.5ｇである。

竪穴住居跡41号（第180～182図1073～1077）

Ｃ・Ｄ－12区のⅣ層上面で検出された。後世の削平が広く及んでおり，住居北東部などは検出面が床面という残存状況だった。

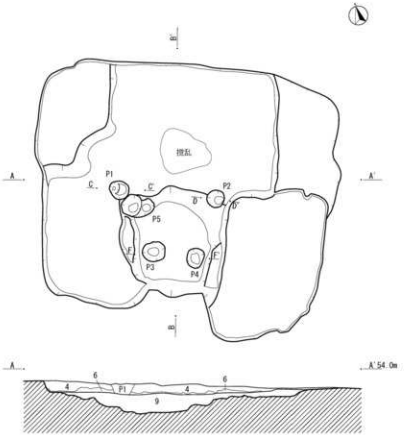
長軸約５m，短軸約４m，検出面からの深さ0.2～0.3mの，南壁が「凹」字状に凹んだやや特異な平面形状を呈する住居である。この凹んだ部分に続くように，床面に平面略方形断面レンズ状の落ち込みが検出され，さらにこの落ち込みの四方にあたる付近に柱穴６本が集中して検出された。付属構築物としては，張り出し部は確認されなかったが，東壁と西北角にはベッド状遺構が設けられている。そのうち，東側のベッド状遺構は北側と南側で５cm程度の高低差をつけている。北西角と東壁北側のベッド状遺構の高さはほぼ同じで，両者と床面の高低差は10cm程度である。壁帯溝は確認されなかった。

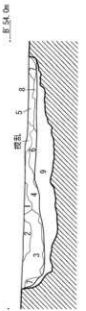
上記した６本の柱穴は，いずれも貼床を切って掘られているが，Ｐ１を除き比較的深く掘りこまれており，住居の構造に関わる柱穴と考えられる。特にＰ２とＰ５の２本は，住居の主軸線上に近く規模も類似することから，この住居の主柱穴と考えられる。また，Ｐ３とＰ４については，両者の規模が類似していること，住居との位置関係が冒頭で説明した南壁の凹み部分と対応するようにみえることから，例えば住居の入口など，相互に関連してひとつの施設となっていた可能性がある。

埋土は部分的な堆積土を含めて10層に分層できた。そのうち貼床は埋土10である。堆積状況は，おおむね北側から南側に向けて傾斜して堆積していることから，北側からの土砂の流入による自然堆積と想定される。ただし，その場合，住居の平面形状と柱穴配置から想定した構造（南側に入口が開口）と単純には整合しないこととなる。

また，この住居の貼床も，厚い部分で約30cmと分厚く貼られていた。断面の調査から，先述した南壁際の落ち込みは貼床を切って掘られたのではなく，落ち込んだ状態で床の完成となるよう施工されていたことも判明した。

貼床を剥いだところ，掘り込み面は住居中央部が南北方向に走る溝状に深くなっており，そこから東西壁面に

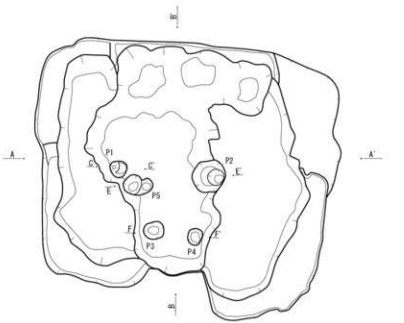


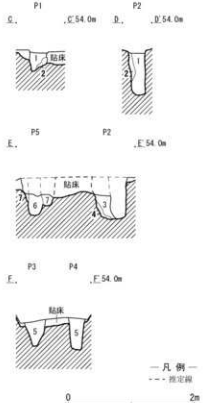


柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	32	28	30
P2	30	27	66
P3	37	30	39
P4	31	26	50
P5	31	20	34

柱穴間距離（cm）	
P1-2	170
P2-5	114
P2-4	105
P3-4	67
P3-5	68

A-B
1 黒褐色土　しまりやや弱い。粘性なし。
2 黒褐色土　しまり弱。粘性なし。
3 黒褐色土　しまり弱。粘性弱。
4 黒褐色土　しまりやや弱い。粘性弱。
5 極暗褐色土　しまりやや弱い。粘性なし。
6 黒褐色土　しまりやや弱い。粘性なし。
7 黒褐色土　しまり弱。粘性なし。
8 黒褐色土　しまりやや弱い。粘性弱。
9 黒褐色土　貼床。しまり中。粘性弱。





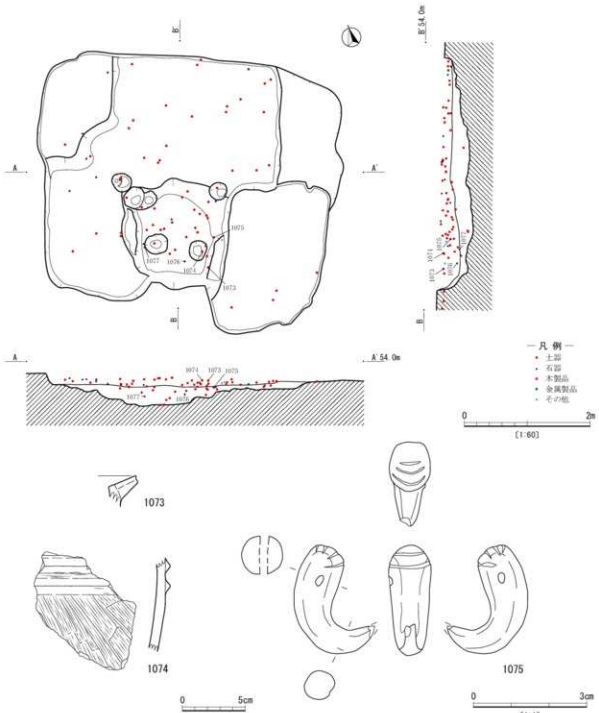
P1～5
1 黒色土　しまりやや弱い。粘性中。
2 黒褐色土　しまり中。粘性中。
3 暗褐色土　しまりやや弱い。粘性なし。
4 褐色土　しまり弱。粘性中。
5 暗褐色土　しまり中。粘性弱。
6 黒褐色土　しまりなし。粘性なし。
7 褐色土　しまりやや弱い。粘性弱。

第 180 図　弥生時代竪穴住居跡 41 号（1）

向けて階段状に浅くなっていく形状だった。この段掘りはベッド状遺構があった場所にも及んでいることから，住居構築に際しては，掘削段階では完成時を見越した作業は行わず，床面はすべて貼床によって仕上げるという工法を採っていたことがわかる。

遺物は，床面近くから埋土上層まで集中域などなく出土する状況で，一括遺物などは見られなかったが，土製勾玉（第181図1075）が出土している。

1073・1074は，埋土1～2で出土した山ノ口式土器の甕と考えられる。1073は，短い口縁部だが斜め上方に立ち上がる。口縁端部の凹線状の凹みは細く浅いが1条施される。1074は外面の縦位基調のハケナデ調整が目を引く。2条残る三角突帯は，器壁と比較して大きい。1075は，丁字頭の土製勾玉である。南壁中程に設けられた落ち込みの床面近くから中央部で折れた状態で出土した。尾部の先端をわずかに欠損するが，長さ約2.9cm，



第181図　弥生時代竪穴住居跡41号（2）

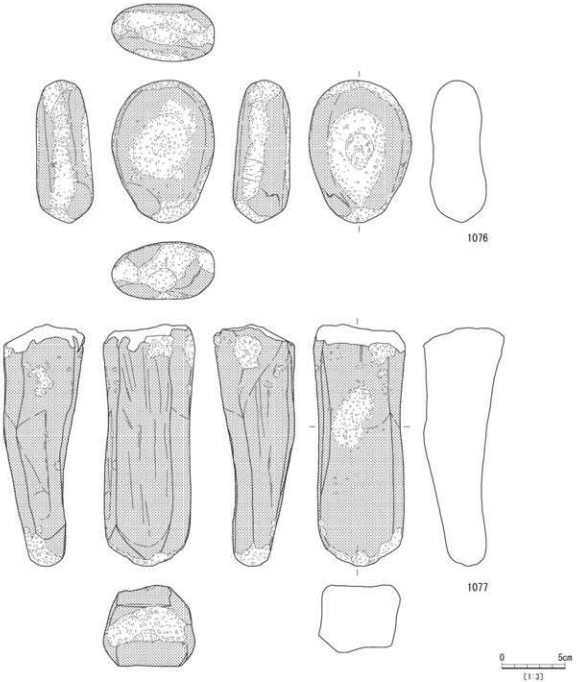
幅約2.2cm，厚さ約1.1cmでほぼ完形である。穿孔部の稜は鋭角的で摩耗などの痕跡は観察されない。頭部は丸く仕上げ，尾部に向けて急速に細くなる。平坦面は観察されず断面はほぼ丸いが，尾部はわずかに左面に寄る。小動物によると想像される掻き傷がある。

1076は，砂岩製の磨敲石である。側縁の全周，正面と裏面に敲打痕が観察されるが，上端並びに下端に敲打痕が密集する面を複数確認できることから，この2か所が主な使用面と考えられる。また，両側面には敲打痕の上から条線が入っている。各面の間は磨面となっており，敲打部との先後関係は場所によってまちまちである。長さ11cm，幅8cm，厚さ4.5cm，重さ564gである。

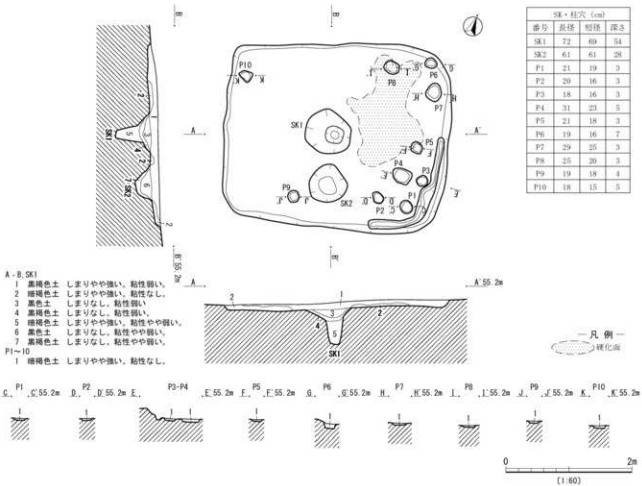
1077は，砥石である。粒子の均質な砂岩の棒状礫を利用して各面に砥面を設けているほか，下端・上端及び上端周辺の側面部と裏面中央には敲打痕を観察できる。各砥面は長軸方向に擦痕が観察されるほか，各面の長軸線付近が溝状に浅く長く凹んでいる。長さ19cm，幅7cm，厚さ6.5cm，重さ1120gである。

竪穴住居跡42号（第183・184図1078～1083）

H－24・25区のⅢb層で検出された。全体的に後世



第182図　弥生時代竪穴住居跡41号（3）



第183図　弥生時代竪穴住居跡42号（1）

の削平を受けており，残存状況はよくなかった。

長軸約3.5m，短軸約3m，検出面からの深さ約0.1mで，本遺跡の住居のなかでは小型となる平面隅丸長方形の住居である。張り出し部とベッド状遺構の有無については残存状況の問題もあって不明だが，南東角に壁帯溝を検出した。また，貼床は確認されなかったが，床面北西区域に硬化面が広がっているのが確認された。

柱穴は，主に住居東側で10本確認したが，いずれも極めて浅く径も不揃いであり，構造に関わるものとは考えられない。竪穴住居跡31号などで確認された壁際に柱穴が巡る状況が想起されるが，より不規則で主柱穴を伴わない点が大きく異なる。

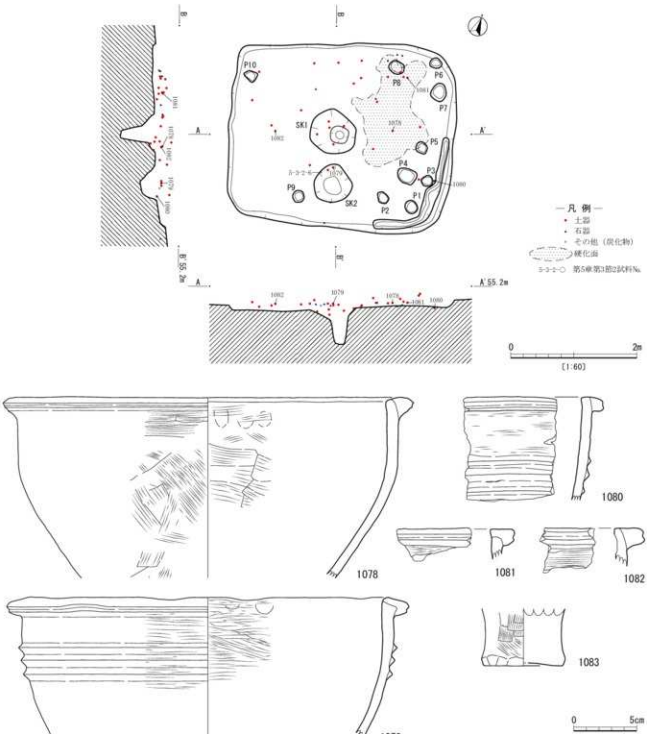
土坑は，住居中央に土坑1（ＳＫ１）と南隣に土坑2（ＳＫ２）を検出した。どちらも平面略円形で，断面は漏斗状を呈し深さもほぼ同じだが，土坑1は床面中央に平面略方形のピット（土坑床面からの深さ約40cm）を伴う。ピットに柱痕跡などは観察されなかった。

埋土は，主に2層確認されたが，残存状況の問題から埋没過程を想定するには至らなかった。

また，土坑の埋土の特徴は2基とも似通っている一方，住居埋土とは異なっていることから，一旦土坑が埋まった後に住居が埋まったものと想定される。埋土観察用ベルト部分の土でフローテーションを行い，炭化材を数点抽出している。

遺物は，遺構の残存状況を踏まえると多く出土した。また，比較的大形の破片も見られた。チップ類はみられなかった。

1078～1083は入来Ⅱ式土器の甕と考えられる。1078は口径約32.5cmで，底部から直線的に開き，胴部最大径部分で角度を直立気味にやや鋭角に変えるという，想定される器高に比して開口部の大きい変則的な器形を呈する。丸味のある断面となる口縁部は，短いがほぼ水平に屈曲する。器壁はほぼ一定の厚みで整えられており，器面調整は内外面とも横基調のナデである。口縁端部には凹線状の凹みが巡るが，平坦面を形成せずに巡らせているためか，凹みは先端よりやや下位に施される。さらに，部分的に二重になっている。胴部に突帯や細沈線はみられない。外面に広くススが付着するほか，内面下位にはコゲも残る。住居中央東寄りの床面近くから出土した。1079は口径約32cmで器形も1078に類似するが，口縁部

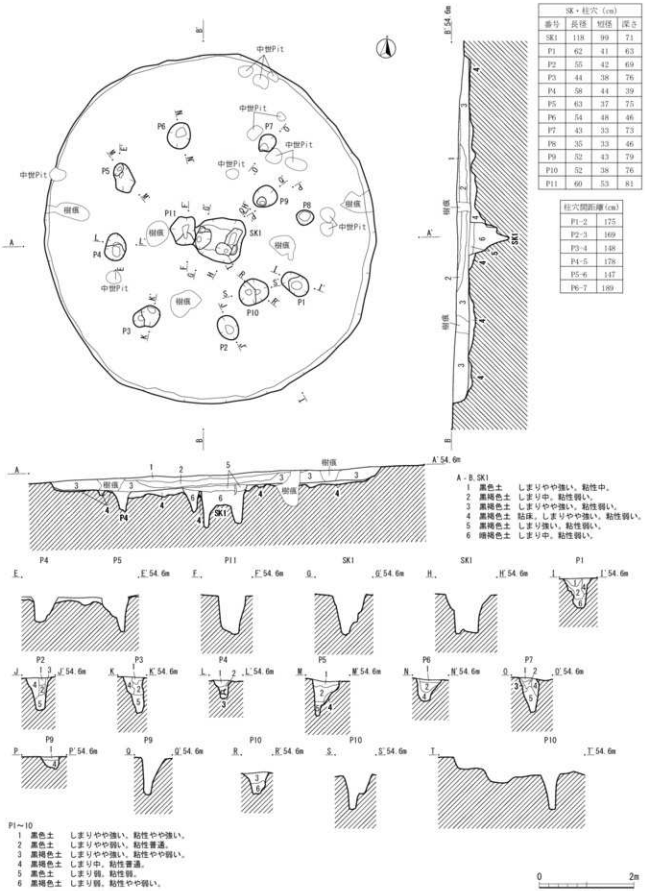


第 184 図　弥生時代竪穴住居跡 42 号（2）

の整形や突帯の貼付などの点が異なる。口縁部の整形はやや雑だが，器面調整は内外面とも横基調の丁寧なナデが施される。口縁部は断面略台形で短く水平に屈曲する。口縁端部の凹線状の凹みは明瞭に１条巡る。３条貼付されている三角突帯は，頂部をやや上向きに，丁寧に整形されている。1080～1082 も上記２点と類似した特徴である。1080 の三角突帯は小振りで，胴部寄りに貼付される。1083 は径６cmの脚台であるが，端部が広がらない分銅のような形状である。端部は面取り整形のみである。

竪穴住居跡 43 号（第 185～188 図 1084～1101）

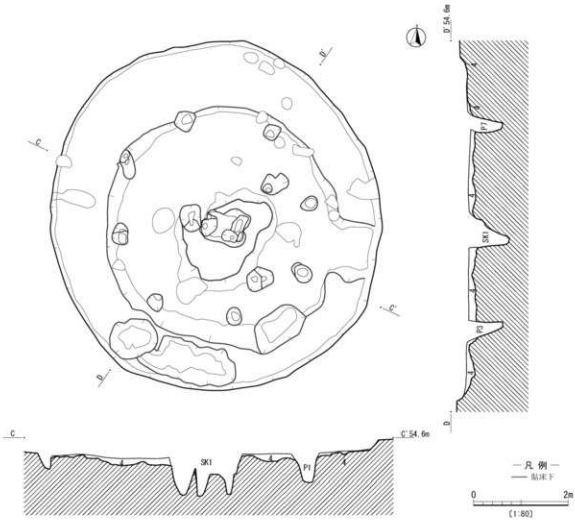
F・G－24・25 区のⅢｂ層で検出された。径約 7.5 m，



SK・柱穴 (cm)			
番号	長径	短径	深さ
SK1	118	99	71
P1	62	41	63
P2	55	42	69
P3	44	38	76
P4	58	44	39
P5	63	37	75
P6	54	48	46
P7	43	33	73
P8	35	33	46
P9	52	43	79
P10	52	38	76
P11	60	53	81

柱穴間距離(cm)
P1-2	175
P2-3	169
P3-4	148
P4-5	176
P5-6	147
P6-7	189

第 185 図　弥生時代竪穴住居跡 43 号（1）



第186図　弥生時代竪穴住居跡43号（2）

検出面からの深さ約0.4ｍの円形住居である。中世の柱穴や樹痕により部分的に破壊されており，特に柱穴の判断に苦慮した。

張り出し部，ベッド状遺構や壁帯溝などの付属構築物は確認されなかった。

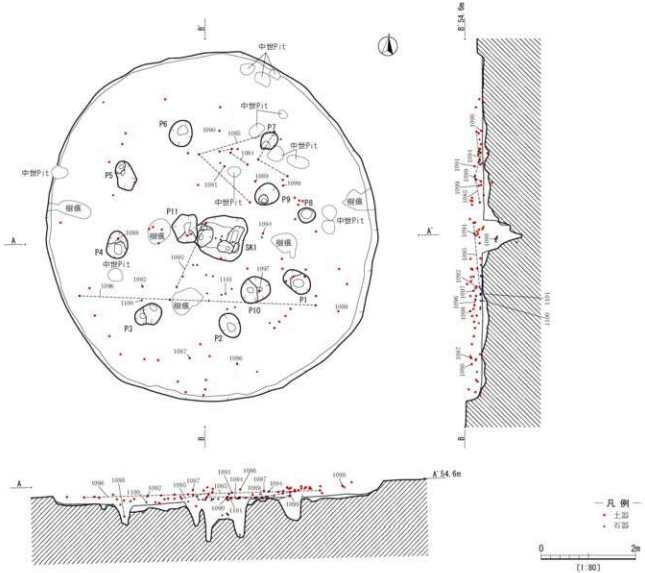
床面中央部に，土坑（ＳＫ１）が１基検出された。貼り床を切って掘られており，平面隅丸方形，断面逆台形を呈する。底面には東西壁面際に小ピットを伴う（西端１本，東側２本（掘り直しか））。

柱穴は，11本検出した。上記土坑西隣に検出された１本（Ｐ11）を除き，環状におおむね等間隔で検出されたが，Ｐ９とＰ10の２本は貼床を剥いでから検出されており，土坑とともに最終使用段階における柱穴は８本（Ｐ１～Ｐ８）で，これらが主柱穴と考えられる。８本は，径の平均が約46cm（やや細いＰ７とＰ８を除くと49cm），深さの平均が61cmで，柱痕跡は観察されないが複数の埋土が確認されていることから，抜き取られた可能性がある。Ｐ９とＰ10については，貼床を剥いで検出されていることから，建て替え等に伴い埋め戻されたものと想定される。ただ，他の構造物や床面に，２本の柱穴と対応できそうな建て替えの痕跡は確認できなかった。

貼床は，主柱穴の内側を中心に厚さ10cm程度とやや薄く貼られていた。主柱穴の外側は，貼られていないか，部分的にごく薄く貼られている程度だった。黒褐色土でアカホヤと池田降下軽石が不均等に混じる。貼床を剥いだ掘削面は全面に細かい凹凸がみられたが，壁際から１～1.2ｍほど内側までが浅く，その付近から内側が１段深くなる傾向が確認できた。特に外側の浅い部分は東端が幅1.2ｍにわたり途切れて中心部と同じ深さとなっていた。この他，南側に浅い掘り込みを３か所確認した。

埋土は，主に５層確認できた。うち貼床は埋土４である。また，埋土２には，暗紫コラの可能性がある斜長石の粒子が少量ながら含まれている。全体的にレンズ状の堆積状況を示していることから，土砂の流入方向は不明であるものの，自然堆積で埋没したものと想定される。

規模，柱穴や土坑などを含めた構造については竪穴住



第 187 図　弥生時代竪穴住居跡 43 号（3）

居跡 21 号や 33 号，45 号など本遺跡の他の円形大型住居と類似する。

遺物の出土状況は，規模のわりに少なかった。しかし，土坑（ＳＫ１）周辺から磨製石鏃（1101）及びチップ類が出土したほか，甕（1084）がＰ７とＰ９の間付近の床面でまとまって出土し，主柱穴Ｐ４埋土中から甕底部（1088）が出土するなど，時期比定や用途解釈などの参考となるような出土状況には恵まれた。

1084～1092 は，甕と考えられる。1084 は入来Ⅱ式土器と考えられ，口径約 24cm で，胴部から口縁部まで直立気味に立ち上がり胴部は丸みをもたない，細身の器形を呈する。器壁は比較的厚いがほぼ一定である。器面調整は内外面とも丁寧に施され，外面はハケナデがほとんど消されている。口縁部は断面台形で短いが水平に屈曲し，上面も平坦に整形される。口縁端部には凹線状の凹みが浅く巡るが，凹みを施したあとからさらに横ナデを加えている可能性がある。三角突帯はやや小振りで，口縁部寄りに２条，軽く蛇行しながら貼付される。1085 は 1084 とほぼ同じ場所で 1084 よりもやや広い範囲で出土した。口径約 18cm の比較的小型の甕で，器壁は比較的薄く胴部が丸みをもたない長胴形の器形である。器面調整は口縁部こそ丁寧な横ナデだが，口縁部より下位は，内外面とも斜位から縦位の長いハケナデ調整を施している。口縁部は，内面に稜を形成して水平に屈曲させ，上面をほぼ平坦に仕上げるが，断面は舌状で端部を丸く収める。胴部には三角突帯や細沈線は施されない。外面全体に広くススが付着している。1086 は小片のため詳細不明だが，いわゆる玉縁口縁の甕である可能性がある。1087 は口縁部の整形がやや粗いが，屈曲部内面は明確な稜を形成する。1088～1092 は脚台である。1088 は主柱

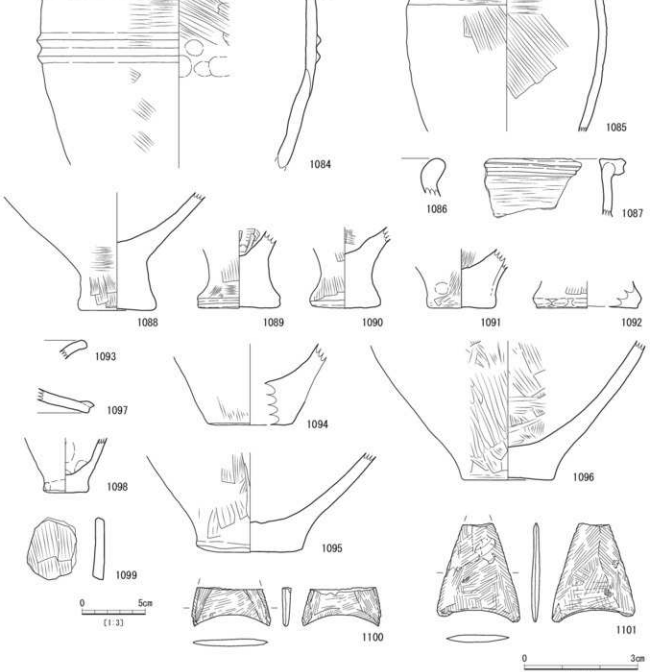
穴（P４）埋土中から出土した。脚台端径約６cm，脚台高は約５.5cmで，端部は開かず凹線状の凹みなどもない。接地面があまり擦れていない。1089～1092は埋土２から出土している。

1093～1096は，壺と考えられる。1093は小片で詳細が不明だが，外面に粗いハケナデが施される。1094は，底面の器壁の厚さが目を引く。底径約６.5cm，底面厚約３.5cmである。1095は，いわゆる「丸平底」状の底部である。外面は縦位の粗いハケナデに軽いミガキ調整が重なる。底径約８.5cmである。1096は，外面の縦基調のミガキ調整が目を引く。底径約７cmである。1095・1096は，外面の色調が特徴的な濃茶褐色を呈する。

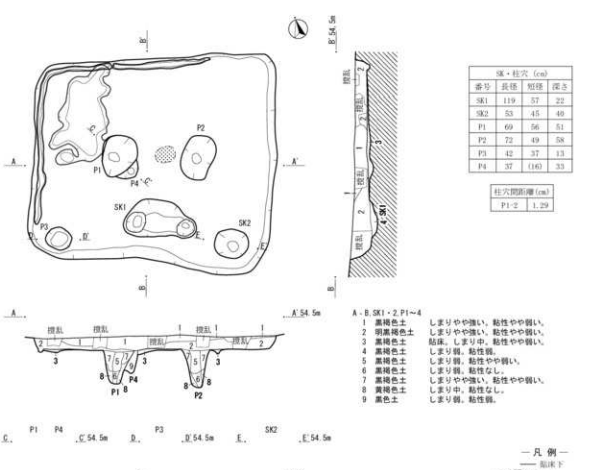
1097は蓋と考えられる。口縁端部の整形が独特である。

1098は鉢の底部と考えられる。器内面と底部外面は指オサエ，胴部外面は剥落しているが縦位のハケナデ調整を観察できる。底径約３.5cmである。

1099は，円盤形土製品である。甕の胴部を利用してい



第188図　弥生時代竪穴住居跡43号（４）



第189図　弥生時代竪穴住居跡44号（1）

ると考えられる。

1100・1101は，どちらも基部が浅く内弯する頁岩製磨製石鏃である。側辺を鋭利に研ぎ出している。欠損範囲に違いがあるものの，どちらも横断方向に割れて先端部を欠損している。

竪穴住居跡44号（第189・190図1102～1110）

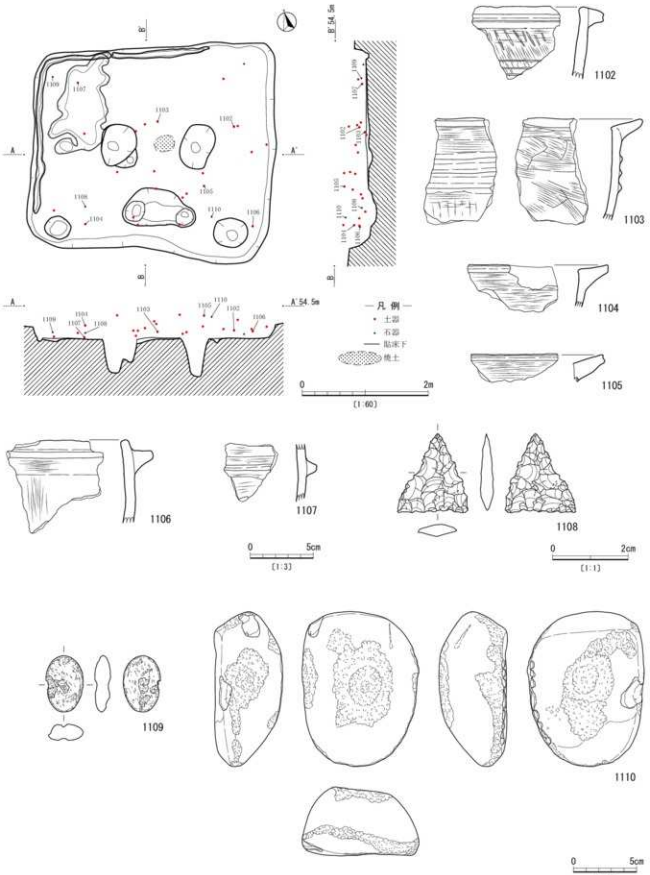
D－24区のⅢa・Ⅲb層で検出された。長軸約4m，短軸約3.5m，検出面からの深さ約0.2mである，平面長方形の住居である。張り出し部は確認されなかったが，後世の削平により消失した可能性もある。ベッド状遺構は設けられていないようである。壁帯溝は，西壁と北壁に沿って検出された。貼床を切って掘られている。

柱穴は，住居中央付近に3本（P1・2・4）と南西角に1本（P3）検出された。前者3本のうち2本（P1・2）が，住居の長軸線上に位置することと規模が類似することから，主柱穴と考えられる。また，この2本からはそれぞれ径15cmほどの円形プランも検出され，断面観察（黒色土中にアカホヤブロックが少量混じる）から柱の抜取跡と想定できる。P4については，切っているP1と深さに違いがあることから，建て替えではなく掘り直しによるものと想定される。なお，床面に比して，主柱穴の規模がやや大きい印象を持つ。

土坑は，南側の中程で土坑1（SK1）と南東角で土坑2（SK2）を検出した。土坑1については，平面形が楕円形（長軸が住居の長軸と一致）で断面は浅いレンズ状を呈し，床面両端に小ピットを伴う。16号など本遺跡の平面長方形の住居に散見されている構造である。

また，44号では床面中央部で，掘り込みまでは確認されなかったものの，焼土範囲を検出した。

埋土は3層確認した。そのうち，貼床は埋土3である。貼床は比較的薄いが，住居の北西，北東，南西，南東隅側がやや厚く貼られており，意図的に中央部を高く掘り残していることが想定される。貼床を剥いだ掘削面は，使用面と同様に四隅が深い傾向があるものの，総じてほ



第 190 図　弥生時代竪穴住居跡 44 号（2）

ぼ平坦だったが，北西隅には不定形の浅い掘り込みが確認された。貼床で埋められているため，掘削に伴うものと想定される。全体として，埋土はレンズ状に堆積しており，流入方向は不明だが自然堆積により埋没したものと想定される。

遺物は，埋土中に散在する状況であり，一括遺物などは出土しなかった。また，炭化材なども出土しなかった。

1102～1107は，甕と考えられる。すべて埋土1から出土した。1102は，入来Ⅱ式土器の甕と考えられる。胴部に3条の横位細沈線が施文されているほか，口縁部下に斜位の短沈線を連続して施しているのが確認される。ただ，後者の短沈線は，長さや間隔がやや不揃いである。両者の工具は異なり，横位細沈線が細く鋭い。1103～1105は，山ノ口式土器の甕と考えられる。口縁部が斜め上方に伸びるほか，口縁部外面は屈曲させず曲線的に整形している。1106は，やや内弯する口縁部のやや下に大振りの突帯が貼付される。比較的薄い胴部の器壁に対して，突帯は厚い。胴部外面は縦位のナデ調整が施される。1107は，胴部片である。三角突帯は断面台形に整形されている。

1108は，緻密安山岩製の打製石鏃である。左側辺がやや歪だが，欠損ではない。長さ2.5cm，幅1.8cm，厚さ0.3cm，重さ0.9gである。

1109は，軽石製品である。全面を磨って整形しているが，正面右側は欠損している可能性がある。正面中央に1か所，裏面に2か所，浅い凹みを形成している。長さ4.4cm，幅2.9cm，厚さ1.3cm，重さ6.0gである。

1110は，縦横断面が略半球状を呈する砂岩製の敲石である。正面と裏面の中央が顕著に凹んで敲打痕も潰れている。また，左側面も浅く凹む箇所が1か所あるほか，両側縁と下端も敲打に利用しているが，部分的に条線が刻まれている範囲があり，敲打以外の作業にも使われていたことが想定される。敲打面を含めて色調が赤変しており，被熱した可能性がある。

竪穴住居跡45号（第191～194図1111～1134）

D－23・24区のⅢb層で検出された。焼失家屋と考えられる。周辺は40号と同様に広く後世の削平を受けており，特に現代のゴボウ耕作による攪乱が著しい区域であったが，幸い，攪乱溝は床面までは達していなかった。そこで，攪乱溝を先行トレンチに転用して調査を行った。

長径約7m，短径約6m，検出面からの深さ約0.2mの，南北方向に長軸をとる平面楕円形の住居である。幅約10cm，深さ約3cmの壁帯溝は，南壁付近を除き，断続的ながらも貼床を切って壁際を巡っている。張り出し部の存在は不明だが，削平された可能性もある。

柱穴は14本検出した。うち4本（P 10～13）は床面中央の土坑（SK1）の底面で検出し，1本（P 14）は貼床を剥いだ時点で検出している。残りの9本（P 1～P 9）は，中央土坑と壁面の中間距離のあたりをほぼ等間隔で環状に巡るように検出した。いずれも貼床を切って掘られており，平面形はばらつきがあるものの，長径で60cm前後，深さが約90cmと60cmにまとまることと，上記した住居との位置関係から，これら9本が主柱穴と考えられる。ほとんどの柱穴で柱痕跡が観察された。また，P 6とP 7が切り合うこと，他の主柱穴の断面が漏斗状を呈することから，柱の建て替えが行われた可能性が想定される。

中央部の土坑（SK1）は，平面形が不整楕円形で断面は盤状を呈し，貼床を切って掘られている。土坑の床面で，上記したように柱穴を4本検出した。柱穴は土坑の長軸側両端に2本ずつ偏在していたが，埋土の特徴はP 10・11がにぶい黄褐色，P 12・13が暗褐色とわかれており，2本ずつの組み合わせだったことがわかる。両者の先後関係については，住居埋土等の特徴（黒褐色でアカホヤが少ない）との比較から，前者（P 10・11）が古く後者（P 12・13）が新しいとする調査時の所見がある。また，このことは，主柱穴で想定された建て替えの可能性とも整合する。

ただし，このような構造を持つ土坑は，本遺跡では長方形プランの住居（位置は南側の壁際）に多くみられるもので，円形プランの住居に存在する点が珍しい。

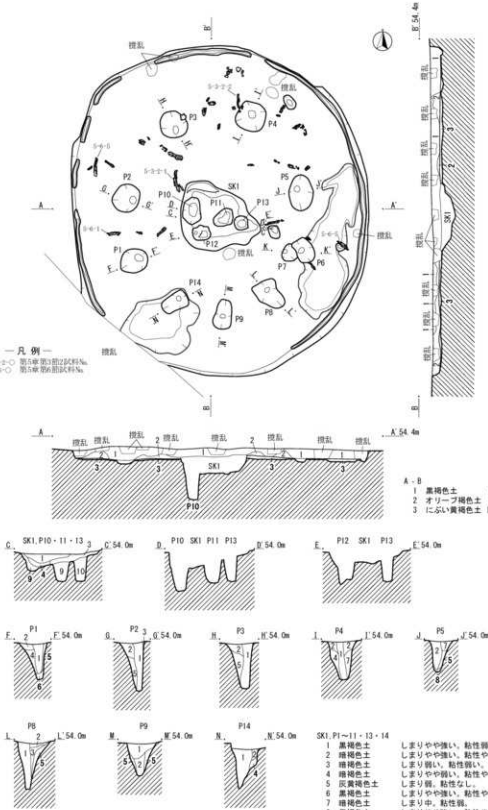
また，床面直上で炭化木が28点出土している。最大の材で幅が10cmある。出土した炭化木は，不明瞭ながら，中央土坑に向かって放射状に分布する一群とそれらにほぼ直行する一群に分けられたことから，屋根材と考えられる。なお，炭化木のうち，加工痕が確認されたものについては，現場で応急の保存処理を行い取り上げた。さらに，それらのうち2点については，年代測定と樹種同定も行った。その他の炭化木は，状態が悪かったため記録を取って廃棄した。

埋土は3層に分層できたが，ほとんどは埋土1で，貼床は埋土3である。貼床直上で部分的に確認した埋土2は炭化物を大量に含んでいた。埋土3は全体的に薄く，掘削時に生じた凹面のみ埋めているような印象である。堆積状況からは，埋没過程を想定するには至らなかった。

貼床を剥いだところ，南西壁際と東壁際で不定形の落ち込みと柱穴1本（P 14）を検出したが，それ以外には目立つ凹凸はみられず，掘削面はおおむね平坦だった。

遺物は，ほとんどが埋土1で出土している。

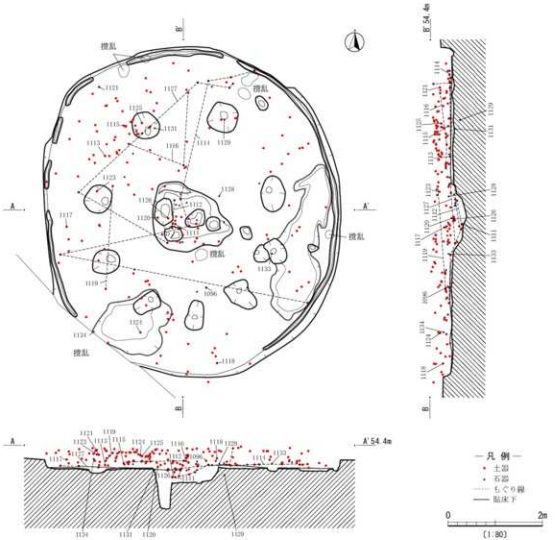
1111～1123は，入来Ⅱ式土器の甕と考えられる。細かい差違はあるが，総じて口縁部が短く水平に屈曲し，端部には凹線状の凹みを明瞭に施す。口縁部の断面形状は，おおむね方形から台形である。1111は，中央部の土坑埋土中で出土した。胴部の器壁に対して口縁部の厚みが目立つが，口縁端部には凹線状の凹みが明瞭に施され



SK・柱穴 (cm)			
番号	長径	短径	深さ
SK1	170	129	72
P1	62	52	75
P2	57	53	102
P3	61	56	95
P4	61	60	80
P5	76	52	64
P6	53	37	65
P7	37	33	59
P8	69	41	97
P9	63	34	67
P10	57	38	36
P11	47	34	58
P12	37	31	61
P13	33	30	53
P14	58	34	84

柱穴間距離(cm)	
P1-2	129
P2-3	176
P3-4	165
P4-5	188
P5-6	129
P6-8	117
P8-9	111
P9-14	106
P14-1	122
P10-13	107

第 191 図　弥生時代竪穴住居跡 45 号（1）



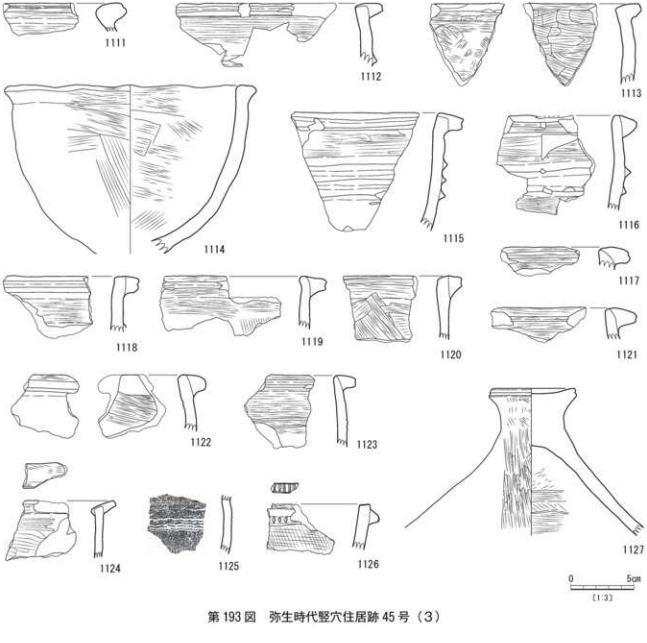
第 192 図　弥生時代竪穴住居跡 45 号（2）

る。1112 に貼付されている三角突帯はかなり小振りである。同じく中央部の土坑埋土から出土した。1113 は，本遺跡で散見される，口径 20cm未満の小型の甕に属する可能性がある。1114 は，床面全体に散らばったような状態で出土した。口径約 20cmで，胴部は丸く張り，口縁部はごく短い。外面は縦基調のハケナデ調整，内面は斜位のハケナデ調整を明瞭に観察できるが，成形時の凹凸を消し切れておらず，やや歪な器形である。口縁部も，上面を中心に横ナデをしているが成形時の凹凸が残る上に，下端の接合も雑である。胴部には三角突帯や細沈線は見られない。外面には広くススが付着している。1115 の三角突帯は明瞭で，整形も丁寧である。1116 の三角突帯はさらに大きいが，貼付がやや粗い。1119 と 1120 は，胴部外面のハケ目調整が縦位を基調とした方向で施される。1120 は口縁部も特に短い。1121～1123 は，屈曲部に向けてやや内傾する器形を呈する。口縁部は長さが異なるものの，下垂傾向である。1124 は，ほぼ直立する胴部に口縁部を上から貼り付けている。器面は内外ともに丁寧なナデで仕上げられ，胎土に雲母を含まず，色調も灰褐色系統を呈する。1125 は，櫛描波状文を施文する甕の胴部片と想定している。

1126 は，鉢の口縁部と考えられる。ほぼ直立する口縁部のやや下位に断面台形の突帯を 1 条巡らせている。外面は斜位のハケナデ調整を施したあとに横ナデを加えている。突帯端部と口唇部に連続刻目を施文している。

1127 は蓋である。つまみ部の径は 7 cm，端部には細い凹線状の凹みが巡る。外面を縦位のミガキ調整で整形している。

1128・1129 は頁岩製の磨製石鏃である。1128 は床面直上で出土した。表面が風化しているため詳細は不明だが，研磨作業に入る前段階の資料である可能性がある。大きな剥片だが，厚みや想定される現状以降の工程を踏



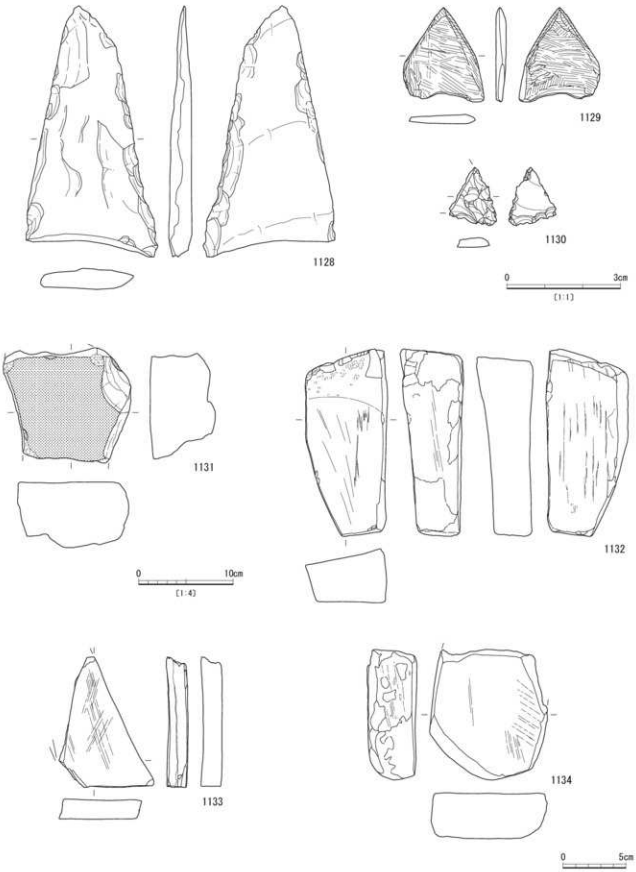
第193図　弥生時代竪穴住居跡45号（3）

まえると，石剣などからの転用は考え難い。長さ6.5cm，幅3.5cm，厚さ0.6cm，重さ13ｇである。1129は，主柱穴（Ｐ４）の埋土中から出土した。凹基式でやや身幅の広い形状である。両側辺を鋭利に研ぎ出している。長さ2.5cm，幅２cm，厚さ0.3cm，重さ1.7ｇである。

1130は，チャート製の打製石鏃である。裏面に主要剥離面を広く残す。

1131は，石皿である。床面直上で出土した。粒子の揃った砂岩を用いている。正面に残る使用面は軽く光沢を帯びる。また，縦方向に浅く溝状に凹む。

1132～1134は，砥石である。1132は埋土２で出土した。完形品で，粒子の極めて細かい砂岩を用いており，正面と裏面の他，右側面でも砥面を確認できる。各面とも長軸方向の長く鋭い擦痕を観察できるほか，裏面は中央部に長軸方向の浅い溝状の凹みも観察される。長さ14.7cm，幅6.5cm，厚さ5.0cm，重さ616ｇである。1133は埋土２から出土した。左側を広く欠損する。頁岩でも粒子の細かい石材を用いており，正面と右側面に砥面を形成する。正面の砥面には，右側縁に左破断面に向かう段差が断続して観察されることから，刃部の長い刃物を研ぐのに使用していたと考えられる。長さ10.3cm，現状で幅7.5cm，厚さ1.8cm，重さ141ｇである。1134は埋土１から出土した。粒子の細かい砂岩を用いており，正面の他，左側面にも砥面を観察できる。左下側面や裏面にも磨面が看取される。上端と右側面は破断しているが稜がやや潰れていることから，破損後も使用していた可能性がある。長さ約10.3cm，幅9.4cm，厚さ4.0cm，重さ544ｇである。



第 194 図　弥生時代竪穴住居跡 45 号（4）

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（27）
東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良 ＪＣＴ）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

永吉天神段遺跡５
第２地点-３
第 １ 分 冊

発行年月　２０２０年２月
編集・発行　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576
印 刷 所　株式会社トライ社
〒892-0834　鹿児島市南林寺町12-6
TEL　099-226-0815　　FAX　099-225-7933

鹿児島県